

二之宮千足遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書
（本文編）

1992

建設省
群馬県教育委員会
（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

二之宮千足遺跡正誤表

本文編

頁・行	誤	正
7・第6図	寛延宮西遺跡	寛延宮西遺跡
62・第93図	セクションB-B'	引き出し線部分に「6」
241・表下	(付図-1)	(付図-2)
243・283図	垂直分布図の水平、垂直方向は1/75縮尺である。	垂直分布図は1/75縮尺である。
288・1	第322図3～第325図95	第322図1～第325図33
288・12	3は	1は
288・14	4～7は	2～5は
288・14	4は	2は
288・14	5は	3は
288・15	6・7は	4・5は
288・16	6は	4は
288・17	8・9は	6・7は
288・17	8は	6は
288・17	9は	7は
288・19	10・11は	8・9は
288・19	10は	8は
288・19	11は	9は
288・21	12～25は	10～23は
288・23	23は	31は

資料

東京大学文学部蔵文化財
調査事業団保管

01-330

21

98-
O.4167

平成10年5月13日

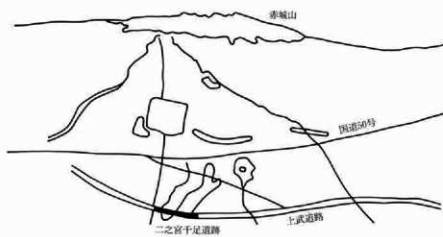
1(7)

二之宮千足遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書
（本文編）

1992

建設省
群馬県教育委員会
（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団



前橋市二之宮町上空から赤城山をのぞむ 昭和62年3月撮影



1区1号祭祀、講出土の土師器杯



3・4区1号溜井出土漆碗 (第189図 105)



4区3号溜井出土漆碗 (第203図 83)



3・4区1号溜井出土漆碗底部 (第189図 105)



4区3号溜井出土漆碗 (第203図 85)



1区プラント・オパール分析A地点



4区ボーリングA地点



5区北壁 (Hr-FA東端)
(中央の白い部分がHr-FA、右に向うと見えなくなる)



6区北壁 (右に見える白い部分がHr-FA、その左の
灰色っぽい部分がウリ科種子の出土した層位)



ウリ科種子出土状態



泥炭質土の植物遺体 (茶色部分)



As-C上水田確認状態



3区縄文包含層

序

埼玉県深谷市と本県の前橋市を結ぶ一般国道17号線のバイパスである上武道路は、既に、新田郡尾島町の国道354号線から前橋市今井町の国道50号線までの区間が開通・供用されており、通過市町村の産業経済の発展に大きく貢献しています。

上武道路の通過する地域は、本県でも有数の埋蔵文化財包蔵地が分布しています。特に、赤城山南麓に位置する前橋市二之宮地区は、それが顕著であります。本書に報告するところの二之宮千足遺跡は、昭和61年度より62年度にかけて当事業団が発掘調査を実施しました。旧石器時代から近世に至るまでの複合遺跡で、台地上からは27軒の住居跡、土坑等、谷地部分からは水田跡の遺構が確認され調査されました。特に谷地部分は、古墳時代から平安時代にかけての6時期の水田面が調査され、この種の遺構の調査を進める上で大きな成果が得られました。

この調査成果は、平成2年度より3年度にかけての整理事業にて、「二之宮千足遺跡発掘調査報告書」としてまとめることができました。

発掘調査から報告書作成に至るまで、建設省関東地方建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者等から種々、ご指導ご協力を賜りました。今回、報告書を上梓するに際し、これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて、本報告書が群馬県の歴史を解明する上で、広く活用されることを願い序とします。

平成3年6月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 小寺 弘之

例 言

1. 本書は一般国道17号線（上武道路）建設工事に伴い事前調査された、二之宮千足遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡は前橋市二之宮町千足、五分一に所在する。
3. 本書は本文編、自然科学・分析編、観察表編の3部からなる。
4. 事業主体 建設省関東地方建設局高崎工事事務所
5. 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
6. 調査組織 常務理事 白石保三郎
事務局長 井上唯雄
調査研究部長 上原啓巳
管理部長 大沢秋良（昭和61年度）、田口紀雄（昭和62年度）
調査研究第2課長 桜場一寿
庶務課長 定方隆史
試掘調査担当 桜場一寿、岩崎泰一
本調査担当 藤巻幸男、大西雅広、中山純一（昭和61年度）、藤巻幸男、大西雅広、樋口伸男（昭和62年度）
事務担当 国定 均、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、野島のぶ江、今井もと子、今井あや子、松井美智子、大澤美佐保、大島敬子
7. 試掘調査期間 昭和61年2月1日～昭和61年3月15日（4遺跡）
8. 調査期間 昭和61年7月17日～昭和62年8月31日
9. 整理主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
10. 整理期間 平成2年4月1日～平成3年6月30日
11. 整理組織 常務理事 邊見長雄
事務局長 松本浩一、
調査研究部長 神保侑史
管理部長 田口紀男（平成2年度）、佐藤 勉（平成3年度）
調査研究第2課長 能登 健
庶務課長 岩丸大作
整理担当 大西雅広
坂庭常替、皆川正枝、大友美代子、串淵すみ江、馬場信子、小淵トモ子、金子吉江、岡田美知枝、笹尾ヨシ子
木製品実測・トレース、プレバラート作成 高橋真樹子、五十嵐由美子、鈴木加津枝、小池 緑
遺物写真 佐藤元彦
保存処理 関 邦一、北爪健二、小村浩一
事務担当 国定 均、小林昌嗣（平成2年度）、船津 茂（平成3年度）、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、野島のぶ江、今井もと子、松井美智代、角田みずほ

12. 本書の編集は大西雅広が行い、本文編の執筆は第1、2、4章、第5章第1～4節は大西雅広が、第3章、第5章第4、5節は藤巻幸男が行った。なお、第6章と自然科学・分析編の胎土分析の目的と試料は藤巻幸男と大西雅広が行い、依頼執筆者は文章中に記した。また、観察表は大西雅広が作成した。
13. ウリ科植物遺体の鑑定は、大阪府立大学農学部教授藤下典之先生にお願いし、玉稿を賜った。
14. 石材の鑑定は飯島静男氏（群馬地質研究会）に依頼した。
15. 陶磁器については、九州陶磁文化館大橋康二氏、愛知県陶磁資料館仲野泰祐氏より御教示を得た。
16. 墨書土器については、高島英之氏より御教示を得た。
17. 調査中及び整理中に行った委託は以下の通りである。
 - 遺構測量：榊測研
 - 井戸掘削：原沢ボーリング株式会社
 - 花粉・けい藻・テフラ分析、種子・昆虫同定、C14年代測定：バリノ・サーヴェイ株式会社
 - プラント・オパール分析：偕古環境研究所
 - 樹種同定：榊パレオ・ラボ
 - 土器胎土分析：榊第四紀地質研究所
18. 本文中に使用した航空写真（KT61-4）は、国土地理院の許可を得て複製したものである。
19. 調査記録、出土遺物などの資料は群馬県埋蔵文化財調査センターが保管し、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が管理している。

凡 例

1. 遺構名称は原則として発掘調査時に付したものを使用したが、検討の結果、整理時に変更したものがあ
る。また遺構番号は発掘調査時のものをそのまま使用している。遺構番号は遺跡全体の通し番号となっ
ている。しかし、若干の欠番を生じている。
2. 遺構、遺物の縮尺は原則として以下のとおりとし、スケールで示した。また、遺物についてはマークを
併用し、示す縮尺は以下のとおりである。なお、最も数が多い1/3については無印とした。
全体図 1/200、竪穴住居跡 1/60、土坑 1/60、井戸 1/60
旧石器単体 4/5、旧石器接合資料 1/2、土器・陶磁器・縄文時代石器 1/3、
軟質陶器・摺鉢・木製品 1/4、大型木製品 1/6 など
△ 1/1、▲ 1/2、● 1/4、■ 1/6、○ 1/8
3. 遺物写真の縮尺は実測図に近づけたが不統一である。
4. 遺構図中及び本文中の方位は、座標北と座標北からの計測値を示す。
5. 水田区画の面積測定は、1/200縮尺図面をデジタルプランメーターで3回測定した平均値を示した。
6. 遺構内の遺物番号、遺物図、遺物写真図版の番号は一致させた。
7. 遺物観察表の登録番号と樹種同定用プレパレート番号は、本事業団における資料管理のための登録番号
である。
8. 遺構図中のスクリーン・トーンは以下のとおりである。また、これ以外に使用したスクリーン・トーンやドット
マークについては挿図内に記した。



灰、炭化物



焼土

10. 報告書中で使用したテフラの略称は以下のとおりである。

浅間B軽石：As-B、榛名ニツ岳火山灰：Hr-FA、浅間C軽石：As-C、始良 Tn 火山灰：AT、

浅間板鼻褐色軽石群：As-BP、浅間板鼻黄色軽石層：As-YP

目 次

序	Hr-FA 上第2水田	184
凡 例	Hr-FA 上第3水田	195
目 次	Hr-FA 下水田	201
挿 図 目 次	As-C 上水田	203
図 版 目 次	5区 As-C 上水田木組	214
第1章 調査に至る経過	As-C 下水田	227
第2章 調査の方法	As-C 下水田耕作土下	234
第3章 遺跡の位置と周辺の環境	第4節 表土出土の遺物	238
第4章 遺跡の概要	第5節 縄文時代の遺構と遺物	241
第5章 検出された遺構と遺物	第6節 旧石器時代の遺構と遺物	281
第1節 台地(2・3区)で検出された	第6章 ま と め	296
遺構と遺物		10
竪穴住居跡		10
2区1号小鍛冶		56
3区1・2号竪穴遺構		61
井 戸		64
2区1号墓		78
土 坑		79
溝		87
第2節 1区(西側)低地で検出された		98
遺構と遺物		98
1区 As-B 下水田		99
1区第3氾濫層下水田		102
1区第4氾濫層下水田		113
1区1号祭祀		114
1区3号溜井、73号溝		123
1区 As-C 下水田		135
1区 As-C 下水田耕作土下杭群		136
1区旧河道		139
第3節 3～6区(東側谷地)で検出された		141
遺構と遺物		141
3・4区1号溜井、4区2号溜井		143
4区1号不明遺構		168
As-B 下水田		168
Hr-FA 上第1水田		174

挿 図 目 次

第 1 図	調査区設定図	2	第 60 図	19号住居跡床面	41
第 2 図	グリッド設定図	2	第 61 図	19号住居跡貯蔵穴状土坑遺物出土状態	42
第 3 図	遺跡位置図	4	第 62 図	19号住居跡掘形	42
第 4 図	上武道路沿いの地質断面図	5	第 63 図	19号住居跡出土遺物 (1)	43
第 5 図	地形区分図	6	第 64 図	19号住居跡出土遺物 (2)	44
第 6 図	周辺の遺跡	7	第 65 図	19号住居跡出土遺物 (3)	45
第 7 図	1号住居跡床面	10	第 66 図	20号住居跡床面	46
第 8 図	1号住居跡掘形	11	第 67 図	20号住居跡掘形	46
第 9 図	1号住居跡出土遺物 (1)	11	第 68 図	20号住居跡出土遺物	46
第 10 図	1号住居跡出土遺物 (2)	12	第 69 図	21号住居跡床面	47
第 11 図	2号住居跡床面	12	第 70 図	21号住居跡掘形	47
第 12 図	2号住居跡掘形	13	第 71 図	21号住居跡出土遺物	48
第 13 図	2号住居跡出土遺物	13	第 72 図	22号住居跡床面	48
第 14 図	3号住居跡掘形	14	第 73 図	22号住居跡掘形	49
第 15 図	3号住居跡出土遺物	14	第 74 図	22号住居跡出土遺物	49
第 16 図	4号住居跡掘形	15	第 75 図	24号住居跡床面	50
第 17 図	5号住居跡掘形	15	第 76 図	24号住居跡掘形	51
第 18 図	6号住居跡掘形	16	第 77 図	24号住居跡竈	51
第 19 図	6号住居跡出土遺物	16	第 78 図	24号住居跡出土遺物	52
第 20 図	7号住居跡床面	17	第 79 図	25号住居跡床面	53
第 21 図	7号住居跡掘形	17	第 80 図	25号住居跡掘形	54
第 22 図	7号住居跡出土遺物	18	第 81 図	25号住居跡出土遺物	54
第 23 図	8号住居跡床面	18	第 82 図	26号住居跡床面	55
第 24 図	8号住居跡出土遺物	18	第 83 図	26号住居跡掘形	55
第 25 図	9・23号住居跡床面	19	第 84 図	26号住居跡出土遺物	55
第 26 図	8・9・23号住居跡掘形	20	第 85 図	27号住居跡掘形	56
第 27 図	9号住居跡出土遺物	20	第 86 図	27号住居跡出土遺物	56
第 28 図	23号住居跡出土遺物	21	第 87 図	2区 1号小竈治部屋状況	57
第 29 図	10号住居跡床面	22	第 88 図	2区 1号小竈治部屋出土状態	57
第 30 図	10号住居跡拡張前床面、拡張後掘形	22	第 89 図	2区 1号小竈治	58
第 31 図	10号住居跡拡張前、拡張後掘形	23	第 90 図	2区 1号小竈治出土遺物 (1)	59
第 32 図	10号住居跡竈	24	第 91 図	2区 1号小竈治出土遺物 (2)	60
第 33 図	10号住居跡掘形	24	第 92 図	2区 1号小竈治出土遺物 (3)	61
第 34 図	10号住居跡出土遺物 (1)	25	第 93 図	3区 1・2号竈穴	62
第 35 図	10号住居跡出土遺物 (2)	26	第 94 図	3区 1・2号竈穴掘形	63
第 36 図	10号住居跡出土遺物 (3)	27	第 95 図	3区 1・2号竈穴出土遺物 (1)	63
第 37 図	11号住居跡床面	28	第 96 図	3区 1・2号竈穴出土遺物 (2)	64
第 38 図	11号住居跡出土遺物 (1)	28	第 97 図	2区 1号井戸	64
第 39 図	11号住居跡出土遺物 (2)	29	第 98 図	2区 1号井戸出土遺物 (1)	65
第 40 図	12号住居跡床面	30	第 99 図	2区 1号井戸出土遺物 (2)	66
第 41 図	12号住居跡掘形	30	第100図	2区 2号井戸、出土遺物	67
第 42 図	12号住居跡竈	31	第101図	2区 3号井戸	68
第 43 図	12号住居跡出土遺物 (1)	31	第102図	2区 3号井戸出土遺物 (1)	68
第 44 図	12号住居跡出土遺物 (2)	32	第103図	2区 3号井戸出土遺物 (2)	69
第 45 図	13号住居跡床面	33	第104図	2区 4号井戸	69
第 46 図	13号住居跡出土遺物	33	第105図	2区 4号井戸出土遺物	70
第 47 図	14号住居跡床面	34	第106図	2区 5号井戸	70
第 48 図	14号住居跡掘形	35	第107図	2区 5号井戸出土遺物	71
第 49 図	14号住居跡出土遺物 (1)	35	第108図	3区 6号井戸	71
第 50 図	14号住居跡出土遺物 (2)	36	第109図	2区 7号井戸、出土遺物 (1)	72
第 51 図	15・16号住居跡床面	37	第110図	2区 7号井戸出土遺物 (2)	73
第 52 図	15号住居跡出土遺物 (1)	37	第111図	2区 8号井戸、出土遺物 (1)	73
第 53 図	15・16号住居跡掘形	38	第112図	2区 8号井戸出土遺物 (2)	74
第 54 図	15号住居跡出土遺物 (2)	38	第113図	2区 9号井戸	75
第 55 図	16号住居跡出土遺物	39	第114図	2区 9号井戸出土遺物	75
第 56 図	17・18号住居跡床面	40	第115図	3区 10号井戸	76
第 57 図	17・18号住居跡掘形	40	第116図	3区 10号井戸出土遺物	76
第 58 図	17号住居跡出土遺物	40	第117図	3区 11号井戸	77
第 59 図	18号住居跡出土遺物	40	第118図	3区 11号井戸出土遺物	77

第119图	2区12号并井	78
第120图	2区1号墓、出土遗物	78
第121图	1区1~8·11~14·16号土坑	81
第122图	2区17~21·23~25·27号土坑	82
第123图	2区26·28~34号土坑	83
第124图	2区35~42·46·53·54~56号土坑	84
第125图	3区45·47~52·57·58·61·62·67·76号土坑	85
第126图	6区65·66号土坑	86
第127图	土坑出土遗物	86
第128图	1区调群断面图(1)	89
第129图	1区调群断面图(2)	90
第130图	时期不詳水田断面图	90
第131图	1区1号溝出土遺物(1)	91
第132图	1区1号溝出土遺物(2)	92
第133图	1区1号溝出土遺物(3)、 6·11·15·35号溝出土遺物	93
第134图	3区48·49·70·71号溝	95
第135图	6区71号溝、各地砂層	96
第136图	6区64号溝出土遺物	97
第137图	1区沖積地基本土層	98
第138图	1区As-B下水田	100
第139图	1区As-B下水田内溝(42号溝·46号溝)	101
第140图	1区43·44·45号溝·47号溝	101
第141图	1区第3层墓層下水田	103
第142图	1区50·54号溝断面图、 第3层墓層下水田水口断面图	104
第143图	1区50·51·52·53·54号溝、1·2号水堀	105
第144图	1区1·2号水堀断面图	106
第145图	1区56号溝	107
第146图	1区50号溝、54号溝、1号水堀	108
第147图	1区第3层墓層下水田溝出土遺物(1)	108
第148图	1区第3层墓層下水田溝出土遺物(2)	109
第149图	1区第3层墓層下水田溝出土遺物(3)	110
第150图	1区第3层墓層下水田溝出土遺物(4)	111
第151图	1区第3层墓層下水田溝出土遺物(5)	112
第152图	1区第4层墓層下水田	113
第153图	1区1号祭祀遺物分布图	115
第154图	1区1号祭祀出土遺物(1)	116
第155图	1区1号祭祀出土遺物(2)	117
第156图	1区1号祭祀出土遺物(3)	118
第157图	1区1号祭祀出土遺物(4)	119
第158图	1区1号祭祀出土遺物(5)	120
第159图	1区1号祭祀出土遺物(6)	121
第160图	1区1号祭祀出土遺物(7)	122
第161图	1区1号祭祀出土遺物(8)	123
第162图	1区3号溝并、73号溝	124
第163图	1区73号溝断面图	125
第164图	1区3号溝并、73号溝、 第4层墓層下水田遺物分布图	126
第165图	1区3号溝并	127
第166图	1区第4层墓層下水田出土遺物(1)	128
第167图	1区第4层墓層下水田出土遺物(2)	129
第168图	1区73号溝出土遺物(1)	130
第169图	1区73号溝出土遺物(2)、3号溝并出土遺物(1)	131
第170图	1区3号溝并出土遺物(2)	132
第171图	1区3号溝并出土遺物(3)	133
第172图	1区3号溝并出土遺物(4)	134
第173图	1区As-C下水田	135
第174图	1区As-C下水田耕作土下底群	136
第175图	1区As-C下水田耕作土下土坑(1)	137
第176图	1区As-C下水田耕作土下土坑(2)	138
第177图	1区旧河道	139

第178图	1区旧河道断面图	140
第179图	4~6区基本土層	141
第180图	3·4区1号溝并遺物出土狀態	144
第181图	3·4区1号溝并	145
第182图	3·4区1号溝并出土遺物(1)	146
第183图	3·4区1号溝并出土遺物(2)	147
第184图	3·4区1号溝并出土遺物(3)	148
第185图	3·4区1号溝并出土遺物(4)	149
第186图	3·4区1号溝并出土遺物(5)	150
第187图	3·4区1号溝并出土遺物(6)	151
第188图	3·4区1号溝并出土遺物(7)	152
第189图	3·4区1号溝并出土遺物(8)	153
第190图	3·4区1号溝并出土遺物(9)	154
第191图	3·4区1号溝并出土遺物(10)	155
第192图	3·4区1号溝并出土遺物(11)	156
第193图	3·4区1号溝并出土遺物(12)	157
第194图	4区2号溝并	157
第195图	4区2号溝并出土遺物(1)	158
第196图	4区2号溝并出土遺物(2)	159
第197图	4区2号溝并出土遺物(3)	160
第198图	4区2号溝并出土遺物(4)	161
第199图	4区2号溝并出土遺物(5)	162
第200图	4区2号溝并出土遺物(6)	163
第201图	4区2号溝并出土遺物(7)	164
第202图	4区2号溝并出土遺物(8)	165
第203图	4区2号溝并出土遺物(9)	166
第204图	4区2号溝并出土遺物(10)	167
第205图	4区1号不明遺構	168
第206图	3~6区As-B下水田	170
第207图	4区As-B下水田	171
第208图	3区As-B下水田溝伏遺構	172
第209图	5区As-B下水田水路	172
第210图	As-B下水田出土遺物	173
第211图	3·5·6区Hr-FA上第1水田	175
第212图	3区Hr-FA上第1水田種子·木製品分布图	176
第213图	3区Hr-FA上第1水田溝	177
第214图	5区Hr-FA上第1水田木製品出土狀態	178
第215图	3区58·90号溝出土遺物	178
第216图	Hr-FA上第1水田出土遺物(1)	179
第217图	Hr-FA上第1水田出土遺物(2)	180
第218图	Hr-FA上第1水田出土遺物(3)	181
第219图	Hr-FA上第1水田出土遺物(4)	182
第220图	Hr-FA上第1水田出土遺物(5)	183
第221图	3~5区Hr-FA上第2水田	185
第222图	3区Hr-FA上第2水田種子·木製品出土狀態	186
第223图	3区Hr-FA上第2水田溝	187
第224图	5区Hr-FA上第2水田水路	188
第225图	4区Hr-FA上第2水田遺物出土狀態	189
第226图	Hr-FA上第2水田出土遺物(1)	190
第227图	Hr-FA上第2水田出土遺物(2)	191
第228图	Hr-FA上第2水田出土遺物(3)	192
第229图	Hr-FA上第2水田出土遺物(4)	193
第230图	Hr-FA上第2水田出土遺物(5)	194
第231图	5·6区Hr-FA上第3水田	195
第232图	5区Hr-FA上第3水田遺物出土狀態	196
第233图	Hr-FA上第3水田出土遺物(1)	196
第234图	6区Hr-FA上第3水田遺物出土狀態	197
第235图	Hr-FA上第3水田出土遺物(2)	197
第236图	Hr-FA上第3水田出土遺物(3)	198
第237图	Hr-FA上第3水田出土遺物(4)	199
第238图	Hr-FA上第3水田出土遺物(5)	200
第239图	5区Hr-FA下水田	202

第240図	5区北壁 Hr-FA 下水田大アゼ断面図	202
第241図	Hr-FA 下水田出土遺物	202
第242図	3～6区 As-C 上水田	204
第243図	4区 As-C 上水田	205
第244図	4区南壁 As-C 上水田大アゼ断面図	206
第245図	5区 As-C 上水田水路	207
第246図	5・6区65溝	207
第247図	4区 As-C 上水田遺物出土状態	208
第248図	5区 As-C 上水田遺物出土状態	208
第249図	6区 As-C 上水田遺物出土状態	209
第250図	As-C 上水田出土遺物 (1)	209
第251図	As-C 上水田出土遺物 (2)	210
第252図	As-C 上水田出土遺物 (3)	211
第253図	As-C 上水田出土遺物 (4)	212
第254図	As-C 上水田出土遺物 (5)	213
第255図	As-C 上水田木組遺構 (下は構造物材除去後)	215
第256図	As-C 上水田木組遺構出土遺物 (1)	216
第257図	As-C 上水田木組遺構出土遺物 (2)	217
第258図	As-C 上水田木組遺構出土遺物 (3)	218
第259図	As-C 上水田木組遺構出土遺物 (4)	219
第260図	As-C 上水田木組遺構出土遺物 (5)	220
第261図	As-C 上水田木組遺構出土遺物 (6)	221
第262図	As-C 上水田木組遺構出土遺物 (7)	222
第263図	As-C 上水田木組遺構出土遺物 (8)	223
第264図	As-C 上水田木組遺構出土遺物 (9)	224
第265図	As-C 上水田木組遺構出土遺物 (10)	225
第266図	As-C 上水田木組遺構出土遺物 (11)	226
第267図	3～6区 As-C 下水田	228
第268図	4区 As-C 下水田	229
第269図	5区 As-C 下水田 (水色は As-C 上水田に 除養されていないアゼ)	230
第270図	5区 As-C 下水田第102号区画	231
第271図	5区 As-C 下水田第102号区画周辺足跡状くぼみ	232
第272図	5区 As-C 下水田杭出土状態	233
第273図	As-C 下水田出土遺物	233
第274図	5区 As-C 下水田耕作土下70号溝	234
第275図	6区 As-C 下水田耕作土下材出土状態 (1)	235
第276図	6区 As-C 下水田耕作土下家敷出土状態	235
第277図	6区 As-C 下水田耕作土下材出土状態 (2)	236
第278図	As-C 下水田耕作土下出土遺物 (1)	236
第279図	As-C 下水田耕作土下出土遺物 (2)	237
第280図	表探及び表土出土遺物 (1)	238
第281図	表探及び表土出土遺物 (2)	239
第282図	表探及び表土出土遺物 (3)	240
第283図	2・3区遺構の配置と遺物の分布	242・243
第284図	1号埋設土器出土状態	244
第285図	1号埋設土器	244
第286図	集石遺構 (1)	245
第287図	集石遺構 (2)	246
第288図	土坑 (1)	247
第289図	土坑 (2)	248
第290図	土坑 (3)、陥穴 (1)	249

第291図	陥穴 (2)	250
第292図	遺構出土の土器	251
第293図	2・3区出土の土器 (第1群、第1群群)	255
第294図	2・3区出土の土器 (第1群群 2・4・5類)	256
第295図	2・3区出土の土器 (第1群群 5類)	257
第296図	2・3区出土の土器 (第1群群 5・6類)	258
第297図	2・3区出土の土器 (第1群群 6類)	259
第298図	2・3区出土の土器 (第IV群 1・2・3類)	260
第299図	2・3区出土の土器 (第IV群、第V群 2類)	261
第300図	2・3区出土の土器 (第V群 2・3・4類)	262
第301図	2・3区出土の土器 (第VI群、第VII群)	263
第302図	2・3区出土石器 (1)	265
第303図	2・3区出土石器 (2)	266
第304図	2・3区出土石器 (3)	267
第305図	2・3区出土石器 (4)	268
第306図	2・3区出土石器 (5)	269
第307図	2・3区出土石器 (6)	270
第308図	2・3区出土石器 (7)	271
第309図	2・3区出土石器 (8)	272
第310図	2・3区出土石器 (9)	273
第311図	1区出土の土器 (第III群)	275
第312図	1区出土の土器 (第IV群)	276
第313図	1区出土石器 (1)	278
第314図	1区出土石器 (2)	279
第315図	1区出土石器 (3)	280
第316図	旧石器試験グリッド設定図	282
第317図	第1文化層器種別分布図	284
第318図	第1文化層石材別分布図	284
第319図	旧石器層関係本表?	285
第320図	第1プロック器種別分布図	286
第321図	第1プロック石材別分布図	287
第322図	第2文化層出土石器 (上段2点)、 第2文化層出土石器 (1)	290
第323図	第2文化層出土石器 (2)	291
第324図	第2文化層出土石器 (3)	292
第325図	第2文化層出土石器 (4)	293
第326図	第2文化層接合資料 (1)	294
第327図	第2文化層接合資料 (2)	295
第328図	第2文化層接合資料 (3)	296

付図1	二之宮千足遺跡 2・3区台地全体図
付図2	二之宮千足遺跡 1区溝群全体図
付図3	二之宮千足遺跡 1・3・4・5・6区 As-B 下水田全体図
付図4	二之宮千足遺跡 3・5・6区 Hr-FA 上第1水田全体図
付図5	二之宮千足遺跡 3・4・5区 Hr-FA 上第2水田全体図
付図6	二之宮千足遺跡 5・6区 Hr-FA 下水田全体図
付図7	二之宮千足遺跡 3・4・5・6区 As-C 上水田全体図
付図8	二之宮千足遺跡 3・4・5・6区 As-C 下水田全体図
付図9	二之宮千足遺跡 3区谷地断面図
付図10	二之宮千足遺跡 2区旧石器層種別、石材別分布図

	3区11号井戸跡出土状態		1区60号溝全景
	3区12号井戸全景		1区65号溝全景
	2区1号墓塚全景		1区71・72号溝全景
	2区1号墓塚精底状圧痕と遺物出土状態	PL-25	1区As-B下水田全景
	2区1号墓塚精底状圧痕近接		1区As-B下水田水路(42号溝)
	1区13号土坑全景		1区43~45号溝全景(As-B下水田検出時に確認)
PL-17	1区17号土坑全景		1区46号溝全景(As-B下水田検出時に確認)
	2区17号土坑遺物出土状態	PL-26	1区47号溝全景(As-B下水田検出時に確認)
	2区18号土坑全景		1区第3起掘層下水田と溝群全景(西より)
	2区19・27号土坑全景		1区第3起掘層下水田と溝群全景(南東より)
	2区21号土坑全景		1区第3起掘層下水田と50号溝
	2区23号土坑全景		1区第3起掘層下水田と54号溝
	2区25号土坑全景		1区第3起掘層下水田に伴う溝群と1・2号水面
	2区29号土坑全景	PL-27	1区50号溝近接
	2区30号土坑全景		1区1号水堀、54・62号溝
PL-18	2区32号土坑全景		1区52号溝遺物出土状態
	2区33号土坑全景		1区1・2号水堀、52・62号溝
	2区35号土坑全景		1区2号水堀と53号溝
	2区36号土坑全景		1区1号水堀と52・62号溝(西より)
	2区38号土坑全景		1区1号水堀と52・62号溝近接(西より)
	2区39号土坑全景		1区2号水堀と53号溝
	2区40号土坑全景	PL-28	1区2号水堀全景
	2区45号土坑全景		1区2号水堀近接
PL-19	2区46号土坑全景		1区第4起掘層下水田耕作痕
	2区54号土坑全景		1区1号祭祀全景
	2区55号土坑全景		1区3号竈井と73号溝全景(東より)
	3区45号土坑全景		1区3号竈井と73号溝全景(西より)
	3区61号土坑全景		1区3号竈井遺物出土状態
	3区62号土坑全景		1区3号竈井全景
	6区65号土坑全景	PL-29	1区As-C下水田全景(東より)
	6区66号土坑全景		1区As-C下水田近接
PL-20	1区溝群全景(南より)		1区田河道全景(東より)
	1区溝群全景(南西より)		1区田河道北半(東より)
PL-21	1区時期不詳水田		1区田河道南半(東より)
	1区1号溝全景	PL-30	1区As-C下水田耕作土下群跡全景
	1区1号溝南半		1区As-C下水田耕作土下軌近接
	1区1号溝北半		3区1号竈井遺物出土状態
	1区1号溝検出出土状態		3区1号竈井遺物出土状態
	1区6号溝全景		3区1号竈井全景(4区部分)
	1区6号溝検出出土状態と底面	PL-31	3区1号竈井全景(4区部分) 塚原出土状態
	1区7号溝全景		3区1号竈井お守り刀出土状態
PL-22	1区8号溝全景		3区1号竈井遺物出土状態
	1区9号溝全景		3区1号竈井遺物出土状態
	1区10号溝全景		3区1号竈井遺物出土状態
	1区11号溝全景		4区2号竈井全景
	1区11・15号溝全景		4区2号竈井溝水部分近接
	1区15号溝底面		4区1号不明遺構全景
	1区15号溝底面ウォーターホール近接	PL-32	3区As-B下水田全景(南より)
PL-23	1区11・12・15・16号溝全景		3区As-B下水田全景(西より)
	1区11・15・36号溝全景		3区As-B下水田近接
	1区22~30号溝全景		3区As-B下水田近接
	1区22~30号溝全景		3区As-B下水田1号水口近接
	1区32号溝全景	PL-33	4区As-B下水田全景(南西より)
	1区31号溝全景		4区As-B下水田近接
	1区33号溝と3~8・11号土坑全景		4区As-B下水田西側大アゼ
	1区34号溝全景		4区As-B下水田東側大アゼ
	1区35号溝全景	PL-34	4区As-B下水田全景(北西より)
PL-24	1区36号溝全景		5区As-B下水田全景(東より)
	1区36号溝全景		5区As-B下水田西平
	1区36号溝全景		5区As-B下水田東平
	1区57・58号溝全景		5区As-B下水田水路全景(南西より)
	1区48号溝全景	PL-35	3区Hr-FA上第1水田全景(西より)
	1区49号溝全景		

	3区 Hr-FA 上第1水田全景 (南東より)	PL-47	5区70号溝 (As-C 下水田耕作土下)
	5区 Hr-FA 上第1水田全景 (南東より)		5区70号溝 (手前) と As-C 下水田面近接 (奥)
	5区 Hr-FA 上第1水田遺物出土状態		6区 As-C 下水田全景 (南より)
	6区 Hr-FA 上種子包含砂層全景		6区 As-C 下水田全景 (北より)
PL-36	3区 Hr-FA 上第2水田全景 (南より)		6区 As-C 下水田近接
	4区 Hr-FA 上第2水田全景 (北東より)	PL-48	6区 As-C 下水田耕作土下木製品出土状態その1 (南西より)
	4区 Hr-FA 上第2水田近接		6区 As-C 下水田耕作土下木製品出土状態その2 (南西より)
	4区 Hr-FA 上第2水田アゼ部分遺物出土状態		
	4区 Hr-FA 上第2水田遺物出土状態	PL-49	6区 As-C 下水田耕作土下鉄柄出土状態
PL-37	5区 Hr-FA 上第2水田全景 (南東より)		6区 As-C 下水田耕作土下鉄柄出土状態
	5区 Hr-FA 上第3水田全景 (南西より)		6区 As-C 下水田耕作土下鉄柄出土状態
PL-38	5区 Hr-FA 上第3水田遺物出土状態		6区 As-C 下水田耕作土下鉄柄出土状態
	6区 Hr-FA 上第3水田全景		5区東側 As-C 下水田耕作土下木製品出土状態
	6区 Hr-FA 上第3水田遺物出土状態	PL-50	2区1号埋設土器
	6区 Hr-FA 上第3水田遺物出土状態		2区1号埋設土器彫形
	6区 Hr-FA 上第3水田遺物出土状態		2区縄文1号土坑
	6区63号溝		2区縄文2号土坑
	6区 Hr-FA 上第3水田遺物出土状態		2区縄文3号土坑
PL-39	5区 Hr-FA 下水田全景 (南西より)		2区縄文6号土坑
	3区 As-C 上水田全景 (南より)		2区縄文7号土坑
	4区 As-C 上水田東平		3区縄文8号土坑
	4区 As-C 上水田西平	PL-51	3区縄文8号土坑遺物出土状態
	4区 As-C 上水田遺物出土状態		3区縄文9号土坑
PL-40	5区 As-C 上水田全景 (北西より)		3区縄文10号土坑
	5区 As-C 上水田西平と65号溝		3区縄文12号土坑
	5区 As-C 上水田水路		3区縄文13号土坑
	5区 As-C 上水田遺物出土状態		3区1号陥穴
	5区 As-C 上水田木組		3区1号陥穴底部セクション
	5区 As-C 上水田木組と Hr-FA 下水田大アゼ (白線)		3区2号陥穴
	5区 As-C 上水田木組と Hr-FA 下水田大アゼ (白線)	PL-52	3区2号陥穴
	5区 As-C 上水田木組と Hr-FA 下水田大アゼ (白線)		3区3号陥穴
PL-41	5区 As-C 上水田木組全景 (北東より)		2区1号集石
	5区 As-C 上水田木組全景 (北西より)		2区1号集石下土坑
PL-42	5区 As-C 上水田木組全景 (南西より)		2区1・2号集石
	5区 As-C 上水田杭		2区2号集石
	5区 As-C 上水田杭		2区2号集石下土坑
	5区 As-C 上水田木組杭出土状態		2区3号集石
	5区 As-C 上水田木組杭頭部近接	PL-53	2区3号集石下土坑
PL-43	65号溝 (5区部分)		2区4号集石
	65号溝 (6区部分)		2区4・5号集石
	6区 As-C 上水田全景 (南より)		2区5号集石
	6区 As-C 上水田遺物出土状態		2区6号集石
	6区 As-C 上水田遺物出土状態		2区7号集石周辺遺物出土状態
PL-44	4区 As-C 下水田全景 (南より)		2区7号集石
	4区 As-C 下水田近接		2区7号集石下面
	4区 As-C 下水田大アゼ近接	PL-54	3区谷地縁辺縄文時代遺物出土状態 (南東より)
	4区 As-C 下水田大アゼ内の遺物		3区谷地縁辺縄文時代遺物出土状態 (南より)
	3区 As-C 下水田全景		3区谷地縁辺石棒出土状態
PL-45	5区 As-C 下水田全景 (南西より)		3区谷地縁辺縄文時代遺物出土状態 (北より)
	5区 As-C 下水田西平		3区谷地縁辺縄文時代遺物出土状態 (南より)
	5区 As-C 下水田水路 (南西より)		3区谷地縁辺縄文時代遺物出土状態 (南東より)
	5区 As-C 下水田水路近接		3区谷地縁辺自然木 (榎) 出土状態
	5区 As-C 下水田水路近接		3区谷地縁辺自然木 (榎) 出土状態
PL-46	5区 As-C 上水田により削平された As-C 下水田アゼ	PL-55	2区西平旧石器試掘及び調査前
	5区 As-C 上水田により削平された As-C 下水田アゼ		2区西平旧石器調査状況
	5区 As-C 上水田により削平された As-C 下水田アゼ		2区東平旧石器調査状況
	5区 As-C 下水田アゼに平行する溝状の落ち込み		2区東平旧石器調査状況
	5区 As-C 下水田水口状落ち込み		2区旧石器第1ブロック遺物出土状態
	5区 As-C 下水田遺物出土状態	PL-56	2区旧石器第1ブロック遺物出土状態
	5区 As-C 下水田面近接		2区旧石器第1ブロック遺物出土状態
	5区 As-C 下水田面近接		2区旧石器 J-23グリッド遺物出土状態

	2区旧石器1-20グリッド遺物出土状態	PL-113	As-C 下水田・As-C 下水田耕作土下出土遺物
	2区旧石器M-19・20グリッド遺物出土状態	PL-114	As-C 下水田耕作土下出土遺物
	2区旧石器K・L-24グリッド遺物出土状態	PL-115	表土出土遺物
	2区旧石器風例本?	PL-116	表土出土遺物
	2区旧石器暗色帯TM-23グリッド層出土状態	PL-117	曇暮近接
PL-57	2区1・6・9・10・23号住居跡出土遺物	PL-118	2号窟弁漆継ぎ近接
PL-58	2区10号住居跡出土遺物		油埴近接
PL-59	2区10・11・12号住居跡出土遺物		焼き痕が時の文字近接
PL-60	2区12号住居跡出土遺物		焙燥内面押印近接
PL-61	2区12・13・14・15号住居跡出土遺物		台付裏接合部近接
PL-62	2区16・18・19号住居跡出土遺物		株名絵石被胎部分近接
PL-63	2区19・20・21・22号住居跡出土遺物		壺内面接合部近接
PL-64	2区24・25・26号住居跡、2区1号小竈跡出土遺物	PL-119	夜胴部接合部近接(下が底部側)
PL-65	2区1号小竈跡、3区2号竈穴出土遺物		鉄付着石製品、鍛冶金床石近接
PL-66	2区1号井戸出土遺物	PL-120	磁石の加工痕近接
PL-67	2区1号井戸出土遺物		漆椀底部外面文字近接
PL-68	2区2・3・4・5・7・9号井戸出土遺物		木口近接
PL-69	2区8号井戸、3区11号井戸、2区1号墓出土遺物	PL-121	刃物痕近接
PL-70	2・3区17・20・45・46・65号土坑、58・60・64号溝出土遺物		鉋作業台刃物痕近接
PL-71	1区1・6・15・35・50・64号溝出土遺物		枕木製品近接
PL-72	1区50・52・54号溝出土遺物		お守り刀近接
PL-73	1区52・53・54・56号溝出土遺物		鉄剣近接(5区には繫縛痕が残る)
PL-74	1区3号窟弁、1区1号祭祀出土遺物		数珠近接
PL-75	1区1号祭祀出土遺物	PL-122	木箱加工痕近接
PL-76	1区1号祭祀出土遺物	PL-123	曲物板敷カバ止め近接
PL-77	1区1号祭祀出土遺物	PL-124	杓柄先端の木釘、摩滅痕近接
PL-78	1区1号祭祀出土遺物		曲物板敷カバ止め近接
PL-79	1区1号祭祀、1区第4祀籠跡下水田出土遺物	PL-125	桐板等木釘近接
PL-80	1区第4祀籠跡下水田出土遺物、1区73号溝出土遺物	PL-126	混炭層圧密化による杭の折れ近接
PL-81	1区73号溝、1区3号窟弁出土遺物	PL-127	杭先端近接
PL-82	1区3号窟弁出土遺物		胎土分析に供した焼結粘土塊
PL-83	1区3号窟弁出土遺物、1区As-C下伏群杭	PL-128	集石・土坑出土の土器
PL-84	1区As-C下伏群杭、3・4区1号窟弁出土遺物	PL-129	2・3区出土の土器(第1群、第II群)
PL-85	3・4区1号窟弁出土遺物		1号覆設土器(上段は表、下段は裏)
PL-86	3・4区1号窟弁出土遺物	PL-130	2・3区出土の土器(第II群2・4・5類の表)
PL-87	3・4区1号窟弁出土遺物	PL-131	2・3区出土の土器(第II群2・4・5類の裏)
PL-88	3・4区1号窟弁出土遺物	PL-132	2・3区出土の土器(第II群5類の表)
PL-89	3・4区1号窟弁出土遺物	PL-133	2・3区出土の土器(第II群5類の裏)
PL-90	3・4区1号窟弁出土遺物	PL-134	2・3区出土の土器(第II群5・6類の表)
PL-91	3・4区1号窟弁出土遺物	PL-135	2・3区出土の土器(第II群5・6類の裏)
PL-92	4区2号窟弁出土遺物	PL-136	2・3区出土の土器(第II群6類の表)
PL-93	4区2号窟弁出土遺物	PL-137	2・3区出土の土器(第II群6類の裏)
PL-94	4区2号窟弁出土遺物	PL-138	2・3区出土の土器(第IV群1類、上段は表、下段は裏)
PL-95	4区2号窟弁出土遺物		2・3区出土の土器(第IV群2・3類)
PL-96	4区2号窟弁出土遺物	PL-139	2・3区出土の土器(第V群1類)
PL-97	4区2号窟弁出土遺物、As-B下水田出土遺物	PL-140	2・3区出土の土器(第V群2類)
PL-98	Hr-FA上第1水田出土遺物	PL-141	2・3区出土の土器(第V群2類)
PL-99	Hr-FA上第1水田出土遺物	PL-142	2・3区出土の土器(第V群3・4類)
PL-100	Hr-FA上第1・Hr-FA上第2水田出土遺物		2・3区出土の土器(第VII群)
PL-101	Hr-FA上第2水田出土遺物	PL-143	2・3区出土の土器(第VIII群)
PL-102	Hr-FA上第2・Hr-FA上第3水田出土遺物	PL-144	1区出土の土器(第II群の表)
PL-103	Hr-FA上第3水田出土遺物	PL-145	1区出土の土器(第II群の裏)
PL-104	Hr-FA上第3・Hr-FA下、As-C上水田出土遺物	PL-146	1区出土の土器(第IV-V群群)
PL-105	As-C上水田出土遺物	PL-147	1区出土の土器(第VIII群)
PL-106	As-C上水田出土遺物	PL-148	1区出土の石器
PL-107	As-C上水田出土遺物、 5区As-C上水田木組遺構出土遺物	PL-149	1・2・3区出土の石器
PL-108	5区As-C上水田木組遺構出土遺物	PL-150	2・3区出土の石器
PL-109	5区As-C上水田木組遺構出土遺物	PL-151	2・3区出土の石器
PL-110	5区As-C上水田木組遺構出土遺物	PL-152	2・3区出土の石器
PL-111	5区As-C上水田木組遺構出土遺物	PL-153	第1・第2文化層出土石器
PL-112	5区As-C上水田木組遺構出土遺物	PL-154	第2文化層出土石器
		PL-155	第2文化層出土石器(接合資料)

第1章 発掘調査に至る経過

昭和46年建設省は、一般国道17号の交通混雑緩和のため、上武道路（国道17号バイパス）の建設計画を発表した。計画路線は、埼玉県熊谷市で国道17号と分岐し、利根川を渡河して群馬県に入り、新田郡尾島町・新田町、佐波郡境町・東村・赤堀町、伊勢崎市、前橋市、勢多郡富士見村を経て、前橋市田口町で再び国道17号に接続するものであった。この計画に伴い、国道が開通する地域の埋蔵文化財所在地を明らかにして、文化財保護と開発諸事業との調整をはかる資料を作成することを目的に、昭和46年度に分布調査が実施された。分布調査は、上武道路建設希望路線を中心に幅2kmを調査対象として実施され、総数472件の埋蔵文化財が対象となった。昭和46年11月には正式路線の発表がなされ、昭和47年度には開通が急がれている尾島町から前橋市二之宮町の国道50号間の遺跡について協議が行われ、昭和48年4月1日付けで「一般国道17号線（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」が締結された。これに基づき、昭和49年から1班で発掘調査が開始された。

昭和53年には、増大する埋蔵文化財の調査・活用などに対するため、県教育委員会は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団を設立し、以降上武道路に伴う調査も本事業団が実施してきた。その間、工事の進捗に対応して昭和59年度からは3班、昭和60年度からは4班体制とし、昭和63年度には国道50号までの調査を終了した。

二之宮千足遺跡は、先の分布調査でも遺跡名称なし、No129の古墳時代包蔵地として記載され、昭和60年度には遺跡の性格や範囲の把握を目的とした試掘調査を実施した。試掘調査の結果、沖積地は水田跡の可能性が、台地では奈良・平安時代の住居跡や縄文時代前期の包含層が確認されたうえ、旧石器時代の要調査地と判断された。遺跡名称は、調査区内の大半を占める字名の「千足」に町名の「二之宮」を冠して「二之宮千足遺跡」と命名した。

第2章 調査の方法

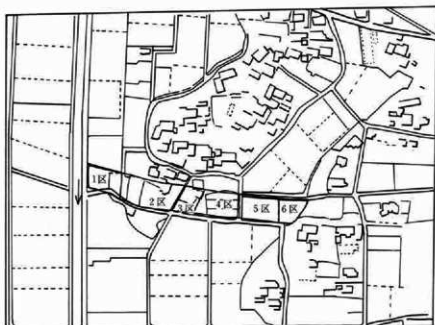
遺跡は、宮川によって形成された沖積地、洪積世から存在する谷地と両者に挟まれた洪積台地とからなる。また、東側の谷地は道路と2本の水路によって分割されていたので、これらによって便宜的に西から1区（宮川沖積地）、2区（洪積台地）、3・4・5・6区（洪積世から続く谷地）と六つの調査区を設けた。また、グリッドは、4m方眼とし、1区側の北西（国土座標第IX系：X=-400360.0、Y=+60085.0）を基準として設定した。グリッドの呼称は、調査区全体が東西に長いことから基準点をA-0として南北方向をアルファベット、東西方向を数字で標記した。グリッドの呼称番号は、北西隅の座標とし、調査区に関係なく通して付した。

台地の発掘調査は、バックホーで表土剥ぎを行った後に遺構調査を開始し、遺構図面は1/20を基本として平板実測で作成した。また旧石器の調査は、2m×4mの試掘を4m間隔で行いAs-BP層の調査終了後、暗色帯上までバックホーで除去し、再び暗色帯の調査を行った。低地部分の発掘調査は、試掘と断面観察の結果、中近世の水田が検出される可能性が低いことからAs-B層上までバックホーで除去した後、水田調査を開始した。3区～6区谷地は、軟弱な泥炭質土層であることから下層の水田調査に移る際には、台地の旧石器調査の排土（暗色帯上のローム層）で部分的に埋め戻し、再び下層の水田確認面上まで掘削する方法で省

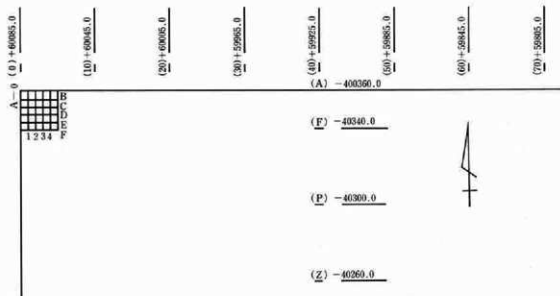
第2章 調査の方法

力化を図った。しかし、ローム層上半除去後は埋め戻し土が不足したために人力で掘削を行い、排土作業のみバックホーを使用することとなった。水田の遺構図面は、1/40を原則としてグリッドに沿った20m×14mの割り付けで作成した。

写真撮影は、モノクロ（35mm、6×9判）とカラーリバーサル（35mm）を使用した。遺構撮影にあたっては35mmを常用し、6×9判は全景撮影にのみ使用した。



第1図 調査区設定図

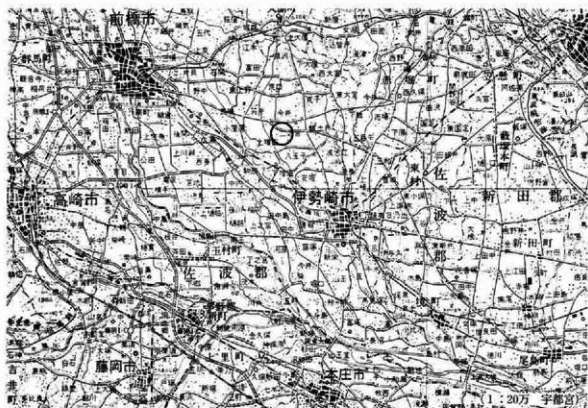


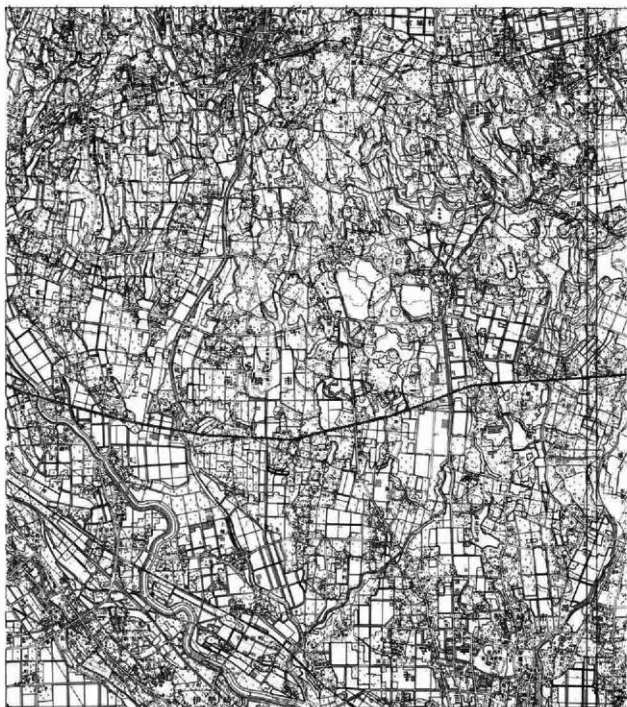
第2図 グリッド設定図

第3章 遺跡の位置と周辺環境

二之宮千足遺跡は、前橋市二之宮町字千足と字五分一に所在する。前橋市街地の東8km、伊勢崎市街地の北東6kmの位置にあり、東700mには上野国二之宮である二之宮赤城神社が鎮座する。この地区は広大な裾野地形をもつ複合成層火山赤城山の南麓裾にあたり、関東平野へつらなる緩やかな低台地が広がっている。低台地は赤城山麓を流下する中・小河川や小支流などによって樹枝状に開折され、複雑な谷地形が形成されている。基盤層は赤城山起源の泥流層で、地表面はローム層を原形面とする台地と、ロームの二次堆積である砂壤土の微高地の他は、沖積地となっている。微高地は降雨災害などによって崩壊した土砂が河川沿いに流出し、流速の衰える山麓末端に再堆積したもので、ローム台地に接している場合が多い。また、低台地は山体に浸透した伏流水が湧出する地区でもあり、湧水地を伴う小支谷も数多く見られる。これらの要素が本地域の地形をさらに複雑なものとしており、またこの地域の特性を生む要因ともなっている。低台地の末端は旧利根川の崖線によって、北西から南東方向に区切られるが、本地区では比高差はほとんど感じられない。

第5図は昭和39年に撮影された本遺跡周辺の空中写真である。この地区は現在大規模な圃場整備事業等により、第6図のように景観が一変している。この2つを見ながら、本遺跡の立地と周辺の地形を見ていこう。中央を流れている宮川は旧利根川の第三次支流で、全長約5kmの小河川である。河川に伴う沖積面は上流域ではほぼ2~4mと狭いが、中流域では小支谷を合わせて幅300mほどの広い沖積面を伴っている。下流域では再び幅が減少し、東側から流下する無名小河川とその間の支谷を合わせて旧利根川の崖線ラインを越え、旧利根低地帯をしばらく流下して荒砥川に合流している。荒砥川はこの先で神沢川を合わせ、旧利根川すじの桃木川に合流している。本遺跡は宮川の下流域左岸のローム台地上に立地している。標高は81mで、沖積地と

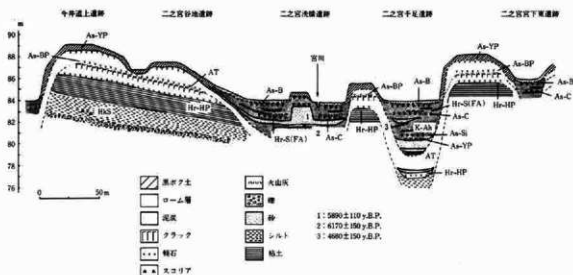




第3図 遺跡位置図

0 1 : 50,000 1,500m

の比高差は2mである。この地点は南北にのびる低台地末端が宮川の支谷で幅100mほどに分割された部分の端部にあたり、この末端には砂壤土性の微高地が接してのびている。この地区では、対岸の荒砥洗橋遺跡をのせる微高地と、荒砥島原遺跡の西側に張り出した部分も、砂壤土性の微高地であることが確認されている。第4図は上武道路関連の発掘調査結果をもとに作成された本地域の主要地質断面図である。ローム台地は榛名八崎軽石層(Hr-HP)以上をのせる洪積台地で緩やかな東側斜面に較べて西側斜面は急峻な傾斜面となっ

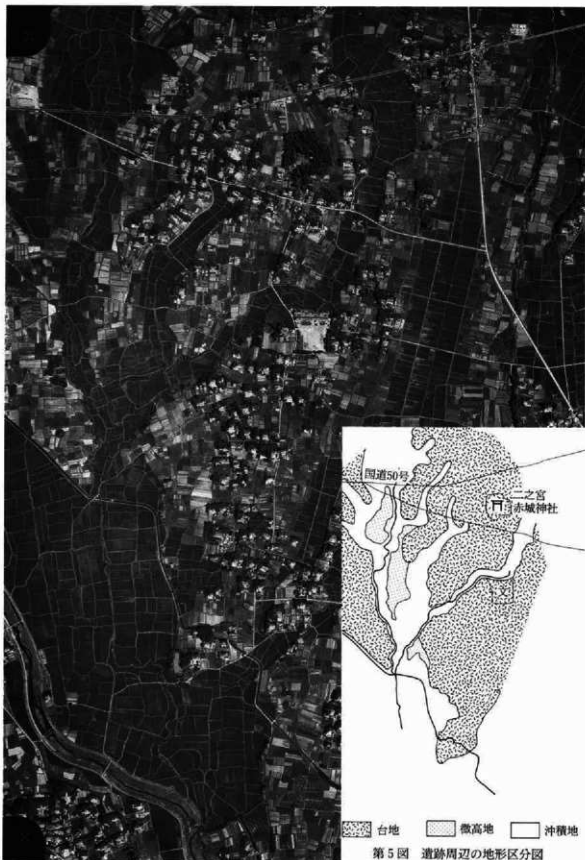


第4図 上武道路沿いの地質断面図 (群馬県史遺史編1より転載)

ている。特に河川を伴う沖積地ではこの傾向が顕著である。宮川が形成した沖積地には砂壤土の堆積が認められ、侵食を免れた中央部が微高地となっている。この微高地に立地する二之宮洗橋遺跡（事業主体は異なるが、荒砥洗橋遺跡と同一の遺跡である。）の調査では、砂壤土上から縄文時代後期前半の土器が出土し、砂壤土下からは縄文時代の石器が数点出土している。この調査結果を補足するため、砂壤土下の黒色土で¹⁴C年代測定を実施し、第4図の1・2の測定結果が得られている。このような砂壤土の堆積は飯土井二本松遺跡でも認められ、ほぼ同様の結果が得られていることから、この地域では縄文時代早期末葉から中期後半のある一時期、あるいは数時期にわたって大規模な山体崩壊があり、宮川遺跡や荒砥島原遺跡をのせる微高地も、この時に形成された可能性が強い。なお、この沖積地では泥土化した浅間C軽石(As-C)と同B軽石(As-B)純層の堆積が認められた。

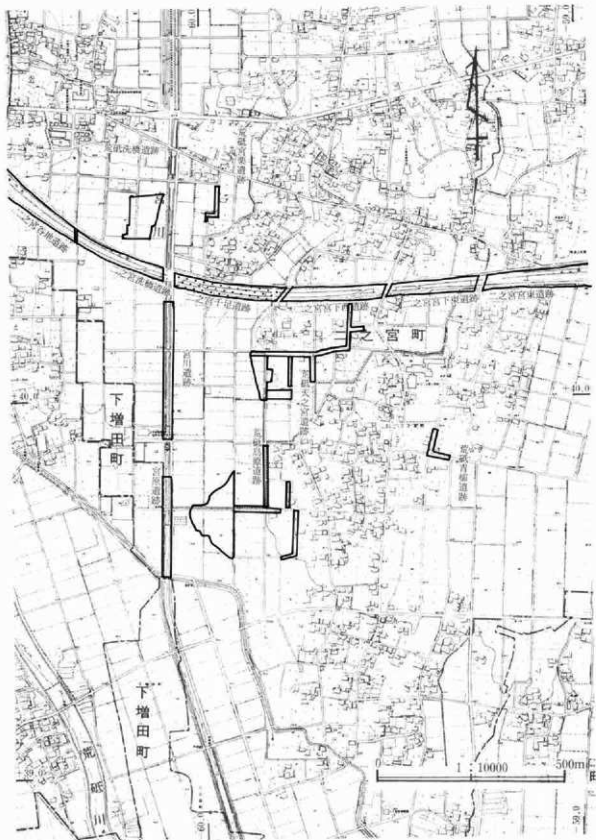
一方本遺跡の東側沖積地は奥行き500mほどの小支谷で、圍場整備前は最奥部や縁辺に数カ所の窰井があった。地元ではこの谷を「種田」と称し、周辺の農家各戸が二畝づつ所有して、次年度の種籾を確保していたという。河川氾濫等の災害を受けない安定性を地域に生かした好事例であるが、このことは逆に河川氾濫等の災害が頻繁にあったことを暗示している。なお、この小規模な谷は実は洪積世から存在する古い谷で、深さは7m以上におよぶことがボーリング調査で判明している。堆積土中には榛名八崎軽石層(Hr-HP)をはじめとする洪積世の火山灰層や砂層数枚と縄文時代の火山灰層や砂層、および浅間C軽石層(As-C)、榛名二ツ岳火山灰層(Hr-FA)、浅間B軽石層(As-B)の堆積が認められ、本地域の環境変化を知るための重要な手掛かりを得ている。

以上のように、本遺跡周辺の地形環境は時代とともにいくつかの変遷をとげている。旧石器時代、本遺跡の立地する台地は眼下に宮川を見下ろす比高差数メートルのローム台地であった。その後台地は堆積が進み、縄文時代早期後半以後には大規模な山体崩壊に伴う砂壤土が低地を埋めつくした。やがて砂壤土は侵食されていくが、取り残された部分が微高地として残り、千足の谷は一挙にその奥行きを増すとともに、滞水性の湿地と化してゆく。やがて低地は耕地化され、現在に至るが、近年の圍場整備事業等により、その景観は再び変化しつつある。



第5図 遺跡周辺の地形区分図

遺跡周辺の航空写真
 [1964年撮影KT61-4、C6-23、24を使用
 この空中写真は、建設省国土地理院長の承認を受けて、
 複製したものである。(承認番号)平4関板、第201号]



第6図 周辺の遺跡

第3章 遺跡の位置と周辺の環境

No.	遺跡名	弥生時代後期		古墳時代前期		古墳時代後期		奈良時代		平安時代		中世		備考
		集落跡地	農跡跡地	墓	農跡跡地	墓	集落跡地	農跡跡地	集落跡地	農跡跡地	集落跡地	農跡跡地		
1	野原宮川	○	石造丁	○	墓	○	○	○	○	○	日本田			
2	# 島原	○		○	○	○		○		○	日本田			縄文遺物(後期後半)
3	# 宮原			○			○							
4	# 西郷					○		○		○	(日本田)			
5	# 宮西					○		○		○				
6	# 天之宮					○	竪井	○	竪井・深井	○	日本田 深井			縄文遺物(早期後半～中期末)
7	# 西郷							○		○				
8	二之宮谷地					○		○	竪井	○	日本田			旧石器遺物(7?) 縄文遺物(前期後半～中期末)
9	# 浅橋			土器						○	日本田			縄文遺物(後期後半)
10	# 千足			土器	○水田		水田	○	水田	○	日本田	井戸		旧石器遺物(4下・5下) 縄文遺物(早期末・前期初) 遺物(後期後半～中期末)
11	# 宮下西					○		○		○		農地		旧石器土器(?) 縄文遺物(中期)
12	# 宮下西						水田遺跡		水田・深井 水田遺跡	○	日本田	#	水田	縄文遺物(前期後半)
13	# 宮東			土器						○	日本田・農地	#		縄文遺物(中期後半)

次に周辺の遺跡について見てみよう。上表は発掘調査された周辺の遺跡を、弥生時代以降を中心にまとめたものである。1～7は圃場整備関連、8～13は上武道路関連で調査された遺跡である。旧石器時代の文化層は3遺跡で発見されているが、試掘調査を実施したのは5遺跡のみであり、高い確率で確認されていると言えよう。縄文時代の遺物は8遺跡で発見されており、草創期後半から後期のものが認められる。しかし、大半はごく少量の散布が認められたにすぎず、遺構を伴うのは2遺跡にすぎない。調査区が縄文時代の遺跡連地からはずされているためであろうが、早期後半以後の山体崩壊に伴う沖積地の埋没が、その一要因となっている可能性もある。弥生時代以降は全遺跡で集落が確認されており、本地区が農耕連地であることを示している。このなかで宮川・島原は弥生時代後期から継続する伝統集落で、この地区の沖積地を開田した当事者となることができよう。その墓域は本地区の中央部にあたる島原遺跡の微高地におかれた。その後耕地拡大に伴い、各台地・微高地に新開集落がおかれ、墓域は宮川遺跡の割端部と宮西遺跡に移された。河川からはずれた谷地遺跡や天之宮遺跡、宮下東遺跡では、用水を確保するために「竪井」を導入し、耕地の拡大を促進している。こうして耕地は拡大され、平安時代には沖積地のほとんどが耕地化されたであろう。やがて中世になると、本地区の中心は二之宮赤城神社周辺に移ることになる。

第4章 遺跡の概要

1. 遺跡の立地

二之宮千足遺跡は、赤城山南麓に源を発する小河川、宮川左岸にのびる標高84m前後の洪積台地とその両側の低地に立地する。洪積台地は南北に長いが、調査区はその南端にあたる。台地西側の低地は、宮川の形成した沖積地で堆積土中にはAs-B、Hr-FA、As-Cといった3枚のテフラと洪水による堆積層が認められた。東側の低地は小規模の谷地であるが、基盤層までの深さは中央で6・7mと深く、後に述べるように洪積世から続く低地であることが判明した(自然科学・分析編参照)。テフラは西側低地同様、As-B、Hr-FA、As-Cの3枚が確認されたが他の堆積層は西側と全く異なり、泥炭質の堆積層が厚く堆積していた。

2. 調査の概要

旧石器時代

2区とした洪積台地からは、As-BP を多量に含むローム層と始良 Tn 火山灰(火山ガラス)、As-HA といたったテフラが確認されたが、As-YP 付近の層準は削平されていた。更に台地西側では、AT から AT 下の暗色帯上部まで大きく削り取られていた。先土器時代の調査は、4mごとに2m×4mの試掘グリッドを設け、石器の出土した部分を拡張する方法で行い、As-BP 層と暗色帯の2枚の文化層を確認した。前者は、文化層といっても剥片2点が出土したのみであった。しかし、西側ではこの層準が削平されていることから調査区全体の分布は不明である。後者では、黒色安山岩を主体としたブロック1カ所を検出した。

縄文時代

遺構は埋壘1基、土坑12基、陥穴3基、集石7基を検出した。遺構の分布は、台地が削平を受けているため、埋壘底部が台地中央で検出された以外は台地東側縁辺に集中している。また、遺構の分布する台地縁辺から東側谷地にかけて早期後半～後期前半の包含層を検出し、厚い部分では1mにも達した。包含層は早期後半・前期～中期・後期前半の遺物が層を異にして出土し、後期後半の層位からは小型の石櫛が出土している。

古墳時代

調査区内では集落は確認されず、水田関連遺構が確認された。西側低地では、洪水堆積層に埋没した水田2面を検出し、水田に伴う水路と水溜状遺構や溜井(3号溜井)も存在した。溜井内とその周辺には、土師器杯を中心とした遺物が集中して出土し、何らかの祭祀・儀礼を思わせる状態であった。

東側谷地では、Hr-FA 下、As-C 上、As-C 下と3面の水田が検出された。このうち、As-C 上水田からは建物とも推測される木組遺構が1基確認されている。

奈良・平安時代

台地では墾穴住居27軒、小鍛冶遺構1基、墾穴遺構2基などを検出した。西側低地ではAs-B 下水田を、東側谷地ではAs-B 下、Hr-FA 上第1・2水田の3面を検出した。各水田調査中に種子、昆虫、木製品、土器が出土している。また、谷地東側縁辺の洪水砂層中からは、1万点をこえるメロン仲間の種子が出土した。

中世～近代

中世の遺構は井戸1基(4号井戸)、墓1基のみであった。ごく僅かであるが、遺構外出土遺物として青白磁梅瓶、白磁などがある。青白磁梅瓶は2点のみであるが、北側台地での館、荘園などの存在を推測させる。

近世・近代では、東側谷地において溜井(1・2号溜井)が検出され、2号溜井は明治6年の絵図に記載されているものと考えられる。西側低地では、水路と考えられる溝が多数検出された。

第5章 検出された遺構と遺物

第1節 台地(2・3区)で検出された遺構と遺物

2区1号住居跡(第7・8・9・10図、PL-1・2・57)

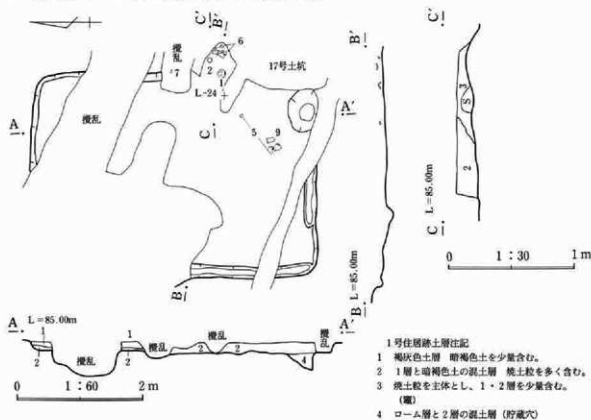
K-23グリッドで検出された。北西部や竈付近などは擾乱のため確認できない。更に東壁南側は江戸時代に廃棄された17号土坑に壊されているために遺存状態は悪く、主軸方位や規模は計測できない。しかし、残存部分から平面形は隅丸長方形、規模は長軸4.6m、短軸3.3mと推定される。

竈前面には貼り床を構築する一方、掘形のない北半部分はローム層を床面として使用している。南壁と西壁には深さ5cmの壁溝が掘られている。また、南東隅には深さ30cm前後の貯蔵穴が穿たれている。遺物は竈と貯蔵穴の存在する南東部分に集中する。

竈は東壁南寄りに構築されるが、擾乱と17号土坑により一部が壊されている。竈内には灰の堆積や壁などの焼土化はほとんど認められず、竈の前にも灰の分布は検出されていない。

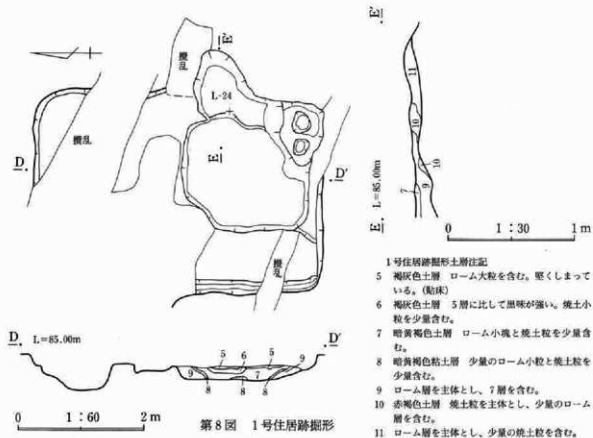
掘形は竈と竈前面に認められた。竈前面は土坑状に20cm程掘りくぼめ、灰褐色土やロームを主体とした土で埋め戻している。この床下土坑からも土師器片が出土しているが、小片のため図示していない。

遺物は土師器杯類13点、壺変類163点、須恵器杯類14点、壺変類3点、盤1点、鉄滓3点、被熱粘土塊2点、石類6点が出土した。これらのうち、南東部分から出土した土師器壺(5)、くぼみ石(9)、竈内から出土した須恵器杯(1・2)、土師器壺(6)などを図示した。

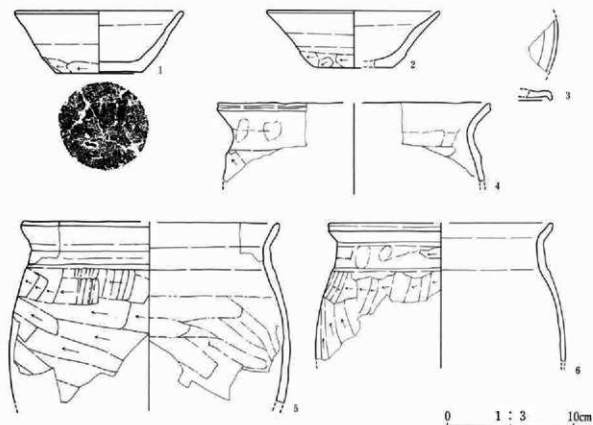


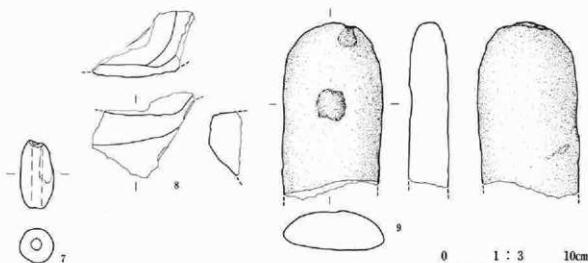
第7図 1号住居跡床面

第1節 台地（2・3区）で検出された遺構と遺物



- 1号住居跡掘形土層注記
- 5 褐色土層 ローム大粒を含む。堅くしまっている。(黏床)
 - 6 褐色土層 5層に比して黒味が強い。焼土小粒を少量含む。
 - 7 暗黄褐色土層 ローム小塊と焼土粒を少量含む。
 - 8 暗黄褐色粘土層 少量のローム小粒と焼土粒を少量含む。
 - 9 ローム層を主体とし、7層を含む。
 - 10 赤褐色土層 焼土粒を主体とし、少量のローム層を含む。
 - 11 ローム層を主体とし、少量の焼土粒を含む。





第10図 1号住居跡出土遺物(2)

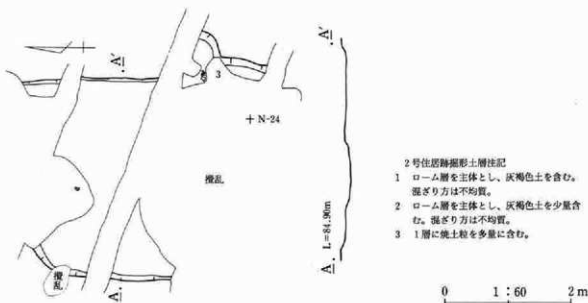
2区2号住居跡(第11・12・13図、PL-2)

M-23グリッドに位置する。南北の壁が攪乱で検出されないために主軸方位は不明であるが、東西壁から判断してほぼ北を指すと考えられる。規模は短軸が3.16mを測るが長軸は不明である。東斜面を除いた台地部分が削平されているため残存壁高は8cmと低い。

竈は東壁南寄りに構築されているが、攪乱により北半分と前面が破壊されている。竈の遺存は悪く、灰や焼土も遺存していない。

掘形は竈部分と2基の床下土坑が検出されたのみで貼床は認められなかった。

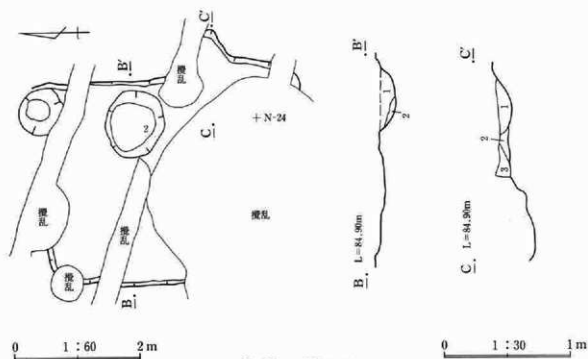
遺物は土師器杯類24点、甕類11点、須恵器蓋1点、石類1点の計37点と少ない。出土遺物は全体に遺存状態が悪く、竈内出土の土師器甕(3)と床下土坑出土の須恵器碗(1)の2点を図示した。なお、2の土師器甕は、攪乱内出土であるが時期的に一致すると考えられるため参考として掲載した。



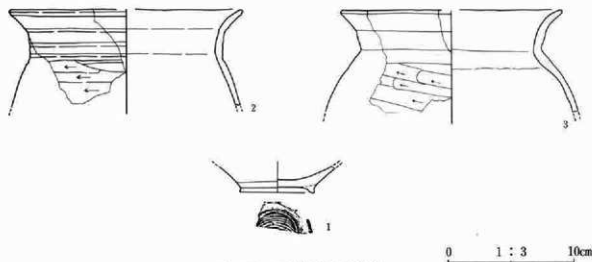
第11図 2号住居跡床面

2号住居跡掘形土層注記

- 1 ローム層を主体とし、灰褐色土を含む。掘ざり方は不均質。
- 2 ローム層を主体とし、灰褐色土を少量含む。掘ざり方は不均質。
- 3 1層に焼土粒を多量に含む。



第12図 2号住居跡掘形

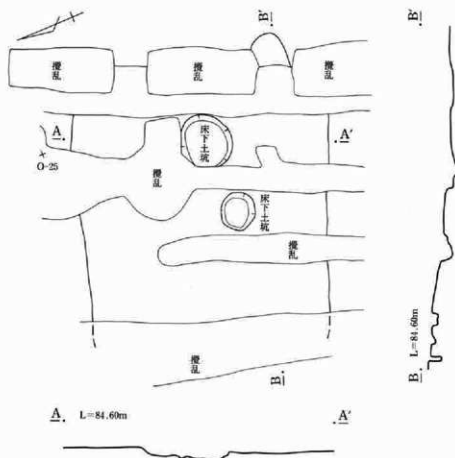


第13図 2号住居跡出土遺物

2区3号住居跡（第14・15図、PL-2）

N-24グリッドに位置する。4号住居跡の西側に近接して焼土が僅かに分布し、焼土の西側には黒ずんだローム層が方形に確認されたため住居跡と判断した。したがって、床面や壁は残存せず、掘形の痕跡を検出したにとどまった。平面形や規模は不明であるが、南北の軸長は4.2m前後と推定される。掘形内には床下土坑と推定される土坑が2基検出されている。遺物は土師器杯類27点、壺類13点、須恵器杯類3点、石類2点が出土し、土師器杯（13）1点のみが図示し得る個体であった。

第5章 検出された遺構と遺物



第14図 3号住居跡掘形

0 1 : 60 2 m



第15図 3号住居跡出土遺物

0 1 : 3 10cm

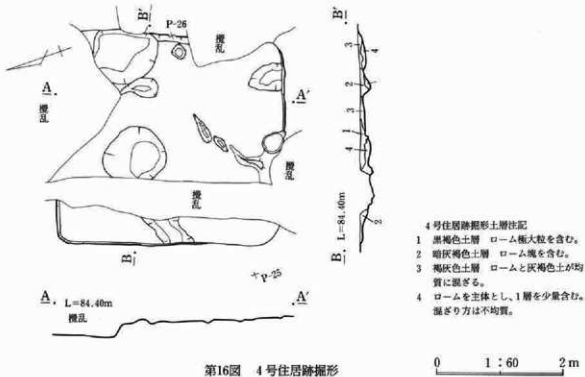
2区4号住居跡 (第16図、PL-2)

台地中央のO-25グリッドに位置する。台地中央部は後世の削平が著しく、浅い部分で深さ3cm程度の掘形が遺存していたのみである。また、この付近は擾乱も多く北東隅と東壁南側などが破壊され、全体は確認されていない。遺存部分から考えて、平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。

竈は検出されていないが、東壁南側の擾乱部分に構築されていたと推測される。

掘形底部は凹凸が多くローンを主体とした土で埋めている。

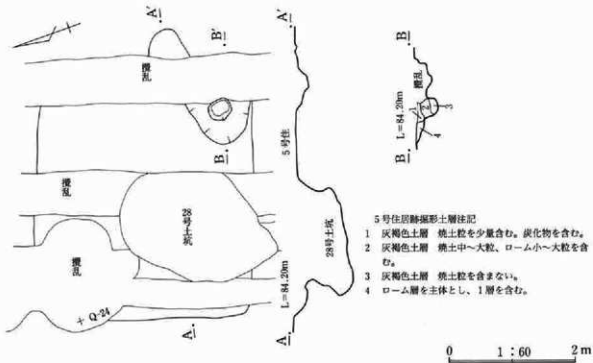
遺物は土師器杯類1点、甕類3点、須恵器杯類1点の計5点が出土したのみで図示し得る個体は認められなかった。時期的には平安時代であろう。



第16図 4号住居跡掘形

2区5号住居跡（第17図、PL-2）

P-24グリッドに位置し、主軸方位はN-22°-Eを示す。台地頂部付近の住居は後世の崩平によって掘り



第17図 5号住居跡掘形

第5章 検出された遺構と遺物

込みの多くは消失し、本住居跡もローム層が多少汚れていることで掘形底部が検出できた。規模は南北3.44mを測るが、東壁が覆乱により破壊されているために東西は不明である。平面形は竈の位置から長方形と推測される。

竈に明確な掘り込みは検出されないが、焼土の分布から東壁南寄りに構築されていると判断された。竈に近い南隅には貯蔵穴の底部が検出された。

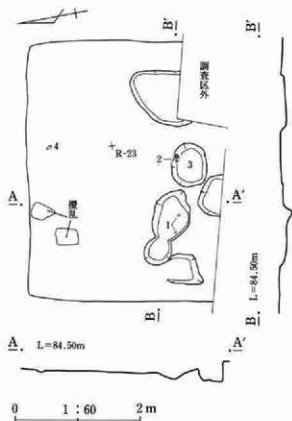
貯蔵穴以外は輪郭がかるうじて検出できたのみであり、遺物の出土は全くなかった。

2区6号住居跡 (第18・19図、PL-2・57)

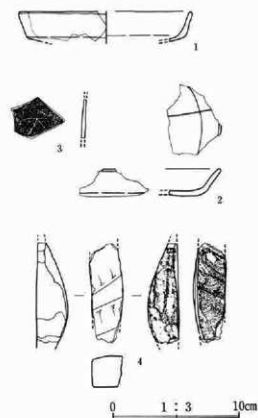
調査区南端のQ-22グリッドに位置する。南壁は調査区内に位置するが、削平が著しいこと、道路として使用されていたうえに遺構検出面まで2・3cmしかないことから遺構が検出できないと判断し、塵土用道路として使用した。この結果、南壁は検出できず平面形は不明である。主軸方位は測れないが、北壁からN-22°-E程度と推定される。5号住居跡同様、ローム層に上層が僅かに混入している範囲を住居跡プランとした。掘り込みとしては床下土坑が検出されたのみである。規模は南北が不明、東西4.12mを測る。

竈は検出されない。

遺物は土師器杯類11点、壺類16点、石類2点が出土し、これらのうち内面底部に「大」字の刻書が認められる土師器杯破片(3)、内面に刻書の一部が認められる土師器杯口縁部破片(2)や土師器杯(1)、砥石(4)の4点を図示した。



第18図 6号住居跡掘形



第19図 6号住居跡出土遺物

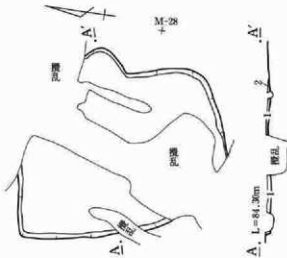
2区7号住居跡（第20・21・22図、PL-3）

L-27グリッドに位置する。北東隅と南西隅にかけての対角線は、攪乱により破壊されている。北東隅が検出されないため主軸方位は正確に測れないが、約N-13°-Wを示すものと推定される。平面形は隅丸長方形で、規模は東西2.47m、南北3.35mを測る。残存壁高は台地が後世の削平を受けているために深い部分で14cmと遺存が悪い。

竈は東壁北寄りに構築され、埋土には焼土粒を多量に含んでいたが火床面は焼土化していない。また、前面にも灰や焼土の分布は認められなかった。

掘形は全体に約15cm程掘り下げ、ローム層を主体とした土で埋戻している。北壁と南東隅には床下土坑が穿たれている。

遺物は土師器杯類17点、甕類25点、須恵器杯類2点、石類5点の計49点出土しているが、図示し得たのは掘形出土の土師器杯2点（1・2）のみであった。

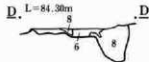
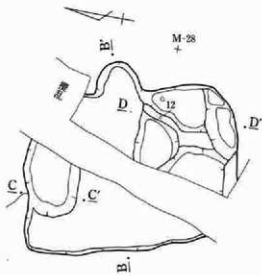


7号住居跡土層注記

- 1 暗褐色土層 ローム小粒を約10%含む。
 - 2 暗褐色土層 焼土小粒を多く含む。
- 7号住居跡掘形土層注記
- 3 ロームを主体とし、焼土と灰を含む。硬化した床面。
 - 4 暗褐色土層 焼土と灰を含む。
 - 5 黄褐色土層 灰白色粘土粒と焼土小粒を含む。
 - 6 4層とロームの強土層 ロームは塊状を呈する。
 - 7 暗黄褐色土層 灰褐色土を主体とし、ロームを含む。
 - 8 暗灰褐色土層 ローム中粒を含む。
 - 9 灰褐色土層 ローム小粒を少量含む。
 - 10 ロームを主体とし、9層を少量含む。
 - 11 6層に近似し、焼土小-大粒を含む。
 - 12 ローム暗色帯の小塊。

第20図 7号住居跡床面

0 1 : 60 2m



0 1 : 60 2m

第21図 7号住居跡掘形



第22図 7号住居跡出土遺物

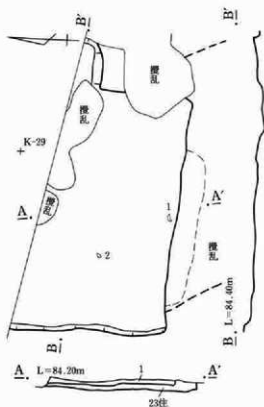
2区8号住居跡 (第23・24図、PL-3・4)

調査区北端のK-28グリッドに位置する。北壁は調査区外で検出できず、南壁と東壁は9号住居跡との重複によって明確には検出できなかった。また、南東隅は攪乱により遺存していない。以上の理由から主軸方位、平面形、規模は不明であるが、東西の規模は約3.80m前後であろう。本住居跡は9号住居跡、23号住居跡と重複し、いずれも本住居跡が新しい。残存壁高は11cmと浅く、この部分も削平を受けていると考えられる。床面はたいして硬化しておらず不明瞭であった。このため、検出した床面には小さい凹凸が目立っている。

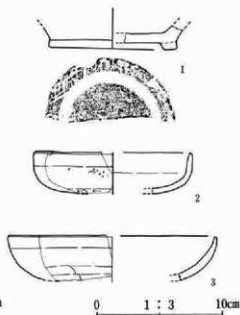
竈は東壁に構築されているが、北半分は調査区外のため検出不可能であった。竈の遺存状態は悪く、火床面や壁の焼土は既に剝落していた。また、前面にも明確な灰の分布は認められない。

掘形は23号住居跡との重複によるためか、掘形と23号住居跡埋土との区別が不可能であった。

遺物は土師器杯類34点、壺甕類68点、須恵器杯類5点、壺甕類3点、石頭5点、鉄滓7点、被熱粘土塊1点の総計123点が出土した。しかし、すべて小片のため図示したのは床面出土の土師器杯(2)と床面上約10cmから出土した須恵器壺底部(1)、掘形出土の土師器杯(3)の3点のみである。



第23図 8号住居跡床面



第24図 8号住居跡出土遺物

2区9号住居跡(第25・26・27図、PL-3・4・57)

調査区北側のK-28グリッドに位置し、8号住居跡、23号住居跡と重複する。新旧関係は断面観察から本住居跡が最も古いと判断される。北東隅と南西隅を攪乱で、北壁を8・23号住居跡に破壊されており、主軸方位、平面形、規模は不明である。残存壁高は17cmと本遺跡では比較的良好である。床面は全体に柔らかく不明瞭であった。南東隅には主軸を住居の対角線にもつ長方形の土坑が検出された。深さ15~20cmのこの土坑は、主軸方位から住居跡とは重複関係にあると考えられるが、新旧関係は確認し得なかった。そのため、住居跡と同一図で掲載した。

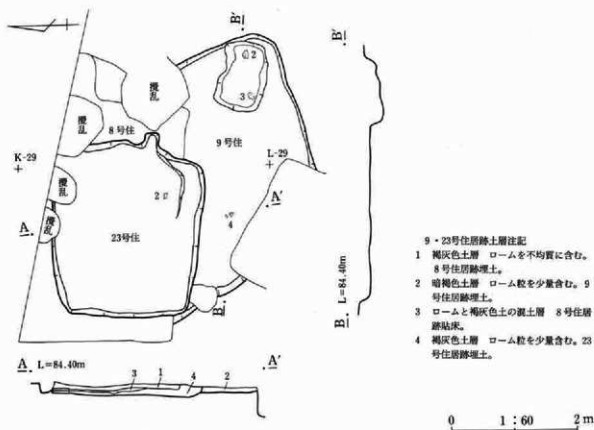
竈は東壁の攪乱部分に構築されていたと考えられるが、その痕跡は検出されなかった。

掘形は全体を床面下20cmほど掘り下げている。床下土坑は、住居跡中央と南壁に沿って溝状に掘り込んでいる。

遺物は土師器杯類26点、壺類8点、須恵器杯類3点、石類2点、被熱粘土塊1点の計40点が出土し、4点を図示した。これらのうち、須恵器杯(2)と土師器杯(3)は土坑内出土、4の土師器壺は床面出土、1の須恵器杯は掘形出土である。

2区23号住居跡(第25・26・28図、PL-4・57)

8・9号住居跡と重複し、断面観察から8号住居跡より古く、9号住居跡より新しいと判断される。北東隅は攪乱と調査区の関係から検出できない。主軸方位はN-2°-Eを示し、平面形は東西2.69m、南北2.39mの長方形である。残存壁高は8号住居跡との重複もあって10cmと浅い。床面は中央部分を褐色土とローム



第25図 9・23号住居跡床面

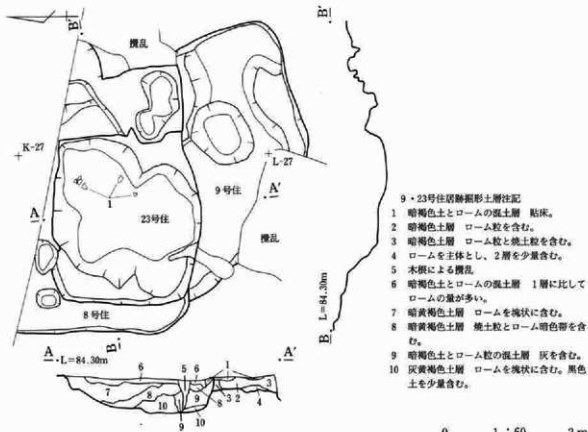
第5章 検出された遺構と遺物

の混土層を貼って構築し、貼床部分は比較的硬化していた。

竈は東壁南寄りに小さく壁外に張り出して検出された。遺存が悪く火床面は焼土も少なく袖も検出されない。

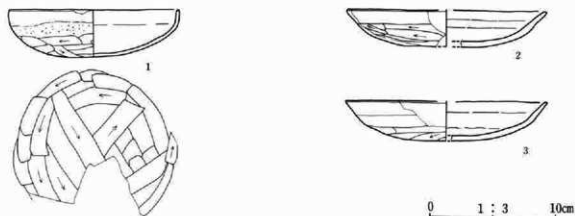
掘形は中央を60cmほど深く掘り下げて不整形の床下土坑を作っている。

遺物は土師器杯類28点、壺甕類42点、須恵器杯類3点、内黒の須恵器1点、石類2点の計76点が出土した。小片が主体のため図示し得たのは、竈前床面上2cmから出土した土師器杯(2)、掘形出土の土師器杯(3・1)の3点のみである。なお、1の土師器杯は床下土坑内の3カ所から出土した破片が接合している。



第26図 8・9・23号住居跡掘形





第28図 23号住居跡出土遺物

2区10号住居跡（第29～36図、PL-4・5・57・58・59）

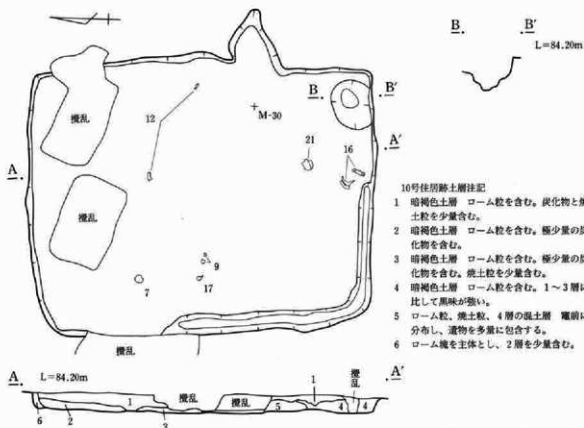
調査区北東寄りのL-29グリッドに位置する。9・14号住居跡に20cmと近接し、24号住居跡と重複する。新旧関係は本住居跡が新しい。13号住居跡とも重複するが、重複部分が攪乱によって破壊されているため新旧関係は不明である。本住居跡は遺存状態が良好で残存壁高は37cmと高い。壁も東壁北端が攪乱によって小さく破壊されている程度である。主軸方位はN-3°-Wを示し、平面形、規模は東西4.14m、南北5.50mの長方形を呈する。床面は、ローム層をそのまま板状に貼って構築し全体に硬化していた。南壁中央から西壁中央にかけて幅15～20cm、深さ6cmの壁溝が巡っている。南東隅には、床面からの深さが30cm程の貯蔵穴が穿たれている。

竈は東壁南寄りに75cm張り出して構築される。竈埋土には焼土や灰を多量に含み、火床面と壁にも焼土が遺存していた。竈煙道の先端には土師器甕（11）が口縁部を壁外に向けた状態の小片となって検出された。甕の内面に煤の付着は認められないが、甕を転用した煙道の可能性が考えられよう。床面上や壁に袖の基部は残存していない。竈前に堆積する埋土5層からは土師器甕の破片を中心として多量の土器が出土した。

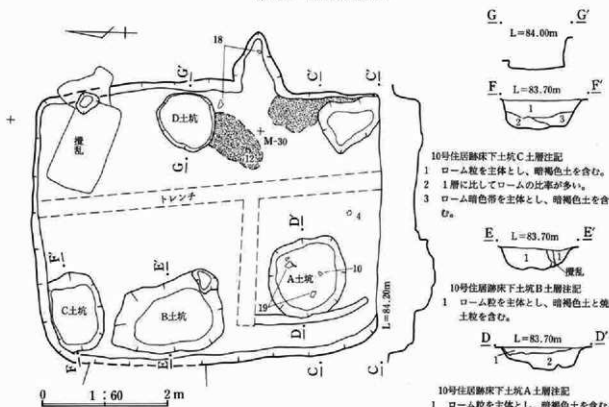
掘形を調査するために最終床面を除去したところ、6～10cm下にもう一枚の明確な硬化床面が確認された。更に、西壁南側の40cm内側には深さ12cmの壁溝が検出され、西壁の拡張が行われていることが判明した。拡張前の床面には拡張時に床下土坑4基が掘り込まれ、A土坑からは土器が出土している。

拡張前掘形は、多くの不整形床下土坑を掘り込んでいる。南側の直線的な落ち込みは、24号住居跡の掘形である。

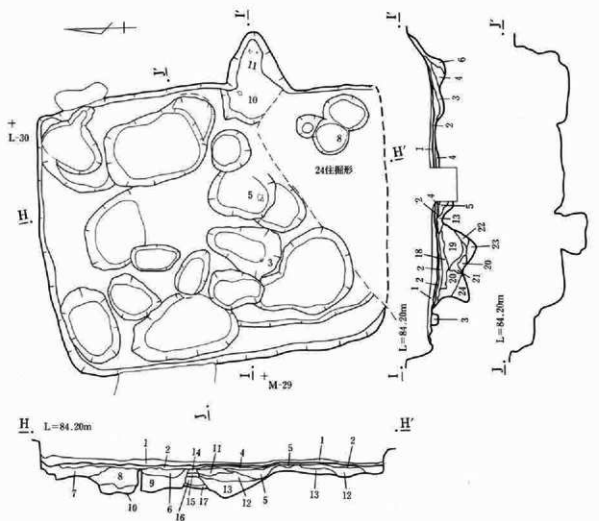
遺物は土師器杯類990点、甕類1298点、須恵器杯類174点、壺類2点、内黒2点、蓋22点、鉄器5点、石類24点、鉄滓8点、被熱粘土塊11点が出土した。図示した遺物の多くは住居跡南東隅と竈前から出土し、器種は土師器甕が主体である。なお、10と19の土師器甕は拡張後の床下土坑出土、4の須恵器杯と12の土師器甕は拡張前の床面出土、5の須恵器杯は拡張前の掘形出土、10、11の土師器甕は竈掘形出土である。



第29図 10号住居跡床面



第30図 10号住居跡拡張前床面、拡張後掘形



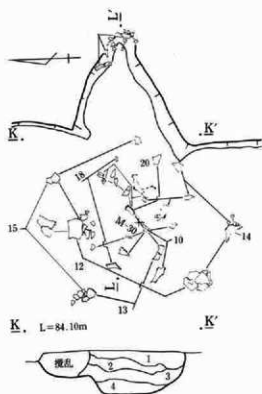
10号住居跡掘削土層注記

- | | |
|--|---|
| <p>1 ロームを使用した埋土。拡張後の床面。
 2 ロームを主体とし、部分的に黒色土を板状に2・3層含む。
 拡張前床面。
 3 暗褐色土層 拡張前の壁溝。
 4 ローム2次堆積土中に薄い黒土層を挟む。
 5 ローム塊、灰、焼土塊の混土層
 6 焼土粒を主体とし、ローム粒と灰を含む。
 7 ロームを主体とし、灰黄褐色土を少量含む。
 8 灰黄褐色土層 ローム塊を含む。灰を少量含む。
 9 灰黄褐色土層 ローム粒を含む。
 10 ロームを主体とし、8層を少量含む。
 11 黄褐色土層 部分的に黒色土を板状に薄く含む。焼土粒を含む。
 12 黄褐色土層 黒色土大粒を含む。</p> | <p>13 黄褐色土層 黒色土塊を含む。
 14 2次堆積ローム
 15 黒褐色土層 ロームを少量含む。
 16 ロームを主体とし、暗褐色土中粒を含む。
 17 ロームと15層の混土層
 18 暗褐色土層 ローム極小粒を含む。
 19 ロームを主体とし、暗褐色土を塊状に含む。
 20 暗褐色土層 ローム中粒を含む。
 21 暗褐色土層 ローム極小へ中粒を含む。
 22 ローム暗色帯に21層を少量含む。
 23 ロームと20層の混土層
 24 暗褐色土層 ロームを塊状に含む。</p> |
|--|---|

0 1 : 60 2 m

第31図 10号住居跡拡張前、拡張後掘削

第5章 検出された遺構と遺物

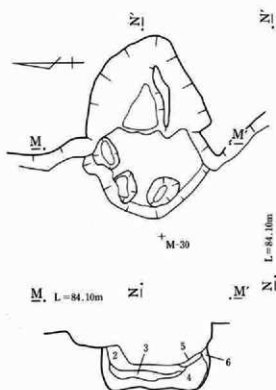


10号住居跡燻土層注記

- 1 褐色土層 焼土粒と灰を含む。
- 2 黄褐色土層 焼土粒を多量に含む。
- 3 2層に近似するが、黒味が強い。
- 4 ローム粒、灰、灰褐色土の混土層
- 5 ローム粒と焼土粒の混土層

第32図 10号住居跡燻

0 1 : 30 1 m



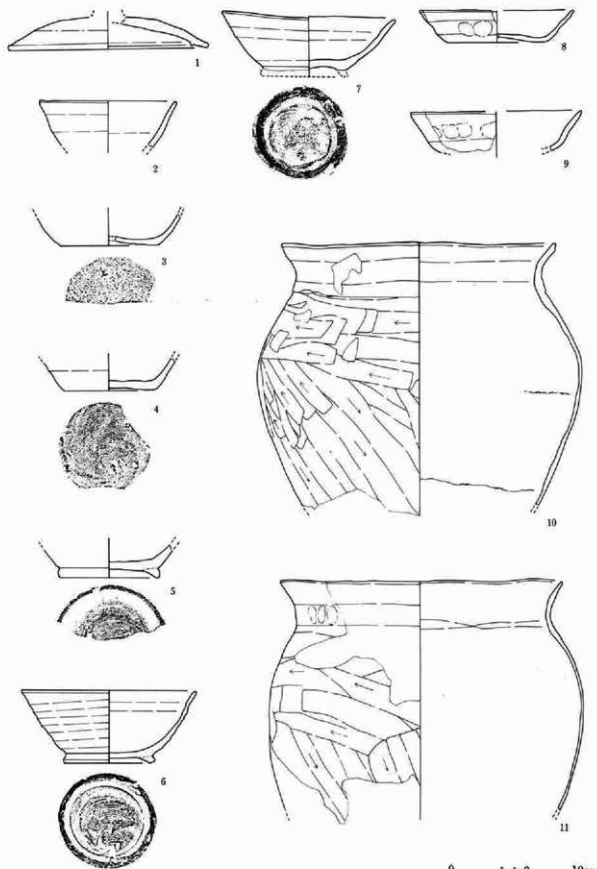
10号住居跡燻電形土層注記

- 1 焼土、灰、ロームが薄く互層をなす。
- 2 ロームの焼土化したものを主体とし、灰を含む。
- 3 ローム、灰、焼土の混土層
- 4 ロームを主体とし、焼土粒を多量に含む。
- 5 焼土層
- 6 ロームを主体とし、焼土粒、灰を多量に含む。

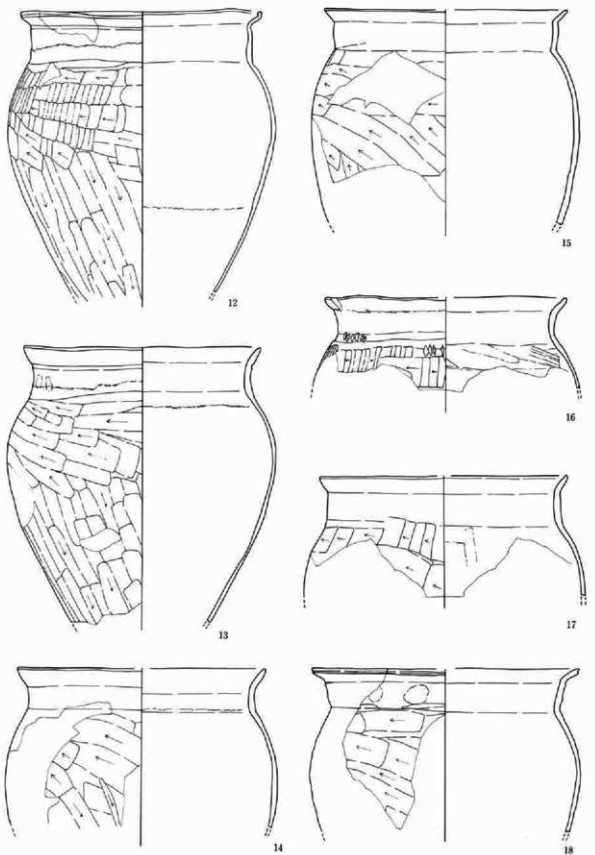
第33図 10号住居跡燻電形

0 1 : 30 1 m

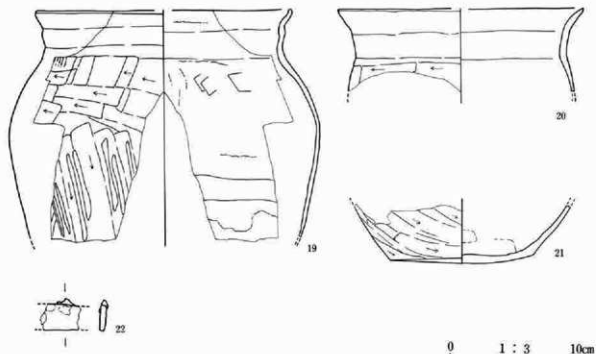
第1節 台地（2・3区）で検出された遺構と遺物



第34図 10号住居跡出土遺物（1）



第35図 10号住居跡出土遺物(2)



第36図 10号住居跡出土遺物（3）

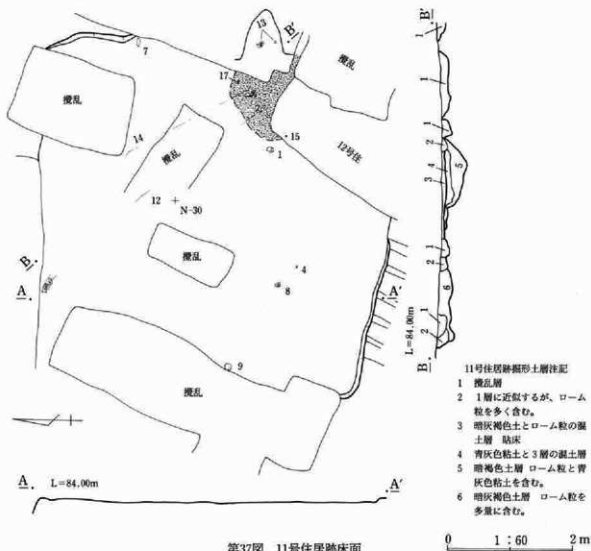
2区11号住居跡（第37・39図、PL-5・6・59）

M-29グリッドに位置し、12・24号住居跡と重複する。新旧関係は、断面観察から24号住居跡より新しく、12号住居跡との関係は、本住居跡がプラン確認時に床面が露出する状態であったが平面的に本住居跡が古いことが確認された。本住居跡は削平を受けているうえに攪乱で破壊された部分も多く、壁は南西と北東の一部が確認されたのみで、平面形、規模、主軸方位は不明である。残存壁高は最も高い部分でわずか8cmである。床面はローム粒を多量に含む土を用いて貼床を行い、硬く締まっている。

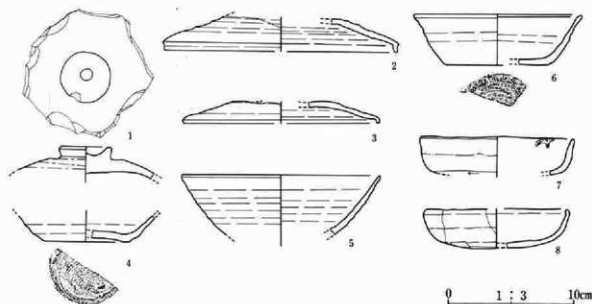
竈は攪乱の底部で掘形を検出することができ、その場所は東壁南寄りに相当する。

掘形は断面観察によると床下土坑などが確認されるが、調査の都合上24号住居跡の床面調査を行った。

遺存状態が不良のわりに出土遺物は多く、土師器杯類1694点、壺罎類156点、須恵器杯類164点、壺罎類118点、須恵器蓋19点、内黒碗1点、石類3点、鉄器14点、鉄滓4点、被熱粘土塊4点と多量に出土した。出土位置は住居跡南側と竈前に集中する傾向が認められる。竈前出土の須恵器蓋（1）の口縁部は、人為的に打ち欠かれていると考えられる。また、西壁際付近床面出土の土師器杯（9）の底部外面には記号のような墨書が認められる。なお、12の小型土師器台付壺は竈前と北壁際出土破片が接合し、13の土師器壺は竈掘形出土である。

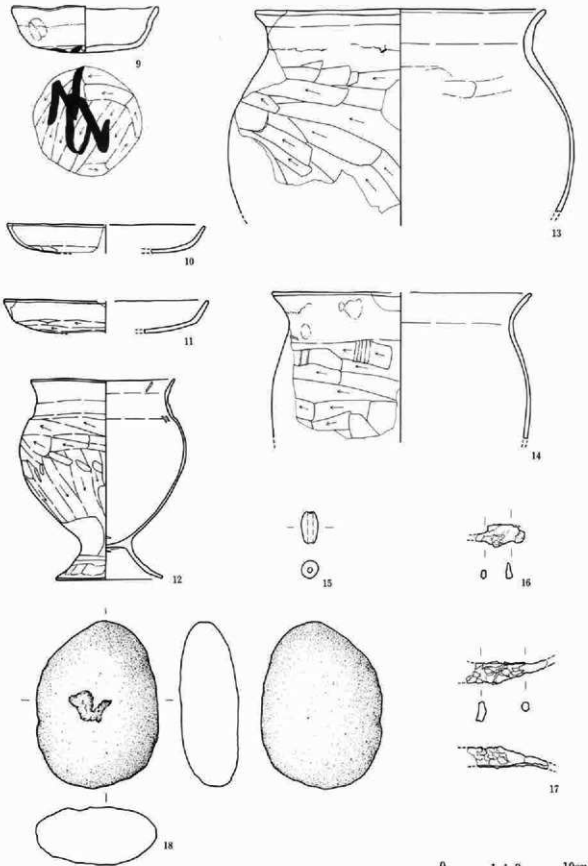


第37図 11号住居跡面



第38図 11号住居跡出土遺物(1)

第1節 台地（2・3区）で検出された遺構と遺物



第39図 11号住居跡出土遺物（2）

2区12号住居跡 (第40~44図、PL-6・59・60・61・127)

2区北東寄りのN-30グリッドに位置し、11号住居跡と重複する。新旧関係は本住居跡が新しい。主軸方位はN-37-Eを示し、平面形・規模は東西南北それぞれ3.5mの正方形を呈し、他に比して新しい様相を呈している。床面は覆瓦が多く入っているが竈前付近は硬くしまっていた。壁の遺存は北西側が悪く南側が良好であり、残存壁高は0~23cmを測る。



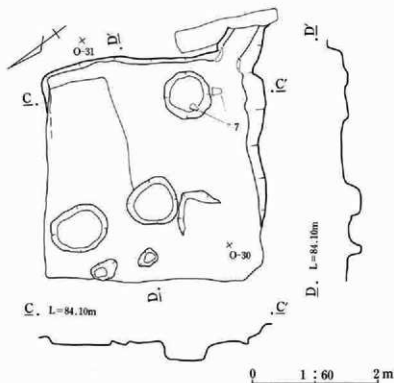
第40図 12号住居跡床面

を測る。

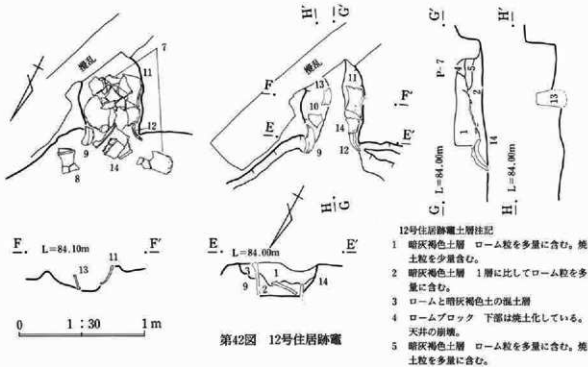
竈は南隅に構築され、竈前には焼土と灰の分布が認められた。竈の壁には打ち欠いた円筒埴輪の内面を内側に向け(8・10・11・14)、焚口には外面を内側に向けて使用(9・12)し、更に支脚にも利用(13)していた。

掘形は円形の床下土坑を3カ所に設ける程度である。なお、竈前の床下土坑は焼土と灰を多量に含んだ土で埋めていた。

遺物は土師器杯類1787点、壺甕類106点、須恵器杯類144点、蓋21点、羽釜1点、円筒埴輪7点、土鍾1点、鉄器1点、石類4点、鉄滓3点、被熱粘土塊7点である。しかし、混入遺物が多く図示した中でも本住居跡の時期を示すものは竈内出土の羽釜(7)1点と考えられる。



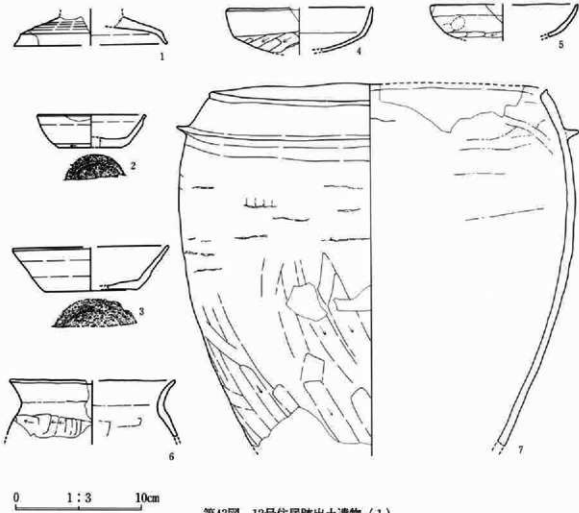
第41図 12号住居跡掘形



第42図 12号住居跡電

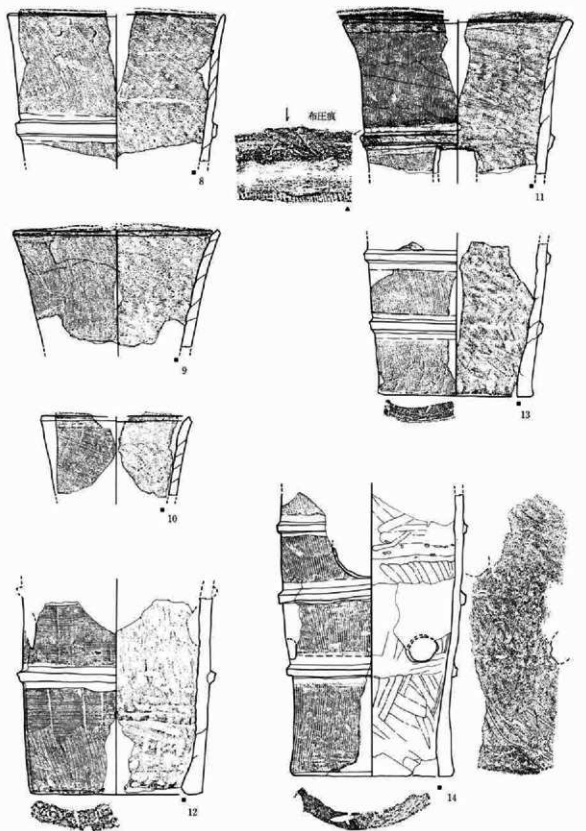
12号住居跡土層注記

- 1 暗灰褐色土層 ローム粒を多量に含む。焼土粒を少量含む。
- 2 暗灰褐色土層 1層に比してローム粒を多量に含む。
- 3 ロームと暗灰褐色土の強土層
- 4 ロームブロック 下部は焼土化している。天井の崩壊。
- 5 暗灰褐色土層 ローム粒を多量に含む。焼土粒を多量に含む。



第43図 12号住居跡出土遺物(1)

第5章 検出された遺構と遺物



第44図 12号住居跡出土遺物(2)

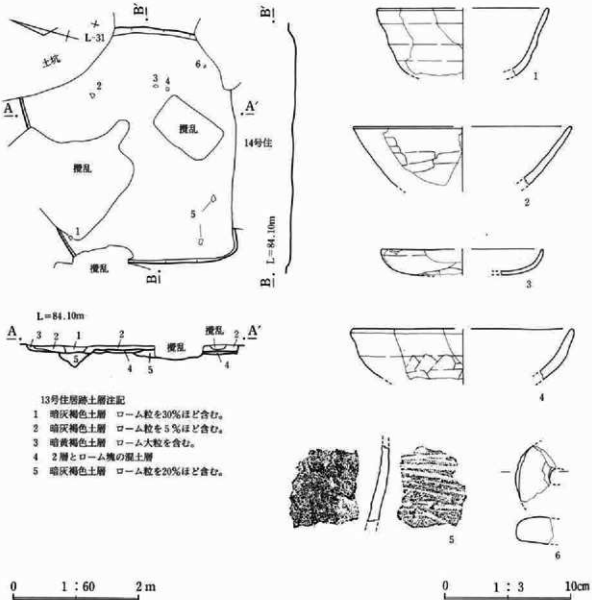
2区13号住居跡（第45・46図、PL-6・61）

2区北東部分のL-30グリッドに位置し、10・14・25号住居跡と重複する。新旧関係は14・25号住居跡より新しいが、10号住居跡との関係は重複部分の攪乱により不明である。本住居跡も遺存が悪く、北壁のほとんどが攪乱で残っていないうえ南壁も検出できない。このため主軸方位、規模、平面形は不明である。ただし、東西は3.74mを測る。最も壁が良好に残存している部分では高さ12cmを測る。

竈は検出されないが、東壁か南東隅に構築されていたと考えられる。

掘形では小型の床下土坑が確認されているが、調査の都合上14号住居跡の調査を優先させた。

遺物は土師器杯類44点、壺頸類31点、須恵器杯類8点、壺頸1点、羽釜1点、土製紡錘車1点、石類2点が出土している。これらのうち床面出土の須恵器椀（1）、土師器杯（4）、羽釜（5）、土製紡錘車（6）、床面直上出土の須恵器椀（2）、埋土出土の土師器杯（3）の6点を掲載した。羽釜は本住居跡に伴うか否か不明である。



- 13号住居跡土層注記
- 1 暗灰褐色土層 ローム粒を30%ほど含む。
 - 2 暗灰褐色土層 ローム粒を5%ほど含む。
 - 3 暗黄褐色土層 ローム大粒を含む。
 - 4 2層とローム塊の混土層
 - 5 暗灰褐色土層 ローム粒を20%ほど含む。

第45図 13号住居跡床面

第46図 13号住居跡出土遺物

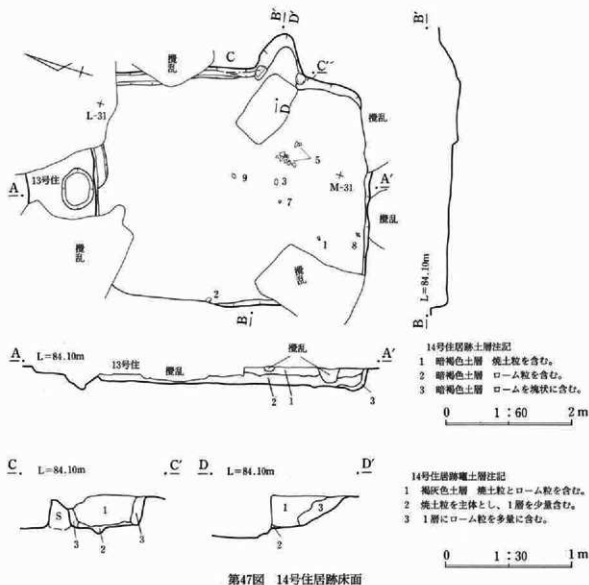
2区14号住居跡 (第47~49図, PL-6・7・61)

L-30グリッドに位置し、2区北東の住居跡集中部分に属する。13・25号住居跡と重複し、新旧関係は13号住居跡より古く、25号住居跡より新しい。コーナーは南東部分しか遺存していないが、平面形、規模は東西3.74m、南北4.43mの長方形を呈すると考えられる。主軸方位はN-17°Wを指す。床面は中央部分が硬く周辺は軟弱である。竈の北から北壁中央にかけて幅約16cm、深さ6cmの壁溝が巡る。また、掘形調査時には西壁で同規模の壁溝が検出された。

竈は東壁南寄りに構築され、焚口部分には袖石が遺存していた。竈の前面は床面に達する擾乱のため焼土や灰の分布は確認できなかった。

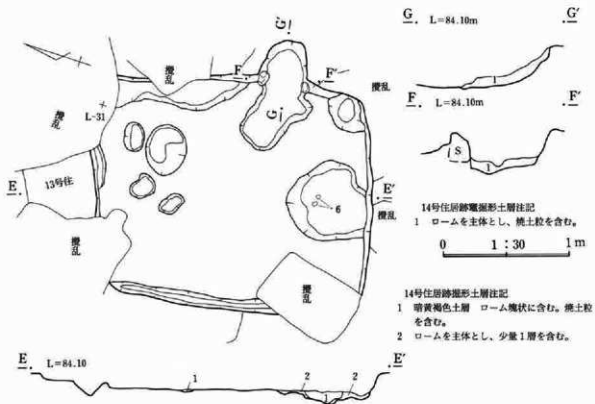
掘形は竈前と南壁中央、北東隅などに小さい床下土坑を穿っている程度である。

遺物は土師器杯類669点、壺甕類164点、須恵器杯類63点、壺甕類9点、蓋5点、灰軸陶器1点、土錘1点、鉄滓11点、石類7点が出土している。これらのうち、中央南寄り埋土中出土の土師器杯・壺(3・5)、土錘(7)、砥石(9)、西壁際床面直上出土の須恵器杯(2)、南壁際床面直上出土の紡錘車(8)、掘形出土の土師器壺(6・4)を図示した。



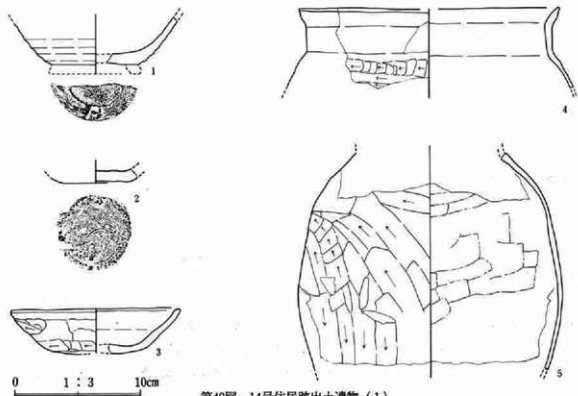
第47図 14号住居跡床面

第1節 台地（2・3区）で検出された遺構と遺物

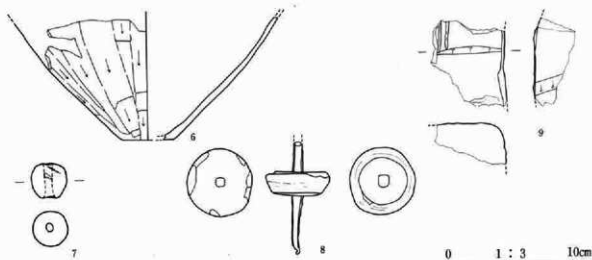


第48図 14号住居跡掘形

0 1 : 60 2 m



第49図 14号住居跡出土遺物（1）



第50図 14号住居跡出土遺物(2)

2区15号住居跡(第51~54図、PL-61・127)

2区北東のK-31グリッドに位置し、16・25号住居跡と重複する。新旧関係は16・25号住居跡より新しい。住居跡の東と西は重複により、壁の立ち上がり不明瞭であるうえに北半は調査区外に位置する。立ち上がりが検出されたのは南壁のみのため、規模・主軸方位は不明である。南壁の残存壁高は20cmを測る。平面形は、短辺2.0m程の隅丸長方形と考えられる。

竈は東壁南寄りに構築されるが、平面確認が困難であったことにより火床面のプランを確認したにすぎない。

調査の都合上、重複する25号住居跡の床面調査を優先させたため、掘形の検出は一部に止まった。

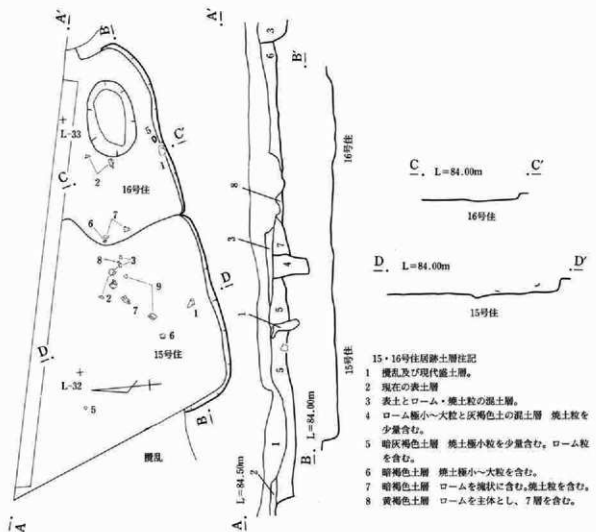
遺物は土師器杯類697点、壺類124点、須恵器杯類58点、内黒碗5点、壺類11点、灰釉陶器2点、石類24点、鉄滓1点、被熱粘土塊8点、鉄製品1点の計907点が出土している。これらのうち、3の須恵器杯と9の土師器壺は、床面直上出土である。他は竈前南寄りから多く出土しているがどれも埋土出土である。なお、1の須恵器杯は本住居跡には伴わない。

2区16号住居跡(第51・53・55図、PL-62)

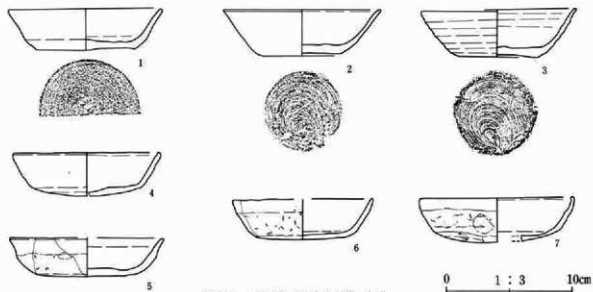
15号住居跡の西側に重複し、新旧関係は本住居跡が古い。15号住居跡同様北半は調査区外で検出不可能であるうえに西壁は15号住居跡に、竈先端は攪乱に破壊されている。したがって、規模・平面形・主軸方位は不明である。南壁の残存壁高は9cmを測る。床面南東隅のやや内側には、深さ6cm程の貯蔵穴様の落ち込みが検出された。

掘形は壁際を除いて深さ27cm程掘り込んでいる。

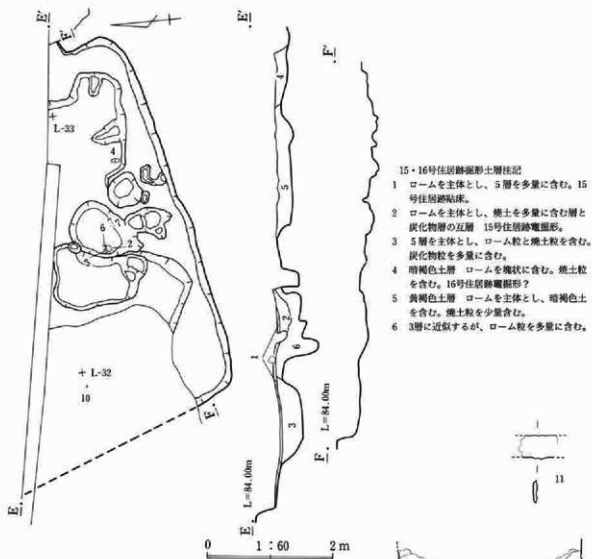
遺物は土師器杯類692点、壺類125点、須恵器杯類26点、壺類12点、蓋9点、灰釉陶器2点、石類19点、被熱粘土塊5点の計890点が出土した。これらのうち、南壁際床面出土の須恵器蓋(1)、床面出土破片と掘形出土破片が接合した須恵器杯(2)、床面出土破片と埋土出土破片が接合した土師器壺(7・5・6)、掘形出土の土師小型台付壺(3・4)などを図示した。



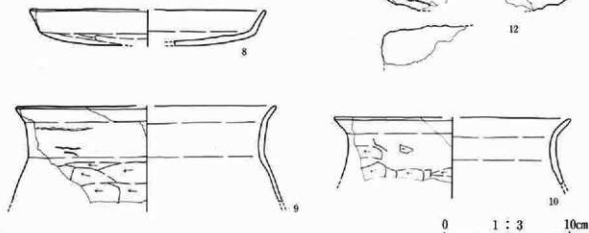
第51図 15・16号住居跡床面



第52図 15号住居跡出土遺物（1）

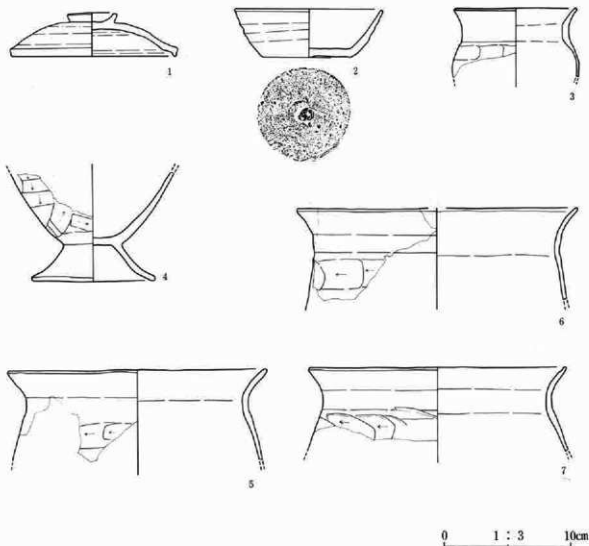


第53図 15・16号住居跡掘形



第54図 15号住居跡出土遺物(2)

第1節 台地（2・3区）で検出された遺構と遺物



第55図 16号住居跡出土遺物

2区17号住居跡（第56・57図、PL-8）

2区北東隅のL-33グリッドに位置し、18号住居跡、6・9号井戸と重複する。新旧関係は、6号井戸、18号住居跡より古い。また、9号井戸は17・18号住居跡の掘形下で検出されたため、住居跡より古いと考えられる。本住居跡は、位置と重複の関係から、高さ12cmの壁が北西隅が検出されたのみであり、規模・平面形・主軸方位は不明である。

掘形は全体に床面より深さ10cm程掘り下げている。西壁南側の半円形の張り出しは、住居跡より古い土坑と考えられる。

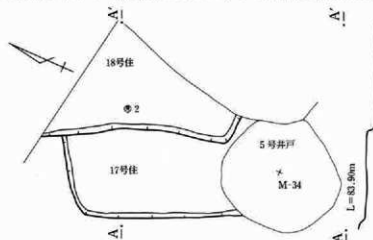
遺物は土師器杯類48点、壺甕類25点、須恵器杯類3点、鉄滓2点の計78点が出土した。遺物はいづれも小片で、図示し得たのは土師器杯（1・2）2点のみである。

2区18号住居跡(第56・57図、PL-8)

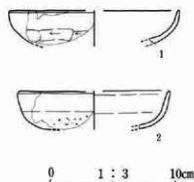
17号住居跡の西側に位置し、17号住居跡、9号井戸と重複する。17号住居跡との新旧関係は、残存壁高が浅いこともあって断面では明確にし得なかったが、出土遺物から本住居跡が新しいと判断される。また、9号井戸との関係は、井戸が掘形下から検出されたことから、本住居跡が新しい。北と東の多くが調査区外に位置するため、主軸方位・平面形・規模・竈位置は不明である。

掘形は9号井戸埋土上面に貼床を施すと共に、北寄りに小型の床下土坑を設けている。

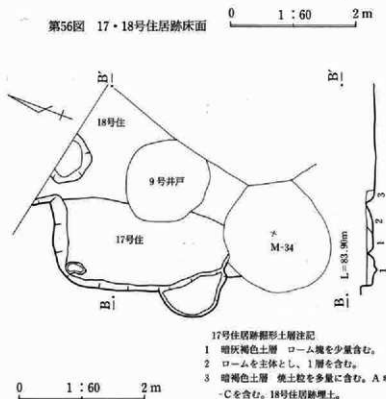
出土遺物は土師器杯類332点、壺壺類174点、須恵器杯類46点、蓋1点、壺壺類12点、灰釉陶器2点、石類12点の計579点が出土している。これらのうち、床面上2cmから出土した須恵器椀(2)と灰釉陶器皿(3)、須恵器蓋(1)の3点を図示した。なお、1の内面黒色須恵器蓋は、小破片であるが図示した。



第56図 17・18号住居跡床面

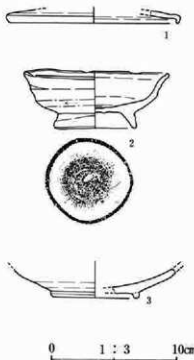


第58図 17号住居跡出土遺物



17号住居跡掘形土層注記

- 1 暗灰褐色土層 ローム塊を少量含む。
- 2 ロームを主体とし、1層を含む。
- 3 暗褐色土層 焼土粒を多量に含む。A * -Cを含む。18号住居跡埋土。



第59図 18号住居跡出土遺物

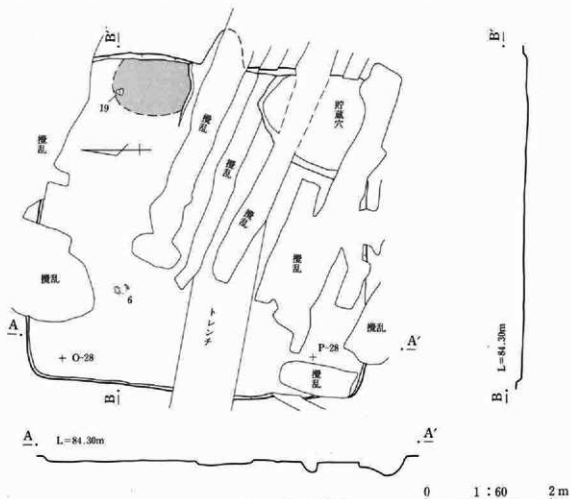
第57図 17・18号住居跡掘形

2区19号住居跡（第60～65図、PL-8・9・62・63）

住居跡分布の希薄なN-27グリッドに位置する。2区の場合台地東斜面以外は後世の削平を受けており、本住居跡も残存壁高は7～9cmと浅い。また、この付近は畑の耕作に伴うトレンチャーによる攪乱が著しく、南壁と北壁はほとんど検出できない状態である。しかし、僅かに検出できた部分から平面形は東西5.25m南北5.32mの正方形を呈し、本遺跡では大形の住居に属する。床面は軟弱で明瞭な貼り床層は認められない。南東隅には、床面からの深さ16cmほどの浅く大型の貯蔵穴様の掘り込みが検出された。この掘り込み内からは、土師器杯を主体とした遺物が多量に出土した。土師器杯は置かれたような状態で内面を上に向けた個体が多く、全体に残りが良いうえに接合率も高い。このため、土師器杯は多少移動しているものの原位置をかなり留めていると考えられる。通常、貯蔵穴から多量に遺物が出土する例はなく、性格が問題となるが、調査時に重複は確認できなかった。

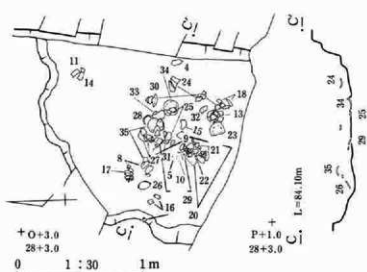
竈は東壁中央に構築されるが、攪乱によって火床面は破壊され、ほとんど掘形のみとなっていた。しかし、竈前の南側には焼土の分布が認められた。

出土遺物は土師器杯類496点、甕類46点、須恵器杯類53点、甕類9点、蓋8点、石類8点、鉄滓2点、被熱粘土塊8点の計630点である。図示した遺物のうち6の須恵器碗は床面出土、19の土師器杯は床面上3cmと掘形出土破片が接合している。しかし、19は出土場所とレベルが近接しており、この部分については床面の誤認があったと思われる。貯蔵穴様の掘り込み出土遺物のうち12点は図示し得なかったが、須恵器杯3点



第60図 19号住居跡床面

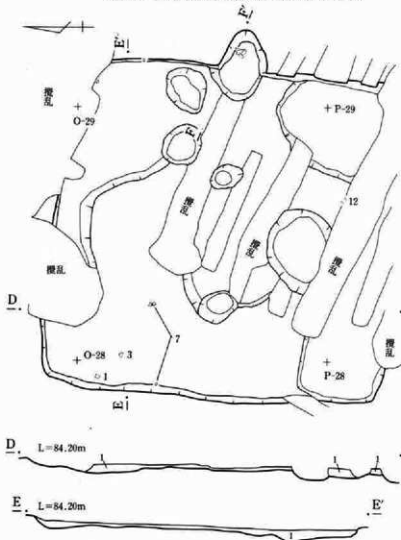
第5章 検出された遺構と遺物



第61図 19号住居跡貯蔵穴状土坑遺物出土状態

(4・5・8)、土師器杯25点(9
~11・13~18・20~35)を
図示した。

なお、13の土師器杯には、「大」
の墨書が3カ所認められる。



19号住居跡掘形土層注記

1 暗褐色土とロームの混土層

19号住居跡掘形土層注記

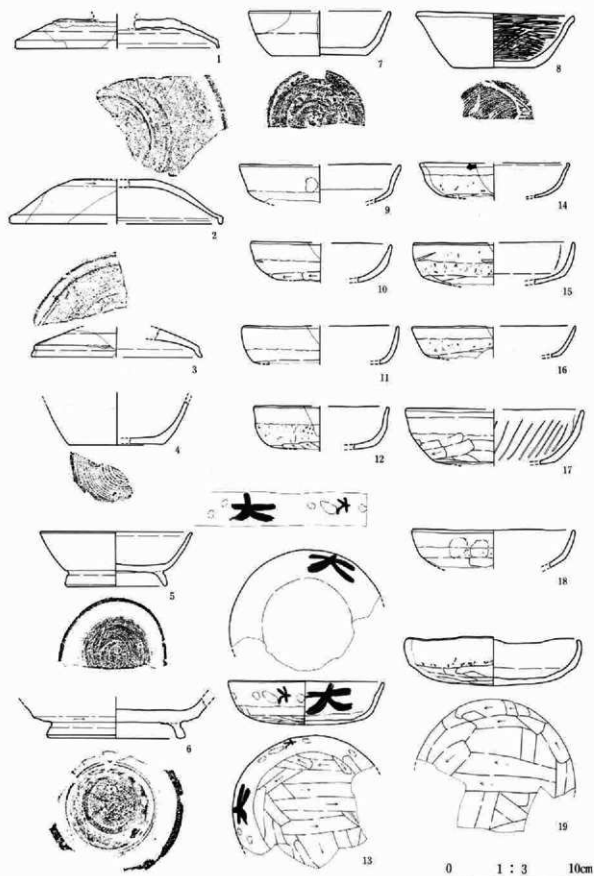
- 1 ローム、焼土、暗褐色土の混土層
- 2 1層に近似するが、焼土粒を多量に含む。
- 3 1層に近似するが、ロームの量が多く不均質。
- 4 焼土粒大粒と暗褐色土の混土層
ロームブロックを含む。
- 5 3層に近似するが、灰を多量に含む。
- 6 ロームを主体とし、灰と焼土粒を少量含む。

0 1 : 30 1 m

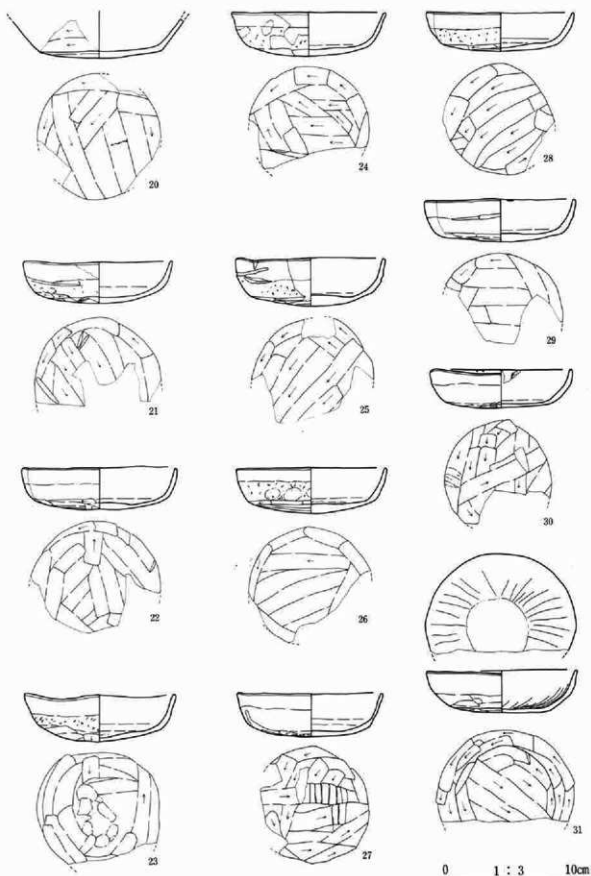
0 1 : 60 2 m

第62図 19号住居跡掘形

第1節 台地（2・3区）で検出された遺構と遺物

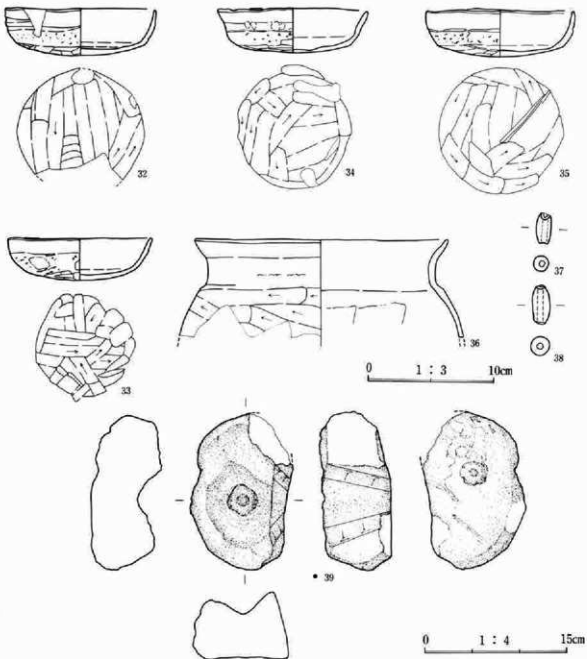


第63図 19号住居跡出土遺物（1）



第64図 19号住居跡出土遺物(2)

第1節 台地（2・3区）で検出された遺構と遺物



第65図 19号住居跡出土遺物（3）

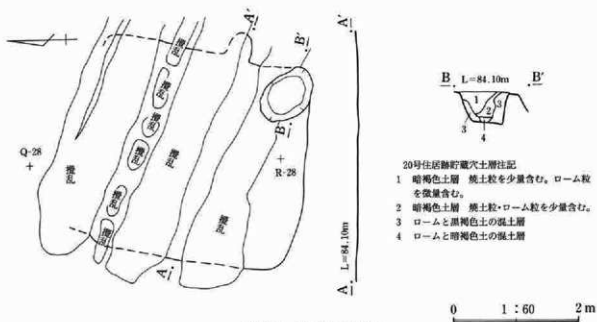
2区20号住居跡（第66～68図、PL-9・63）

2区南東のQ-27グリッドに位置し、21号住居跡と重複する。新旧関係は、21号住居跡埋土中に本住居跡の床が構築されていることから本住居跡が新しいと判断される。本住居跡が位置する部分は後世の削平が著しく、表土掘削時に床面が露出している状態であった。加えて、耕作による攪乱も多いためにプランは南と東西の一部が遺存していた程度であった。このため、主軸方位・平面形・規模は不明である。床面は攪乱に

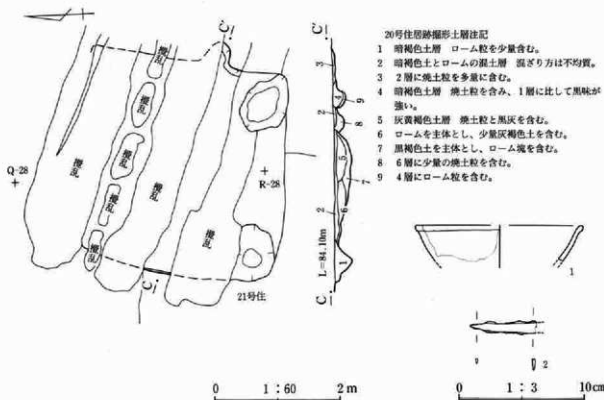
第5章 検出された遺構と遺物

よる破壊が多いが、全体に硬く貼り床が施されている。貯蔵穴は南東隅に位置し、深さは46cmを測る。竈は東壁南よりに設置されているが、攪乱により北半分が失われている。

遺物は土師器杯類28点、甃壁類69点、須恵器杯類28点、甃壁類31点、鉄滓1点、鉄滓7点の計164点が出土した。図示した2点の遺物はいずれも掘形出土である。



第66図 20号住居跡床面

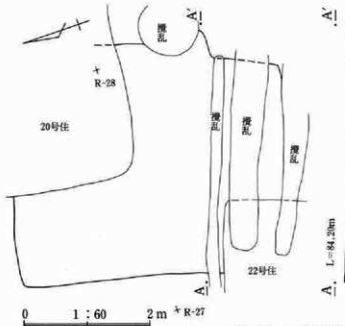


第67図 20号住居跡掘形

第68図 20号住居跡出土遺物

2区21号住居跡（第69～71図、PL-9・10・63）

2区南東のQ-27グリッドに位置し、20・22号住居跡と重複する。新旧関係は20号住居跡の床が本住居跡の埋土上に、22号住居跡埋土上に本住居跡の床が構築されていることから、20号住居跡より古く、22号住居跡より新しいと判断される。本住居跡も20号住居跡同様、表土掘削時に床面が露出する状態であるうえに攪乱も多く規模や主軸方位は不明である。平面形は残存する部分から東西3.38m、南北4.25m?程の長方形と



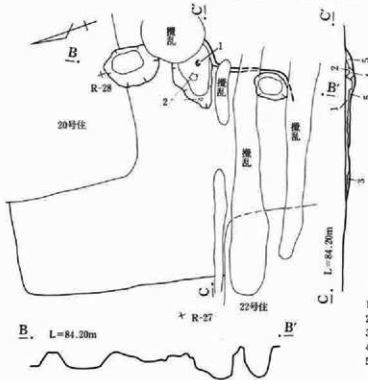
第69図 21号住居跡床面

考えられる。

竈は東壁南寄りに構築されているが、攪乱によりほとんど破壊されている。

掘形は竈周辺に認められる程度である。また、竈の南に位置するピットはその位置から貯蔵穴と考えられる。竈の北に確認されたピットは壁外に位置することから、住居跡より古いピットと考えられる。

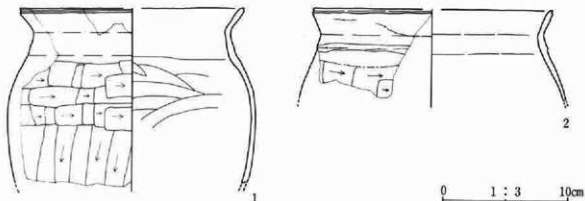
遺物は土師器壺類20点、須恵器杯類3点の計23点が出土したのみで、そのうち掘形から出土した土師器壺（1・2）2点を図示した。



第70図 21号住居跡掘形

21号住居跡掘形土層注記

- 1 灰褐色土層 ローム粒を含む。焼土粒を少量含む。
- 2 灰褐色土層 ローム粒と焼土粒を含む。
- 3 ロームを主体とし、1層を少量含む。
- 4 ロームと暗褐色土の混土層
- 5 1層と焼土の混土層 焼土は大粒。



第71図 21号住居跡出土遺物

2区22号住居跡（第72～74図、PL-10・63）

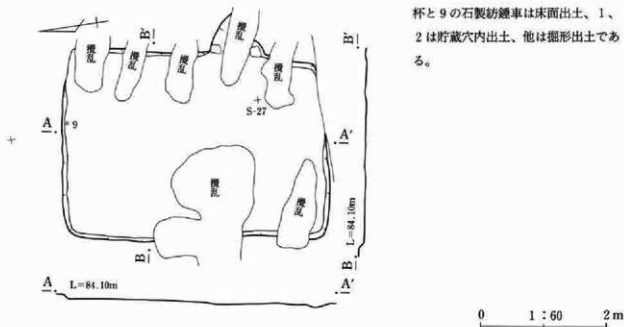
2区東寄り南端のR-26グリッドに位置し、21号住居跡と重複する。新旧関係は、本住居跡埋土上に21号住居跡の床が構築されていることから本住居跡が古いと考えられる。東壁は耕作による攪乱のため部分的に遺存していた。また、西壁は攪乱により中央と南側が破壊されていた。貯蔵穴は南東隅に小さく掘り込まれ、須恵器蓋（1）と須恵器杯（2）が重なって出土している。

竈は東壁南寄りに構築されていたが、攪乱が中央を破壊しており両端が検出されたのみである。壁の部分には焚口部の袖石が残存していた。

掘形は竈前面と西壁際に床下土坑を設けている。

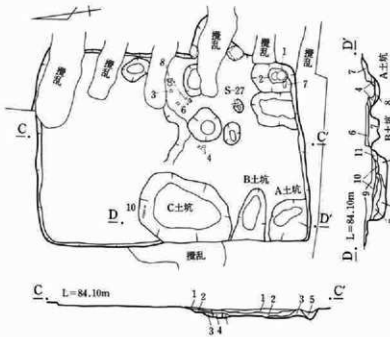
遺物は土師器杯類63点、甕埴類42点、須恵器杯類11点、蓋1点、甕埴類2点の計119点が出土している。こ

れらのうち10点を図示し、6の土師器杯と9の石製紡錘車は床面出土、1、2は貯蔵穴内出土、他は掘形出土である。



第72図 22号住居跡床面

第1節 台地（2・3区）で検出された遺構と遺物

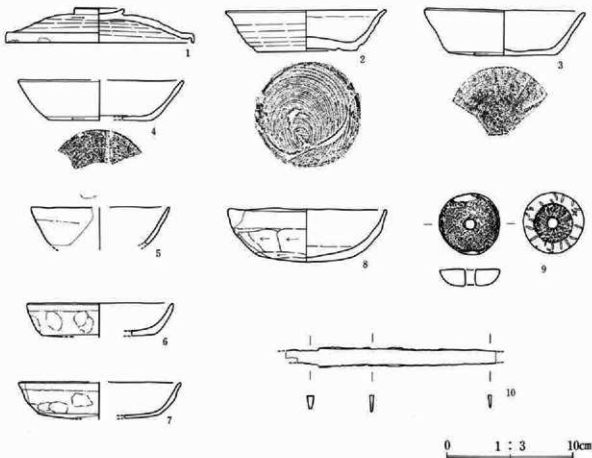


22号住居跡掘形土層記

- 1 ローム層を主体とし、少量の暗褐色土を含む。貼床。
- 2 褐灰色土層
- 3 ロームを主体とし、少量の褐灰色土を含む。
- 4 3層に焼土粒を含む。
- 5 2層に少量の焼土粒を含む。
- 6 灰褐色土層 ローム粒と焼土粒を少量含む。
- 7 暗褐色土層 ローム粒を多量に含む。
- 8 ローム暗色帯を主体とし、暗褐色土を少量含む。
- 9 ロームと灰褐色土の混土層 両者は塊状を呈する。
- 10 ロームを主体とし、褐灰色土を含む。
- 11 暗褐色土とロームの混土層
- 12 ロームを主体とし、灰褐色土粒を少量含む。
- 13 灰褐色土層 ローム粒を均質に含む。

0 1 : 60 2 m

第73図 22号住居跡掘形



第74図 22号住居跡出土遺物

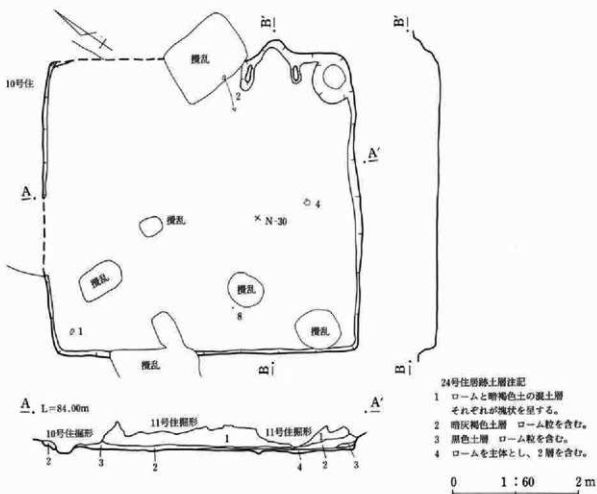
2区24号住居跡 (第75~78図、PL-10・11・64)

本遺跡で最も住居跡が集中する2区北東のM-29グリッドに位置する。10・11号住居跡、33号土坑と重複し、新旧関係は33号土坑より新しく10・11号住居跡より古い。本住居跡は壁の一部が攪乱で破壊されている程度であり比較的遺存は良好である。平面形は東西4.70m、南北4.98mの正方形を呈し、主軸方位はN-38°-Wを指す。主軸方位は、9・12号住居跡などと共に本遺跡中最も西に振れる一群に属する。貯蔵穴は南東隅に小さく設けられている。

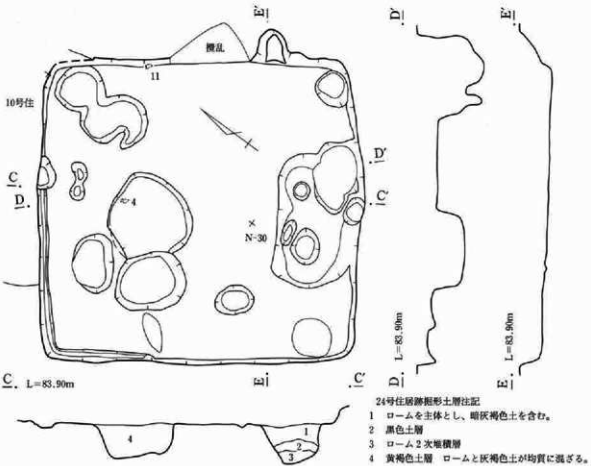
竈は東壁南側に構築され袖も遺存していた。しかし、明確な焼土や灰の分布は認められなかった。

掘形は竈周辺を6・7cm掘り下げる他は床下土坑を設ける程度である。

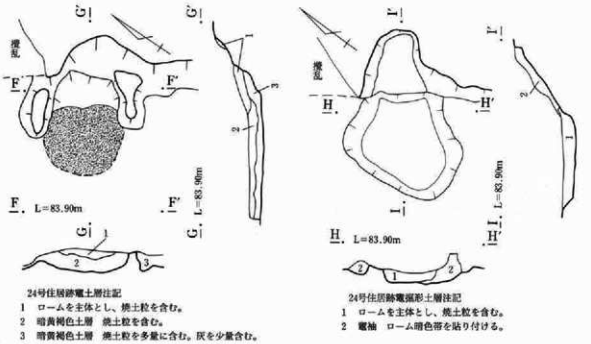
遺物は土師器杯類910点、甕甕類150点、須恵器杯類85点、甕類7点、甕類8点、土製品2点、石類23点、鉄製品1点、鉄滓1点、被熱粘土塊14点の計1201点が出土し、これらのうち13点を図示した。図示した遺物のうち、1の須恵器杯、3・5・6の土師器杯、9・10の土製品、8・7の基石状石製品は埋土出土、11・12・13のこも編み石は掘形出土である。4の土師器杯は埋土出土破片と掘形出土破片が、2の須恵器高台付盤は3区1号竈穴遺構出土破片、3区Hr-FA上水田出土破片、3区As-C上水田出土破片と接合している。なお、5の土師器杯底部内面には「大」の刻書が、6の土師器杯底部外面には記号の墨書がそれぞれ認められた。



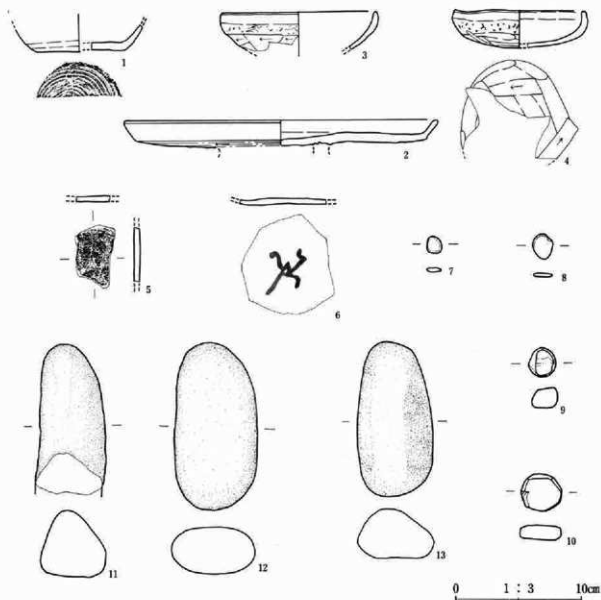
第75図 24号住居跡床面



第76図 24号住居跡掘形



第77図 24号住居跡壺



第78図 24号住居跡出土遺物

2区25号住居跡（第79・81図、PL-64）

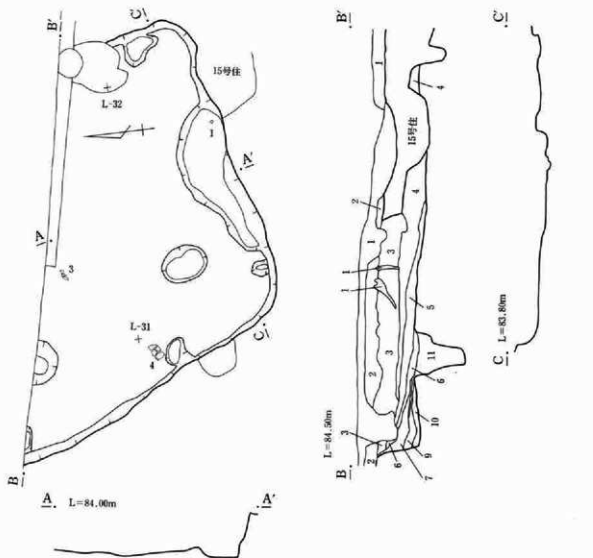
本遺跡のなかで、最も住居跡が集中する2区北東のK-31グリッドに位置し、14・15号住居跡と重複する。新旧関係は、いずれも本住居跡が古い。本住居跡の残存壁高は、32cmと深く遺存は良好であったが、北半分が調査区外に位置するため南半のみ検出された。床面は全体に明確ではないが、竈前面には貼り床が認められた。床面調査時に、西壁側では支柱穴が2本確認されたが、東側は検出されなかった。南壁中央に不整形の落ち込みを確認したが、出土遺物から平安時代の掘り込みと考えられる。

竈は15号住居跡との重複により、火床面は遺存していなかった。しかし、掘形の確認から東壁南寄りに構築されていたことが確認できた。

掘形は大小の床下土坑を有するが、ほぼ中央に位置する床下土坑が最も深く、約60cmを測る。

第1節 台地(2・3区)で検出された遺構と遺物

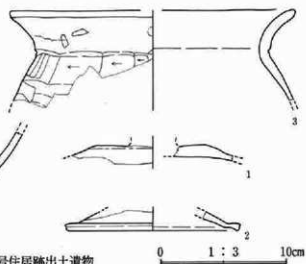
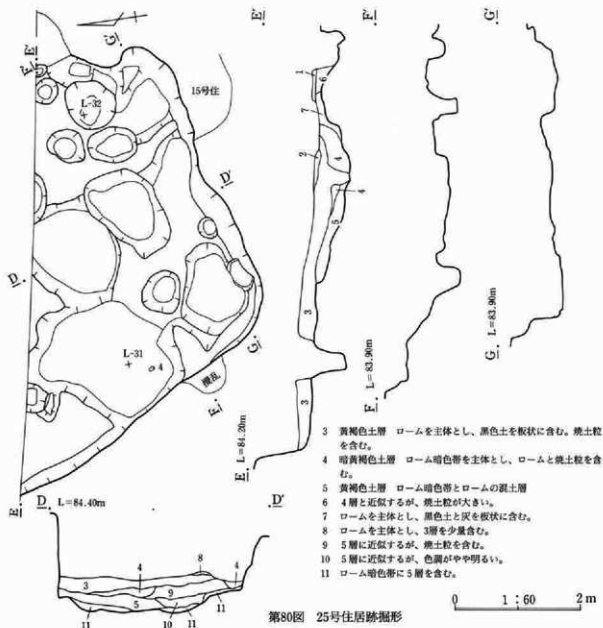
遺物は土師器杯類72点、壺甕類288点、須恵器杯類13点、壺甕類13点、蓋5点、石類28点の計419点が出土した。これらのうち、南壁中央の落ち込み内出土内黒須恵器蓋(1)、埋土出土の須恵器蓋、土師器壺(2・3)、床面出土破片と掘形出土破片が接合した土師器壺(4)の4点のみが図示し得た。なお、須恵器蓋と土師器壺の間には時期差が認められ、出土位置、遺存状態、住居跡平面形態などから、須恵器杯は本住居跡に伴わないと判断される。



25号住居跡土層注記

- | | |
|-----------------------------------|-------------------------------|
| 1 雑品と現代盛土層 | 6 暗褐色土層 ローム粒を多量に含む。黒色土を塊状に含む。 |
| 2 表土層 | 7 灰黄色土層 灰を少量含む。 |
| 3 暗灰褐色土層 ローム粒を含む。As-Cと炭化物粒を少量含む。 | 8 灰層 |
| 4 暗褐色土層 ローム粒を多量に含む。黒色土粒と塊状土を少量含む。 | 9 暗黄灰色土層 灰を少量含む。 |
| 5 暗褐色土層 ロームを塊状に含む。 | 10 灰黄色土層 灰を含まない。 |
| | 11 ロームと灰黄色土の混土層 炭土粒を含む。柱穴の。 |

第79図 25号住居跡床面

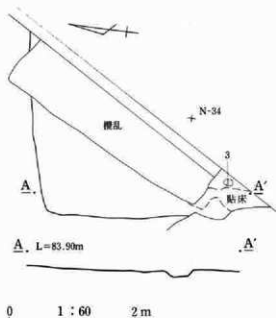


第1節 台地（2・3区）で検出された遺構と遺物

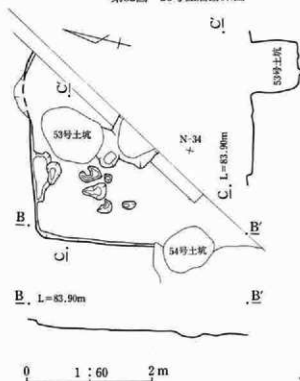
2区26号住居跡（第82～84図、PL-11・64・117）

2区北東隅のM-33グリッドに位置し27号住居跡と重複する。重複する南側は、壁が遺存しないうえに床面も不明瞭で新旧関係は不詳である。しかし、確認されたのは本住居跡が先である。2区東端は調査区内であるが、調査の工程上道路の付け替えが困難であることから調査を行っていない。したがって、本住居跡も東半は検出できなかった。このため、規模・平面形・主軸方位は不明である。床面は南端のみ硬化していた。

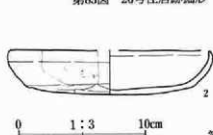
遺物は土師器杯類78点、甕甕類164点、須恵器杯類9点、甕甕類9点、蓋3点、石類2点の計265点が出土した。これらのうち埋土中出土の土師器杯、須恵器甕蓋（2・1）と床面出土の墨書を有する土師器杯（3）の3点のみが図示した。



第82図 26号住居跡床面



第83図 26号住居跡掘形



第84図 26号住居跡出土遺物

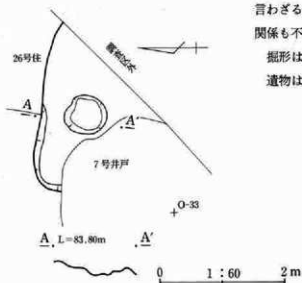
第5章 検出された遺構と遺物

2区27号住居跡 (第85・86図、PL-11)

住居跡が最も集中する一角の2区北東隅N-33グリッドに位置し、7号井戸、26号住居跡と重複する。新旧関係は、7号井戸より新しい可能性が高いが壁や床の遺存が悪いことや井戸埋土の陥没を考慮すると不詳と言わざるを得ない。また、先に述べたように26号住居跡との関係も不詳である。

掘形は検出されない。

遺物は図示した須恵器杯小片1点のみである。



第85図 27号住居跡掘形

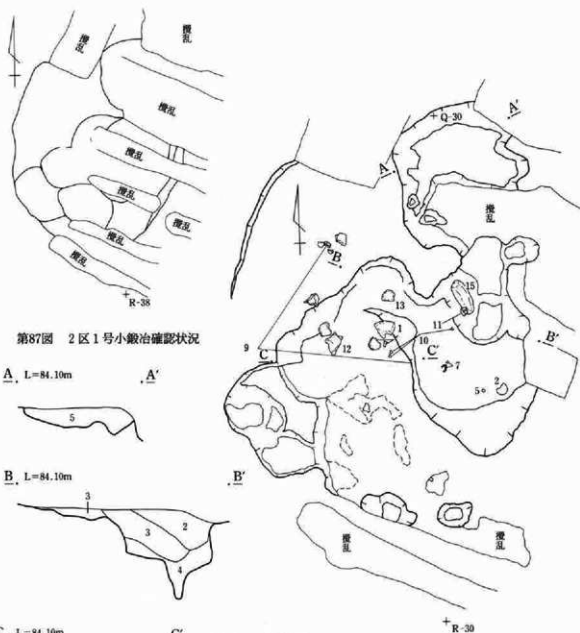


第86図 27号住居跡出土遺物

2区1号小鍛冶 (第87~92図、PL-12・64・65)

台地先端西寄りのQ-29グリッドに位置する。小鍛冶遺構の存在する地点は、住居跡の分布や地形から判断して居住域南西端に位置すると考えられる。遺構のプランは不明瞭で、土坑が集中するかたちで検出され、周辺や埋土からは、多量のスケールと鉄滓が出土している。出土総量は、スケールが約100g、鉄滓が約9.5kgである。小鍛冶遺構とした範囲のほぼ中央からは炉床が確認された。確認時の炉床直径は37cm、深さは10cmを測り、下部は還元し、更に下部は酸化した焼土層が認められた。他の土坑状の落ち込みは炉の南東側に多く中央のものが最も深い。

鉄滓は落ち込み南西寄りから多く出土し、鍛錬時の金床石は破損したもの(13)が炉の上から、完形のもの(15)が炉の東側から出土している。2点の金床石は13が広い平坦面を使用しているのに対し、15は狭い平坦面の端を中心として使用しており前者は全体の延ばしや鋼の接ぎなどに、後者は縦方向の延ばしに使用したと推測される。羽口は炉内に挿入する先端部分が7個体(4~6・8・9~11)、フィゴに挿入する部分(7)1個体が炉の南側から出土している。炉と羽口、金床石の出土状態から炉の南東に工人が位置し、炉に向かって右に金床石が、左にフィゴが位置していた可能性が考えられまいだろうか。周辺の落ち込みには重複が認められ、すべてが同一時期ではないが本遺構の年代を示す遺物として3点の須恵器(1~3)があり、その時期は9世紀後半と考えられる。なお、1の須恵器は、遺構内の攪乱から出土しているが、遺存が良いことなどから本遺構出土として扱った。その他の遺物として、一部に鉄の付着した扁平な石(12)、不明鉄製品(18)、高温により一部が溶けている榛名軽石(16)などがある。なお、17のガラス玉は古墳時代の所産であろう。

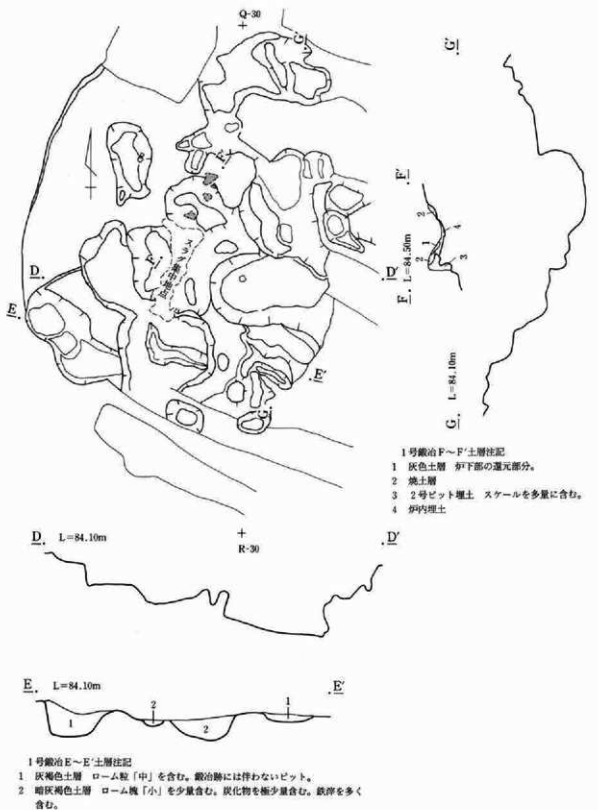


1号鍛冶A～C土層注記

- 1 暗褐色土層 ローム粒「極小～中」を均質に含む。炭化物を少量含む。鉄屑を多量に含む。
- 2 暗褐色土層 1層に比してローム粒を多量に含む。
- 3 暗褐色土層 ローム粒「極小～小」を少量含む。
- 4 暗褐色土層 均質。
- 5 暗褐色土層 1～4層に比して締まりがあり、硬い。他の土坑の可能性はある。

0 1 : 30 1 m

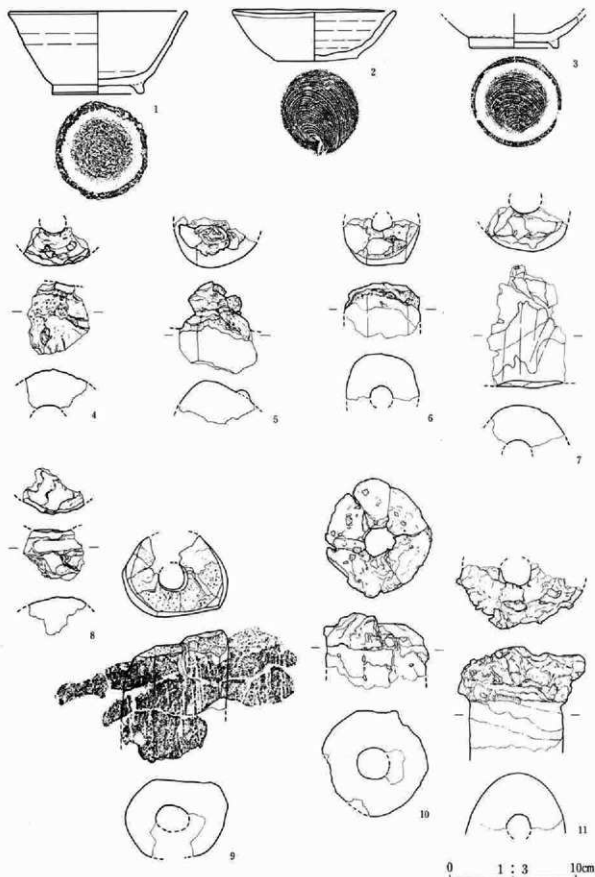
第88図 2区1号小鍛冶遺物出土状態



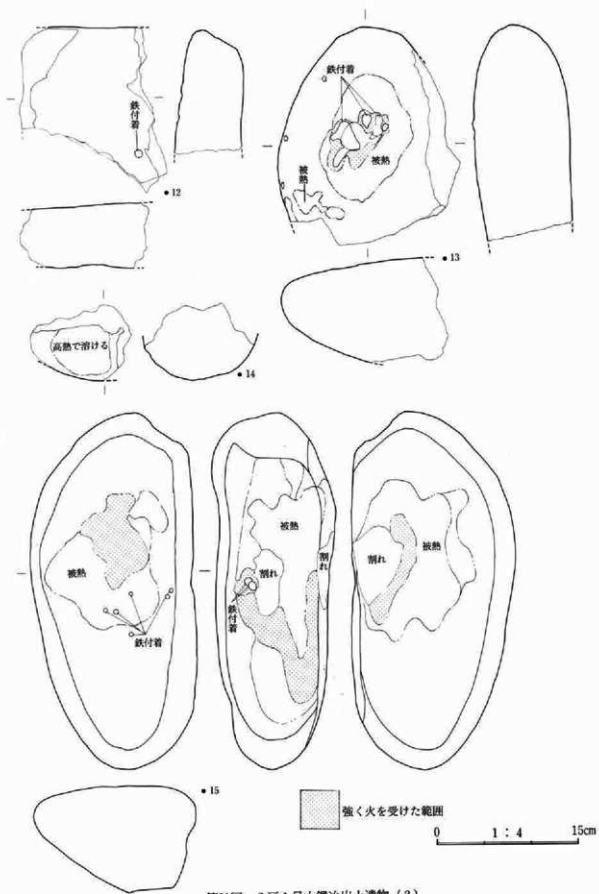
第89図 2区1号小鍛冶

0 1 : 30 1 m

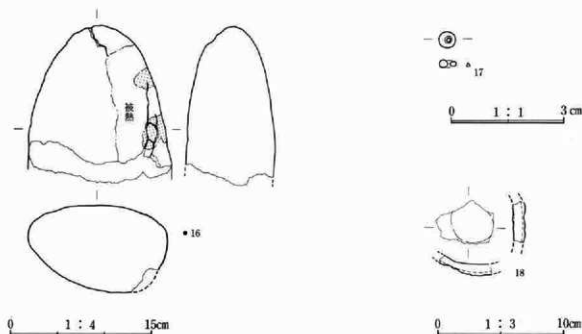
第1節 台地（2・3区）で検出された遺構と遺物



第90図 2区1号小鍛冶出土遺物（1）



第91図 2区1号小鍛冶出土遺物(2)



第92図 2区1号小竪治出土遺物（3）

3区1・2号竪穴遺構（第93～96図、PL-13・65）

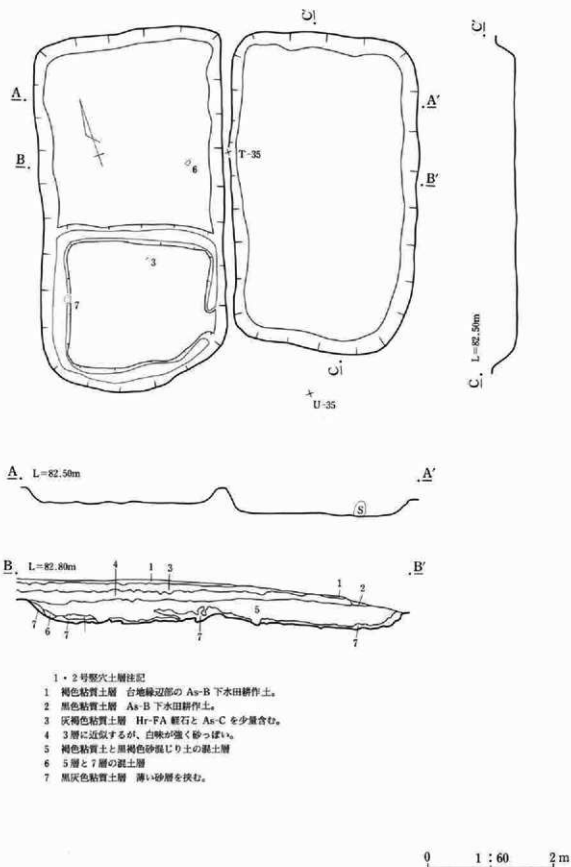
竪穴遺構は、いずれも台地縁辺に平行して構築され、1号竪穴はS-34グリッド、2号竪穴はS-35グリッドに位置する。両遺構は10cmほど隔てて平行する。竪穴の平面形は、1号が短辺3.0m、長辺4.9mの隅丸長方形、2号が短辺2.9m、長辺5.7mの隅丸長方形と規模、平面形も近似する。残存壁高は、1号竪穴20～25cm、2号竪穴18～25cmを測り、傾斜地に位置することから谷地側の残存壁高が低くなっている。

床面にはいずれも硬化した部分はなく、焼土や炭化物の分布も認められない。また、壁外の精査を行ったが柱穴等の施設は検出されなかった。

埋土の観察からは、両竪穴の重複は確認されずほぼ同時期に廃棄されたと考えられる。埋土上層にはAs-B下水田耕作土が形成されており、1108年以前には完全に埋没していたことが分かる。

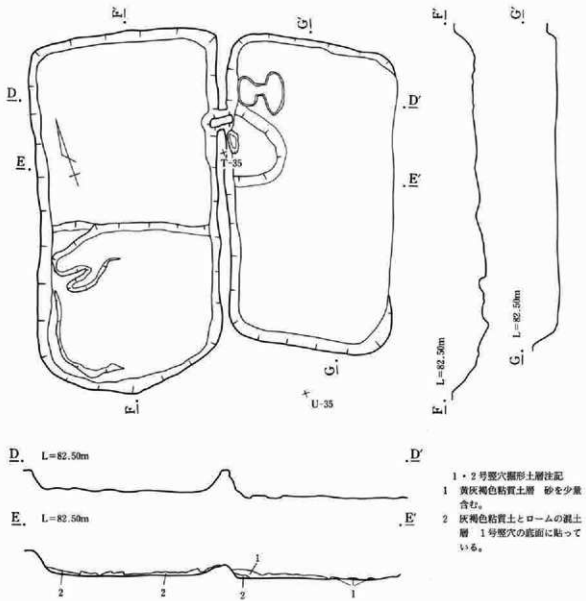
両竪穴とも掘形を有しており、薄く粘質土を貼っている。両竪穴間の壁は幅約27cmの溝状の落ち込みで連結している。

出土遺物のうち図示したのは7点で、2の土師器杯は混入である。図示した以外では1号竪穴から土師器杯頸14点、壺甕類47点、須恵器壺6点、石類5点、2号竪穴からは土師器杯61点、壺47点、須恵器杯頸4点、壺20点、蓋1点が出土した。

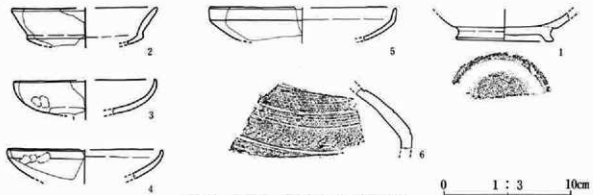


第93図 3区1・2号整穴

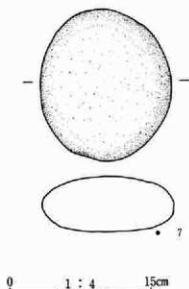
第1節 台地（2・3区）で検出された遺構と遺物



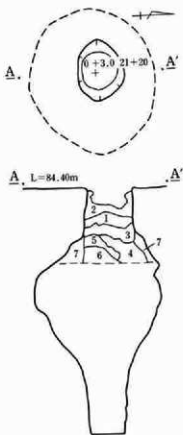
第94図 3区1・2号竪穴圓形



第95図 3区1・2号竪穴出土遺物（1）



第96図 3区1・2号
竪穴出土遺物(2)



1号井戸土層注記

- 1 暗黄褐色土層 軽石粒を多く含む。
- 2 暗黄褐色土層 軽石粒を多く含む。
- 3 暗黄褐色土層 軽石粒を多く含む。
- 4 6層にロームブロックが入る。
- 5 ハードロームの崩落土層
- 6 ローム層の暗色帯と同色調でさらさらしている。
- 7 ローム層の暗色帯崩落部分。

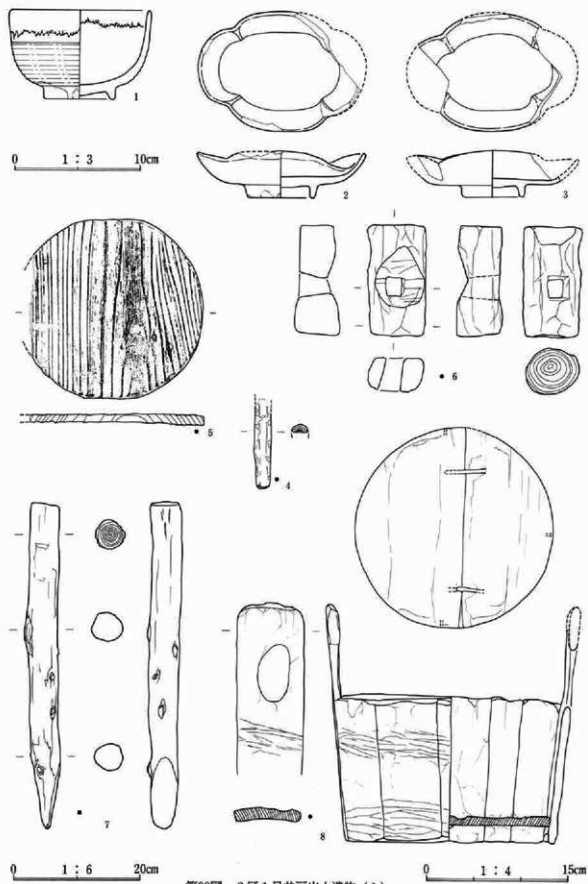
2区1号井戸(第97~99図、PL-13・66・67)

2区中央南側のP-21グリッドに位置する。2区とした台地の西半分は、大きく削平され住居など浅い遺構は遺存していない状態であった。したがって、本井戸は台地の最も西寄りで検出された遺構である。確認時の平面形は、東西97cm、南北72cmの楕円形を呈する。掘形は地山井筒円筒形であるが、中程に埋積後の亀裂が生じており、危険防止のためこれを除去して調査を行ったため、大きな「アグリ」を生じている。確認面からの深さは、3.86mを測る。調査時の涌水は確認面から2.68m以下である。涌水量はにじみ出る程度で、調査時の自然水位は底から47cmである。

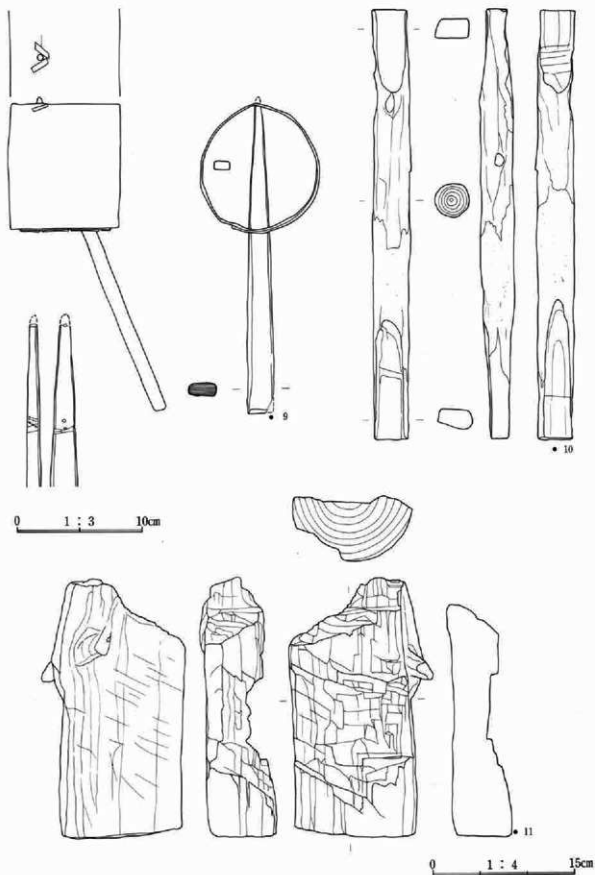
遺物は土師器や須恵器など混入と考えられるものは6点と少なく、時期不明の鉄滓も1点出土している。図示した遺物は、底部上1m以内から出土したもので、尾呂茶碗(1)と御深井打型皿(2・3)、水汲桶(8)、柄付杓(9)、曲物底板(5)、柱状木製品(6)、柄(10)、鉋作業台(11)、杭(7)、不明木製品(4)の11点である。水汲桶は、出土時には完形であったが取り上げ時にタガが切れてしまい、写真撮影はばらした状態で行った。なお、2の御深井皿は汲桶内に入った状態で検出された。井戸の使用年代は、陶器碗と皿の年代から18世紀中頃と推定される。

第97図 2区1号井戸

第1節 台地（2・3区）で検出された遺構と遺物



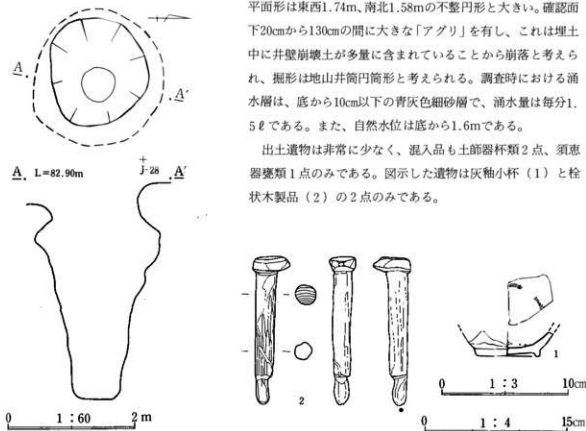
第98図 2区1号井戸出土遺物(1)



第99図 2区1号井戸出土遺物(2)

2区2号井戸(第99図、PL-14・68)

2区中央北端のJ-22グリッドに位置する。本井戸は、大きく削平された部分で確認されたため、確認面は先の1号井戸より150cm低くなっている。上部が削平を受け、井壁の崩落が始まる部分で検出されたため、平面形は東西1.74m、南北1.58mの不整形円形と大きい。確認面下20cmから130cmの間に大きな「アグリ」を有し、これは埋土中に井壁崩壊土が多量に含まれていることから崩落と考えられ、掘形は地山井筒円筒形と考えられる。調査時における涌水層は、底から10cm以下の青灰色細砂層で、涌水量は毎分1.5ℓである。また、自然水位は底から1.6mである。

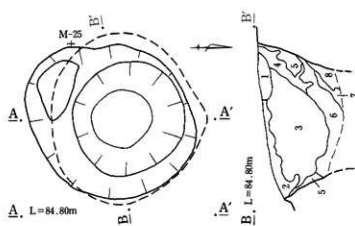


第100図 2区2号井戸、出土遺物

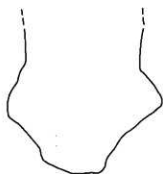
2区3号井戸(第101～103図、PL-14・68)

2区中央北より位置し、北西1.5mと4mには江戸時代に廃棄された17号土坑と1号住居が、南西3.5mには2号住居が存在する。確認面での口径は東西2.42m、南北2.5mと大きい、これは「アグリ」が崩落した結果であると考えられる。確認面から1m前後の部分は、直径1.8mの円形を呈しており、本来は直径1.8m程の地山円筒井筒形であったと推定される。調査時の涌水層は、底部から1～1.3mの八崎バミスと暗灰色土層である。涌水量はにじみでる程度で、調査時の自然水位は底から1.17mである。

遺物は、調査方法の関係もあって確認面から1.3mまでのものが主体である。遺物の図示にあたっては中世遺物が認められたことから小片であってもこれらを優先した。その結果、軟質陶器すり鉢(1・2・5)、軟質陶器火鉢(3)、常滑焼こね鉢(4)、燻し瓦(6)、目の粗い粗粒安山岩製の砥石(7)の7点を選択した。なお、図示した遺物のうち、確認面から1.3m以内出土のものは2・4・7である。また、3の火鉢と6の瓦は、胎土と焼成から近世の所産と考えられる。中世遺物の存在は、削平により中世遺構が消滅したことを暗示する。井戸の廃棄年代は明瞭ではないが、埋積後の陥没土層以下から江戸時代の遺物が出土していることから、江戸時代と考えておきたい。図示しなかった遺物は、奈良・平安時代の土器器杯類74点、甕壺類131点、



灰釉陶器 2点、須恵器杯類21点、壺
類14点、石類は58点、鉄滓は 3点であ
る。2区最西端に位置する1・2号井
戸と比してその量の多さが目立ち、住
居分布の傾向を示す可能性もあろう。

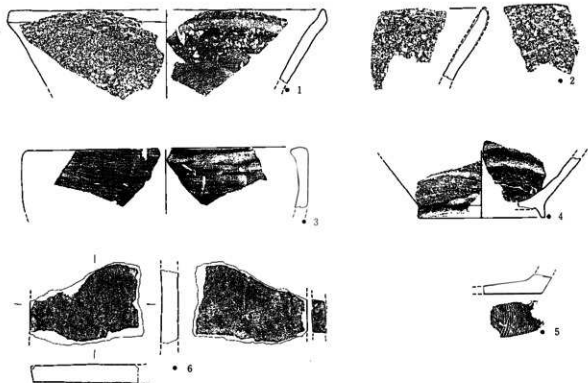


3号井戸土層注記

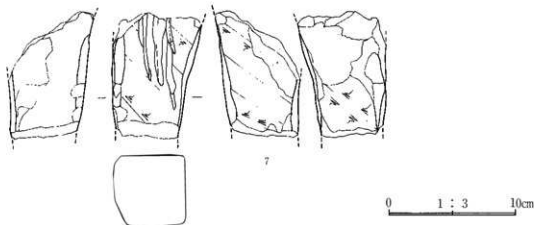
- 1 灰褐色土層 ロームを塊状に含む。サク状遺構。
- 2 灰褐色土層 1層に比して黒味が強い。
- 3 褐色灰質砂土層 As-Bを含む。砂を部分的に混える。
- 4 暗褐色土層 As-Bを微量含む。
- 5 4層とローム粒の混土層
- 6 灰褐色土層 2層に比して黒味が強い。As-Bを含む。
- 7 暗褐色土層 やや粘性がある。ローム粒を少量含む。
- 8 7層とロームの混土層 ロームは塊状を呈する。

第101図 2区3号井戸

0 1 : 60 2 m



第102図 2区3号井戸出土遺物(1)



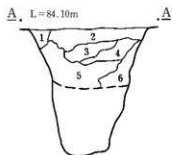
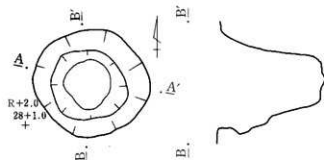
第103図 2区3号井戸出土遺物（2）

2区4号井戸（第104・105図、PL-14・68）

2区南東のS-28グリッドに位置し、3.1m北東に21号住居、北4.2mに20号住居、西北西3.9mに22号住居が存在する。確認面における平面形は、東西1.25m、南北1.14mの円形を呈する。確認面からの深さが1.33mと浅く、井壁の崩落は南側の一部に小さく認められたのみである。掘形は地山井筒円筒形である。調査時の涌水は底部からしみ出る程度で、調査時の自然水位は底から10cmであった。

遺物は土師器杯類24点、壺甕類46点、須恵器杯類4点、壺甕類10点、石類9点、軟質陶器内耳鍋5点が出土した。遺物はいずれも細片であるが、廃棄時期推定と遺構の存在しない中世の情報を得るため軟質陶器内耳鍋5点（1～5）、砥石1点（6）、石臼1点（7）、使用痕のある被熱した礫2点（8・9）の9点を図示した。

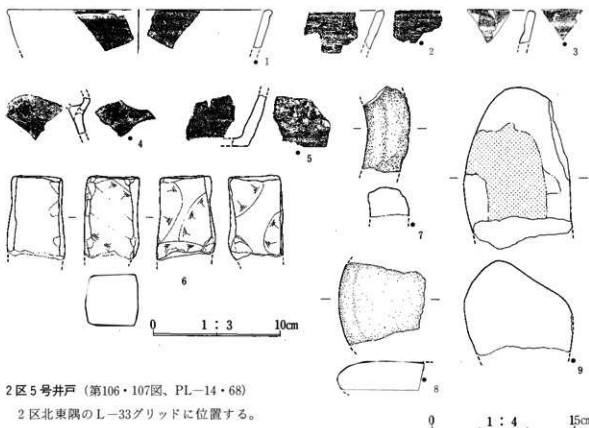
内耳鍋は、細片であるが14世紀～15世紀に属し、確実に江戸時代に属する遺物の出土はみられない。したがって、廃棄年代は中世の可能性が高い。



4号井戸土層注記

- 1 灰褐色土とロームの混土層
- 2 暗褐色土層 ローム小粒を少量含む。
- 3 暗灰褐色土層 ローム小粒を少量含む。
- 4 暗褐色土層 2層に比して黒味が強く、軽石をほとんど含まない。
- 5 褐灰色土層 ローム小粒を30%程含む。
- 6 黒褐色土層 ロームを塊状に少量含む。

第104図 2区4号井戸

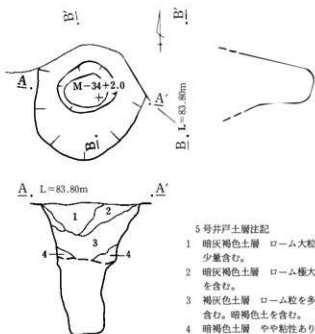


第105図 2区4号井戸出土遺物

2区5号井戸 (第106・107図, PL-14・68)

2区北東隅のL-33グリッドに位置する。17・18号住居と重複し、26号住居に40cmと近接する。また、北東の一部は調査区外に延びる。新旧関係は、いずれも本井戸が新しい。平面形は、直径1.6mほどの円形を呈すると推定される。掘形は、2.08mの地山井筒円筒形である。調査時の湧水はなく、底部に滲む程度であった。

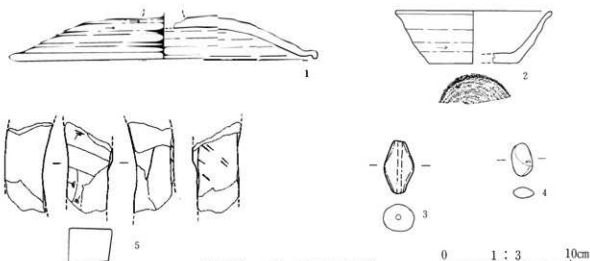
遺物は土師器杯類21点、壺甕類83点、土錘1点、須恵器杯類4点、壺甕類2点、蓋類2点、石類6点が出土し、これらのうち須恵器蓋1点(1)、杯1点(2)、土錘1点(3)、砥石1点(5)、礫1点(4)を図示した。砥石は、周辺に加工痕を残さないほど使用されているうえ、大型であり、江戸時代の所産でない可能性が高い。また、図示した須恵器は、住居の重複と矛盾し廃棄年代を示す遺物とするには無理があると考えられる。



5号井戸土層注記

- 1 暗灰褐色土層 ローム大粒を少量含む。
- 2 暗灰褐色土層 ローム極大粒を含む。
- 3 褐灰色土層 ローム粒を多く含む。暗褐色土を含む。
- 4 暗褐色土層 やや粘性あり。

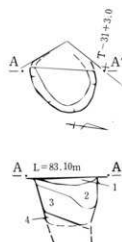
第106図 2区5号井戸



第107図 2区5号井戸出土遺物

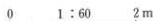
2区6号井戸（第108図）

3区南西隅のR-33グリッドに位置し、南西は調査区外に延びる。平面形は、短径1m程の楕円形を呈すると推定される。本井戸は、排土運搬に使用する道路と農道に接しているため、危険と判断し深さ75cmで調査を中止した。したがって、掘形形状や時期は不明である。



6号井戸土層注記

- 1 黒褐色土層 As-B を多量に含む。
- 2 黒褐色土層 As-B を多量に含む。ロームブロックを少量含む。
- 3 黒褐色土層 As-B を多量に含む。ロームブロックと灰色シルトブロックを少量含む。
- 4 灰褐色土層 As-B を多量に含む。



第108図 3区6号井戸

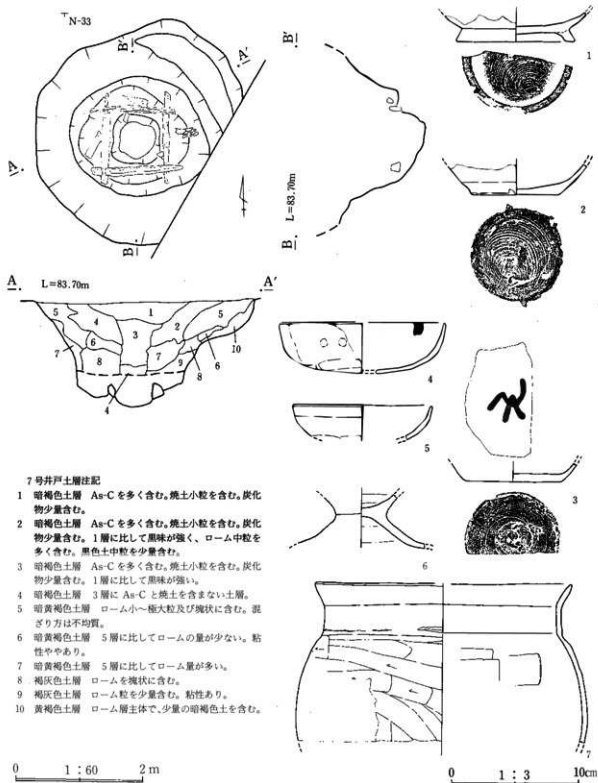
2区7号井戸（第109・110図、PL-14・15・68）

2区北東のN-33グリッドに位置し、26・27号住居と重複する。重複する26・27号住居の遺存が非常に悪い。掘形の東側は調査区外に延びる。掘形の平面形は、直径3.4m前後の円形、断面形はすり鉢状を呈する。井戸の底部には割り材を井桁組にした井筒台が遺存していた。井筒台内側底部は、周囲の掘形に比して15cm程深く掘削されている。断面観察では、井筒台内径と同じ幅の立ち上がりか底部から140cmまで確認された。この痕跡は、井戸の上部まで設置されていた井筒の痕跡と考えられる。調査時の涌水は、底部から滲み出る程度で自然水位は10cm程度である。

遺物は掘形出土が主体であり、土師器杯類1116点、壺甕類66点、須恵器杯類84点、壺甕類16点、蓋類13点、壺類1点、鉄製品1点、被熱粘土塊5点、石類1点が出土した。明確に井筒内出土と確認できるものは、底部から出土した6の小型台付壺と8の曲物の2点である。7の土師器壺は、掘形上層出土である。3の須恵器杯底部には記号の墨書が認められる。廃棄年代を明確に示す遺物の出土はなかったが、中近世遺物が出土

第1節 台地（2・3区）で検出された遺構と遺物

していないこと、側板受けを有する曲物は、Hr-FA 上水田から多く出土していることや住居との重複から平安時代後期から中世初頭と推定される。



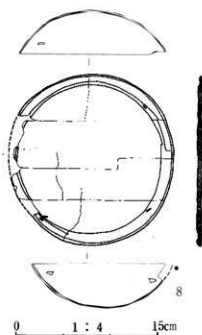
7号井戸土層注記

- 1 暗褐色土層 As-Cを多く含む。焼土小粒を含む。炭化物少量含む。
- 2 暗褐色土層 As-Cを多く含む。焼土小粒を含む。炭化物少量含む。1層に比して黒味が強く、ローム中粒を多く含む。黒色土中粒を少量含む。
- 3 暗褐色土層 As-Cを多く含む。焼土小粒を含む。炭化物少量含む。1層に比して黒味が強い。
- 4 暗褐色土層 3層に As-Cと焼土を含まない土層。
- 5 暗黄褐色土層 ローム小〜極大粒及び塊状に含む。混ざり方は不均質。
- 6 暗黄褐色土層 5層に比してロームの量が少ない。粘性ややあり。
- 7 暗黄褐色土層 5層に比してローム量が多い。
- 8 褐灰色土層 ロームを塊状に含む。
- 9 褐灰色土層 ローム粒を少量含む。粘性あり。
- 10 黄褐色土層 ローム層主体で、少量の暗褐色土を含む。

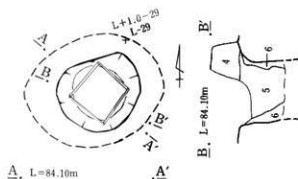
第109図 2区7号井戸、出土遺物（1）

2区8号井戸（第111・112図、PL-15・69）

2区北東に位置し、10号住居と近接する。上部は攪乱と芋穴により破壊されている。確認面は不正円形を呈するが、本来は直径1mほどの円形であったと考えられる。確認面から1.10mから1.30mの範囲は、「アグリ」を有している。底部から1.17m以下には、一辺43cmの板組による方形井筒が遺存している。井筒は、底部から60cmのところから3寸の角材で井筒台を設置している。井筒台の上には8分の板目材を使用した井筒を立てると共に、外側に1枚の板を横に設置する。井筒は5段検出され、2段目以上の重ね部分には添え板をしている。井筒に使用した板は、ほぞの加工はなく、釘などの使用も認められなかった。井戸の中程には、井壁の崩落と思われる「アグリ」があるが、これは当初から井筒が設置されていたれば井筒も崩壊しているはずである。したがって、本井戸は当初地山井筒円筒形で掘削され、井壁崩落後に井筒が設置されたものと解される。調査時の湧水層は、底部から1.60～1.90mの八崎層前後であり、湧水量は滲み出る程度である。自然水位は、底部から1.90mである。

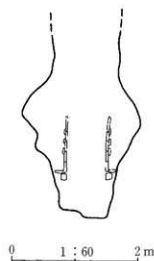


第110図 2区7号井戸出土遺物（2）



A, L=84.10m

B, L=84.10m



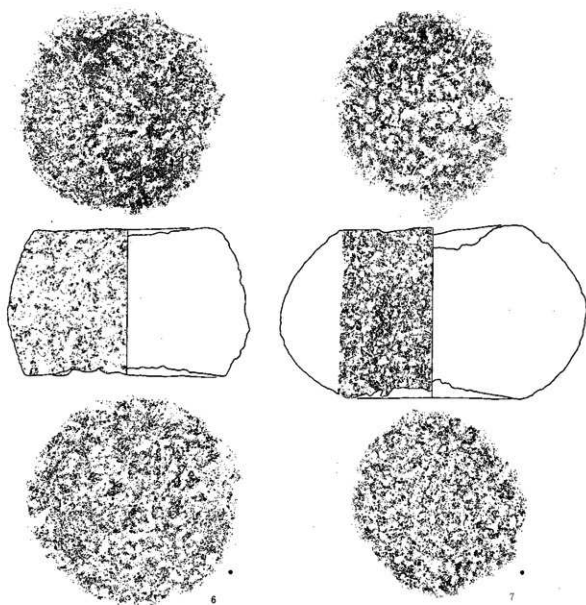
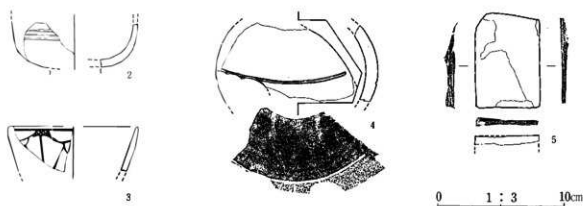
8号井戸土層注記

- 1 攪乱
- 2 攪乱
- 3 攪乱
- 4 暗灰褐色土層
ローム中～大粒を多く含む。
- 5 暗褐色土層
ローム小粒を少量含む。
- 6 暗褐色土層
ローム塊状に多く含む。



第111図 2区8号井戸、出土遺物（1）

第5章 検出された遺構と遺物

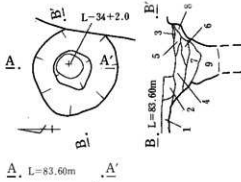


第112図 2区8号井戸出土遺物(2)

2区9号井戸(第113・114図、PL-15・68)

2区北東隅のL-33グリッドに位置し、17・18号住居と重複する。新旧関係は、両住居の掘形下で検出されたことから本井戸が古いと判断される。掘形は地山井筒円筒形と考えられるが、上部は朝顔形に開く。朝顔形に開いた部分の埋土は、18号住居の掘形埋土と推定される。深さは確認面から2.24mを測る。調査時の涌水層は底部から29cm以下の八崎層で、涌水量はしみ出る程度である。自然水位は底部から70cmである。

図示した遺物は、羽釜底部破片(2)、内黒須恵器碗(1)、用途不明軽石製品(3)の3点である。しかし、これらの遺物は出土層位を把握できず、埋土8層以上の18号住居掘形から出土した可能性もある。また、井戸底部1m以内から出土した遺物は、桶か曲物の底板(4)と縄文時代の石器各1点である。図示した以外では、土師器杯類43点、壺甕類28点、須恵器杯類2点、壺甕類1点、石類1点が出土している。

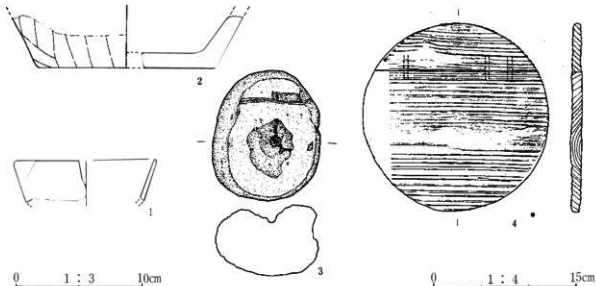


9号井戸土層注記

- | | | |
|------------------------------------|----------|------------------|
| 1 17・18号住埋土 | 5 暗褐色土層 | ローム極小と中粒を少量含む。 |
| 2 17・18号住埋土 | 6 暗褐色土層 | ローム極大粒を含む。 |
| 3 ローム層(板状)を主体とし、少量の黒褐色土を含む。18号住貼床。 | 7 黒褐色土層 | 炭化物を少量含む。 |
| 4 黒褐色土層 | 8 暗黄褐色土層 | ローム大粒を含む。 |
| ローム粒と焼土粒の「極小」を少量含む。 | 9 暗褐色土層 | ローム極小粒を均質に多量に含む。 |

第113図 2区9号井戸

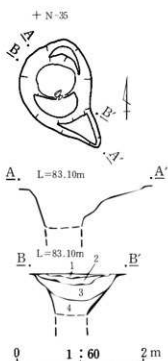
0 1 : 60 2 m



第114図 2区9号井戸出土遺物

3区10号井戸 (第115・116図、PL-15)

3区西端のN-35グリッドに位置し、11号井戸に50cmと近接する。確認面での平面形は、短径1.15m、長径1.40mの楕円形を呈し、南東方向に三角形のテラスを有する。深さ65cm以下からは、直径60cmの円形となる。本井戸は、直径が小さく湧水があることから底部の検出は不可能であった。出土遺物は、土師器杯類116点、壺類15点、須恵器椀類10点、壺類6点、蓋類2点、石類13点、鉄滓2点、被熱粘土塊2点であるが、図示し得たのは1の土師器杯、2の須恵器壺、3の礎の3点のみであるが、いずれも上層出土であるために井戸の廃棄年代は不明である。



10号井戸土層注記

- 1 黄褐色土層 As-Bと焼土粒を多量に含む。
- 2 黒褐色土層 焼土粒、炭化物を含む。
- 3 灰褐色粘質土層 As-Bを含む。
- 4 黒褐色土層 須恵器片と礎を含む。



第115図 3区10号井戸



第116図 3区10号井戸出土遺物

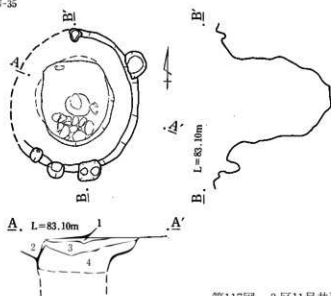
3区11号井戸 (第117・118図、PL-15・16・69)

3区西端のN-35グリッドに位置し、10号井戸に50cmと近接する。確認面において、深さ25cm、長径2.25m、短径2.05m?の楕円形を呈する掘り込みが検出され、その中心に地山井筒を掘り込んでいる。また、テラス状の掘り込み周辺には小ピットも認められ、井戸枠か上屋の存在が推測される。本井戸の確認面から90cmから120cm前後の埋土中には、多量の礎が投棄されていた。調査時の湧水層は、底部から60cm以下の部分である。また、湧水量は毎分4.0ℓで、自然水位は底部から70cmである。

遺物としては、梅の種子やヒョウタン類の種子と果皮など、植物遺体が多く出土した。図示した土器類は、埋土出土の内黒須恵器椀(1)、埋土下層出土の須恵器椀(2)、同土師器杯(3)の3点である。また、木製品は、下層から曲物底板(5・6)栓状木製品(4)を図示した。図示した以外では、住居に近接した谷地縁辺という占地との関係か、土師器杯類626点、壺類122点、須恵器杯類76点、壺類8点、蓋類5点、石類11点、鉄滓2点、粘土塊6点と多い。本井戸の廃棄年代は、ほぼ完形に接合された1の須恵器椀の頃と考えられる。

第1節 台地（2・3区）で検出された遺構と遺物

N-35

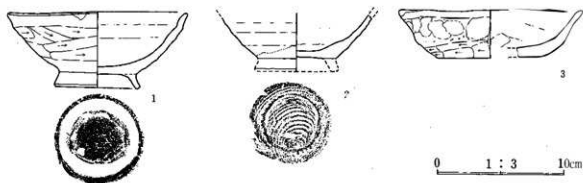


11号井戸土層注記

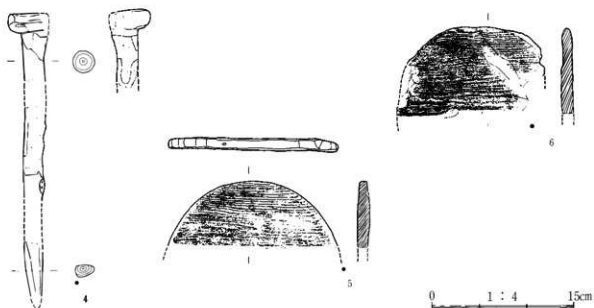
- 1 黄褐色土層 As-Bと焼土粒を多量に含む。
- 2 灰褐色土層 塊埋土。
- 3 黒褐色土層 As-B下水田耕作土と同じ土。焼土粒、炭化物を含む。
- 4 灰褐色粘質土層 焼土粒を多量に含み、下層より礫を多量に含む。

0 1 : 60 2 m

第117図 3区11号井戸

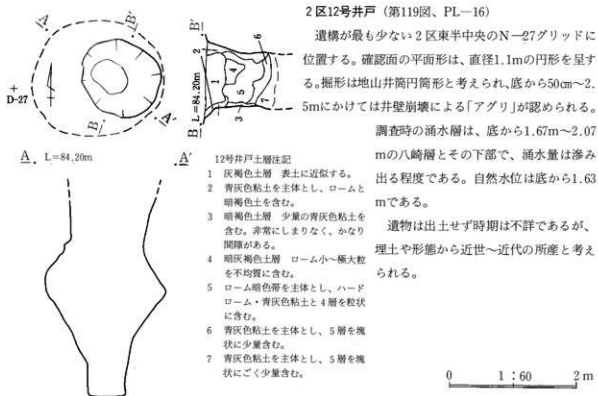


0 1 : 3 10cm



0 1 : 4 15cm

第118図 3区11号井戸出土遺物

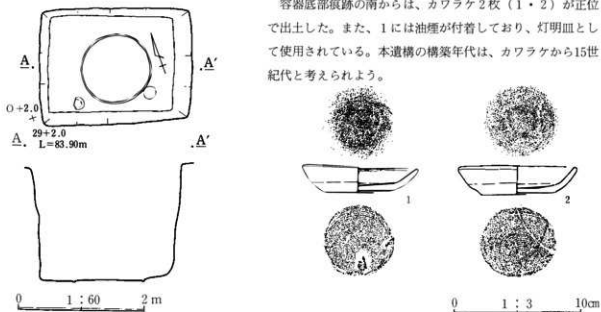


第119図 2区12号井戸

2区1号墓 (第120図、PL-16・69)

台北北東付近のO-29グリッドに位置し、短軸方位はN-18°-Eを示す。平面形は長辺119cm、短辺90cmの長方形を呈し、深さは91cmを測る。底部には薄く粘土が貼られ、直径53cm、幅1cmの桶又は曲物の痕跡が認められた。骨は小片すらも検出されなかったが、遺構の形状と遺物の出土状態から墓と判断した。

容器底部痕跡の南からは、カワラケ2枚(1・2)が正位で出土した。また、1には油煙が付着しており、灯明皿として使用されている。本遺構の構築年代は、カワラケから15世紀代と考えられよう。



第120図 2区1号墓、出土遺物

土坑の概要（第121～127図、PL-16～19・70）

1区

宮川によって形成された沖積低地の1区では、溝と場所を同じくして土坑が検出されている。中でも調査区北中央に位置する33号溝沿いでは、3～8・11・14号土坑の8基が直線上に並んで検出された。いずれも土坑埋土にはAs-Bをブロック状に含み、同一時期に構築された可能性が高い。また、これらは33号溝内に位置することから、溝の一部とも考えたが、土坑内に円礫や砂の堆積が認められないことから土坑として扱った。出土遺物は、2号土坑から土師器壺類細片6点、石類4点が出土したのみであり、時期は特定し得ないが、As-Bの降下年代が1108年とされている、中世前半の所産と判断される。

他の1・2・12・16号土坑も溝と重複するが、出土遺物が全くないうえに溝の時期も特定できず、土坑の時期は不明である。

2区

台地部分にあたる2区は、後世の擾乱により西側半分を暗色帯付近まで削られており、縄文時代以降の遺構・遺物は検出できなかった。台地東側における土坑の分布は、西側、南東隅、北東隅の3群に大きく分かれ、概ね住居と一致し東側中央には分布しない。その理由は不明であるが、住居掘形の一部が土坑状に残存したものを含む可能性は高い。また、各群ごとの規模や形状、方位も一定しておらず、性格、時期共に不詳のものが多く、17号土坑は、埋土上層から近世陶磁器が出土し、18世紀末～19世紀前半の所産と考えられる。46号土坑からは、埋土上層から礫とともに平安時代の遺物が少量出土している。

3区

2区から延びる台地縁辺に13基集中するが、規模や形状は様々である。時期の判明するものはないが、45号土坑からは北宋後半期の中国製白磁が2点（45土坑-1・2）出土しており、廃棄年代を示す可能性がある。

6区

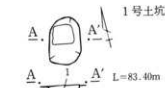
6区からは2基検出されているが、いずれも時期、性格は不明である。

土坑一覧表

番号	平面形	長軸方位	規模 (m) ---長軸×短軸×深さ---	出土遺物	遺構図	遺物図	備 考
1区1	楕円形	N-45°-E	0.75×0.51×0.36		第121図		26号溝と重複。本土坑が新しい。
1区2	楕円形	N-35°-W	1.80×1.26×0.24		第121図		29号溝と重複。本土坑が古い。
1区3	楕円形	N-33°-E	1.74×1.26×0.15		第121図		33号溝と重複。本土坑が古い。
1区4	不整形	不明	---×---×0.21		第121図		33号溝と重複。本土坑が古い。
1区5	長方形	N-42°-E	1.47×0.96×0.21		第121図		埋土が3号土坑3層に近似し、33号溝より古い可能性大。
1区6	円形	不明	0.90×0.75×0.30		第121図		埋土が3号土坑3層に近似し、33号溝より古い可能性大。

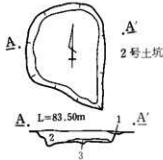
第5章 検出された遺構と遺物

番号	平面形	長軸方位	規模 (m) 長軸×短軸×深さ	出土遺物	遺構因	遺物因	備	考
1区7	不整形	不明	—×0.75×0.12		第121図			埋土が3号土坑3層に近似し、33号溝より古い可能性大。
1区8	楕円形	N-23°-W	0.90×0.75×0.30		第121図			埋土が3号土坑3層に近似し、33号溝より古い可能性大。
1区11	不整形	不明	1.50×—×0.15		第121図			埋土が3号土坑3層に近似し、33号溝より古い可能性大。
1区12	楕円形	N-28°-W	—×0.60×0.18		第121図			16号土坑と重複。本土坑が新しい?
1区13	長方形	N-22°-W	1.20×0.60×0.31		第121図			11・35号溝と重複。本土坑が新しい。
1区14	円形	不明	0.63×0.60×0.14		第121図			埋土が3号土坑3層に近似し、33号溝より古い可能性大。
2区16	楕円形	N-24°-W	—×—×0.18		第121図			12号土坑と重複。本土坑が古い?
2区17	不整形	不明	—×—×0.40	1, 2 3, 4	第122図	第127図		1号住居と重複。本土坑が新しい。 遺物は1層より出土。
2区18	円形	不明	1.00×0.95×0.58		第122図			
2区19	楕円形	N-63°-W	1.12×0.90×0.20	1	第123図	第127図		27号土坑と重複。本土坑が古い。
2区20	不整形	不明	—×0.68×0.10		第122図	第127図		21号土坑と重複。新旧関係不明。
2区21	楕円形	N-52°-W	0.78×0.64×0.32		第122図			20号土坑と重複。新旧関係不明。
2区23	楕円形	N-39°-E	1.00×0.64×0.21		第122図			
2区24	不整形	不明	—×—×0.42		第122図			2号住居と重複?埋土に貼り床らしき硬質土塊含む。
2区25	円形	不明	0.70×0.20		第122図			
2区26	楕円形	N-45°-E	0.94×0.58×0.24		第123図			
2区27	楕円形	N-57°-E	1.10×0.85×0.44		第122図			19土坑と重複。本土坑が新しい。
2区28	楕円形	N-35°-E	3.48×1.69×0.75		第123図			5号住居と重複。5号住居埋土がなく、新旧関係不明。埋土から本土坑が新しい?
2区29	楕円形	N	0.82×0.70×0.34		第123図			
2区30	楕円形	N-62°-E	1.36×1.18×0.20		第123図			
2区31	楕円形	N	1.13×1.08×0.19		第123図			
2区32	楕円形	N-20°-E	0.70×0.50×0.22		第123図			
2区33	不明	不明	—×—×0.16		第123図			24号住居と重複。本土坑が古い。
2区34	不整形	不明	—×—×0.15		第123図			
2区35	楕円形	N	0.96×0.78×0.32		第124図			
2区36	円形	不明	(0.90)×0.40		第124図			
2区38	不明	不明	—×—×0.22		第124図			
2区39	楕円形	N-47°-W	1.32×1.11×0.18		第124図			
2区40	楕円形	N-70°-W	1.12×0.90×0.13		第124図			
2区41	方形	不明	(70)×(70)×0.28		第124図			42号土坑と重複。本土坑が古い。
2区42	楕円形?	N-40.5°-E	—×0.69×0.90		第124図			41号土坑と重複。本土坑が新しい。
2区46	円形?	不明	Q.20)×0.48	1, 2	第124図	第127図		埋土層に礫を含む。
2区53	楕円形	N-18.5°-E	1.08×0.75×0.70	1	第124図			26号住居と重複。住居埋土が殆どなく、新旧関係は不明。本土坑が古い可能性大。
2区54	楕円形	N-36.5°-W	0.80×0.61×—		第124図			7号井戸と重複。本土坑が古い。
2区56	不整形	不明	—×0.92×0.38		第124図			
3区45	円形	N-12°-W	0.58×0.54×0.42	1, 2	第125図	第127図		
3区47	不整形長方形	不明	0.81×0.54×0.42	1, 2	第125図			H r - F Aを含む土層を掘り込む。
3区48	不整形	不明	0.63×0.54×0.06		第125図			
3区49	円形	不明	0.27×0.18		第125図			
3区50	不整形	不明	—×0.69×0.39		第125図			
3区51	円形	N-20°-W	0.87×0.72×0.27		第125図			
3区52	円形	不明	0.80×0.75×0.25		第125図			
3区57	不明	不明	—×—×0.15		第125図			58、59号土坑と重複。58号土坑より古い。
3区58	不明	不明	—×—×0.30		第125図			57、59号土坑と重複する。57号土坑より新しい。埋土上にA・B下水田耕作土。
3区59	不明	不明	—×—×0.15		第125図			57、59号土坑と重複する。新旧は不明。埋土上にA・B下水田耕作土。
3区61	長方形	N-59°-E	1.50×0.95×0.08		第125図			上面は60号溝によって削平。
3区62	円形	不明	0.63×0.58×0.20		第125図			
3区67	楕円形	N-38°-E	0.92×0.60×0.12		第125図			
6区65	円形	N-32°-E	1.92×0.58×0.12	1	第126図	第127図		
6区66	楕円形	N-35°-E	0.86×0.75×0.10		第126図			



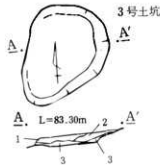
1号土坑土層注記

- 1 褐灰色土層 砂を含む。
- 2 ロームブロックと1層の混土层



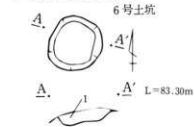
2号土坑土層注記

- 1 灰色シルト層 29号溝埋土。
- 2 粗砂層 フリナ地塊。
- 3 黒褐色シルト層



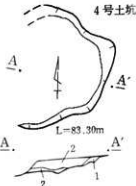
3号土坑土層注記

- 1 におい黄褐色土層 ローム粒を多量に含む。33号溝埋土。
- 2 におい黄褐色土層 ローム粒を多量に含む。As-Bを含む。
- 3 As-Bと黒褐色土の混土层



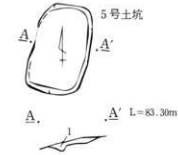
6号土坑土層注記

- 1 黒褐色土層 As-Bを多量に含む。



4号土坑土層注記

- 1 3号溝埋土。
- 2 As-Bと黒褐色土の混土层



5号土坑土層注記

- 1 黒褐色土層 As-Bを多量に含む。



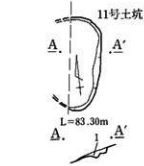
7号土坑土層注記

- 1 黒褐色土層 As-Bを多量に含む。



8号土坑土層注記

- 1 黒褐色土層 As-Bを多量に含む。



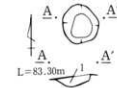
11号土坑土層注記

- 1 黒褐色土層 As-Bを多量に含む。



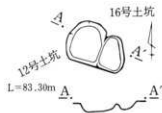
14号土坑土層注記

- 1 黒褐色土層 As-Bを多量に含む。

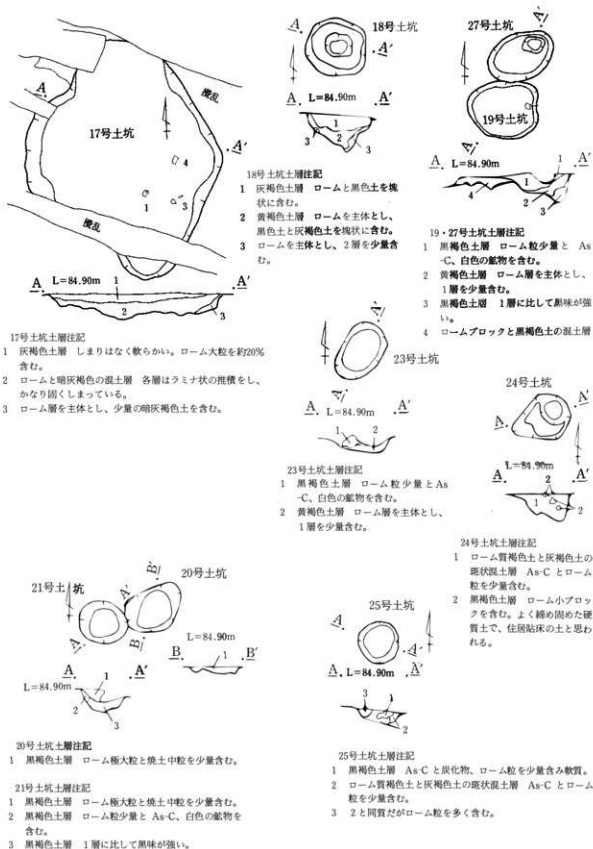


16号土坑土層注記

- 1 黒褐色土層 As-Bを多量に含む。



0 1:60 2m

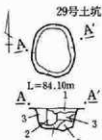


第122図 2区17～21・23～25・27号土坑



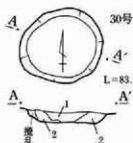
26号土坑

- 26号土坑土層注記
- 1 黒褐色土層 As-C と炭化物・ローム粒を少量含む軟質。
 - 2 ローム質褐色土と灰褐色土の斑状混土層 As-C とローム粒を少量含む。



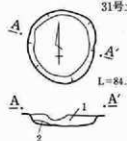
29号土坑

- 29号土坑土層注記
- 1 擾乱
 - 2 灰褐色土層 黒色土粒とローム中粒を均質に含む。
 - 3 黒色土とローム小ブロックの混土層
 - 4 ローム層を主体とし、2層を含む。
 - 5 ローム層を主体とし、微量の黒色土粒を含む。



30号土坑

- 30号土坑土層注記
- 1 暗褐色土層 ローム層を不均質に含む。
 - 2 黒褐色土層 ローム極小粒を微量含む。



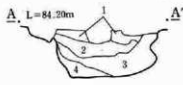
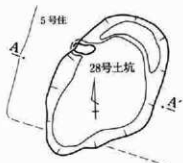
31号土坑

- 31号土坑土層注記
- 1 暗灰褐色土層 ローム大粒を不均質に少量含む。
 - 2 黄褐色土層 ロームを主体とし、少量の1層を含む。



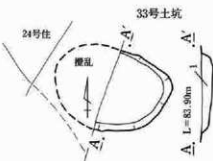
32号土坑

- 32号土坑土層注記
- 1 暗灰褐色土層 ローム大粒を不均質に少量含む。
 - 2 暗褐色土層 ローム大粒少量含む。
 - 3 ロームと2層の混土層



28号土坑土層注記

- 1 灰褐色土層 ローム粒「中」を部分的に多く含む。
- 2 灰黄褐色土層 1層とローム粒の混土層。ロームは均質に含む。黒褐色土を含む。
- 3 ローム層を主体とし、ごく少量の2層を部分的に含む。
- 4 ローム層を主体とし、少量の2層を均質に含む。



33号土坑

33号土坑土層注記

- 1 暗褐色土層 ローム極小〜中粒を多量に含む。As-Cを含む。混土小粒を少量含む。

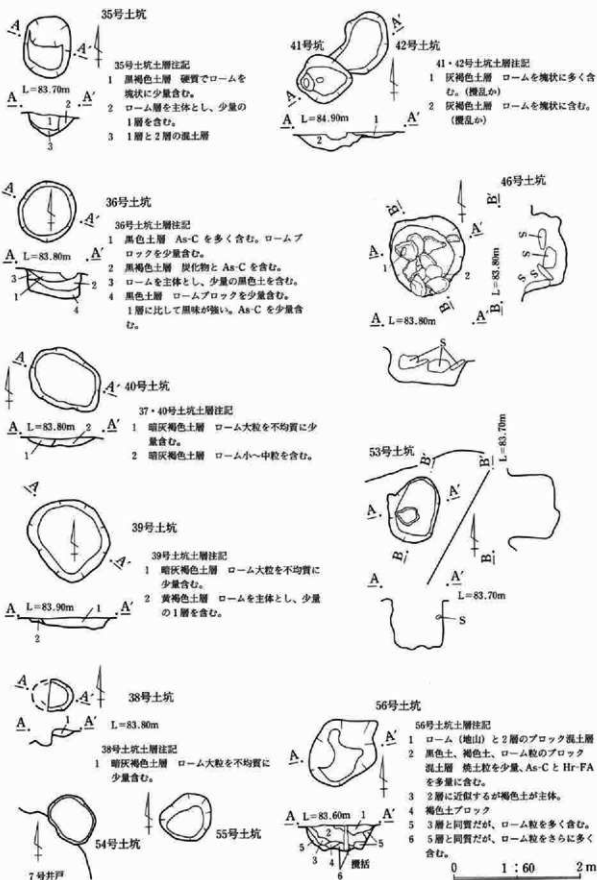


34号土坑

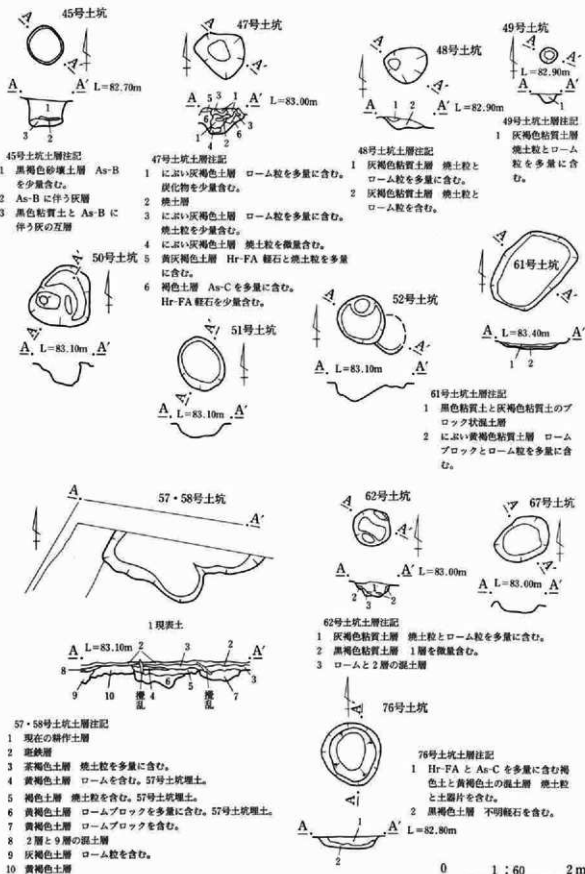
34号土坑土層注記

- 1 灰褐色土層
- 2 暗灰褐色土層 ローム大粒を不均質に少量含む。
- 3 黄褐色土層 ロームを主体とし、少量の2層を含む。

0 1 : 60 2m

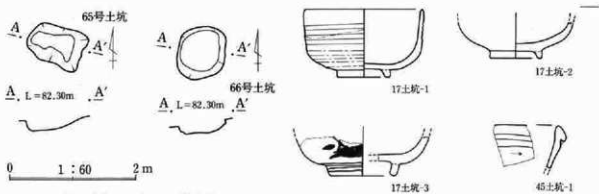


第124図 2区35~42・46・53・54~56号土坑

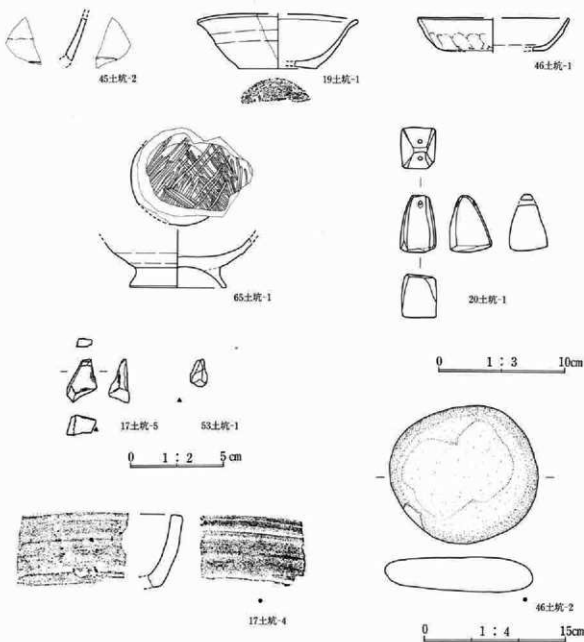


第125図 3区45・47～52・57・58・61・62・67・76号土坑

第5章 検出された遺構と遺物



第126図 6区65・66号土坑



第127図 土坑出土遺物

1区溝の概要(付図2、第128～133図、PL-20～24・71)

1区は、宮川によって形成された沖積低地と、低地に面する洪積台地縁辺部にあたる。沖積低地部分は、後述するように旧水路が大きく蛇行する部分にあたり、旧水路埋設後もその形状は低地として残っている。後者では、沖積地に沿って西に大きく蛇行する溝が多く検出され、前者ではAs-B下からAs-C下までの水田を4面確認した。

台地縁辺を走る溝の多くは、遺物の出土がないうえに混入遺物の出土も認められ、開削・埋没年代を推定しうる溝は非常に少ない。最も多く遺物を出土した1号溝は、江戸時代後期から末の陶磁器が多く出土しているが、中にはハンドクリーム等の容器やゴム印判の碗など昭和のものも含まれ、近年まで使用されていたことが分かる。1号溝から分かれる6号溝の分岐点に9本、西端に13本の杭があり、堰が設けられていたと考えられる。1号溝同様廃棄年代は新しいが、古代の瓦塔片が1点出土している。17号溝は、6号溝と走行を一にし若干位置がずれている。したがって、6号溝は17号溝の掘り返しであろう。17号溝の時期は出土遺物がなく不明である。11・15・35号溝はほぼ平行し、15・35号溝は中央付近から深さを増して砂で埋没したウォーターホールが連続して認められる。一方、11号溝はあまり水量が多くなかったようで15・35号溝ほど深さも増さず、ウォーターホールも形成されていない。15・35号溝からは、ローリングを受けた古代の土師器、須恵器の小片が多く出土しており、埋没時期が古代である可能性が高い。11号溝からは土器類の出土はなく、五輪塔(11号溝-1)が1点出土したのみである。1～6・11・15・17・35・36・40号溝などの地形に沿って蛇行する溝の埋土には、砂が多く堆積しており流水のあったことが伺える。また、地形に沿っているものの台地上を流れていることから、これらの多くは水路と考えられる。

1区北東には、アゼ状の高まりと水口状の施設が検出され、更にJ-11～K-11グリッドでは、アゼ状の高まりの内側に沿って東にほぼ直角に曲がる39号溝も存在する。したがって、これらのアゼ状の高まりと37・38・39号溝は水田の痕跡と考えられ、その時期は、位置関係や埋土から1号溝と同一時期と推測される。

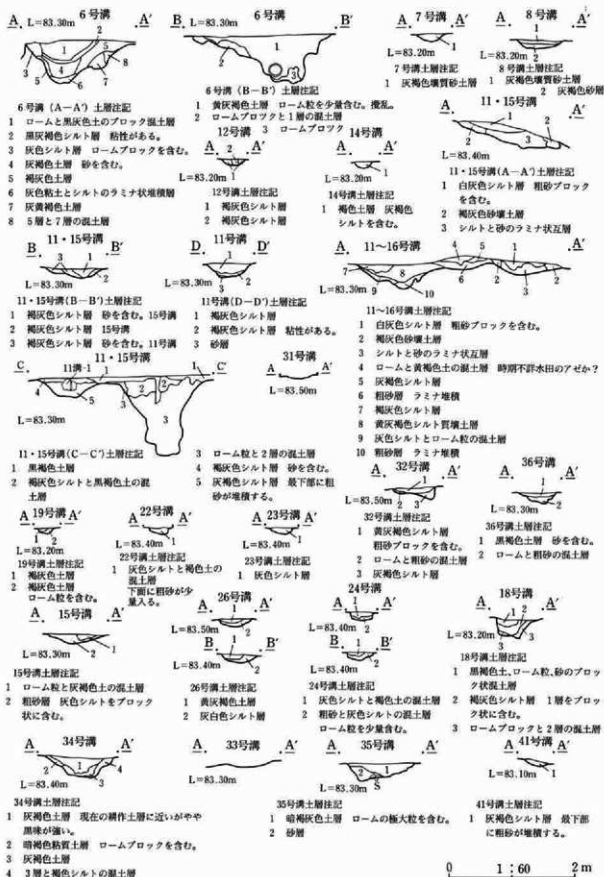
1区溝群一覧表

番号	位置	重複	形状	規模 (幅、深さ、長さm)	出土遺物	調査所見
1	G-13～N・O-14	2・6, 8, 11	緩い曲線を描き南北に延びる。	3.40, 0.55, 33.5	江戸時代から昭和中期頃の陶磁器類 ガラス、砥石等	埋土中に砂が多く堆積しており、近年まで水路として利用されていたようである。底部には小さいウォーターホールが認められる。6号溝との分岐点とその南には、堰の杭が残る。2～6号溝は同時期に存在し、本溝の支流や蛇行であろう。
2	L-15～O-15	1, 3～5	直線的に南北に延びる。	0.20, 0.02, 6.5 0.52, 0.14	なし	1号溝の蛇行跡。
3	N-15～O-15	1, 2, 4, 5	緩く蛇行し、南北に延びる。	0.38, 0.12, 6.5 0.85, 0.04	なし	1号溝の蛇行跡。
4	N-15～O-15	1～3, 5	蛇行して南北に延びる。	0.30, 0.05, 6.2	なし	1号溝の蛇行跡。
5	O-16	1, 4	直線的に東西に延びる。	0.90, 0.07, 2.82	なし	1号溝の蛇行跡。
6	M-11～N-14	1, 8, 17	直線的で、調査区南で西に方向を変える。	0.95, 0.52, 21.0 1.85, 0.26	瓦塔(1)	1号溝の支流。17号溝より新しい。堰の杭残る。瓦塔は古代であるが、溝の時期は新しい。
7	M-12～N-14	14	直線的に東西に延びる。	0.70, 0.12, 7.30 0.65	なし	砂が堆積する。

第5章 検出された遺構と遺物

8	L-13~M-14	1, 6	直線的に東西に延びる。	0.80, 0.08, 6.65 0.03	なし	砂が堆積する。6号溝より古い。
9	L-14	なし	直線的に南北に延びる。	0.35, 0.09, 1.50 0.11	なし	
10	K-14	なし	直線的に南北に延びる。	0.25, 0.02, 1.58 0.08	なし	
11	I-14~L-10	1, 12~15	直線的であるが、中程で屈曲する。	0.80, 0.14, 28.50 1.10, 0.29	五輪塔(39) (空・風輪)	底部に砂が堆積する。
12	L-13~M-11	6, 11, 13, 14, 19	緩く蛇行する。	0.36, 0.10, 8.50 0.68, 0.14	なし	
13	L-13	11, 12	直線的。	0.46, , 0.88	なし	埋土に砂堆積。
14	L-12~N-13	6, 7, 11~13	両曲して南北延びる。	0.30, 0.13, 8.72 0.45, 0.04	重複は最も古い。	
15	K-10~J-13	1, 11, 14	直線的であるが、中程で屈曲する。	0.92, 0.06, 21.82 1.65, 0.23	土銅器、須恵器破片多量に出土。遺物は摩滅する土器(2)	西側の深い部分はウォーターホールが多い。ホール内は砂が堆積。
16	J-12~K-13	11, 15	11号溝北部と平行する。	0.42, 0.27, 5.20 1.70	なし	
17	N-12~O-13	6	6号溝と平行する。	0.15, , 7.20	なし	6号溝より古い。
18	M-12	6, 12, 36, 40	緩く蛇行する。	0.62, , 7.12	なし	6号溝より古い。
19	M-11~L-12	6, 12	12号溝西側と平行する。	0.30, 0.40, 4.5 0.73, 0.11,	なし	
20	M-11~N-12	6, 18	6号溝の南に平行する。	0.68, 0.09, 4.50	なし	
21	G-11	34	34号溝と直行する。	0.50, 0.29, 1.00	なし	
22	I-10~I-12	23, 24, 26, 33	ほぼ直線的。	0.32, 0.07, 8.48 0.48, 0.17,	なし	
23	H-12~I-12	22, 24	両曲部のみ検出	0.24, 0.06, 2.20 0.53	なし	
24	I-10~I-12	22	23号溝に沿う。	0.50, 0.12, 1.12	なし	
25	I-11	22, 26	不詳	0.10, , 0.92		
26	I-10~G-12	22, 24, 27, 31	途中で両曲する。	0.42, 0.80, 8.25 0.62		
27	H-12	26	不詳。	0.50, , 1.50		
28	H-12~I-12	23, 24, 26, 27	不詳。	1.05		
29	G-11~H-12	31	両曲する。	0.50, 0.14, 7.50		
30	H-10~H-11	31	直線的。	0.28, 0.04, 6.35 0.50, 0.02		
31	H-11~H-12	26, 28	直線的。	0.20, 0.10, 2.42 0.50, 0.08		
32	G-11~H-11	3土坑	直線的。	0.80, 0.09, 5.58 0.10	常滑焼鉢(1)	
33	G-10~K-10	16, 22, 24, 32	南北に直線的。	0.06, 15.15 0.07		
34	F-10~G-12	26, 29, 30	直線的だが、東で北に屈曲すると思われる。	0.85, 0.26, 7.90 1.16, 0.24,		
35	L-10~M-12	なし	直線的。	0.64, 0.12, 7.00 1.20,	滑石製玉(1)	
36	N-10~N-12	40	40溝との重複が著しく規模は不明。			埋土に砂堆積。
37	J-13~K-13	なし	直線的。水田にかかわるものか。	0.25, 0.06, 5.88 0.40,		
38	J-12~K-12	なし	直線的。	0.36, 0.16, 6.15 0.60, 0.20		
39	J-11~K-12	なし	わずかに東に両曲。	0.60, 0.07, 6.20 0.13,		
40	N-10~N-12	40	40溝との重複が著しく規模は不明。		石製品(1)	埋土に砂堆積。

第1節 台地(2・3区)で検出された遺構と遺物



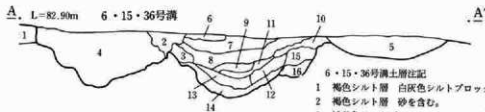
第128図 1区溝群断面図(1)

第5章 検出された遺構と遺物



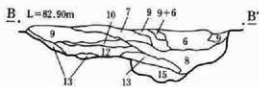
36・40号溝土層注記

- 1 暗褐色土層 ローム極小粒を少量含む。As-Bを含む。
- 2 灰褐色シルト層
- 3 暗褐色土層 As-Bを多量に含む。ローム粒を含む。
- 4 3層と砂にロームブロックが混じったものの混土層
- 5 暗褐色土層 3層に近似するが、砂が少ない。
- 6 7層と砂の混土層 灰色シルトとロームブロックを含む。
- 7 暗褐色土と砂の混土層 灰色シルトとロームブロックを含まない。



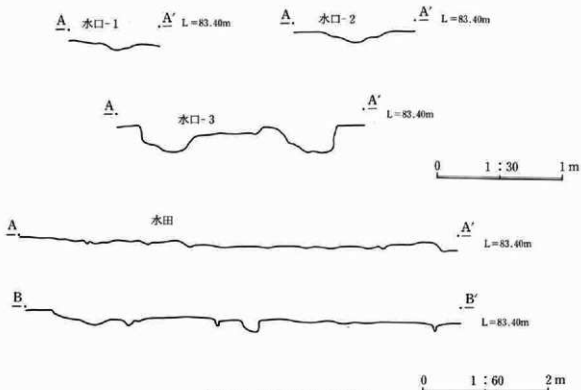
6・15・36号溝土層注記

- 1 褐色シルト層 白灰色シルトブロックを多量に含む。
- 2 褐色シルト層 砂を含む。
- 3 淡黄色シルトブロック
- 4 粗砂層 ラミナ堆積。淡黄色シルトブロックを含む。
- 5 粗砂、褐色シルト、淡黄色シルトの互層
- 6 灰褐色シルト層 砂を含む。
- 7 シルトと粗砂の互層
- 8 シルトと粗砂の互層 6層を含む。
- 9 粗砂層 ラミナ堆積。
- 10 9層に近似するが、粒径が小さい。
- 11 シルト層 ラミナ堆積。
- 12 シルト層 11層に比して粒径が大きい。
- 13 粗砂層 ラミナ堆積。
- 14 シルトと粗砂の互層 円礫と灰白色シルトブロックを含む。
- 15 シルトと砂の互層
- 16 粗砂層



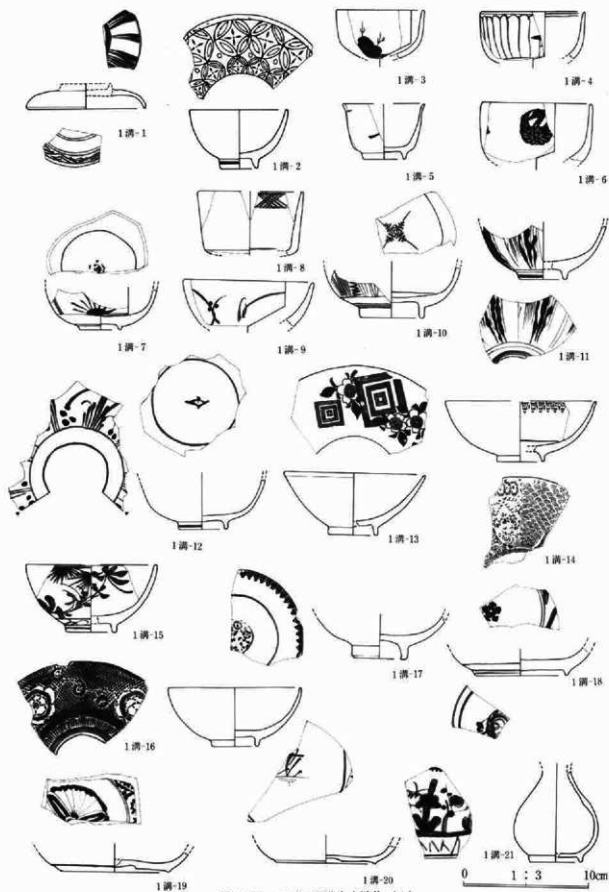
0 1 : 60 2 m

第129図 1区溝群断面図(2)



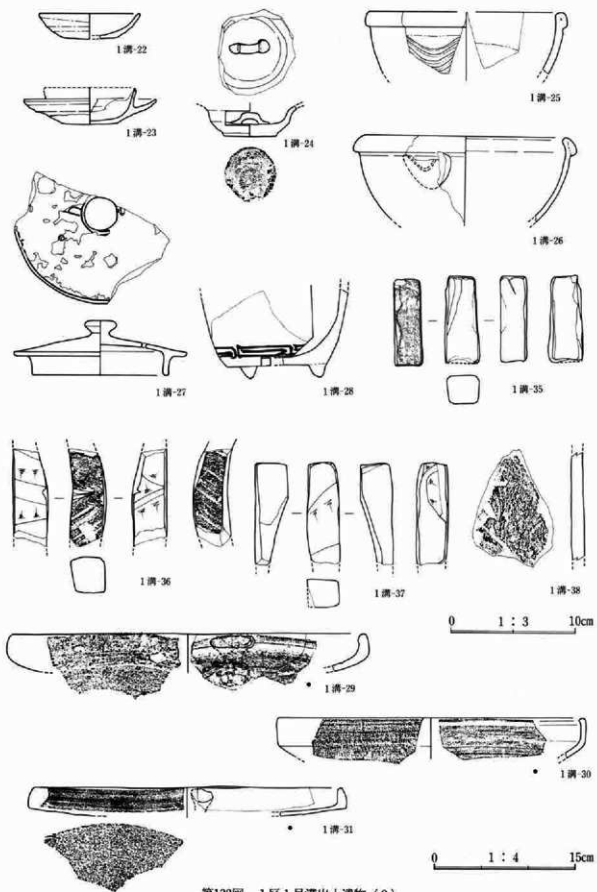
第130図 時期不詳水田断面図

第1節 台地（2・3区）で検出された遺構と遺物



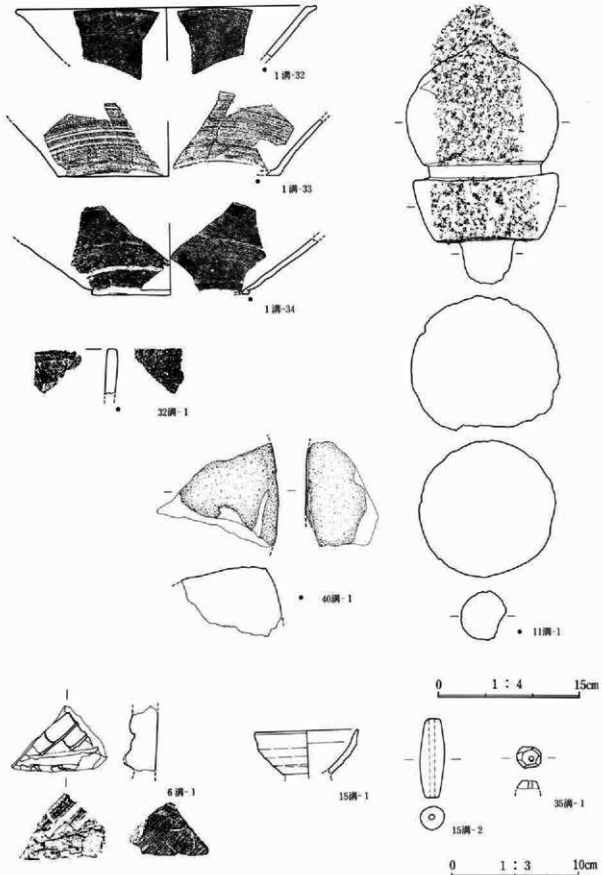
第131図 1区1号溝出土遺物（1）

第5章 検出された遺構と遺物



第132図 1区1号溝出土遺物(2)

第1節 台地（2・3区）で検出された遺構と遺物



第133図 1区1号溝出土遺物(3)、6・11・15・35号溝出土遺物

3 区溝

48号溝 (第134図、PL-24)

L-35~T-31グリッドに位置し、幅0.7~1.2m、長さ35.6mにわたって検出された。走向はほぼ直線的で、北東から南西に向かい、断面形状は「U」字型を呈する。埋土に砂の堆積は認められなかった。出土遺物はなく時期は不詳。

49号溝 (第134図、PL-24)

N-35~O-35グリッドに位置するが、調査区の関係から、東側の一部が長さ5.72m確認できずに過ぎない。埋土に砂の堆積はなく、出土遺物も認められなかった。規模、断面形状、埋没年代は不詳。

71・72号溝 (第134図、PL-24)

L-37~Q-34グリッドに位置し、47・48号土坑の下で確認されている。両溝は重複し、重複関係は72号溝が新しく71号溝が古い。規模は72号溝が幅0.35~1.00m、深さ25cm、長さ20.5m、71号溝が幅0.35~0.48m、深さ30cm、長さ4.90mを測り、71号溝の検出できない部分は72号溝と走向を一にしていたと考えられる。水の流れた形跡は認められず、出土遺物もない。

6 区溝

63号溝 (第135図)

V-70~W-70グリッドに位置し、重複は認められない。Hr-FA を掘り込んで掘削され、走向は直線的である。種子は多量に出土したものの土器類の出土はなく、掘削時期は As-B 以前、Hr-FA 以降としか分からない。

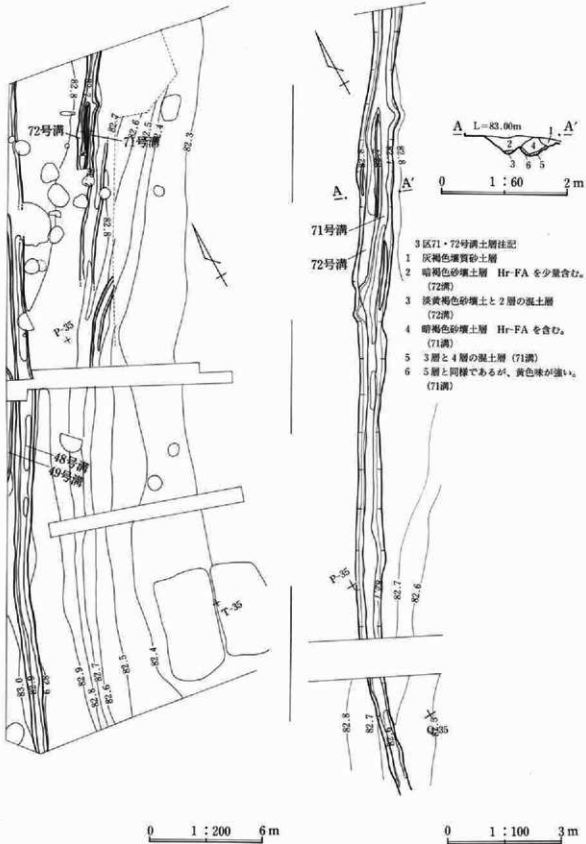
64号溝 (第136図、PL-24)

R-72~W-70グリッドに位置し、重複は認められない。Hr-FA 下黒色土の下面から掘り込まれ、規模は幅0.50m、深さ4cm、長さ6.08mを測る。溝内からは、木製品2点(3・4)と滑石製模造品(1)が、脇からは土師器壺(2)が出土している。また、埋土中にはウリ仲間を中心とした種子が多量に包含されていた。

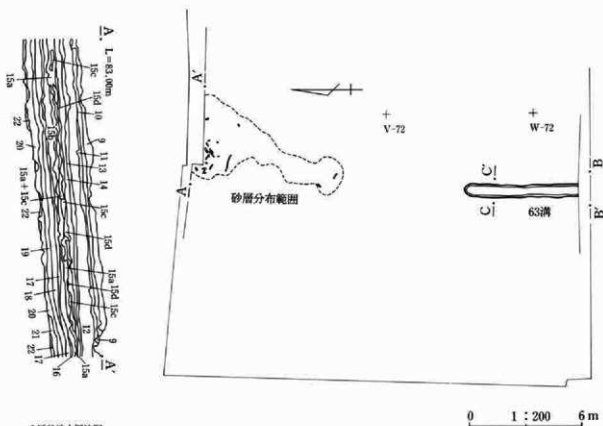
6 区 Hr-FA 上砂層 (第135図)

15層で確認された砂層で、6区北側中央から6区中央にかけて分布する。この砂層内にはウリ仲間の種子が多量に包含されており、時間的制約と種子・土量の多さからそのすべてを採取することはできなかった。一部については採取し、大阪府立大学農学部教授の藤下典之先生には玉稿をいただいた(自然科学・分析編参照)。砂層は上下を泥炭質土に挟まれており、東側台地上から洪水によって流されてきたと考えられる。この砂層の堆積時期を特定するには遺物が伴わないため不詳である。

第1節 台地（2・3区）で検出された遺構と遺物



第134図 3区48・49・70・71号溝



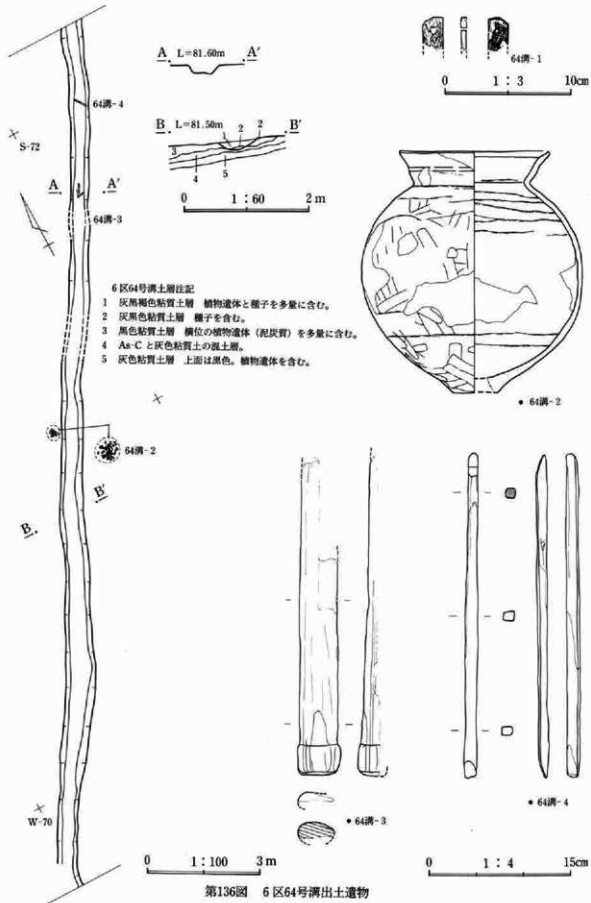
6区谷地土層注記

- 9 As-B層
- 10 黒色シルト質壤土層 (10YR1.7/1) As-B下水田耕作土。横位のアシ類は目立たないが、植物根遺体を多く含む。
- 11 黒色土層 (10YR1.7/1) 10層に比して明るい色調。横位のアシ類を少量含む。植物根遺体を含むが、10層より少量。
- 12 黒色土層 (10YR1.7/1) 11層より横位のアシ類を多く(20~30%)含む。
- 13 黒色土層 (10YR1.7/1) 土は少なく明褐色(7.5YR5/6)を呈する横位植物遺体を断面横の約50%強含む。
- 14 黒色土層 (2.5YR2/1) 上面でHr-FA上第1水田を検出。他の土層に比して灰色味が強い。横位のアシ類は断面横の10%程と少ない。植物根遺体を多く含む。
- 15a 黒色土層 (2.5YR2/1) 上面でHr-FA上第2水田を検出。部分的に黒味が強い。横位のアシ類が主体を占める。植物遺体は明褐色(7.5YR5/6)であるが、上層に比してやや黄色味を帯びる。Hr-FAのない部分又は堆積状態の悪い部分は、Hr-FAを含む。
- 15b 灰茶褐色土層 植物遺体を少量含む。
- 15c 粗砂層 Hr-FA 軽石を少量含む。糠子を多量に含む。洪水による堆積であろう。
- 15d 15a層と15c層の強土層 未分解の植物遺体を多量に含む。洪水による堆積であろう。
- 16 Hr-FA層 植物根遺体を多く含むが、断面では目立たない。
- 17 黒色土層 (10YR1.7/1) Hr-FA下水田耕作土。横位のアシ類を断面横の10%程含む。植物根遺体を含むが、断面で目立たない。
- 18 黒色土層 (10YR1.7/1) 横位のアシ類を断面横の10~25%程含む。部分的に50%を超える。
- 19 黒色土層 (10YR1.7/1) 横位のアシ類の色調は黄褐色(10YR5/6)を呈し、断面横の約10%含む。

- 20 As-Cを主体として少量の黒色土を均一に含む。上面でAs-C上水田を検出。
- 21 As-C層 粒径は1mm程度が主体で、少量2mm前後を含む。
- 22 黒色土層 (10YR1.7/1) As-C下水田耕作土。色調・植物遺体の状況ともに19層と同様であるが、若干植物遺体を多く含む部分が多い。

第135図 6区63号溝、谷地砂層

第1節 台地(2・3区)で検出された遺構と遺物



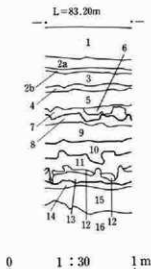
第2節 1区(西側)低地で検出された遺構と遺物

1区低地部分の基本土層 (第137図)

後述するように、1区の低地は宮川旧流路が蛇行する部分にあたり、流路変更後の河川堆積物(16層など)により低地化し、As-C(14層)が降下した古墳時代前期には水田化されている。As-C上1cm~10cmにはHr-FAが1・2cmの層厚で堆積し、Hr-FA下には黒色土が認められたが水田は検出されなかった。9・10層はかなり厚く堆積した河川堆積物であり、これらの下からも水田が検出された。また、As-B層に埋没した水田も検出されている。これ以降は、水田遺構としては検出できないものの、斑鉄層が認められることや台地縁辺溝群の存在から、水田は継続的に営まれていたと考えられる。

基本的な層位は、第137図に示したもので1区低地部北壁を標準とした。

- 1 灰色土層 圃場整備時の盛土。調査前の水田耕作土。
- 2 a 灰褐色土層 白色軽石(天明3年降下のAs-Aか)を少量含む。
- 2 b 3層が黄褐色化したもの。斑鉄層。水田は検出できないが、水田の床土と思われる。
- 3 灰褐色土層
- 4 褐色土層 砂を含む。斑鉄層。水田は検出できないが、水田の床土と思われる。
- 5 褐色土層 砂を含む。
- 6 褐色土層 砂を含む。5層に比して黒味がつよい。
- 7 As-B層
- 8 黒色粘質土層 この面で水田を検出した。水田耕作土。下半はやや灰色がかる。
- 9 灰褐色シルト質土層 ローム粒と軽石粒を少量含む。第3記濫層。
- 10 灰黒色シルト質土層 第4記濫層。上面で水田とそれに伴う溝、水溜を検出した。第3記濫層下水田の耕作土。
- 11 黒褐色土層 Hr-FAを少量含む。上面で水田と水田より古い溜井状遺構と溝を検出した。また、10層下面から本層上面にかけて1号祭祀跡を確認した。第4記濫層下水田の耕作土。アゼは検出されず、本層を少し削ったところで痕跡が検出された。
- 12 Hr-FA層
- 13 黒色粘質土層 As-Cを多量に含む。
- 14 As-C層
- 15 黒色粘質土層 As-C下水田の耕作土。1区ではもっともアゼの残りが良好であった。
- 16 灰白色粗シルト層



第137図 1区沖積地基本土層

1区 As-B 下水田(第138~140図、PL-25)

1区は本遺跡の西端に位置し、赤城山に源を発する宮川の左岸にあたる。本区は、宮川によって形成された沖積低地と、低地に接し溝の集中する洪積台地からなる。先に述べたように、台地部分には水路と考えられる溝が多く検出され、長期間水田が営まれていたことを物語っている。沖積低地部は、縄文時代頃の宮川旧河道が東に蛇行し西に向きを変える部分に当たり、その後の流路変更によって水田可耕地となっている。

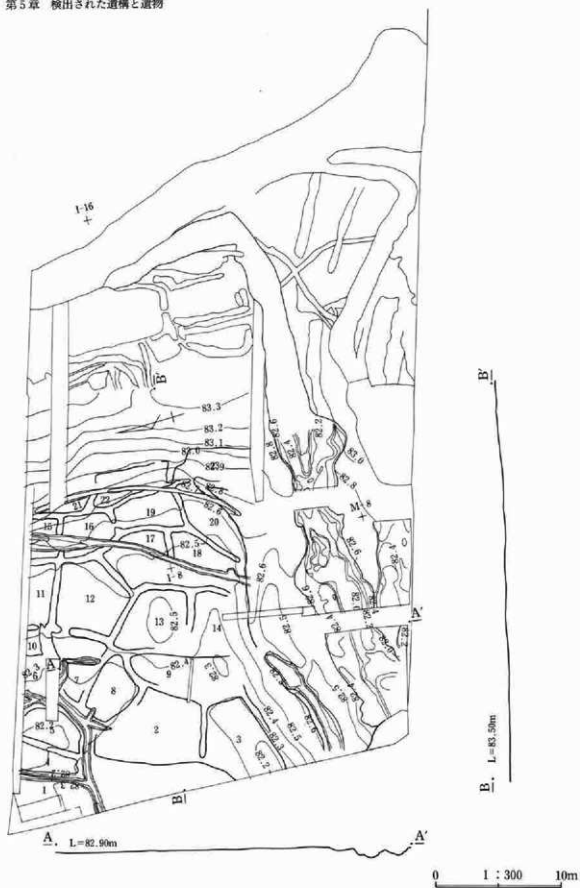
本水田は、低地部では最も上層で検出された水田であり、As-Bにより覆われていた。As-Bの層厚は2cm前後で比較的良好であったが、いわゆるピンクアッシュは認められない。As-Bの堆積が比較的良好であったものの、アゼは偏平化が著しく、アゼと水田面との比高差は1~3cm程である。このため、水田城南側の区画は検出が困難であった。

水田域は先に述べたように旧流路の蛇行部にあたり、台地に接する東側と南側の傾斜は急なものとなっている。しかし、傾斜変換部分以外の傾斜はさほど急ではなく、宮川に近づくにしたがって低くなっている。

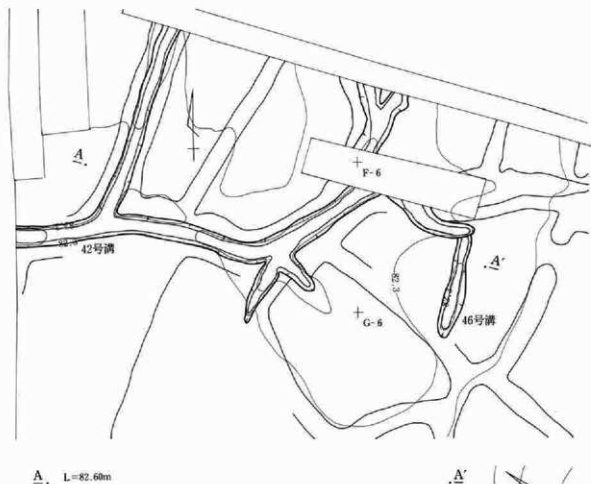
アゼの走向や区画は、調査面積が狭いことや区画のすべてが確認された訳ではないので明確にはしたがいが、概ね地形に沿ってアゼを湾曲させ、その間を等高線に直交する方向に区切る等高線耕作を基本としている。特に傾斜のきつい東端は、等高線に平行する南北方向に長く、直交する東西方向に狭い区画を作っている。アゼには中央に水路(42号溝)を有する幅65cm程の大アゼとクロ的なアゼの2種類が存在する。水田区画は23区画を確認したが、面積を計測できるのは8・12・16・19の4区画にすぎない。水田が狭い傾斜地に営まれているため、等高線間隔の狭い部分に位置する8・16・19区画は12.6㎡、11.2㎡、12.2㎡、広い部分に位置する12区画は29.33㎡と面積には2倍以上の開きがある。

取水については、地形から台地縁辺に等高線に沿った水路を設けて行っていたと考えられるが、As-Bに埋没した取水路は検出されなかった。47号溝は位置的に取水路と考えられるが、埋土はAs-Bを含むものの純層ではないことからAs-B下水田には共なわないと判断される。排水は北西隅のアゼ内に位置し、地形に沿って蛇行する42号溝がその役割を果たしていたものと考えられる。42・43・44号溝は、As-B水田調査時に検出されたが、いずれも水田のアゼを壊していることから水田より新しいと判断される。

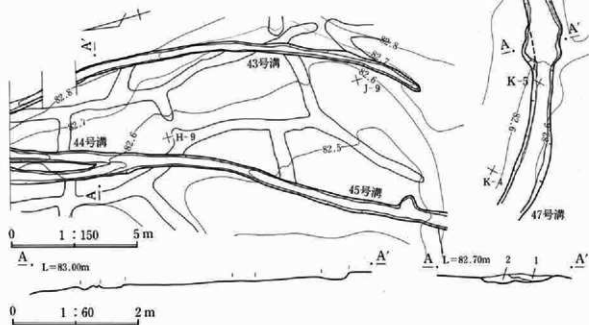
出土遺物は、水田に伴うと考えられるものは出土していない。また、伴わない遺物もすべて細片で図示しうるものはなかった。



第138図 1区As-B下水田



第139図 1区As-B 下水田内溝 (42号溝・46号溝)



第140図 1区43・44・45号溝・47号溝

第3 氾濫層下水田 (第141～151図、PL-26～28・71～74)

調査時に第3 氾濫層と名付けた河川堆積層(基本土層の9層)下で検出された。9層は低地部分で11cm程の厚みをもって堆積しているためか、全体に水田面の残存状態は良好であり、区画も北側を除いて確認することができた。しかし、アゼはかなり偏平で最も比高差のある部分で5cmを測るが、殆どは1cm前後と非常に低く検出は困難であった。

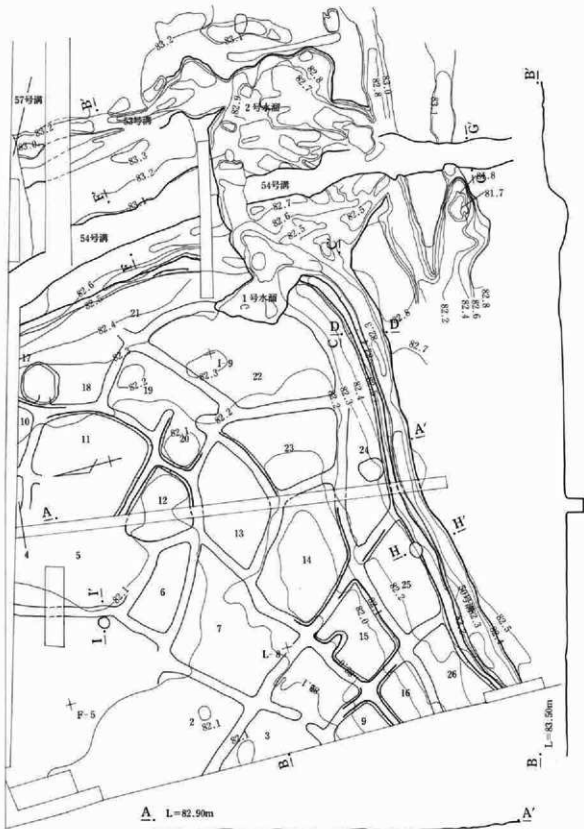
水田域は、旧流路が東から西に蛇行した部分の南半にあたり、微細な凹凸が多いうえに谷地縁辺は急傾斜である。なかでも、旧流路が縁辺に沿って流れていた南側は、旧流路が凹みとして残っている関係で中央より標高が低く、等高線も狭く平行に走向している。アゼは等高線に平行と直交するように設けているため、区画の形状や区画積は一定していない。但し、流路跡が残る南西部分は、その地形の関係から平行四辺形の区画となっている。水田区画の面積は、地形の複雑さに影響されて非常にばらつきがある。

取水路は縁辺のアゼに沿って流れる50号溝が位置的に最適と考えられ、流水の痕跡が確認されると共に24、25区画には水口が存在する。50号溝の北、谷地の南西隅は溝が幅を増し、水溜状(1号水溜)を呈している。1号水溜の北では6m程水路(51号溝)が確認されたが、それ以北は検出されなかった。配水に関しては、水口が24、25区画に、尻水口が19区画と20区画の間、8区画と3区画の間に確認されたのみで不明瞭であるが、概ね縁辺部から北西の中央部にかけ流していたと推測される。調査区内に排水路は見当たらず、水田域は更に西に延びている。第3 氾濫水田は、第4 氾濫層とした10層を耕作土、同じく河川氾濫堆積物の10層を床土としているために水持ちは不良であったと考えられる。

水路関連遺構としては、50・51号溝と1号水溜以外に52・53号溝、2号水溜があるが、両者に重複関係は認められないうえ、1・2号水溜を連結する53A号溝の存在からほぼ同時期と思われる。これは遺物の接合関係からも肯定される。51号溝の北半が不明瞭であることを重視すれば、これら複数の水路と水溜は同時に機能していたわけではなく、第3 氾濫水田存続中に51号溝→1号水溜→50号溝から53B・C号溝→2号水溜→53号溝若しくは、53B・C号溝→2号水溜→52号溝→1号水溜、50号溝への水路変更があったとも考えられる。

54号溝は、上記の遺構や第3 氾濫水田より古く、埋土最下層に砂が認められるのみでほとんどはロームや灰褐色土で埋設していた。

水田に伴う遺物は認められなかったが、検出時に出土した土師器杯小片2点(3H水田-1・2)を图示した。しかし、この2点の遺物は水路関連遺構出土遺物と年代差が認められるうえに、第3 氾濫層下水田出土遺物に下層との接合関係が認められる。したがって、これらは第4 氾濫層下水田に伴う遺物が耕作によって浮き上がったものであろう。54号溝の下、F-10～M-10グリッドにかけて56号溝が確認され、走向方向も54号溝に一致している。溝の性格は不明であるが、時期的には下層の73号溝、3・4号水溜とほぼ同時期と考えられる。



第141図 1区第3 氾濫層下水田

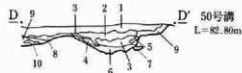
0 1 : 200 6 m

第5章 検出された遺構と遺物



1区50号溝 (C-C') 土層注記

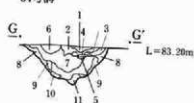
- 1 灰黒色シルト層 黒色シルトと黄灰色シルトの互層。
- 2 灰褐色土層 ローム粒と砂粒を含む。
- 3 黒褐色土と2層、砂層のラミナ状堆積。
- 4 灰色砂層 ラミナ状堆積。ロームブロックとローム粒を多量に含む。第3氾濫層。
- 5 灰白色シルト層。
- 6 4層と同様であるが、ややロームブロックを多く含む。
- 7 灰白色シルトと灰黒褐色シルトのラミナ状堆積層
- 8 4層と7層の混土層
- 9 4層と同様であるが、ロームブロックが大型で量も多い。
- 10 4層と7層のブロック状混土層 4層をやや多く含む。



1区50号溝 (D-D') 土層注記

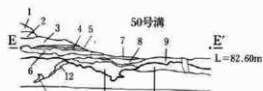
- 1 第2氾濫層と第2氾濫水田耕作上の混土層
- 2 灰色砂層 ラミナ堆積。ロームブロックとローム粒を多量に含む。第3氾濫層。
- 3 灰黒褐色粘土と灰色シルトのラミナ状堆積層
- 4 灰黒褐色粘土と灰色シルトのラミナ状堆積層 黒褐色土を含む。
- 5 灰色砂層 ラミナ堆積。ロームブロックとローム粒を多量に含む。
- 6 灰色砂層 ラミナ堆積。5層に比してロームブロックが大型で量も多い。
- 7 灰色砂層 ラミナ堆積。ローム粒とロームブロックを多量に含む。
- 8 灰黒褐色シルトと灰白色シルトのラミナ状互層 黒褐色土を含む。
- 9 4層と灰白色シルトの混土層
- 10 灰白色シルト層

54号溝



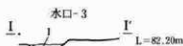
1区54号溝 (G-G') 土層注記

- 1 灰褐色土層
- 2 灰白色シルト層
- 3 灰褐色土層
- 4 微砂層 ローム粒を多量に含む。
- 5 灰色シルト層
- 6 灰褐色土層 硬質で黒味が強い。
- 7 灰褐色土層
- 8 灰黄褐色土層 ローム粒を多量に含む。
- 9 ロームブロック
- 10 砂層
- 11 8層とローム層の混土層 砂を少量含む。



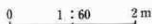
1区50号溝 (E-E') 土層注記

- 1 現在の耕作土層
- 2 黄褐色土層 砂を含む。鉄線層
- 3 灰褐色砂礫土層
- 4 As-B層 若干灰が軽石と混ざっている。
- 5 黒褐色土層 As-B下水田耕作土層
- 6 灰褐色土層 砂を多量に含む。
- 7 灰色シルト層 砂を多量に含む。
- 8 ロームと灰色シルトの粒状混土層
- 9 灰黒褐色土層
- 10 灰黒褐色土層 ローム粒を多量に含む。中に砂をラミナ状に含む。底面に小円礫を含む。
- 11 灰褐色土層 砂を多量に含む。
- 12 灰色シルト層
- 13 灰色シルト層 木根によるものか?



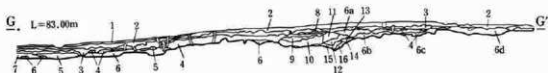
- 1区第3氾濫水田水口3
1 黄灰褐色土層

- 1区第3氾濫水田水口2
1 砂層 粗砂を含む。



第142図 1区50・54号溝断面図、
第3氾濫層下水田水口断面図

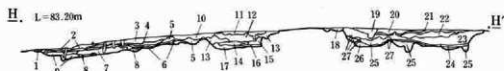
第5章 検出された遺構と遺物



1区1・2号水堀 (G-G') 土層注記

- 1 黒色粘質土層 As-B 下水田耕作土。
- 2 灰黒色シルト層 粘性がある。黒色土と黄灰色土の互層を呈し、3層をブロック状に含む。
- 3 黄灰色シルト層 砂を含む。第2記層層。
- 4 灰褐色土層 ローム粒と砂粒を少量含む。
- 5 灰色砂層 ラミナ堆積。ロームブロックとローム粒を多量に含む。第3記層層。
- 6 灰白色シルトと灰黒褐色シルトのラミナ状互層 部分的に混ざる。第3記層層。
- 6a 灰褐色シルトと黒褐色土のブロック状混土層 砂とローム粒を含む。第3記層層。
- 6b 灰褐色シルト層 砂を含む。第3記層層。
- 6c 灰褐色シルト層 砂、ローム粒、ロームブロックを多量に含む。

- 第3記層層。
- 6d 灰色粗砂層 ラミナ堆積。第3記層層。
- 7 5層と6層のブロック状混土層 5層がやや多い。
- 8 黄白色砂礫土層 砂を含む。ロームの2次堆積。
- 9 淡黄色砂礫土層 ロームの2次堆積。54号溝。
- 10 黒褐色土層 ローム粒、軽石粒、炭化物粒を含む。54号溝。
- 11 灰黒褐色土層 軽石粒と砂を含む。54号溝。
- 12 黒褐色土層 ローム粒と砂を多量に含む。54号溝。
- 13 淡黄色砂礫土層 ロームの2次堆積。54号溝。
- 14 黄褐色シルト層 54号溝。
- 15 黒色土層 ローム粒を多量に含む。54号溝。
- 16 14・15層の混土層 54号溝。



1・2号水堀 (H-H') 土層注記

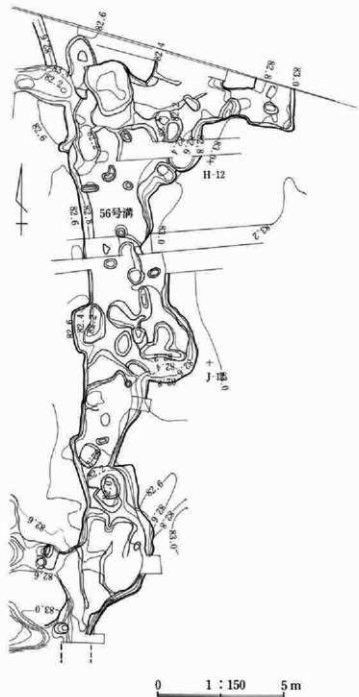
- 1 第3記層層下水田耕作土と2層の混土層
- 2 粗砂層 ラミナ堆積。ローム粒を多量に含む。
- 3 黒灰色粘土と灰白色シルトのラミナ状互層
- 4 2層に近似する。
- 5 3層に近似する。
- 6 2層に近似するが、ロームブロックを多く含む。
- 7 3層に近似する。
- 8 2層、3層、ローム粒の混土層
- 9 6層に近似する。
- 10 灰褐色土層 ローム粒と砂粒を少量含む。
- 11 ロームと灰褐色土の混土層 砂を含む。
- 12 灰褐色土層 砂、Hr-FA、As-Cを多量に含む。
- 13 灰褐色土層 砂、Hr-FA、As-C、ロームブロックを多量に含む。
- 14 灰黒褐色土層 砂を含む。
- 15 ロームブロック
- 16 黒色粘質土層
- 17 粗砂層 14層を多量に含む。粗砂はラミナ堆積。
- 18 灰褐色土層 ロームブロックと砂を含む。
- 19 粗砂層 ラミナ堆積。
- 20 灰褐色シルト層 砂をラミナ状に含む。
- 21 灰褐色シルト層 20層に比して微細。
- 22 粗砂層 ラミナ堆積。ロームブロックを多量に含む。
- 23 ローム粒を多量に含む粗砂層と灰褐色シルトのラミナ状互層
- 24 21層と近似する。
- 25 22層と近似するが、ロームの量が多く砂も粗い。
- 26 黄灰色土層 ローム粒と粗砂を多量に含む。
- 27 ロームブロック

0 1 : 100 3m

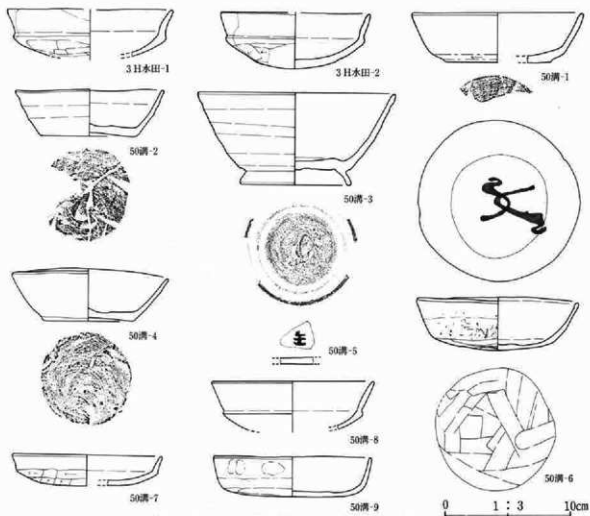
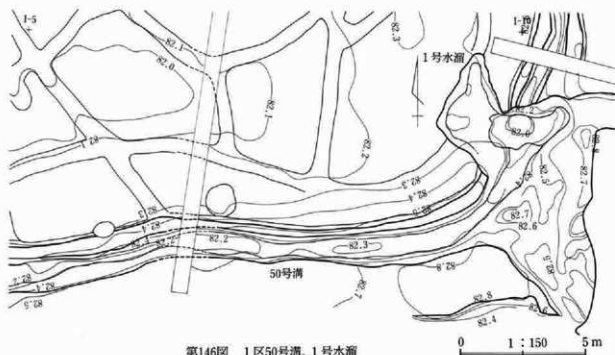
第144図 1区1・2号水堀断面図

1区56号溝 (第145・151図、PL-73)

1区水田域東側を25mにわたって南北に延びる溝で、幅、断面形状は一定していない。埋土底面や埋土中には、砂のラミナ状堆積やシルトの堆積が認められるとともにウォータールールや壁のオーバーハングがあるなど相当量の水流が想定され、灌漑用水としての機能が考えられる。本溝の走向は、形状が一定しないものの直線的であり、南側は攪乱や他の溝で確認できないが調査区を横切ってさらに南に延びている。溝の時期は、出土遺物から3号溜井や1号祭祀と同時期と考えられるが、第4区治水水田と同時期か否かは確認できない。本溝は、1区台地部に存在する溝の中で最も古い時期に属する。

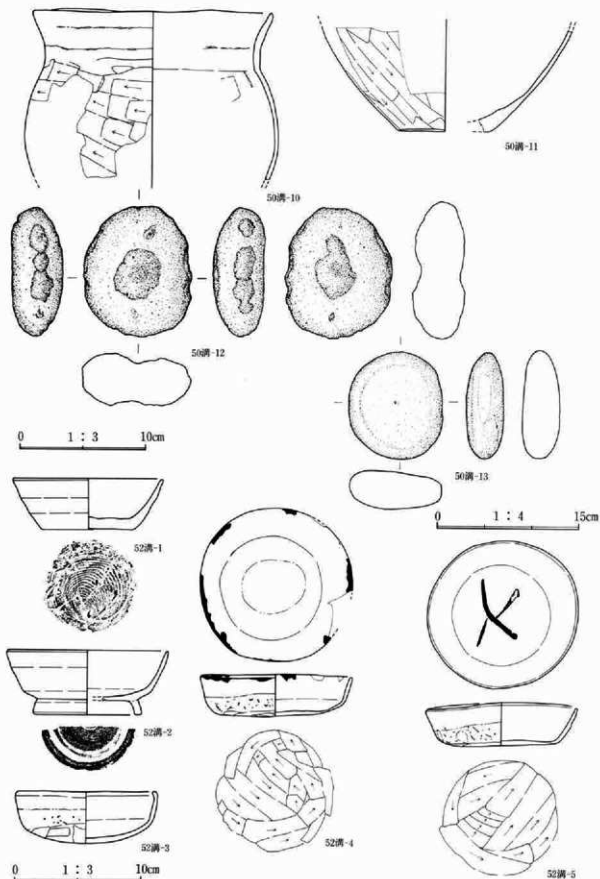


第145図 1区56号溝

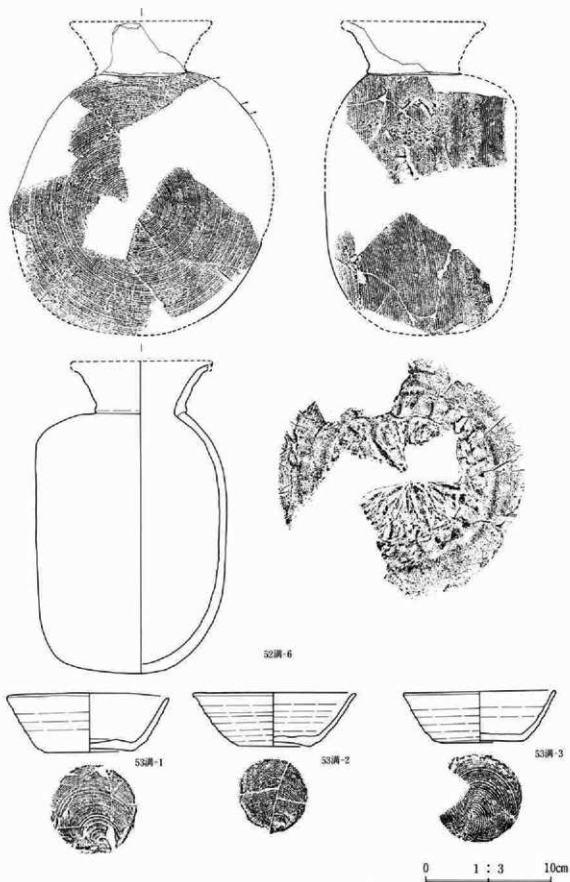


第147図 1区第3号泥層下水田溝出土遺物(1)

第2節 1区(西側)低地で検出された遺構と遺物

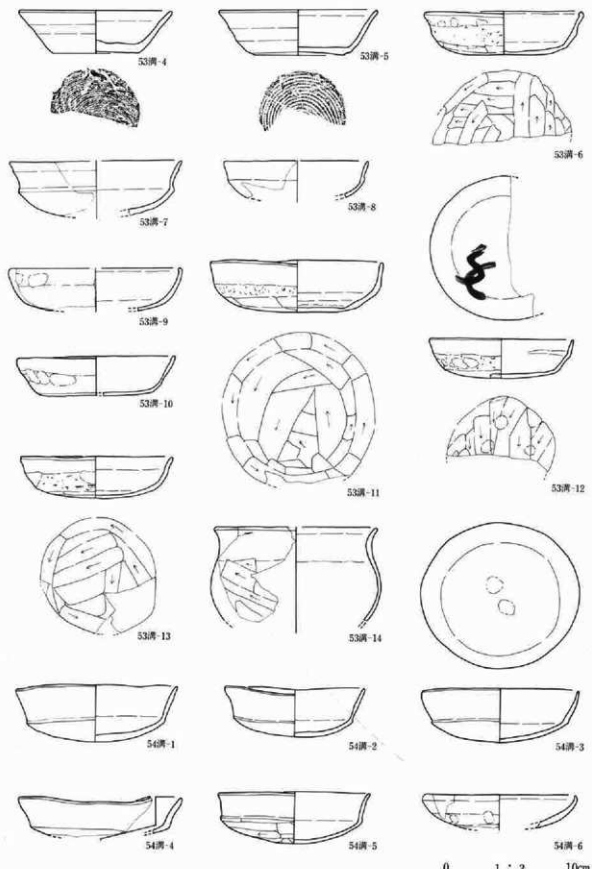


第148図 1区第3区3層下水田溝出土遺物(2)

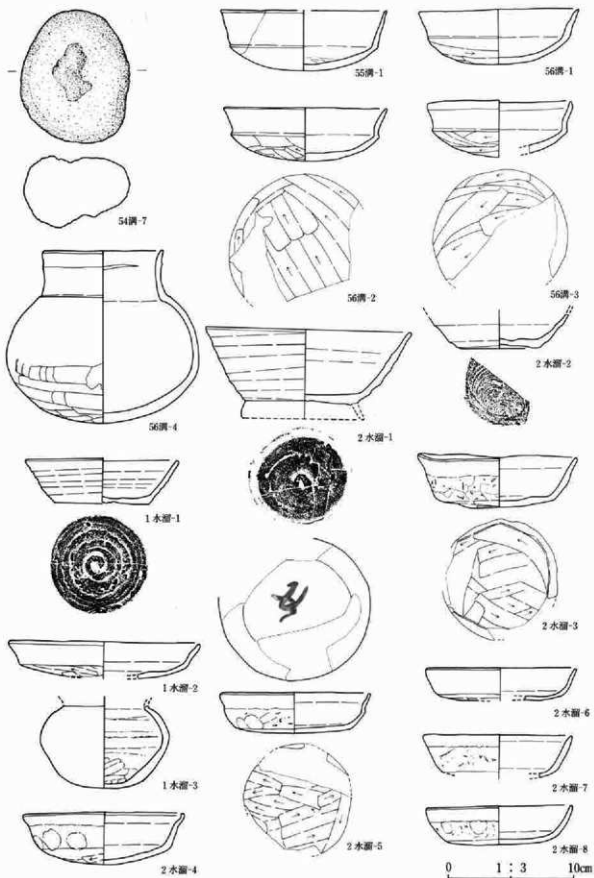


第149図 1区第3 泥濘層下水田溝出土遺物(3)

第2節 1区（西側）低地で検出された遺構と遺物



第150図 1区第3 沓蓋層下水田溝出土遺物（4）



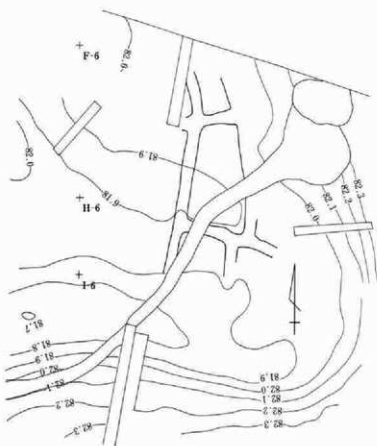
第151図 1区第3 泥濘層下水田溝出土遺物 (5)

第4 氾濫層下水田(第152図、PL-28)

黒褐色土である11層は、水田耕作土と判断されたが上面においてアゼは検出されなかった。しかし、本層を若干削ったところで東縁辺部にアゼの痕跡を確認することができた。(プラント・オパール分析では、11層上部において多量にイネのプラント・オパールが出現し、本層上面を水田面としていたことが裏付けられている。自然科学・分析編参照) 検出されたのが一部であり全体の区画規模や形状は不明であるが、検出部分に限ればアゼの走向や区画は直線的で区画は台形を呈している。なお、区画が変形すると考えられる南東部分の痕跡は検出できなかった。

取配水は、水路と水口が確認できないため不明であるが、水田面の地形がほぼ同じであることから、基本的に上層の第3 氾濫水田と同じと考えられる。耕作土にはAs-Cが含まれているうえに直下がAs-C層であることから漏水の多い水田であったと考えられる。

後述する1号祭祀、73号溝、3号溜井は、断面観察の結果本水田より古いと判断されたが、1号祭祀、3号水溜などの遺物が上層から確認されはじめたために調査順は逆となっている。



第152図 1区第4 氾濫層下水田

0 1 : 200 6 m

1号祭祀 (第153~161・164~172図、PL-28・74~83)

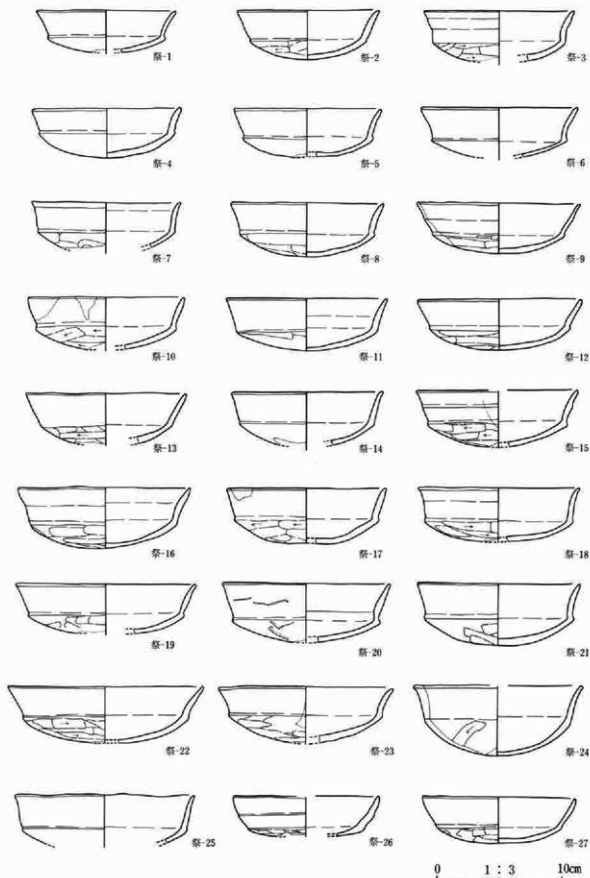
1区低地部の第3 氾濫水田調査終了後、第4 氾濫水田を検出すべく徐々に10層を下げて行く途中で掘り込みが確認されない状態で土師器杯を中心とした遺物がG-8・9、H-8・9グリッド内に集中して検出された。調査時にはこの土器の集中箇所を「1号祭祀」と命名し遺物分布図を作成しつつ遺物の取り上げを行った。その後、遺物分布より多少北にずれた位置に3号溜井と溜井から流れ出る73号溝が確認され、両者の平面形が確認された時点から両遺構出土として遺物の取り上げを行った。しかし、溜井や溝、水田は本来土器を使用する場所でないこと、溜井と溝に砂礫が堆積した後に土器が廃棄されていること、当初1号祭祀として扱った部分は谷地縁辺の高い部分であったことなどの理由により遺物群をここで説明し、遺構のみを3号溜井、73号溝として説明する。水田との新旧関係は、第4 氾濫水田耕作土が祭祀とした土器包含層を覆っているのがセクションで確認され、祭祀が古いと考えられる。

遺物はすべて土器であり、祭祀遺構として取り上げた土師器は総数3,611点でその内訳は杯類2,908点、高杯2点、壺甕類(瓶含む)701点である。一方、須恵器は総数17点でその内訳は杯類8点、甕5点、壺1点、蓋3点である。報告書にはこれらのうちから口縁部が約4以上残っているものをおよその基準として遺物の選択を行ない、土師器のみ117点を掲載した。3号溜井の湧水部(北側の深い部分)から出土した土器は総数55点で、その内訳は土師器杯類121点、須恵器杯類3点、甕類3点である。これらのうち掲載したのは須恵器甕(3号溜井-52)1点のみである。3号溜井流出部(南側)出土土器は総数573点で、その内訳は土師器杯432点、壺甕類139点、須恵器壺1点、蓋1点である。これらのうち土師器杯49点、壺1点、甕1点を掲載した。また、73号溝内からは3号溜井付近を中心に土器509点が出土し、その内訳は土師器杯類452点、高杯1点、壺甕類56点である。これらのうち、掲載したのは土師器杯類25点、甕1点である。

これらの遺物群に対して調査時には遺物が集中して検出されたこと、出土遺物の主体が土師器杯であることなどを根拠に祭祀遺構と考えていた。しかし、遺物残存度が悪いうえに接合率も悪く掲載率は約4%にとどまっていること。掲載遺物についてのみ接合関係を確認(第153・164・165図)した結果、かなり離れた地点での接合が多く、この地点での祭祀行為はもとより、完形品をこの場所に廃棄したとも考え難い出土状態を示している。加えて、図示しなかった土器のうち、平面図に記載した456点について器種別分布図も作成したが器種毎の集中は認められなかった。このため、本遺構の名称は「祭祀」ではなく「土器溜」としたほうが適切とも考えられる。ただ、土器の器種構成が土師器杯に偏っていることや土師器杯の主体を占める黒色を呈するものと橙色を呈するものがほぼ同数であること、器表が橙色を呈する土師器は胎土と焼成の関係から器表と割れ口の摩滅が進行しているが黒色を呈する土師器杯片には摩滅が認められないことなど、何らかの「祭祀」か「儀礼」終了後打ち割った土器群を廃棄した可能性と上流部の至近距離に廃棄されたものが流下して留まった可能性が考えられる。また、出土位置に注目すれば、砂礫が堆積してその機能が停止した後に溜井部分に土器を廃棄していることから、溜井の機能停止に伴って土器を廃棄したとも考えられる。このように祭祀や儀礼との何らかの関連が想定されるため調査時の名称は変更せず使用した。

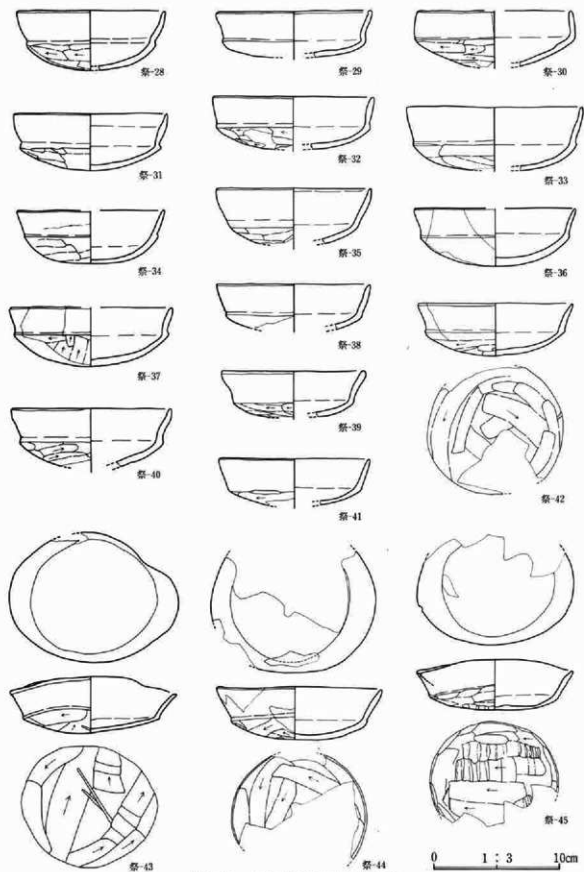
上記遺構の周辺、すなわち第4 氾濫層と第4 氾濫層下水田耕作土からも同一時期、同一胎土の土器が総計2,974点出土している。これらの遺物も土師器杯がほとんどを占めるなど祭祀と同一器種構成であり、分布も西半からは出土せず、東に集中することから祭祀関連の土器を多く含んでいると考えられる。第4 氾濫水田-24、29、35の土師器杯は、同様のものが祭祀関係遺物内に認められず、北側台地上に推定される古墳時代集落遺物が混入したものと解されよう。掲載した遺物は土師器杯類31点、鉢1点、皿類1点、壺甕類4点、須恵器杯1点、甕1点の計39点であるが、第4 氾濫水田-1の須恵器杯は上層遺物の混入である。

第5章 検出された遺構と遺物



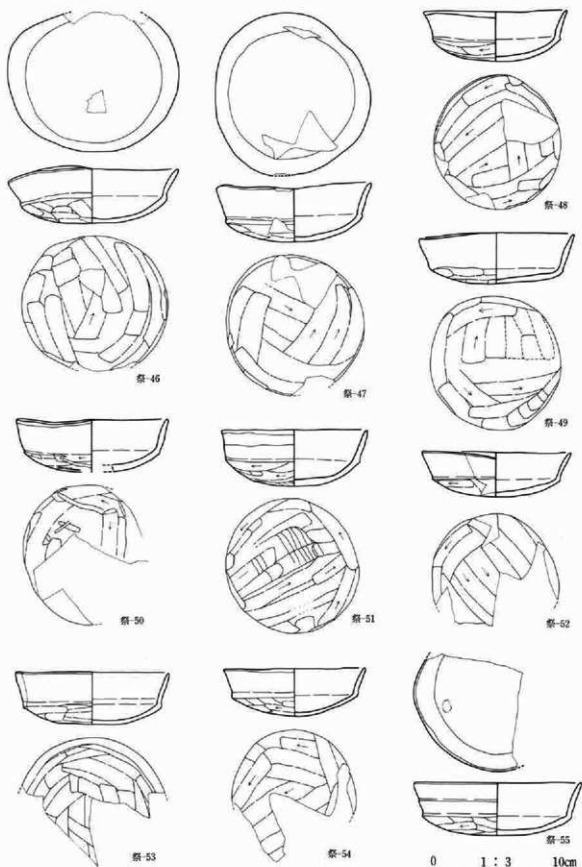
第154図 1区1号祭祀出土遺物(1)

第2節 1区(西側) 低地で検出された遺構と遺物

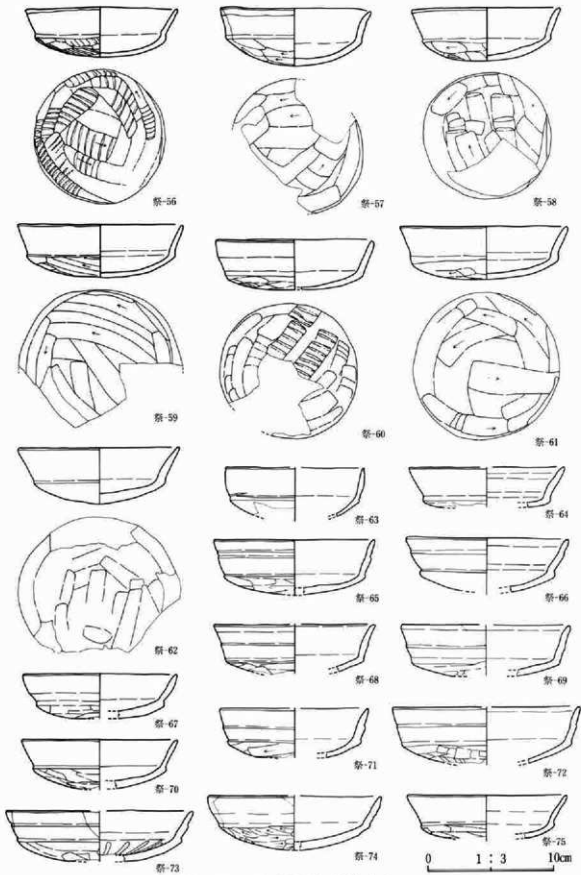


第155図 1区1号祭祀出土遺物(2)

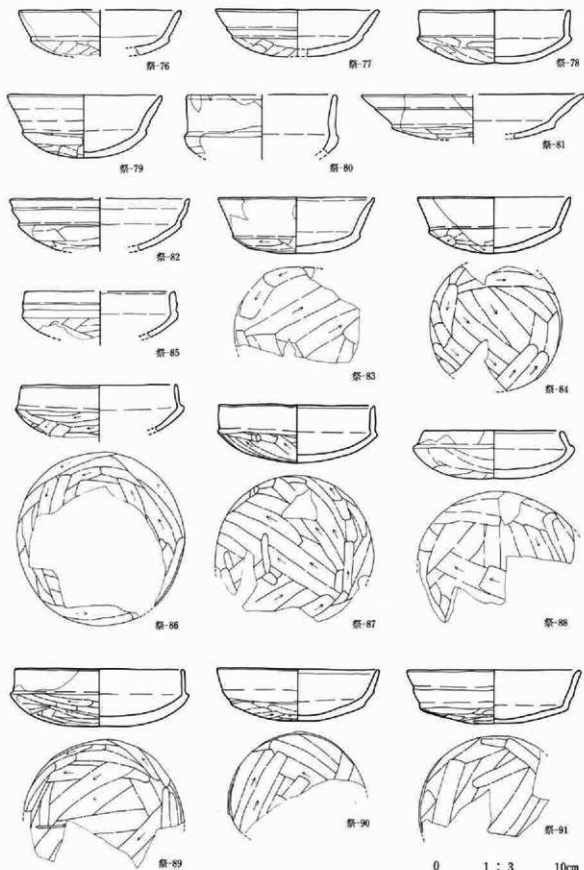
第5章 検出された遺構と遺物



第156図 1区1号祭祀出土遺物(3)

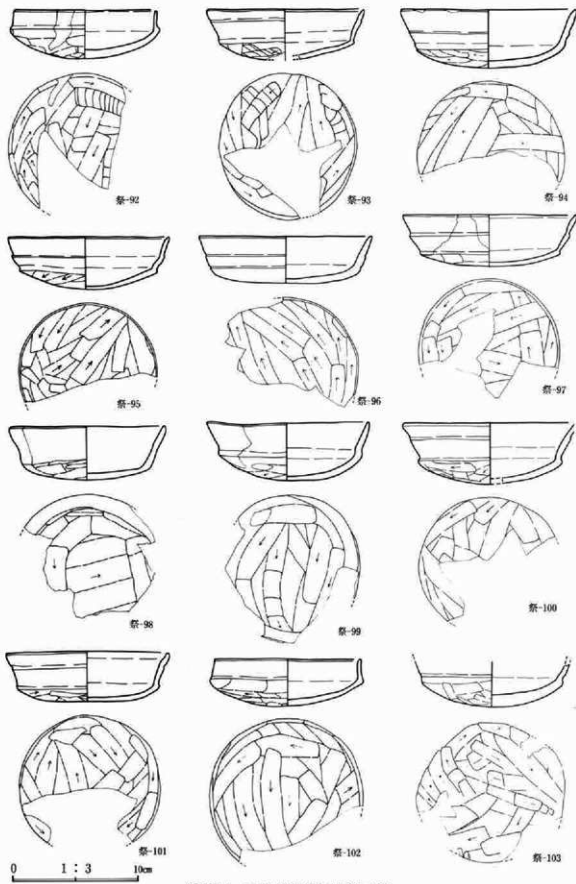


第157図 1区1号祭祀出土遺物(4)



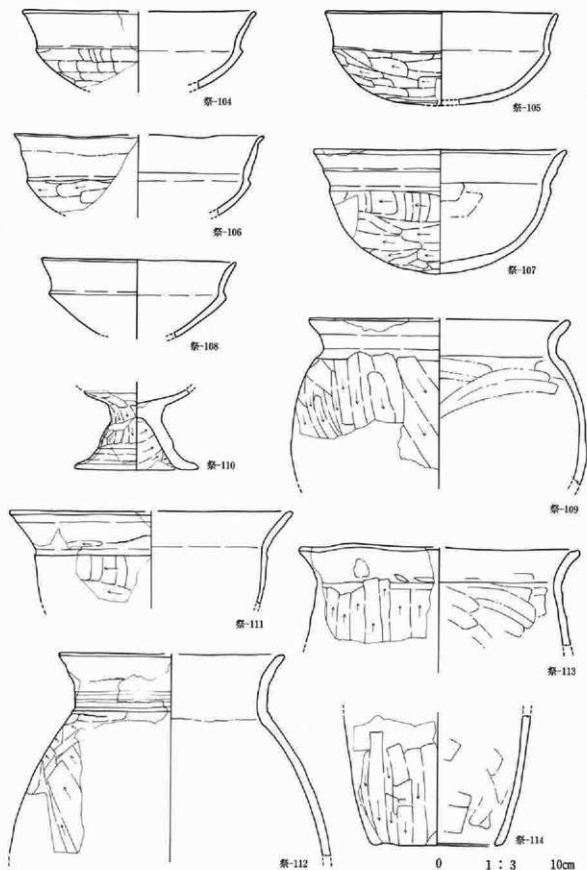
第158図 1区1号祭祀出土遺物(5)

第2節 1区（西側）低地で検出された遺構と遺物

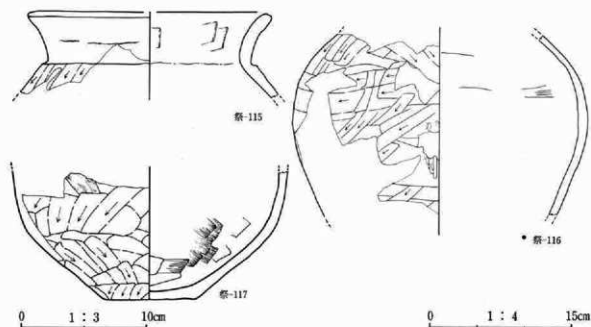


第159図 1区1号祭祀出土遺物（6）

第5章 検出された遺構と遺物



第160図 1区1号祭祀出土遺物(7)



第161図 1区1号祭祀出土遺物(8)

1区3号溜井、73号溝 (第164・165図、PL-28)

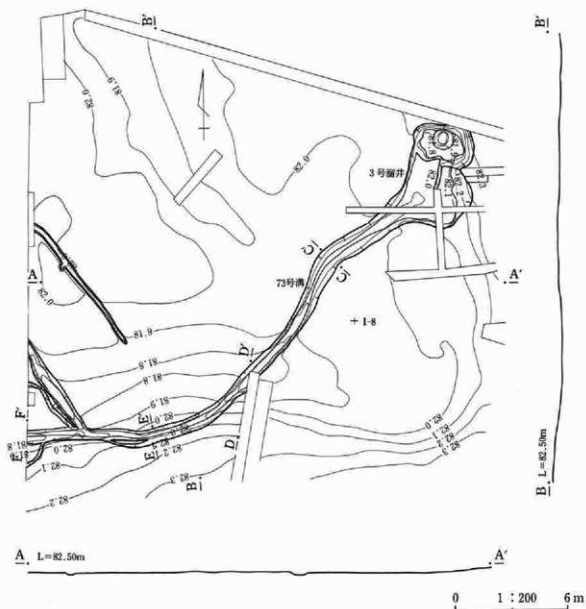
3号溜井は低地部北東隅の傾斜部分に位置し、北の一部は調査区外のため確認できない。調査時は北半分の深い部分を「3号水溜」、南の浅い部分を「4号水溜」としていたが、上流にあたる北側に溝が続かないこと、調査時に3号水溜としていた北側部分の中央にビット状の落ち込みがあること、台地から低地に至る傾斜地に位置することなどの理由から「溜井」と変更した。平面形は、涵水部が長軸3.4m、短軸1.8mの楕円形を呈し、深さは最も深い所が40cm、周辺の浅い所で約30cm、流出部は長軸3.68m、短軸3.36mの隅丸長方形を呈し、深さは12cmと浅くなっている。溜井の最下層には砂礫層が堆積しており、流水のあったことを示している。なお、後に述べるAs-C下水田耕作土内で検出された杭群は、水の流出しやすい西壁と南壁を保護するためのものであったと考えられる。

73号溝は3号溜井から流出する水路にあたり、谷地縁辺には沿わず北東から南西に僅かに蛇行して伸び、縁辺部に至って西に流れを変えている。規模は幅0.56m～1.12m、深さ20cm～50cm、長さ26mを測り、最下層には砂のラミナ状堆積が認められ、流水のあったことが伺える。溝の西側は、合流するようになっているが重複関係は不明である。

調査時の断面観察によると、3号溜井周辺部で第4氾濫水田耕作土が上に乗っていることが確認されたこと、73号溝の断面観察ではHr-FAより新しいことが確認されている。また、1号祭祀との関係から虎葉は1号祭祀直前と考えられ、時期的な隔たりはほとんどないものとされよう。

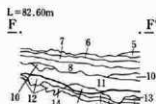
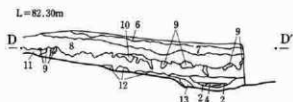
本溜井から延びる水路は、先に述べた水田や後述するAs-C下水田の域を横切って走行しており、水の供給先は、より下流の水田であったと考えられる。また、溜井が機能した時期に調査区内が水田化されていたか否かは不明である。

遺物は出土しているが、出土状態については祭祀の項で述べた。



第162図 1区3号掘井、73号溝

第2節 1区(西側)低地で検出された遺構と遺物

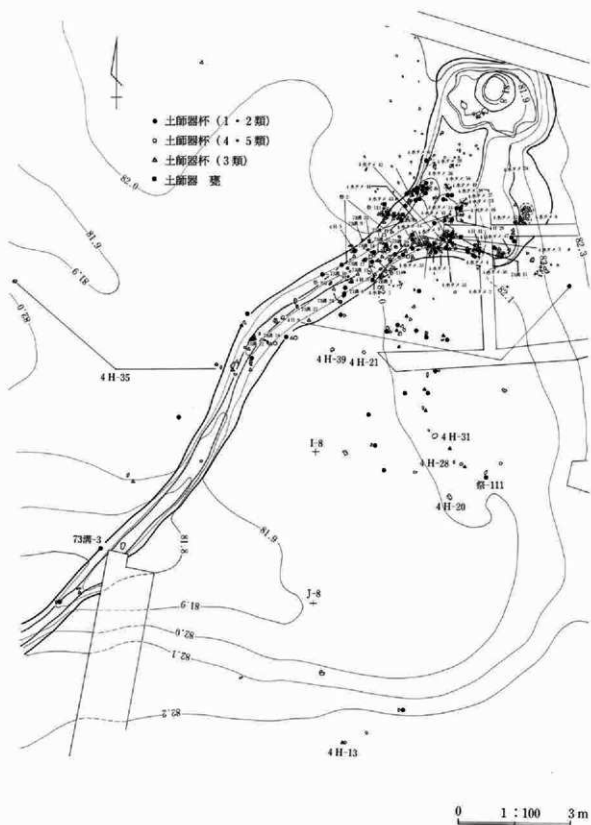


第4紀層地下水田内73号溝土層注記

- 1 黒褐色粘質土層 軽石とローム粒を含む。
- 2 黒褐色粘質土層 シルトを多量に含む。
- 3 黒褐色粘質土層 軽石と砂を少量含む。
- 4 砂層 ラミナ堆積。
- 5 As-B層 上部にいわゆるベンクアッシュを伴う。
- 6 黒色粘質土層 As-B 下水田耕作土相当。
- 7 灰黄褐色粘質シルト質土層 第2紀層。
- 8 灰黄褐色粘質シルト質土層 第3紀層。8層に比してやや黒味を帯びる。
- 9 微砂層 第3紀層に伴う砂。
- 10 9・10・12層の混土層
- 11 黒褐色粘質土層 軽石と砂を少量含む。第4紀層相当。
- 12 黒褐色粘質土層 Hr-FA を少量含む。
- 13 黒色粘質土層
- 14 As-C層

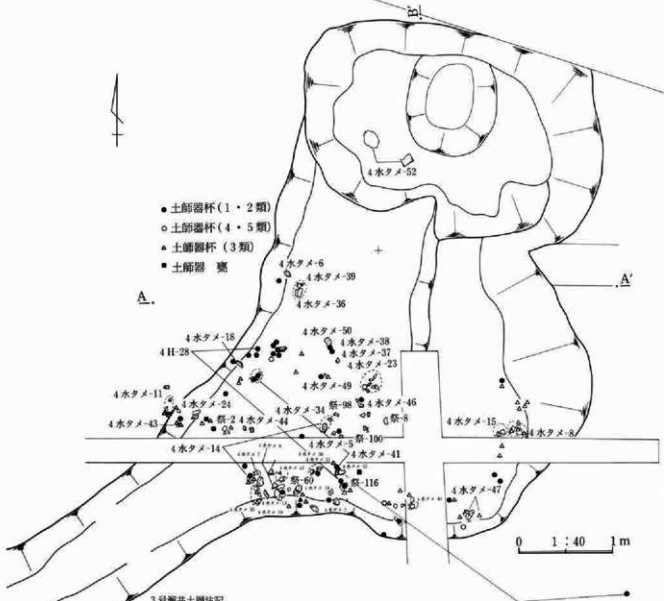
0 1 : 60 2 m

第163図 1区73号溝断面図



第164図 1区3号溜井、73号溝、第4区灌漑下水田遺物分布図

第2節 1区(西側)低地で検出された遺構と遺物



- 土師器杯 (1・2類)
- 土師器杯 (4・5類)
- ▲ 土師器杯 (3類)
- 土師器 壺

A.

A'

0 1:40 1m

3号掘井土層注記

- 1 灰褐色土層 Hr-FA、As-Cを多量に含む。
第4区掘井水田耕作土。
- 2 黒褐色土層
- 3 黒褐色粘質シルト層 Hr-FA、As-Cを少量含む。
- 4 灰褐色土層 As-Cを含む。
- 5 黒褐色粘質土層 As-Cを含む。
- 6 灰褐色土と砂礫層の混土層 直径5~8cmの円礫が主体。

B.

- 7 砂礫層 直径5~8cmの円礫が主体。
- 8 黄褐色粘質土と黒褐色土、砂の混土層
- 9 砂礫層
- 10 黄褐色粘質土層 砂を少量含む。
- 11 灰黒褐色シルト層 砂を含む。

L=82.50m

A. ロームブロック



L=82.50m

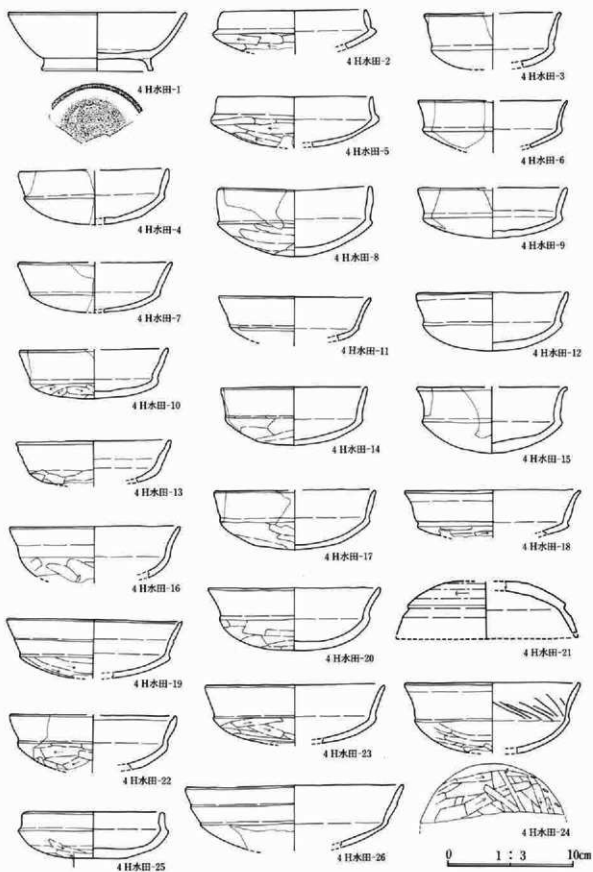
B. ロームブロック



第165図 1区3号掘井

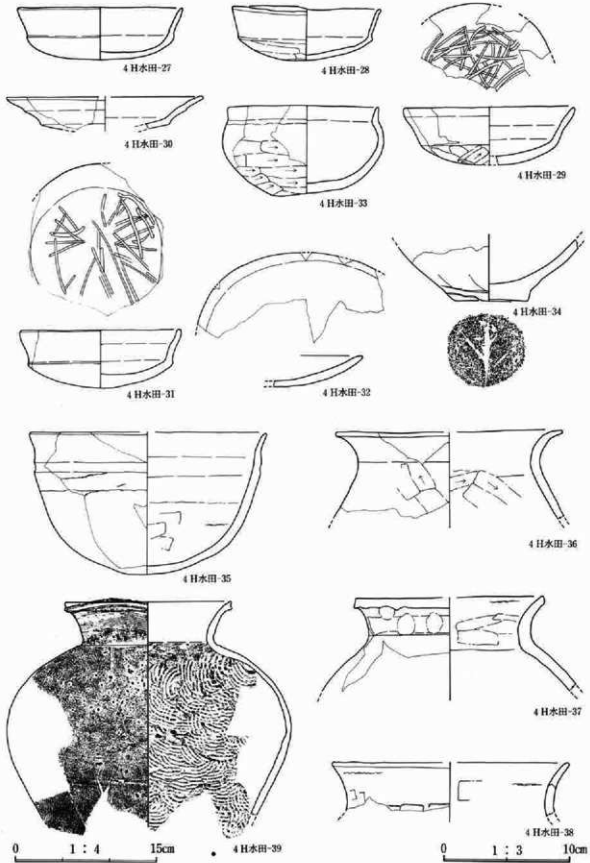
0 1:60 2m

第5章 検出された遺構と遺物



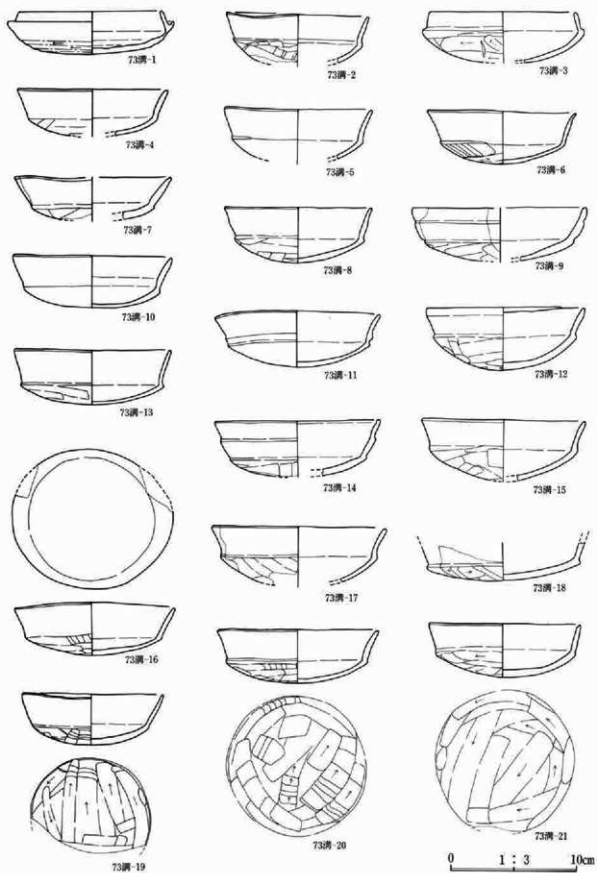
第166図 1区第4 泥濘層下水田出土遺物 (1)

第2節 1区(西側)低地で検出された遺構と遺物



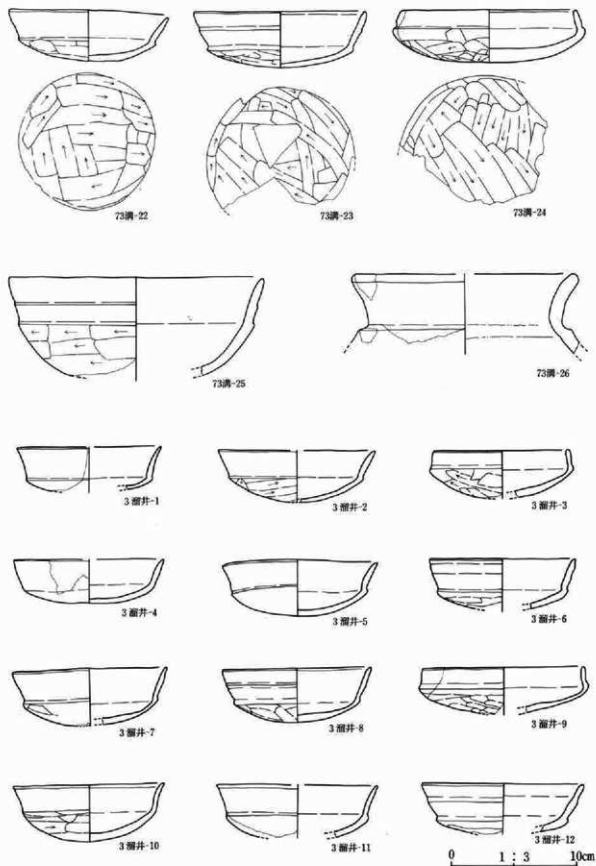
第167図 1区第4 泥濘層下水田出土遺物(2)

第5章 検出された遺構と遺物



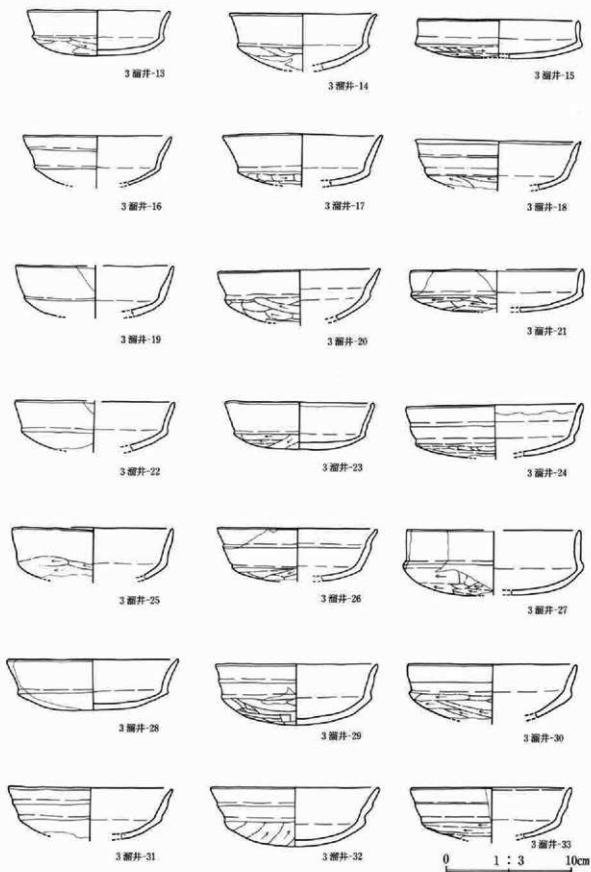
第168図 1区73号清出土遺物(1)

第2節 1区(西側)低地で検出された遺構と遺物



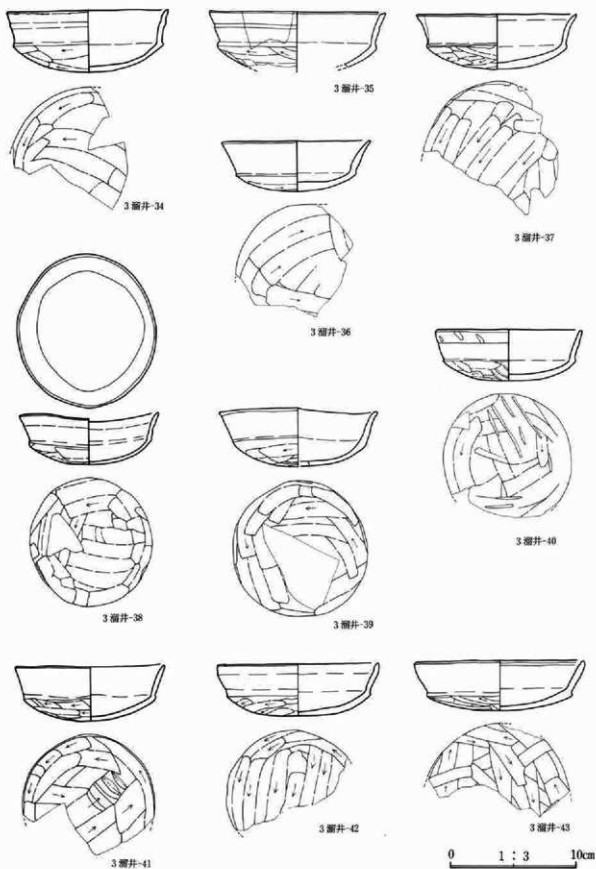
第169図 1区73号溝出土遺物(2)、3号瀬井出土遺物(1)

第5章 検出された遺構と遺物



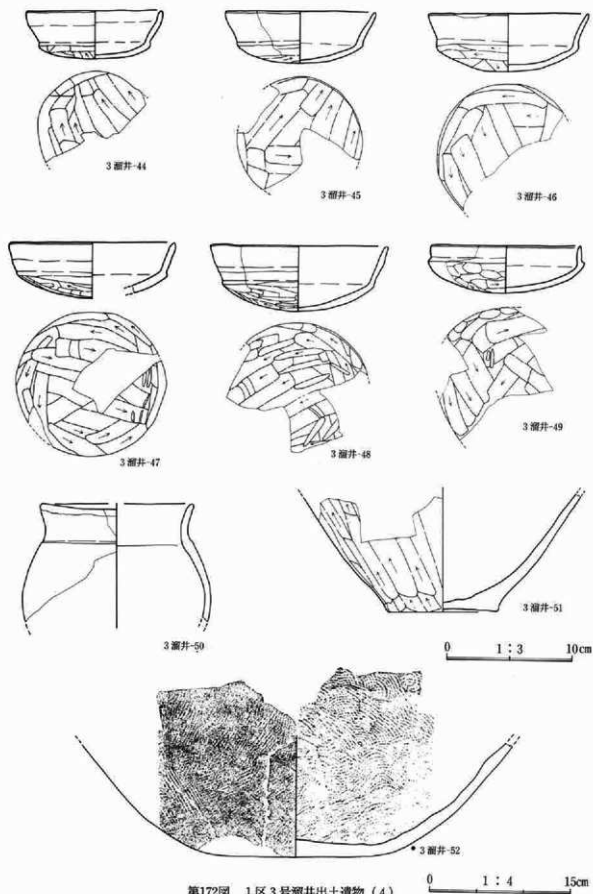
第170図 1区3号瀬井出土遺物(2)

第2節 1区(西側)低地で検出された遺構と遺物



第171図 1区3号福井出土遺物(3)

第5章 検出された遺構と遺物



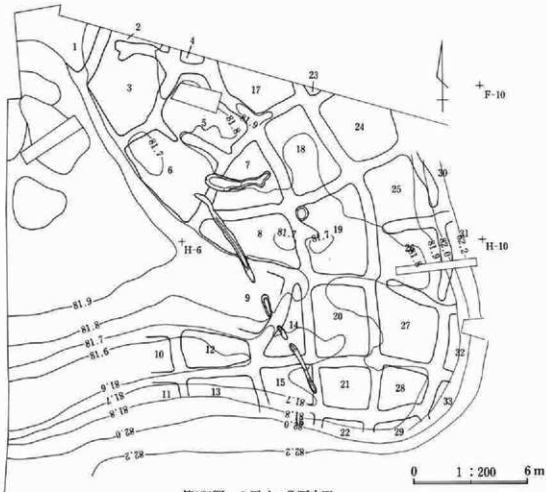
第172図 1区3号瀬井出土遺物(4)

1区 As-C 下水田(第173図, PL-29)

1区で検出された最も古い水田であり、約2cmのAs-C層に覆われていた。水田の残存状況は、1区の水田の中では最も良好で、水口も5カ所で確認されている。しかし、西側中央の高い部分と南西の旧流路部分のアゼは検出されていない。低地部は耕作土下に存在する旧流路の影響により、北側中央から南西と南側縁辺が溝状にくぼんでいる。この旧流路の痕跡は、北側はなだらかだが南側は急傾斜となっている。このため、水田区画のうち北に位置する区画は幅が広く、南に位置する区画は狭い区画となり、両者の変換点の区画(第20・21区画)は正方形を呈している。区画の面積も北側が広いのに対し南側が狭く、面積的にも地形による差異が生じている。アゼの走向は、北側の傾斜が緩いために僅かに湾曲するのみで比較的直線的である。また、南側は旧流路に沿って設けていることから直線的となっている。

取配水関係では、水路は後の溝群に破壊されてしまったため検出されないが、水口と考えられるアゼの途切れた部分が6カ所確認されている。30区画と25区画、31区画と26区画間の水口は、台地縁辺に存在したと推定される水路から取り入れた水を25・26区画に流し、25区画と26区画、26区画と27区画間の水口は、取り入れられた水を26区画→27区画へと下流に配水するための戻水口と解される。しかし、より下流側の区画で水口を検出することはできなかった。耕作土は粘性のある黒色土を使用し、上層で検出された水田に比して保水性は高かったと考えられる。

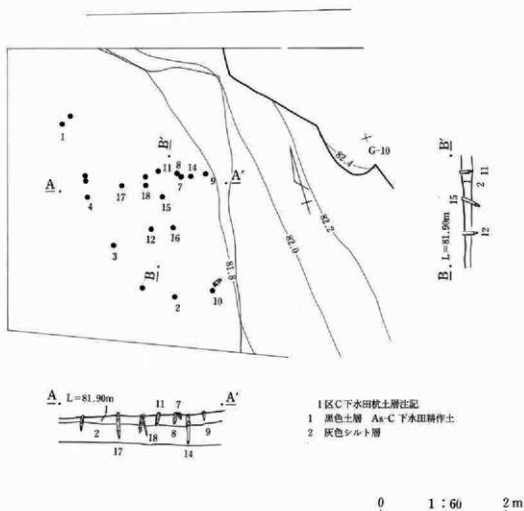
出土遺物は認められなかった。



第173図 1区 As-C 下水田

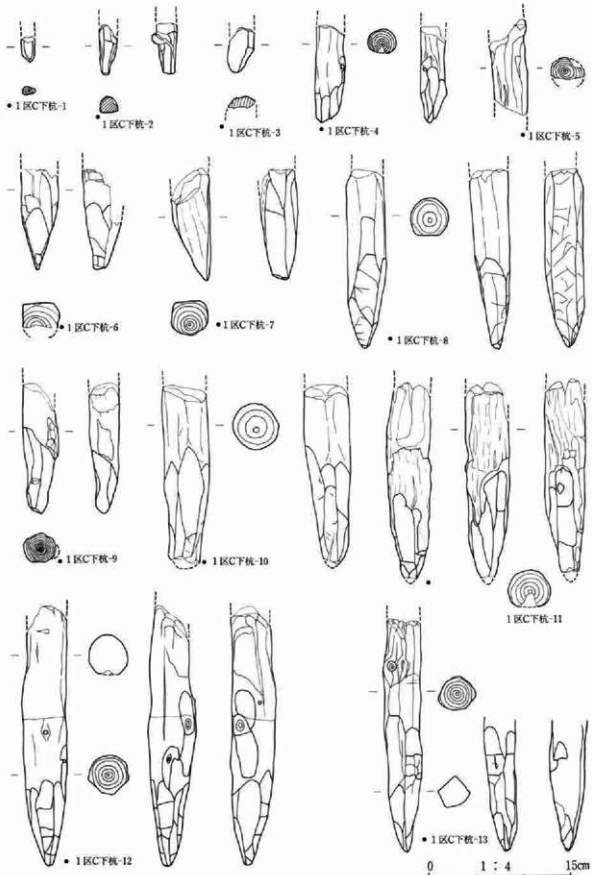
1区As-C下水田耕作土内杭群 (第174~176図、PL-30・83・84)

As-C下水田調査後、1区北東隅のF・G-9グリッド周辺の耕作土内で杭が21本検出された。杭の位置はAs-C下水田のアゼと区画内にまたがっていることから水田に伴う杭ではないと考えられる。しかも杭は規則性をもって並んでいないため、より上層の水田に伴うとも考え難い。また、杭が細いことから大きな構造物ではなかったようである。時期的には全く不明であるが、杭の多くがAs-C下水田耕作土内で先端が終わっていること、杭先端の加工が細かく、多面にわたっていることなどから、より上層から打ち込まれたものと考えられる。以上の理由からこの杭群は、3号溜井に伴う可能性が出てくる。そこで杭の分布を3号溜井と重ねてみると、杭の集中する部分が溜井涵水部分の西壁と南壁に、南の散在する部分が流出部と一致する。したがって、本杭群は、3号溜井に伴うものが地下水位の関係でAs-C下水田より上層が腐化したものと判断されよう。そして、杭群は水の流出しやすい西壁と南壁の補強・保護を目的として打ち込まれたのであろう。出土した21本の杭のうち図示し得たのは19本である。図示した中には遺存が悪く、整理作業時に形を留めておらず出土状態実測図と長さの異なるものもある。また、17~19の3本は、取り上げ後乾燥させてしまったために変形している。

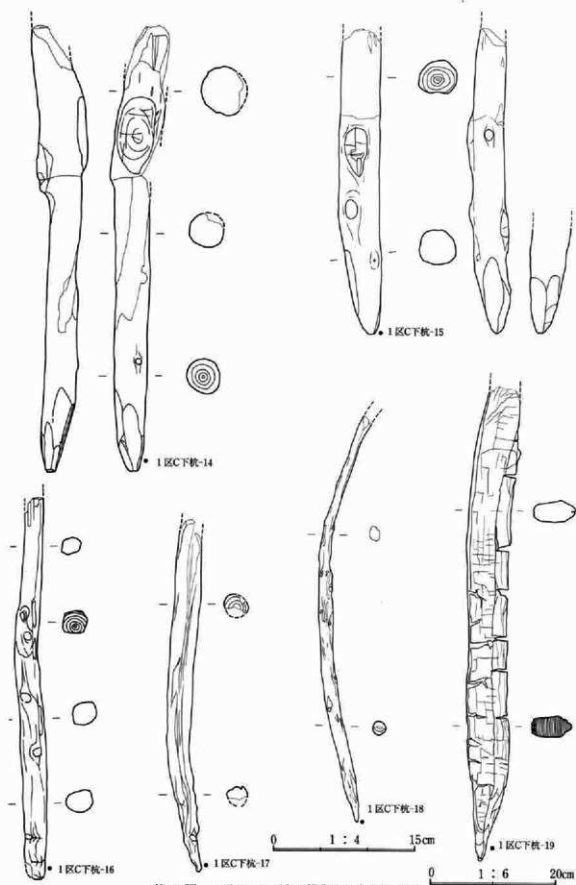


第174図 1区As-C下水田耕作土下杭群

第2節 1区(西側)低地で検出された遺構と遺物



第175図 1区As-C下水田耕作土下出土杭(1)



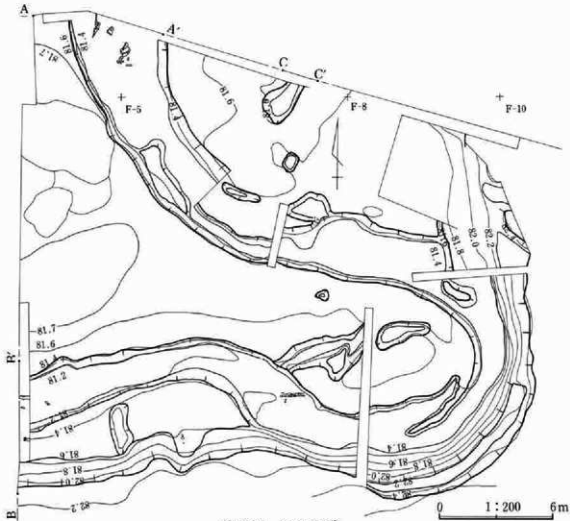
第176図 1区 As-C 下水田耕作土下出土杭 (2)

1区旧河道(第177・178図、PL-29)

旧河道は1区北西から南東、南西とヘアピンのように蛇行し、幅は1.2m~3.0m、低地側と底部との比高差は30cm前後、蛇行を含めた検出長は30mに及ぶ。河道としては深さ、幅共に規模が小さく、最もカーブのきつい南東部分においても台地縁辺の侵食がなく、底に礫も認められないことから水量はさほど多くなかったと推測される。また、埋土も砂とシルトで構成されていることも上記のことを裏付けている。出土遺物は埋土19層下部から縄文後期の土器が出土しているが、河道の地山にあたる20層にも縄文後期の土器が包含されており河道の時期は示さないが、下限は示すものと考えられる。また、地山の23層では加曾利E~堀之内式の土器と流木が検出されている。河道とその地山から出土した縄文土器のうち5点を図示したが、説明と実測図は「縄文時代の遺構と遺物」の項に記した。

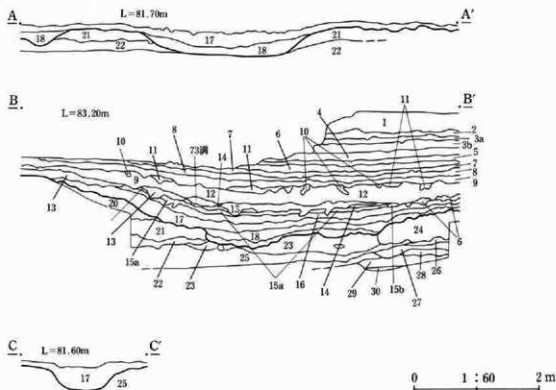
河道に挟まれた1区の西側は、低地部の中では最も標高が高く、3カ所の風倒木跡が重複して確認された。風倒木跡は、土層の観察からいずれも木が西に倒れたと判断され、その時期はAs-C下の黒色粘質土が流入していることからAs-C下水田以前と考えられる。3カ所は重複しているが、流入土にほとんど違いがなく近接した時期に生じたと推定される。

平面図に記した河道は、断面図より規模がやや大きめとなっているが、これは河道埋土と地山の区別が困難な部分があったことと、縄文土器が出土したために広げている部分があるためである。



第177図 1区旧河道

第5章 検出された遺構と遺物



1区旧河道土層注記

- | | |
|---|---|
| <p>1 褐灰色土層 砂を含む。現耕作土。
 2 褐灰色土層 砂を含む。
 3a 灰黄褐色土層 砂を含む。
 3b 灰黄褐色砂質土層 一部に砂層が認められる。
 4 灰黄褐色砂質土層 短鉄が認められる。
 5 黒褐色砂質土層
 6 As-B層 上部にいわゆるピンクアッシュを伴う。
 7 黒色粘質土層 As-B 下水田耕作土相当。
 8 灰黄褐色粘質シルト質土層 第2記層層。
 9 灰黄褐色粘質シルト質土層 第3記層層。8層に比してやや黒味を帯びる。
 10 微砂層 第3記層に伴う砂。
 11 9・10・12層の風土層
 12 黒褐色粘質土層 軽石と砂を少量含む。第4記層層相当。
 13 黒褐色粘質土層 Hr-FA を少量含む。
 14 黒色粘質土層
 15a As-C層</p> | <p>15b As-Cと黒褐色粘質土の風土層
 16 黒色粘質土層
 17 黒色粘質土層 灰色を帯びてやや軟質。
 18 17・21・24層の混土層
 19 18・23層の混土層 下部に縄文後期土層を包含する。
 20 黒褐色土層 縄文後期土層包含層。
 21 褐灰色シルト層
 22 褐灰色シルト層 直径1cmの流木を含む。
 23 22層と砂の互層 流木を含む。上面に加曾利E~層之内式器を含む。
 24 浅黄色シルト層
 25 砂礫層 ラミナ堆積。
 26 灰白色シルト層
 27 褐灰色シルト層
 28 褐灰色シルト層 22層と同様。
 29 28層と灰白色砂の互層
 30 砂礫層</p> |
|---|---|

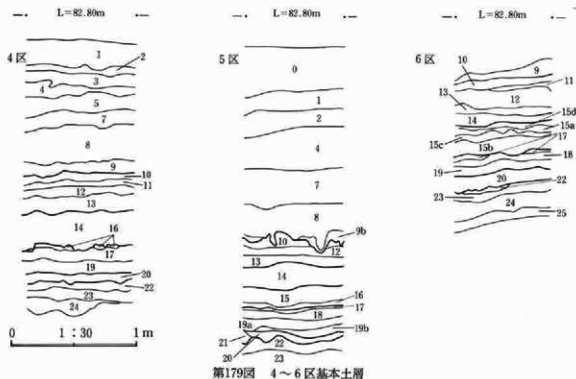
第178図 1区旧河道断面図

第3節 3～6区(東側谷地)で検出された遺構と遺物

3区～6区基本土層 (第179図)

3～6区は東側谷地部分にあたり、水路と農道を境に西から3・4・5・6区を設定した。3区は千足遺跡の台地(2区)に接する谷地縁辺部に、4・5区が谷地中央部、6区が宮下西遺跡の台地に接する谷地縁辺部である。谷地の分層は比較的容易であったが、調査区が水路と農道によって分析されているうえに同一層でも場所によって多少差異があるが、調査区相互の同一層位認定には火山噴出物を鍵層として行った。3区の基本土層実測地点は、台地に近いため谷地の基本土層としては不適切であり省略した。

調査区によって層の差異が認められるため注記は柱状図毎に付し、本文では遺構検出面について記す。9層はAs-Bの降下堆積層であり、部分的に上層にいわゆるピンクアッシュが認められる。3区～6区の9層下からは、遺存が悪いものの全面にわたって水田が検出された。As-B層下水田とHr-FA層との間は泥炭質の堆積層であるが、14層、15層、17層の上面において水田が検出された。水田は検出した順に上からHr-FA上第1水田、同第2水田、同第3水田とした。第1水田は5区東側と6区、第2水田は3～5区、第3水田は3区、5区、6区で検出されている。5区のHr-FA上第3水田の認定は、後に述べるように若干問題が残っている。水田以外では、6区15層のみに砂層(15c、d層)が認められ、多量の種子が含まれていた。種子の主体はウリ・ヒョウタン仲間であり、台地上での多量の存在を想定させる。16層はHr-FA層で、上層の水田耕作時にかなり踏み込まれているため部分的に残っているのみである。しかし、5区西側についてはHr-FA層(16層)が平面的に確認され、その直下からは水田を検出している。20層は多少汚れている部分が主体であるが、部分的に白色のAs-C純層(21層)が認められた。この白色の純層部分はアゼ状を呈しており、平面的に確認した結果、As-C層上の水田と判断した。その後、20・21層を除去した結果、これらに埋没した水田も検出され、3～6区で検出された水田は6面となった。6区ではAs-C下水田耕作土下から多量の自然木と加工木が出土した。



第5章 検出された遺構と遺物

4 区西壁土層注記

- 1 灰黄褐色土層 現在の耕作土。圃場整備時の盛土。
- 2 灰黄褐色土層 1層より粘性があり斑鉄が認められる。砂を含む。
- 3 灰黄褐色土層 斑鉄が若干認められる。砂を含む。
- 4 灰黄褐色土層 砂を含む。斑鉄が著しい。
- 5 灰黄褐色砂礫土層 植物根跡に鉄分が凝集する。
- 7 灰黄褐色砂礫土層 5層に比して黒味が強く、炭化物、焼土粒を少量、As-Bを多量に含む。
- 8 黒褐色砂礫土層 炭化物、焼土粒を少量、As-Bを多量に含む。
- 9 As-B層 上面にいわゆるピンクアッシュが認められる。
- 10 黒色粘質土層 As-B下水田耕作土。
- 11 黒褐色粘質土層 5区東側ではより泥炭質になっている。
- 12 黒色粘質土層
- 13 黒褐色粘質土層 横位の植物遺体を多量に含む。
- 14 黒色粘質土層 下手に Hr-FA を少量含む。
- 16 Hr-FA層 上面で Hr-FA 上第2水田を確認。
- 17 黒色粘質土層 植物遺体を少量含む。上面で Hr-FA 上第2水田を確認。
- 19 黒色粘質土層
- 20 As-Cと黒色粘質土層の混土層 上面で As-C 上水田を検出。
- 22 黒色粘質土層 As-C下水田耕作土。
- 23 黒色粘質土層 植物遺体を少量含む。東側では植物遺体を多量に含む。
- 24 黒色粘質土層

5 区北壁土層注記

- 0 圃場整備後の盛土。
- 1 灰黄褐色土層 現在の耕作土。圃場整備時の盛土。
- 2 灰黄褐色土層 1層より粘性があり斑鉄が認められる。砂を含む。
- 4 灰黄褐色土層 砂を含む。斑鉄が著しい。
- 7 灰黄褐色砂礫土層 5層に比して黒味が強く、炭化物、焼土粒を少量、As-Bを多量に含む。
- 8 黒褐色砂礫土層 (10YR2/2) 1mm以下の浅間系の軽石を多く含む。砂がレンズ状に多く入る部分がある。
- 9 b As-B層
- 10 黒色シルト質礫土層 (10YR1.7/1) As-B下水田耕作土。横位のアシ類は目立たないが、植物根遺体を多く含む。
- 12 黒色土層 (10YR1.7/1) 11層より横位のアシ類を多く (20~30%) 含む。
- 13 黒色土層 (10YR1.7/1) 土は少なく明褐色 (7.5YR5/6) を呈する横位植物遺体を断面積の約50%強含む。
- 14 黒色土層 (2.5YR2/1) 上面で Hr-FA 上第1水田を検出。他の土層に比して灰色味が強い。横位のアシ類は断面積の10%程と少ない。植物根遺体を多く含む。
- 15 黒色土層 (2.5YR2/1) 部分的に黒味が強い。横位のアシ類が主体を占める。植物遺体は明褐色 (7.5YR5/6) であるが、上層に比してやや黄色味を帯びる。Hr-FA のない部分又は堆積状態の悪い部分は、Hr-FA 上第2水田を検出。
- 16 Hr-FA層 植物根遺体を多く含むが、断面では目立たない。
- 17 黒色土層 (10YR1.7/1) 横位のアシ類を断面積の10%程含む。植物根遺体を多く含むが、断面で目立たない。Hr-FA 下水田耕作土。東半分では Hr-FA 上第3水田耕作土。
- 18 黒色土層 (10YR1.7/1) 横位のアシ類を断面積の10~25%程含む。部分的に50%を超える。

- 19 a 黒色土層 (10YR1.7/1) 横位のアシ類の色調は黄褐色 (10 YR5/6) を呈し、断面積の約10%含む。
- 19 b 黒色粘質土層 19a層より黒味が強い。Hr-FA 上第3水田大アザ部分のみ認められる。
- 20 As-Cを主体として少量の黒色土を均一に含む。上面で As-C 上水田を検出。
- 21 As-C層 粒径は1mm程度が主体で、少量2mm前後を含む。
- 22 黒色土層 (10YR1.7/1) 色調・植物遺体の状況ともに19層と同様であるが、若干植物遺体を多く含む部分が多い。As-C下水田耕作土。
- 23 黄褐色 (10YR5/6) の横位のアシ類を主体とし、黒色土 (10YR1.7/1) を断面積の15~20%程含む。

6 区北壁土層注記

- 9 黒褐色砂礫土層 (10YR2/2) 1mm以下の浅間系の軽石を多く含む。砂がレンズ状に多く入る部分がある。
- 10 黒色シルト質礫土層 (10YR1.7/1) As-B下水田耕作土。横位のアシ類は目立たないが、植物根遺体を多く含む。
- 11 黒色土層 (10YR1.7/1) 10層に比して明るい色調。横位のアシ類を少量含む。植物根遺体を多く含むが、10層より少量。
- 12 黒色土層 (10YR1.7/1) 11層より横位のアシ類を多く (20~30%) 含む。
- 13 黒色土層 (10YR1.7/1) 土は少なく明褐色 (7.5YR5/6) を呈する横位植物遺体を断面積の約50%強含む。
- 14 黒色土層 (2.5YR2/1) 上面で Hr-FA 上第1水田を検出。他の土層に比して灰色味が強い。横位のアシ類は断面積の10%程と少ない。植物根遺体を多く含む。
- 15 a 黒色土層 (2.5YR2/1) 上面で Hr-FA 上第2水田を検出。部分的に黒味が強い。横位のアシ類が主体を占める。植物遺体は明褐色 (7.5YR5/6) であるが、上層に比してやや黄色味を帯びる。Hr-FA のない部分又は堆積状態の悪い部分は、Hr-FA 軽石粒を含む。
- 15 b 灰茶褐色土層 植物遺体を少量含む。
- 15 c 粗砂層 Hr-FA 軽石を少量含む。種子を多量に含む。洪水による堆積であろう。
- 15 d 15a層と15c層の混土層 未分解の植物遺体を多量に含む。洪水による堆積であろう。
- 17 黒色土層 (10YR1.7/1) Hr-FA 下水田耕作土。横位のアシ類を断面積の10%程含む。植物根遺体を多く含むが、断面で目立たない。
- 18 黒色土層 (10YR1.7/1) 横位のアシ類を断面積の10~25%程含む。部分的に50%を超える。
- 19 黒色土層 (10YR1.7/1) 横位のアシ類の色調は黄褐色 (10 YR5/6) を呈し、断面積の約10%含む。
- 20 As-Cを主体として少量の黒色土を均一に含む。上面で As-C 上水田を検出。
- 22 黒色土層 (10YR1.7/1) As-C 下水田耕作土。色調・植物遺体の状況ともに19層と同様であるが、若干植物遺体を多く含む部分が多い。
- 23 黄褐色 (10YR5/6) の横位のアシ類を主体とし、黒色土 (10YR1.7/1) を断面積の15~20%程含む。
- 24 茶褐色土層 植物遺体を多量に含む。泥木や木質を多量に含む。
- 25 灰褐色粘質土層 植物遺体を少量含む。

3・4区1号溜井（第180～193図、PL-30・31・84～91）

1号溜井は3区北東隅から4区北西隅のN-40-O-43グリッドに位置し、中央は水路、北側は調査区外のため検出できなかった。また、東端は3区において溜井を確認する以前に4区のAs-B下水田の調査を行ったために検出できず、形状や規模は不明である。溜井の3区部分は壁が比較的直線的で、立ち上がりも一定である。これに対し4区側は壁と底部共に一定していない。4区東側の形状は不明であるが、確認された範囲から推定すると、しだいに幅を減しながら南東に延びるものと思われる。また、水路にかかっていたために一部しか確認できなかったが、堰板状の施設（PL-31参照）も確認されたことなどから溜井と判断した。

この溜井内には、機能しなくなった後に多量の木製品や陶磁器、石製品などが廃棄されており、その行為は完全に埋没するまで継続されていた。埋土の直上には明治時代の陶磁器（1～6）を含む砂層が堆積しており、溜井が完全に埋没したのは明治時代以前とされる。埋土中から出土した陶磁器は17世紀末から19世紀前半にわたり、その中心は18世紀前半頃にある。17世紀に遡る陶磁器が少量であることからこれらは伝世品と考えられ、溜井の機能が停止した時期は18世紀前半と考えておきたい。出土した陶磁器のなかで見込み荒磯文鉢（42）は、県内では希少例として注目される。木製品では下駄、漆椀、杓、お守り刀などが出土し、江戸時代の木製品が少ない本県では良好な資料と言える。出土陶磁器総数は211点、軟質陶器152点、木製品総数は78点、石類118点、土器類11点、金属器10点、瓦99点、磚2点であり、これらのうち陶磁器類54点、軟質陶器9点、木製品41点、石類29点、金属器7点、土器4点、磚1点を図示した。なお、掲載遺物の選択にあたっては残存率を第1とし、器種の組み合わせが得られるように配慮した。瓦はすべて江戸時代の棧瓦と思われるが、破片が非常に小さく1点も図示し得なかった。

4区2号溜井（第194～204図、PL-31・92～97）

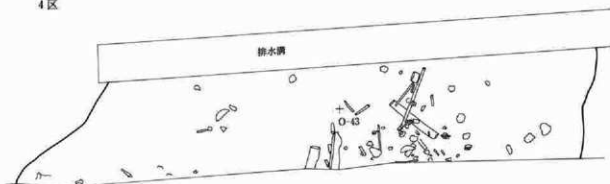
4区北東隅のO-50-P-52グリッドに位置し、北は調査区外、東は農道のため検出できず平面形、規模は不明である。本遺構はAs-B下水田を調査するためにAs-Bまでバックホーで除去した段階で確認した。また、確認当初は埋土が非常にぬかるんだ状態であったため、遺物の出土状態や攪乱の有無や位置も確認できなかった。しかし、掘り下げるにしたがって調査できる状態になったが、その時点からの遺物出土量は非常に少ない。本遺構には確認時点の深さが70cm程の水溜部分と更に100cm前後深い湧水部があり、流出部は溝状に北東に延びた後、東に向きを変えている。水溜部分の壁際には杭が、少量打ち込まれた状態で検出されている。流出部分や溝が続くと考えられる5区では、As-B下水田を調査する際に掘り込みは確認されなかったが、北西部分においてバックホーで掘削中に南東方向に向かう枕列が一部認められ、枕で護岸された溝が延びていたと推定される。この枕列は、As-B下水田を調査するために1m以上の掘削を行っている時点での検出であり、確認した時点では図面、写真を撮れる状態ではなかった。

出土遺物は陶磁器114点、軟質陶器49点、瓦25点、木製品34点などが出土し、陶磁器45点、軟質陶器7点、瓦3点、砥石10点、木製品10点などを図示した。これらのうち明治時代以降の陶磁器（6のみ図示）が12点含まれており、攪乱の存在を想定させるが、上記のように検出当初は攪乱も確認できない状況であったため確認できなかった。

本溜井は、湧水部分出土遺物（21・32・40・41・43・45・52・58・64）から18世紀代から機能していたと考えられ、明治6年の地引き絵図にも記載されており明治時代にも機能していたようである。

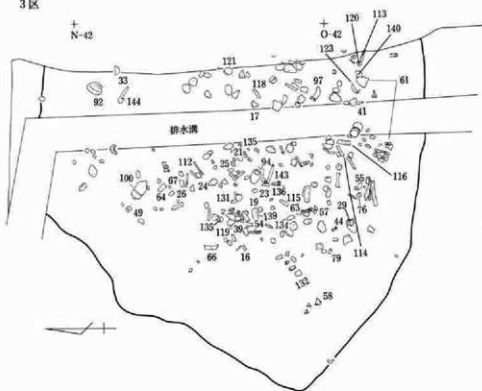
第5章 検出された遺構と遺物

4区

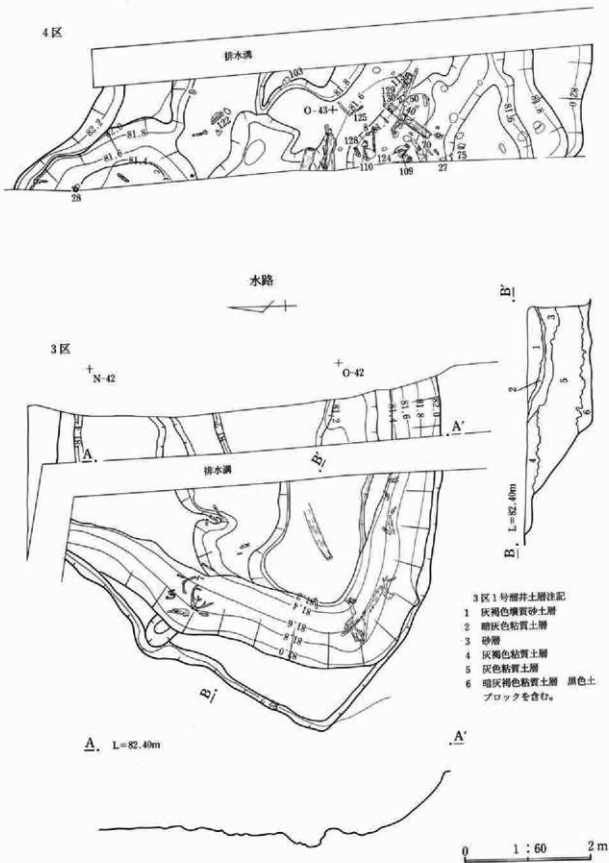


水路

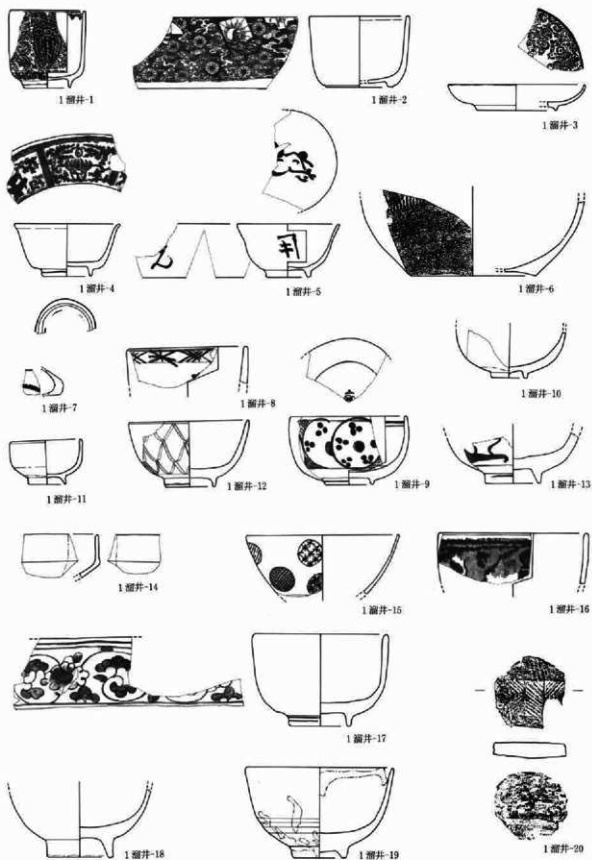
3区



第180図 3・4区1号溝井遺物出土状態



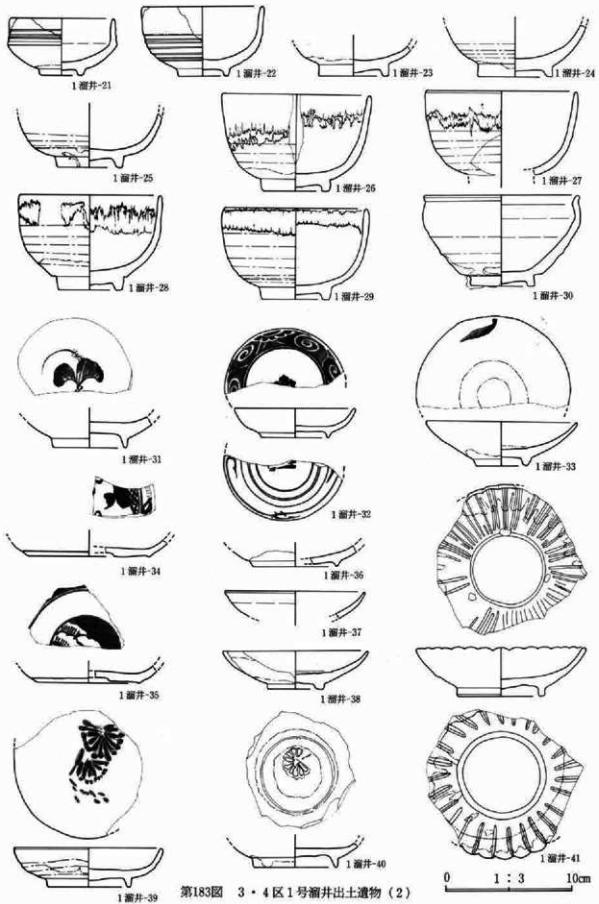
第181図 3・4区1号掘井



第182図 3・4区1号瀬井出土遺物(1)

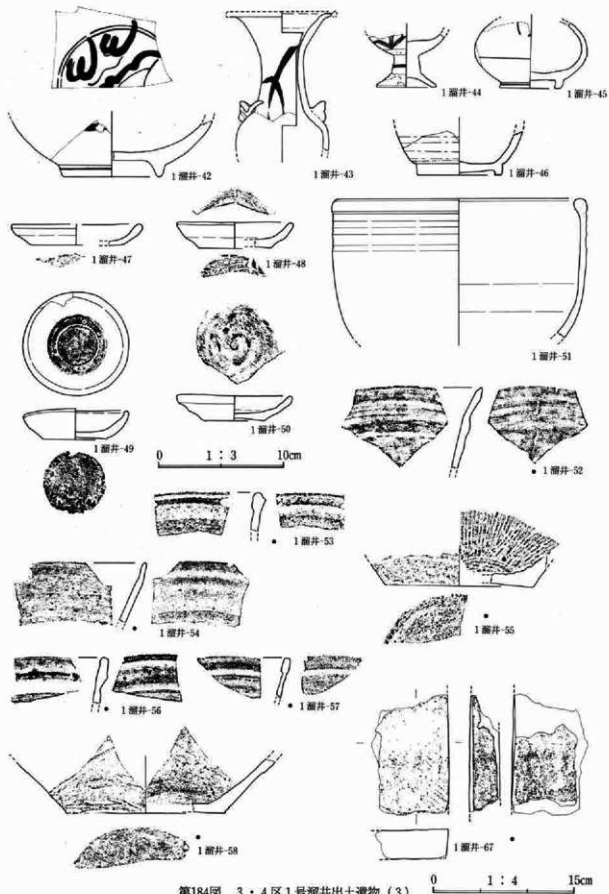
0 1 : 3 10cm

第3節 3～6区(東側谷地)で検出された遺構と遺物



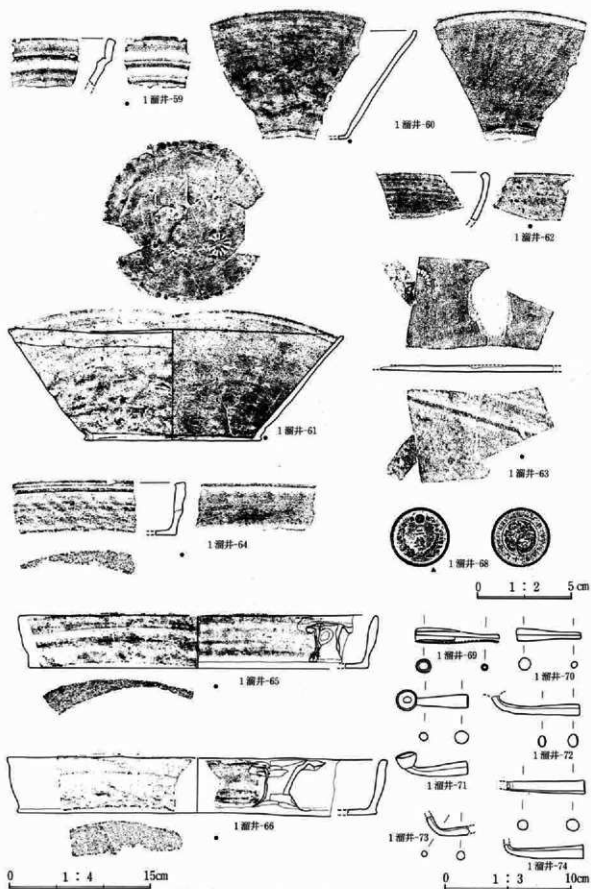
第183図 3・4区1号瀬井出土遺物(2)

第5章 検出された遺構と遺物



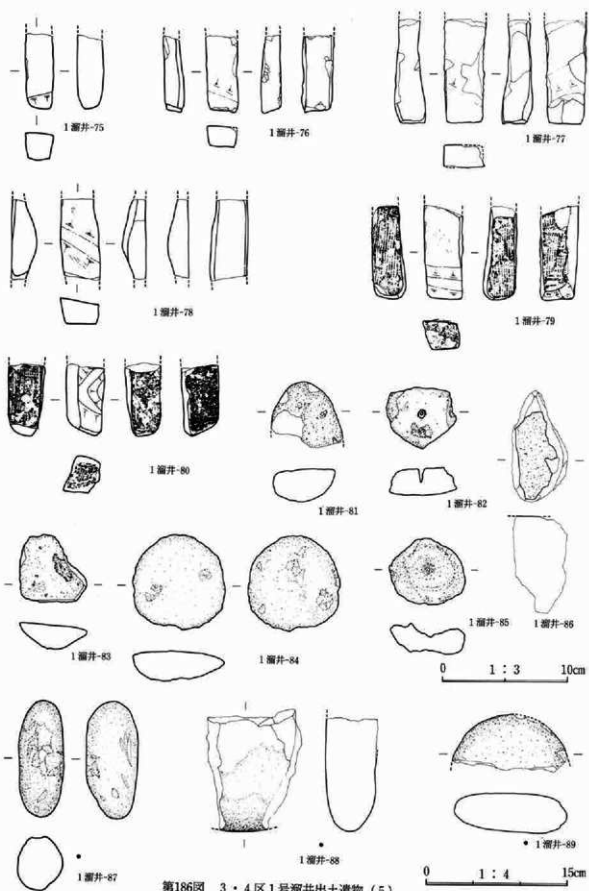
第184図 3・4区1号溜井出土遺物(3)

第3節 3～6区(東側谷地)で検出された遺構と遺物

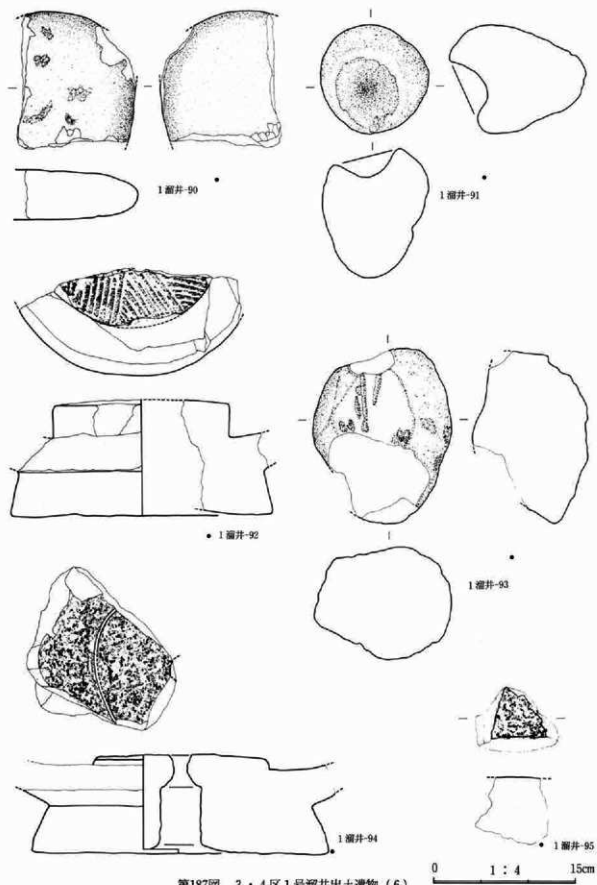


第185図 3・4区1号掘井出土遺物(4)

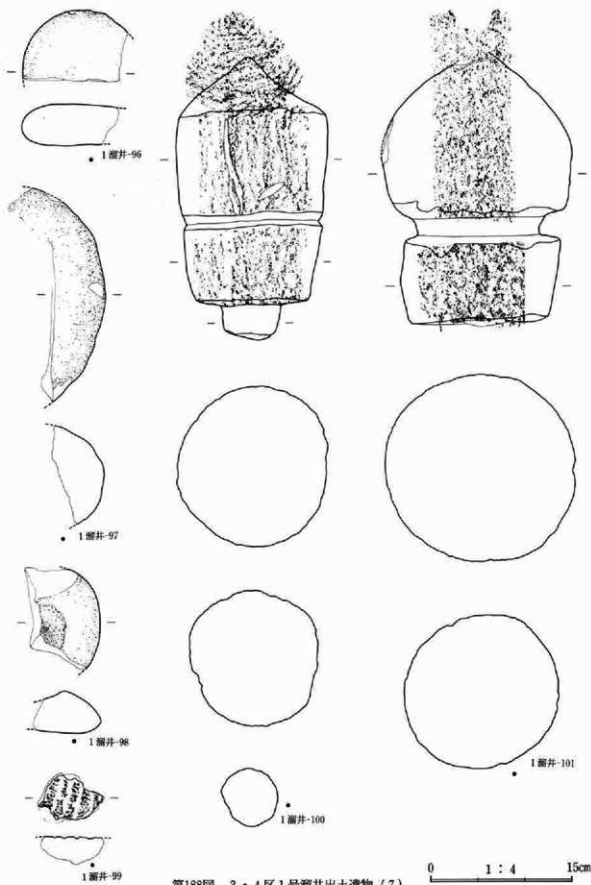
第5章 検出された遺構と遺物



第186図 3・4区1号瀬井出土遺物(5)

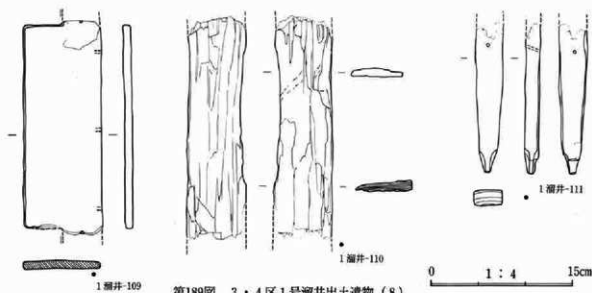
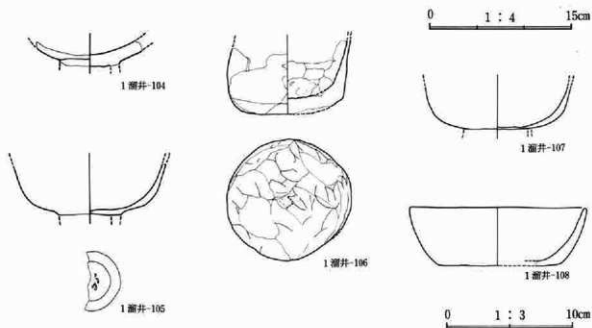
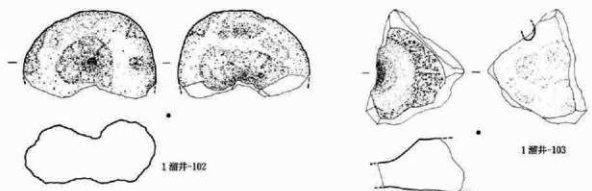


第187図 3・4区1号瀬井出土遺物(6)

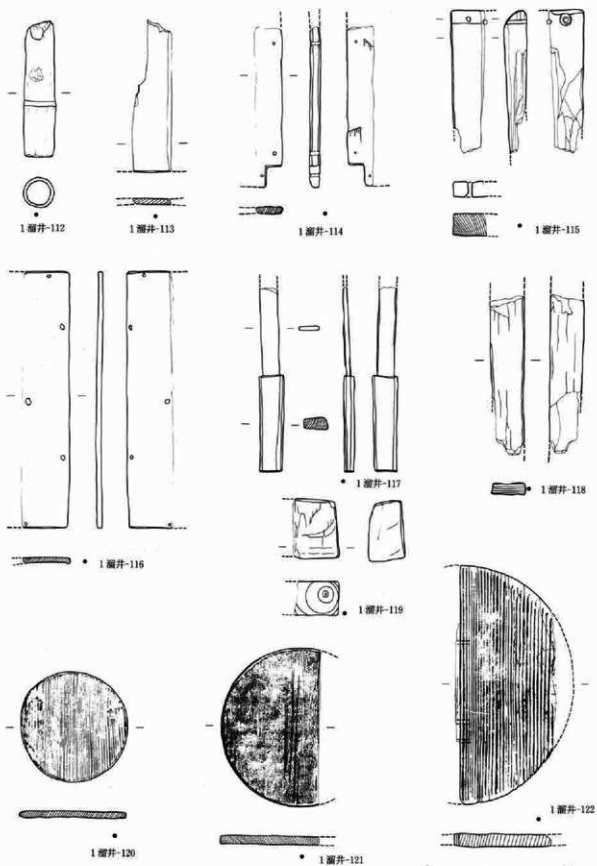


第188図 3・4区1号井出土遺物(7)

第3節 3～6区（東側谷地）で検出された遺構と遺物

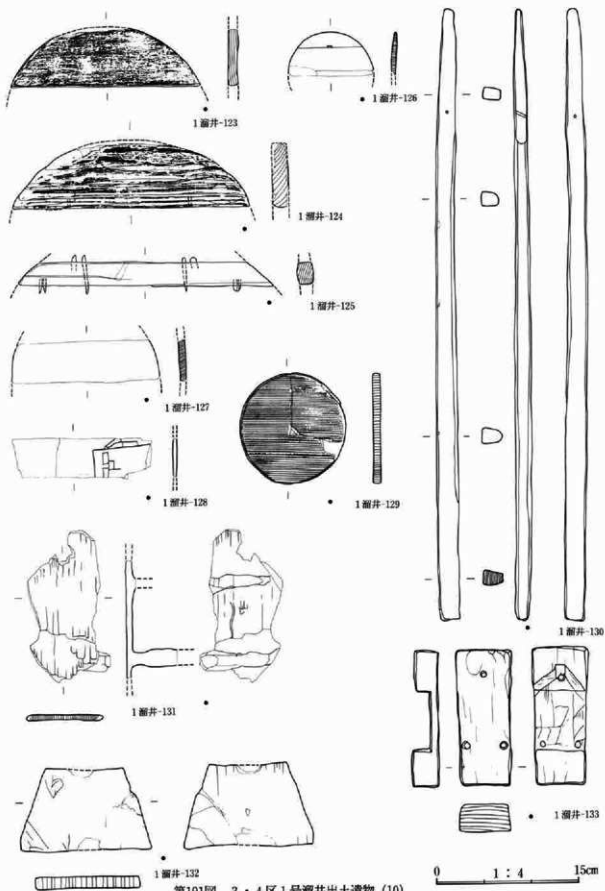


第189図 3・4区1号瀬井出土遺物(8)

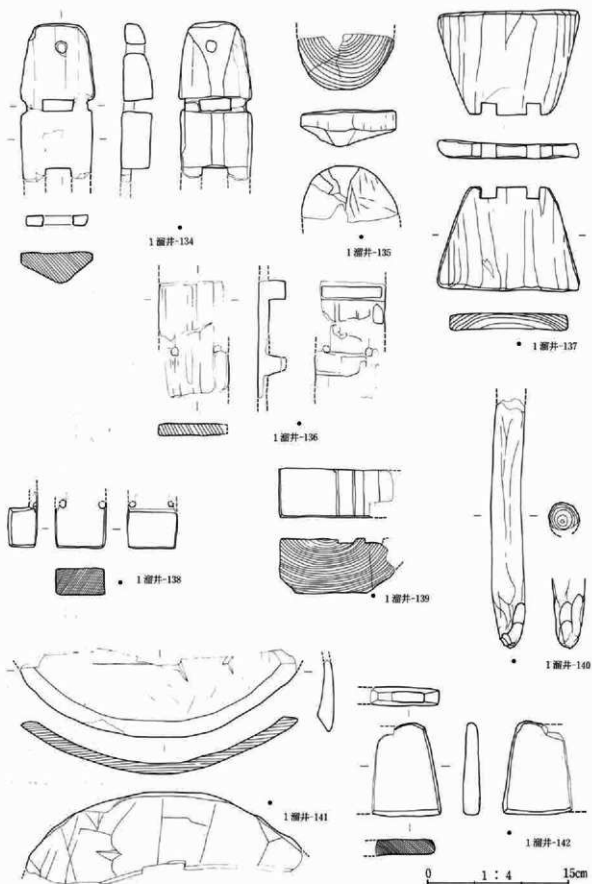


第190図 3・4区1号瀬井出土遺物(9)

第3節 3～6区(東側谷地)で検出された遺構と遺物

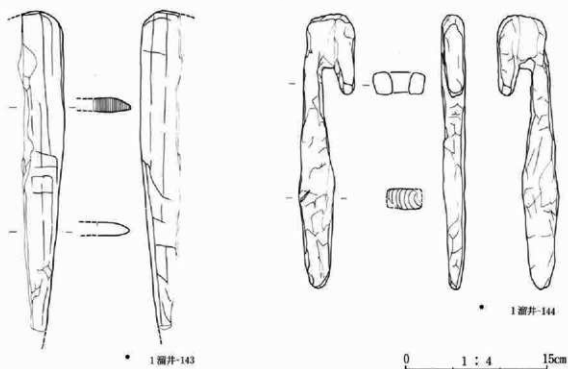


第191図 3・4区1号井出土遺物(10)

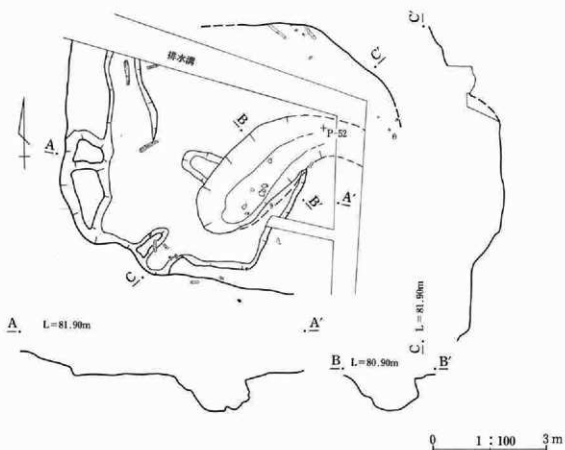


第192図 3・4区1号掘井出土遺物(11)

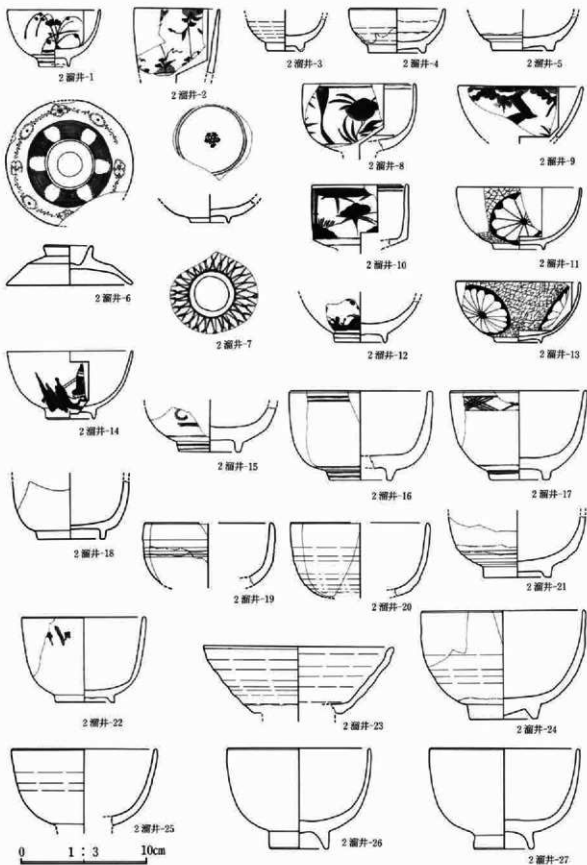
第3節 3～6区（東側谷地）で検出された遺構と遺物



第193図 3・4区1号掘井出土遺物 (12)

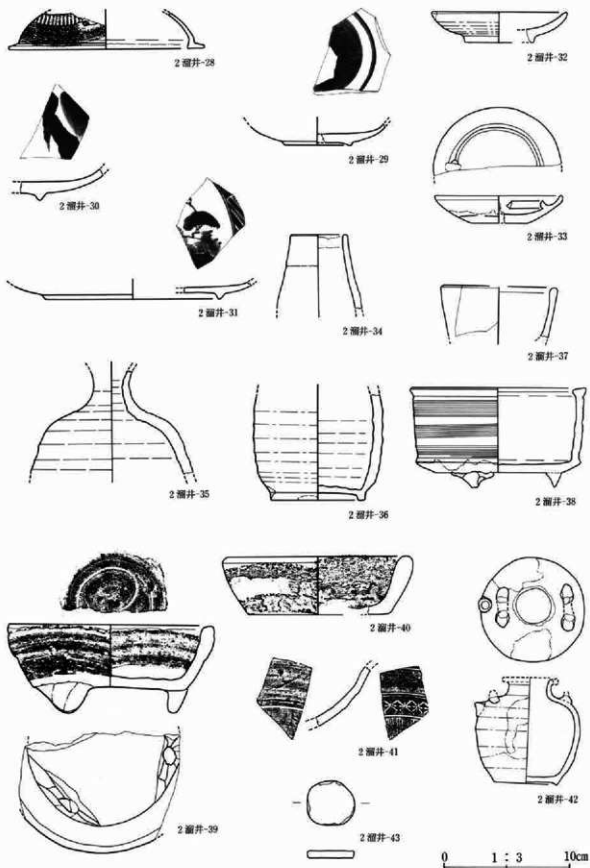


第194図 4区2号掘井



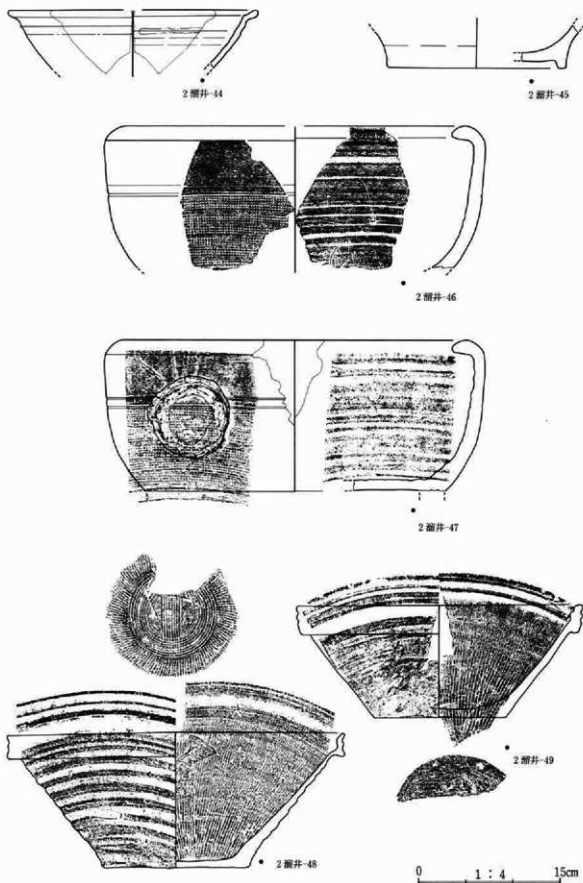
第195図 4区2号溜井出土遺物(1)

第3節 3～6区（東側谷地）で検出された遺構と遺物



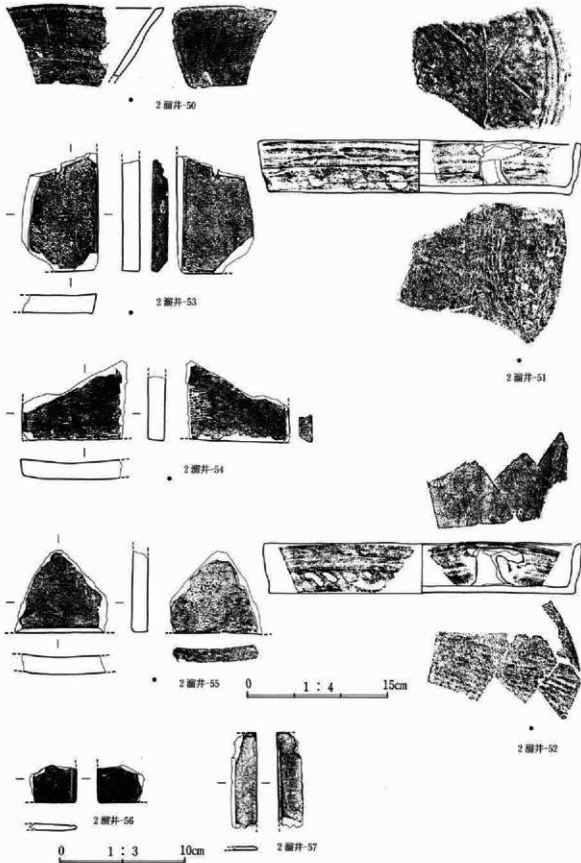
第196図 4区2号溜井出土遺物（2）

第5章 検出された遺構と遺物

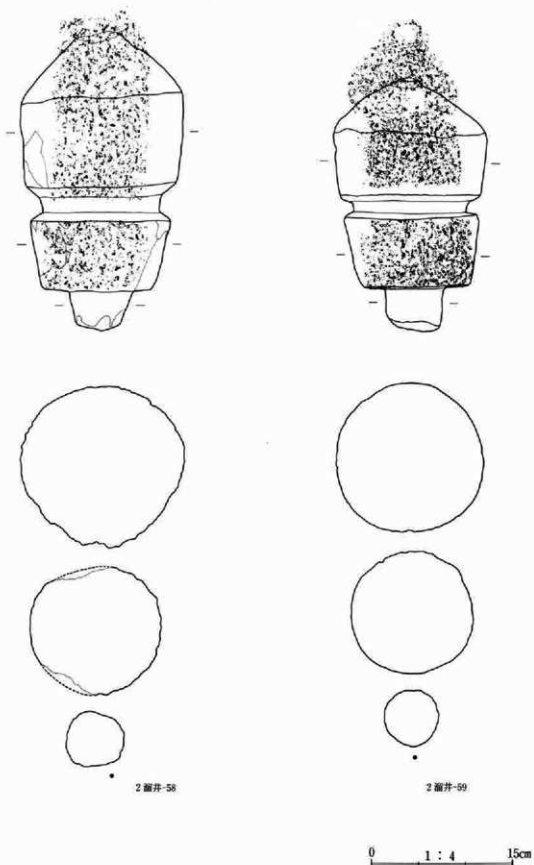


第197図 4区2号掘井出土遺物(3)

第3節 3～6区（東側谷地）で検出された遺構と遺物

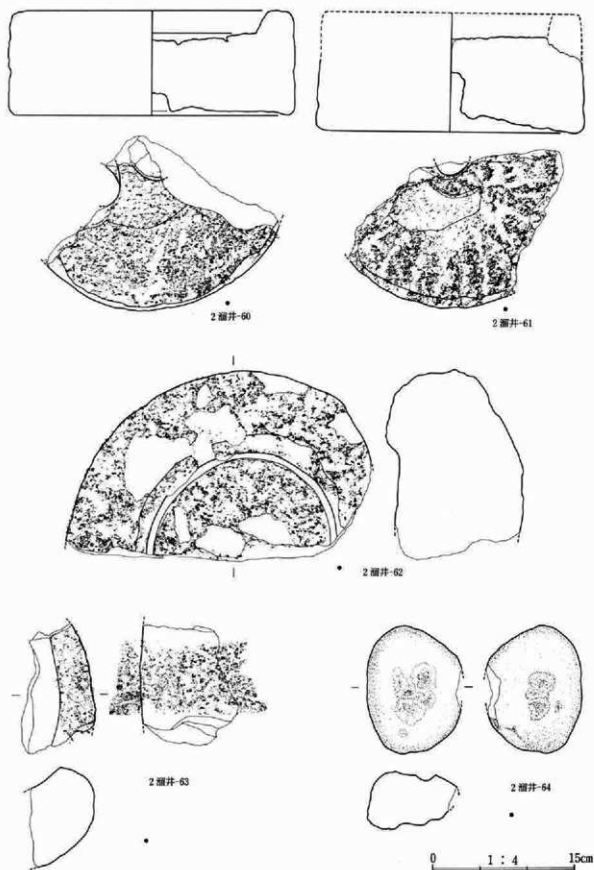


第198図 4区2号福井出土遺物（4）



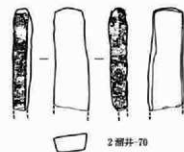
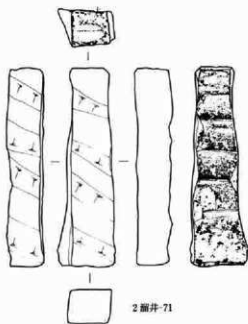
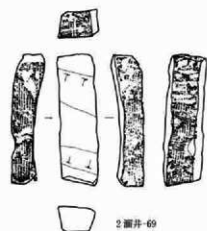
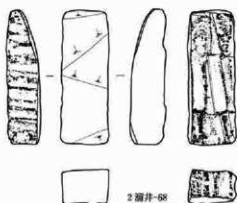
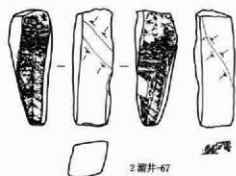
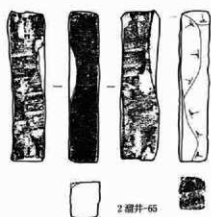
第199図 4区2号竈井出土遺物(5)

第3節 3～6区（東側谷地）で検出された遺構と遺物



第200図 4区2号掘井出土遺物（6）

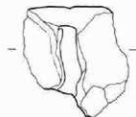
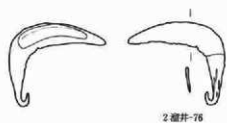
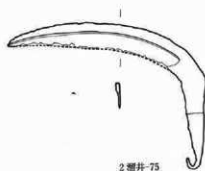
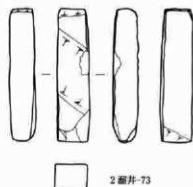
第5章 検出された遺構と遺物



0 1 : 3 10cm

第201図 4区2号溜井出土遺物(7)

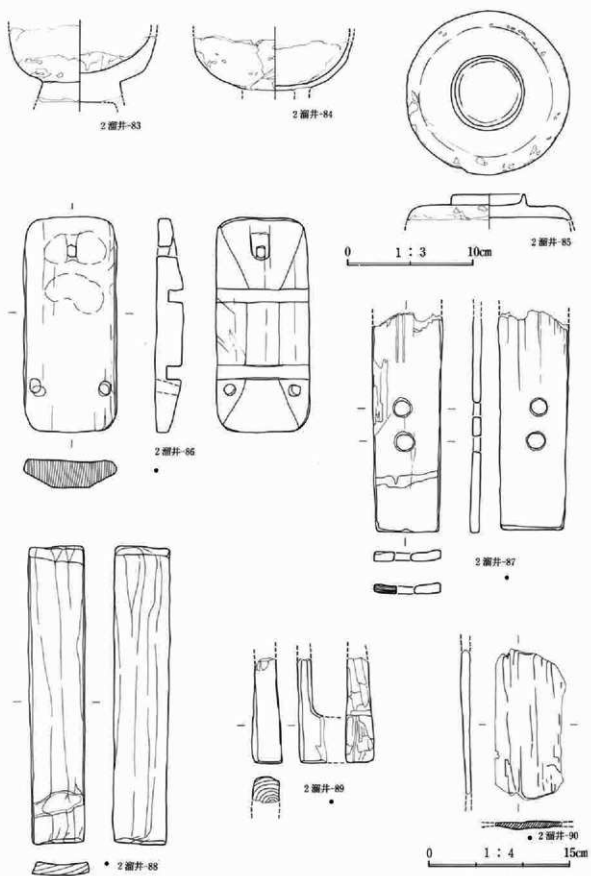
第3節 3～6区(東側谷地)で検出された遺構と遺物



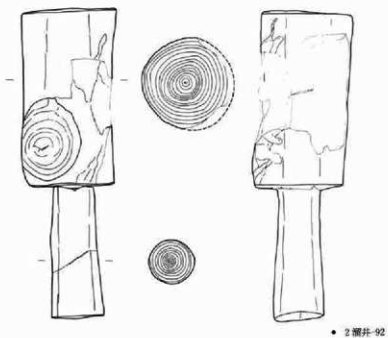
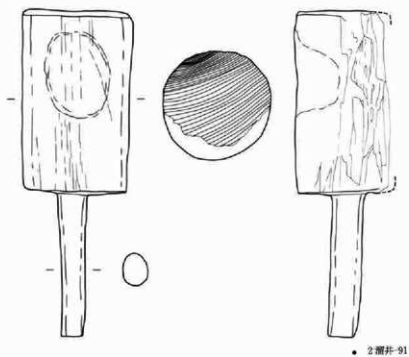
0 1 : 3 10cm

第202図 4区2号瀬井出土遺物(8)

第5章 検出された遺構と遺物



第203図 4区2号竈井出土遺物(9)



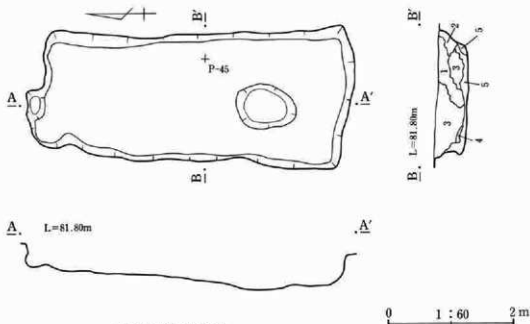
第204図 4区2号溜井出土遺物(10)

0 1 : 4 15cm

4区1号不明遺構 (第205図、PL-31)

1号不明遺構は4区西側中央のO-44グリッドに位置し、地元のかたから「むかしこのあたりには池があった。」との話から調査時は「池」と称していたが、池とする根拠に欠けることから不明遺構と改称した。平面形は長軸5.0m、短軸2.0mの長方形を呈し、深さは40~50cmを測る。底面には大きな凹凸はないが、南に傾斜している。埋土にはAs-Bが多量に認められるうえに、1・2号溜井埋土とも異なることから江戸時代以前に埋没していると推測される。なお、セクションには記していないが、底部には0.5cm~3cmの白色砂が堆積していた。

出土遺物は全く認められない。



4区1号不明遺構土層注記

- 1 黒褐色粘質土層 As-B 下水田耕作土を含む。
- 2 灰褐色粘質土層 As-B を含む。
- 3 灰褐色粘質土層 As-B をブロック状に含む。
- 4 黒色粘質土ブロック
- 5 灰褐色粘質土層 As-B を含む。

第205図 4区1号不明遺構

3区~6区 As-B 下水田 (第207~210図、PL-32・33・97)

3区

3区は千足遺跡が占地する2区台地の東側に位置し、谷が台地側にやや湾入する部分の上流側にあたる。3区は谷地の縁辺部であるため、西側ではAs-Bの堆積は不良で黒色土と混ざる状態であり、東側の深い部

分になってようやく純層が認められた。4区に近い東側でAs-Bの純層は1cmと薄く、3区は谷地縁辺のため南東に向かって均一に傾斜する。しかし、南東隅は4区の延長で等高線が込み合っている。アゼは偏平化が著しく、良好な部分でも4cmと非常に低く、検出は困難であった。中央部のアゼは確認できない。縁辺部のアゼは、等高線に平行に直線的に走向し、それを等高線と直行方向に区切って水田区画としている。3区は、南に行くに従って幅が広がるために西端の区画を1列増やしている。水田区画は比較的整っているが、区画を1列増やしている部分のみは三角形や台形を呈している。南東隅は地形的には4区の西端といえ、傾斜がきつくと等高線はやや湾曲している。この部分の区画は地形をよく反映し、形状は一定していない。3区には地形的に取水路が存在してもよいが検出されなかった。配水は第15区画西アゼ内側にあるくぼみが水口と考えられることから、台地縁辺から取水して順次下の区画に流していったものと考えられる。

4区

4区は谷地中央部西側に位置するが、4区の上流側で谷地が拡がっており(地形図、航空写真参照)、北側台地から続く縁辺傾斜部分が北から西にかけて存在するため、地形的には谷地縁辺部となっている。加えて、谷地が拡がる湾曲部分にあたることから西から北にかけて等高線も湾曲し、水田地形としては複雑なものとなっている。アゼは地形の影響によって概ね南中央を中心として弧を描くように走向し、その間を区切って水田区画としている。区画の形状と面積はさまざまで一定しておらず、その関係から第74区画と84区画の間に存在する大アゼも途中で枝別れて小アゼとなってしまう。また、第57区画と第66区画の間にある大アゼは、北に行くに従って次第に細くなり小アゼと区別がつかなくなってしまう。

5区

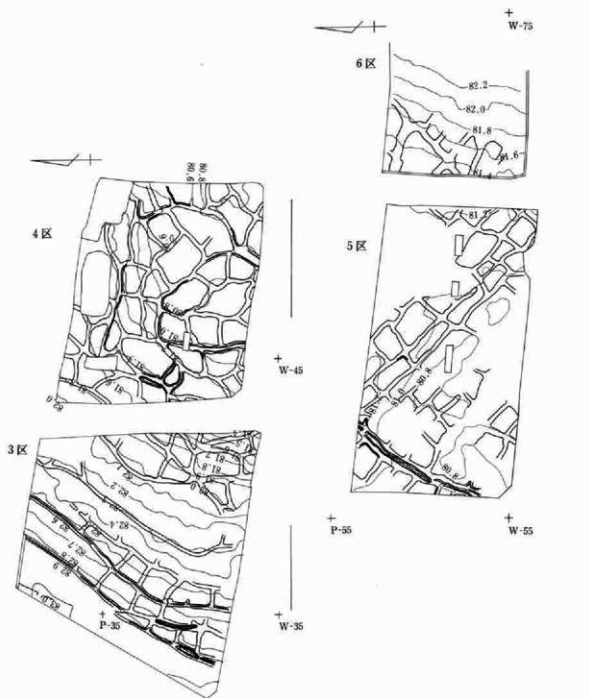
5区では被覆層であるAs-Bが4cm前後の層厚を有し、上面には部分的にいわゆるピンクアッシュが認められるなど比較的良好に堆積していた。しかし、北東と南側では上層の耕作によってAs-B層と水田耕作土が膨らまれており、水田区画の検出はできなかった。水田面は北東から南西に向かってやや急な傾斜で、等高線も混みあっているが、谷地の中央に位置するため、等高線はあまり湾曲せず地形は最も安定している。アゼの走向は谷地を横断する方向に設置され、それを区切って水田区画を作っている。区画は地形の関係から等高線と平行方向に長く、直行方向に短い長方形を呈するものが多い。西端には等高線と直行方向にアゼ間を流れる排水路が約22mにわたって確認された。水路を含むアゼの幅は約2m、水路の幅は70cm～100cm、深さは約30cmを測る。部分的に確認できないところもあるが、排水路は続いていたと考えられる。

6区

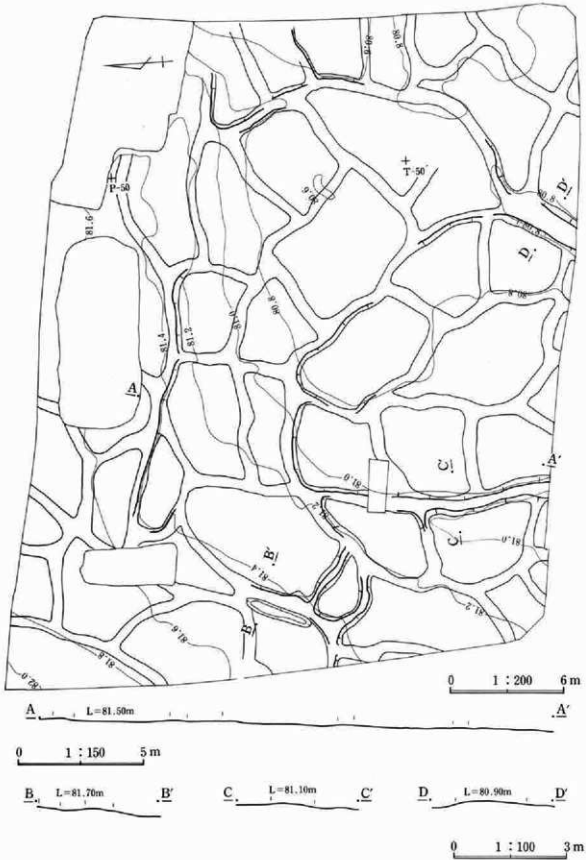
6区は現在の水路を隔てて5区の西に位置し、当初は本遺跡と並行して二之宮宮下西遺跡の台地縁辺として調査されていたが、水田が検出されたことによって、谷地部分のみを千足遺跡の「6区」として扱うこととなった。被覆層であるAs-B層は縁辺であるが、堆積状況は良くいわゆるピンクアッシュも認められた。地形的にも傾斜が急なことを除けば単純であり、水田区画は5区と同様な形状となっている。しかし、区画の長軸が等高線と交差方向にあるのは、等高線耕作の原則に則っている3～5区とは大きく異なっている点である。なお、区画は東にもっと広がっていたと考えられるが後世の耕作によって検出できない状態であった。

出土遺物

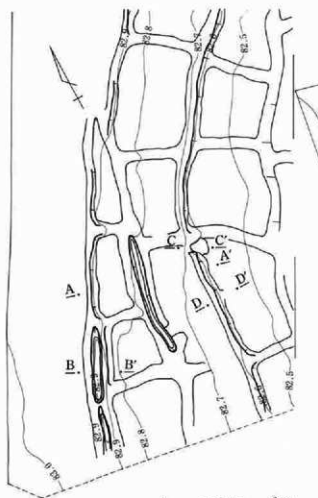
水田面と耕作土内出土遺物は、集落に近い3区から多く出土しているが、図示したなかでもAs-B水田の耕作時期を示すと思われるのは3区-4の須恵器碗と3区-9の中國製の白磁碗程度であろう。また、龍泉窯系青磁碗(3区-10)は、時期的にも合わないうえ、出土地点が3区の台地に近いことから混入と考えておきたい。



第206図 3～6区As-B下水田



第207図 4区As-B下水田



0 1 : 200 6 m

B L=83.10m B'

A L=83.00m A'

0 1 : 100 3 m

C L=82.80m C' D L=82.70m D'

0 1 : 60 2 m

第208図 3区 As-B 下水田溝状遺構



0 1 : 200 6 m

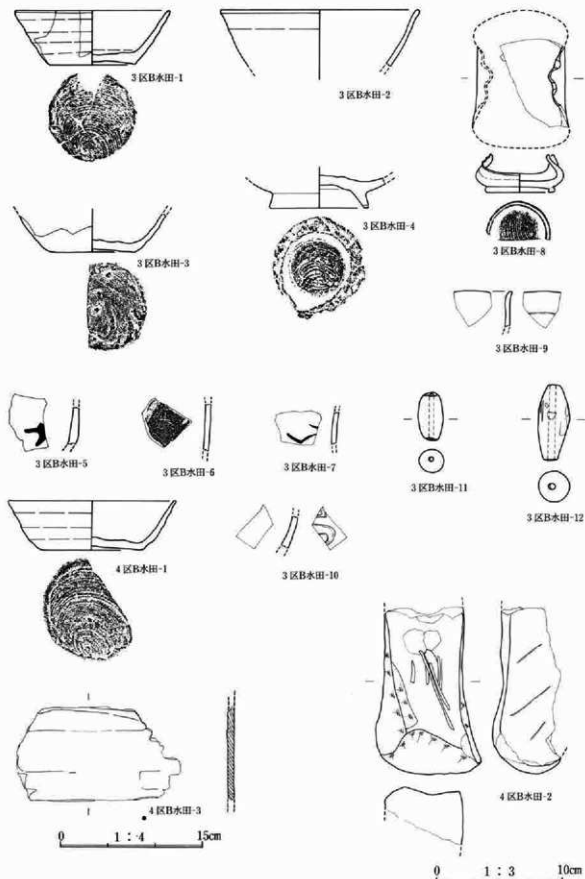
A L=81.10m A'

B L=81.10m B'

0 1 : 100 3 m

第209図 5区 As-B 下水田水路

第3節 3～6区(東側谷地)で検出された遺構と遺物



第210図 As-B 下水田出土遺物

3～6区 Hr-FA 上第1水田 (第211～220図、PL-35・98～100)

3～6区では、As-B 下水田と Hr-FA 下水田の間に3面の水田が検出され、上層から順に Hr-FA 上第1水田、同第2水田、同第3水田と呼んだ。これらのうち、最も新しい Hr-FA 上第1水田は、3区及び5区東半分、6区の14層上面で確認された。

3区は2区台地に続く谷地縁辺であり、その西側でのみアゼが検出された。水田区画の遺存は悪く、区画全体が確認できたのは1・2・6号区画の3区画のみである。地形的には傾斜地に位置することから等高線はやや込み合っているが、僅かに湾曲するのみでほぼ平行している。As-B 下水田で確認された南東隅での区画の乱れは、その箇所ではアゼが検出されなかったために確認できなかった。しかし、西側は等高線に沿ってアゼを設置し、それを区切って長方形の区画を作っているが、中央の第6区画は変形区画となっていることや地形から南東隅に存在したであろう区画が変形であった可能性が高い。アゼは痕跡程度であり、高まりは殆どないに等しいが、傾斜変換線にあたる第2区画東側と第6区画西のアゼは10cm近い比高差がある。取配水関連遺構は確認できないが、位置関係から60・61号溝に水路の可能性が高い。59号溝は層位から古代の所産と考えられるが水田との関連は不明である。また、58号溝は水田区画内を走行するうえに、溝上にアゼが設置されていることから水田より古いと判断される。後に述べるように、この溝は Hr-FA 上第2水田に伴う可能性が高い。

3区からは小型の加工木とともに多量の梅、桃等の種子が出土している。その分布は第212図に示すように標高81.8mの等高線に沿っている。また、先にも述べたように3区が谷地の湧入部であることを考慮すれば、谷地が洪水等で水没した際に汀線に浮遊していたものが水が引いた際に取り残されたと推測される。

4区においても14層は確認されているが、アゼは検出されなかった。

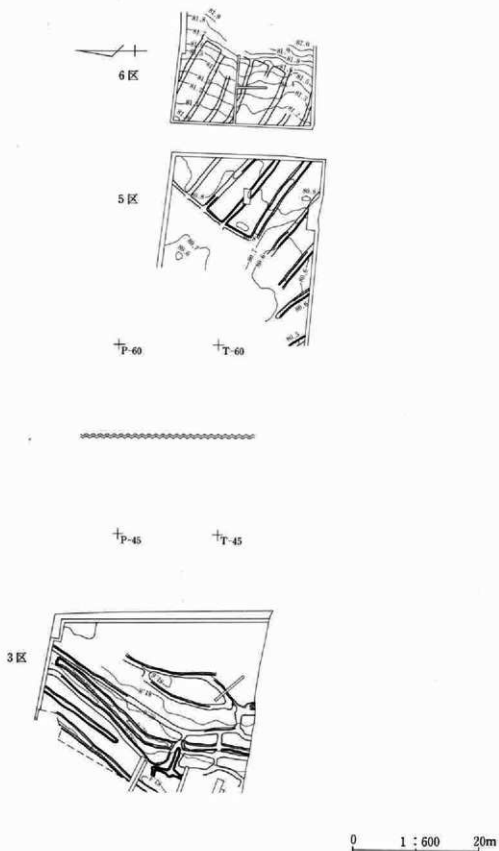
5区の東端では14層上面を精査中にアゼ状遺構が検出され、その範囲と区画を確認するために東に広がっていった。その結果、ほぼ等間隔に等高線と直行する方向に直線的なアゼ状遺構が検出された。調査当初はこの面を水田面と考え、アゼ状遺構の両側を掘り下げたが水田面は不明瞭で確認できなかった。また、アゼ状遺構が水田状の区画をなさず直線的に延びるなど不自然な点が認められた。しかし、調査中に行ったプラント・オパール分析により本遺跡の火山灰下水田とほぼ同量のイネのプラント・オパールが検出され、水田であったことが傍証された。しかし、5区のアゼ状遺構のありかたは、開田時の区画設定途中の姿であるのかもしれない。

5区では上層の13層に包含されていた木製品が5点出土している。木製品のうち5区-4は薄片であるが着柄跡と考えられ、時期的には下層の水田に属する可能性が高いと推測される。また、5区-1・2は大型曲物の底板で、形状と出土状態から同一個体の可能性が高い。5区は谷地中央に位置するために土器は出土していない。

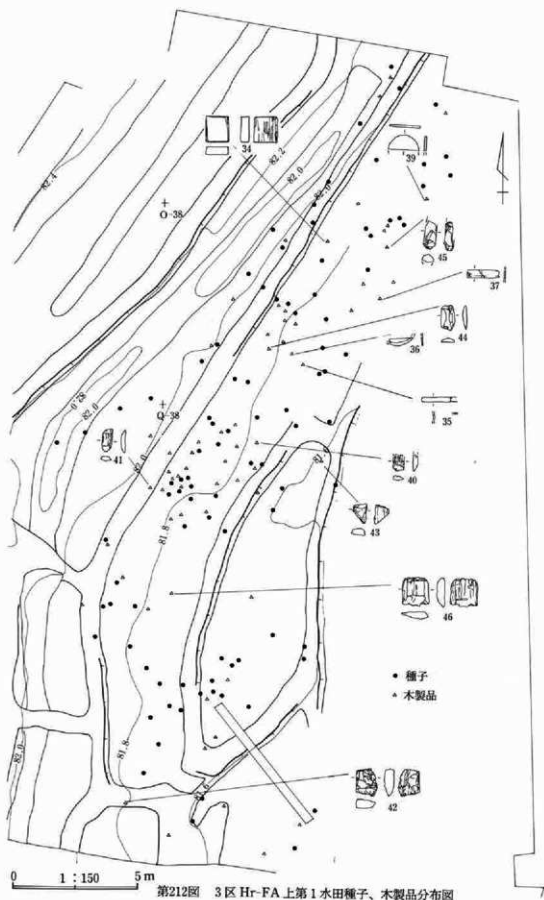
6区は東側台地に続く谷地縁辺であり、他の水田では等高線と平行にアゼを設定した後、その間を区切って区画を設定するが、ここでは逆に直行方向を基準としている。アゼ状遺構に高まりはなく、アゼ状遺構がやや黒いという色調の違いで確認した。遺物は1点も出土していない。

Hr-FA 上第1水田は3区と5・6区とは異なったアゼのありかたをしており、5・6区についてはアゼと呼ぶには躊躇するが、3区と同じ層位であること、分析では他の水田と同量のプラント・オパールが検出されており、水田と考えておきたい。ただし、5・6区において確認されたのは水田面ではなく、床土面での痕跡の検出である可能性が高い。耕作土はいずれにしても草本性泥炭質土であり、プラント・オパール分析結果にあるように生産性は低かったと考えられる。

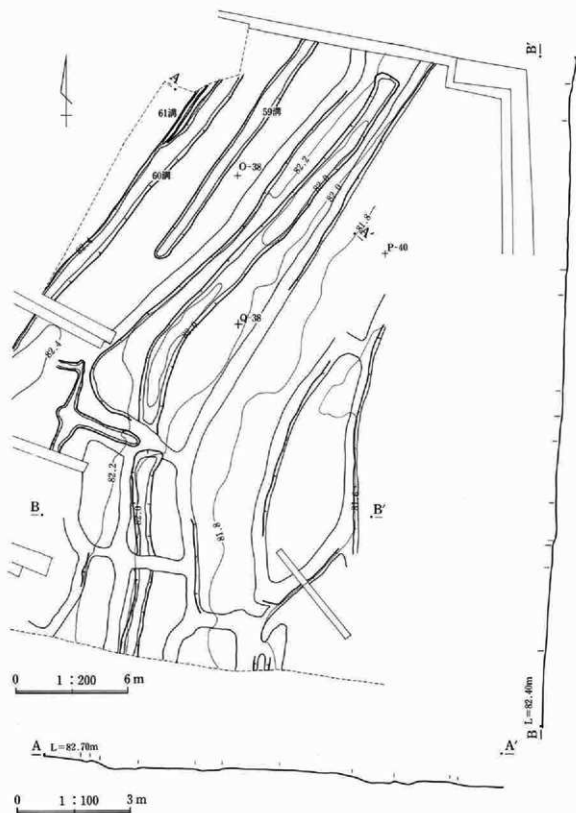
第3節 3～6区（東側谷地）で検出された遺構と遺物



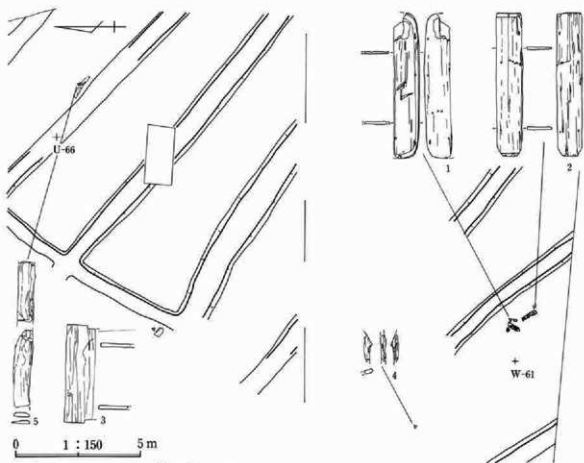
第211図 3・5・6区Hr-FA上第1水田



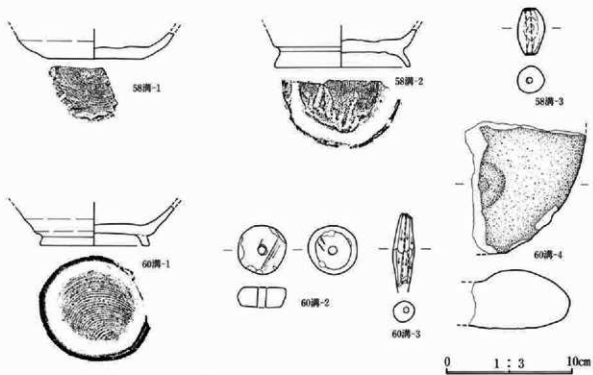
第212図 3区 Hr-FA上第1水田種子、木製品分布図



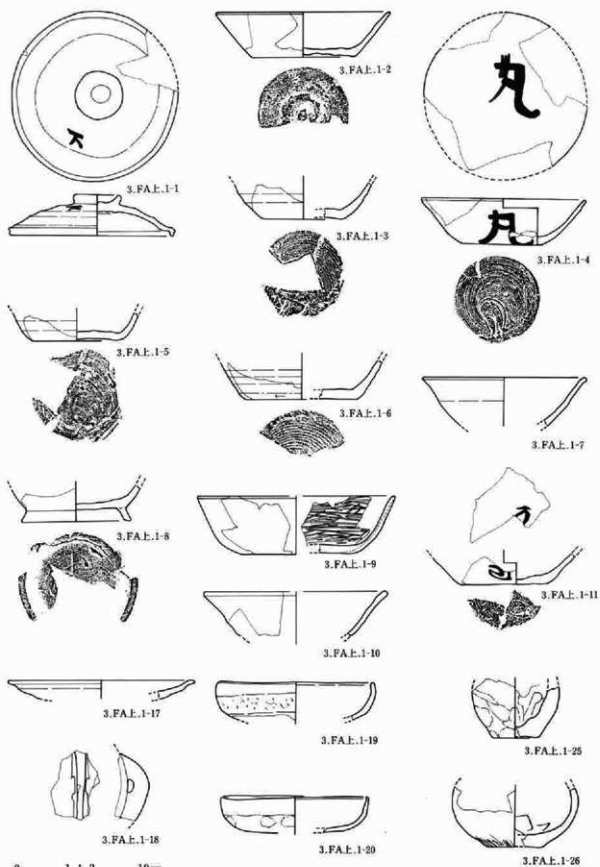
第213図 3区 Hr-FA 上第1水田溝



第214図 5区 Hr-FA 上第1 水田木製品出土状態

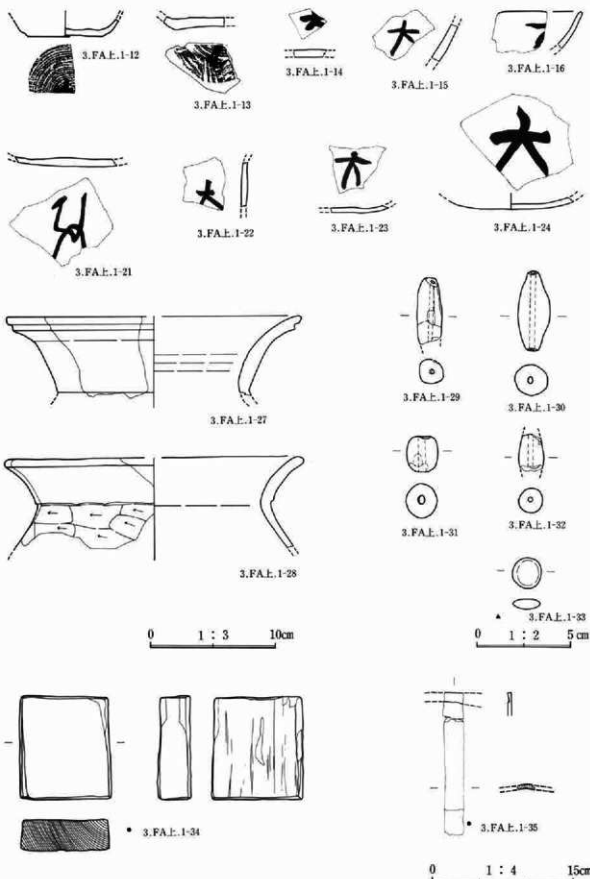


第215図 3区58・60号溝出土遺物



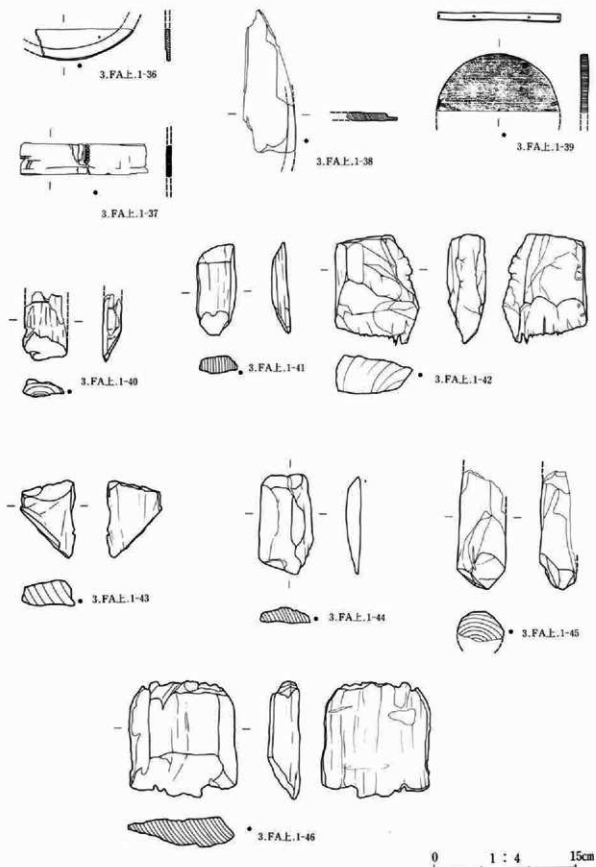
第216図 Hr-FA上第1水田出土遺物(1)

第5章 検出された遺構と遺物

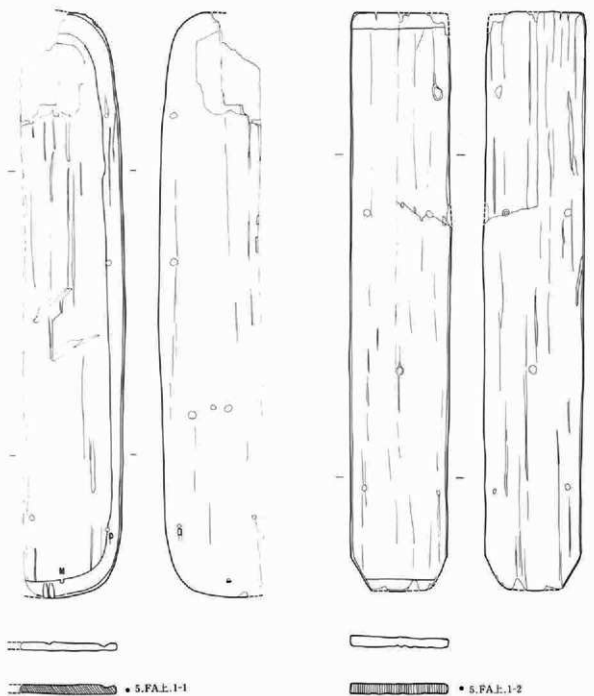


第217図 Hr-FA上第1水田出土遺物(2)

第3節 3～6区（東側谷地）で検出された遺構と遺物

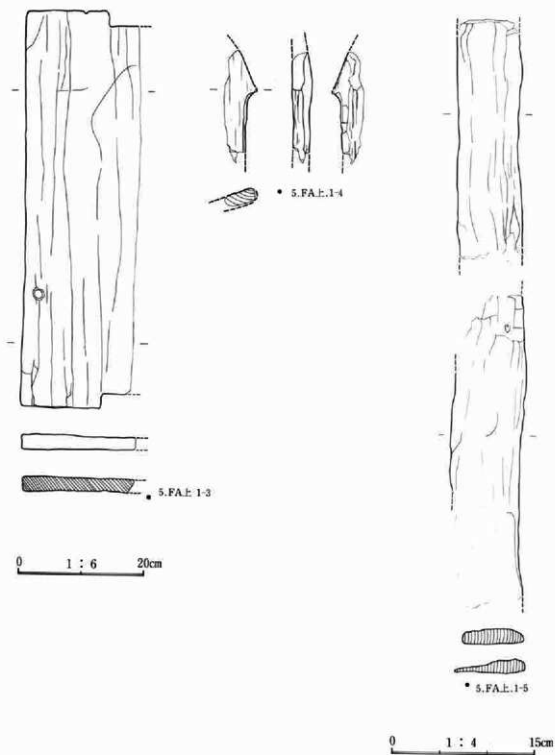


第218図 Hr-FA 上第1水田出土遺物 (3)



0 1 : 4 15cm

第219図 Hr-FA上第1水田出土遺物(4)



第220図 Hr-FA 上第1水田出土遺物（5）

3・4・5区 Hr-FA 上第2水田(第221~230区、PL-36・37、100~102)

3区 Hr-FA 上第2水田は17層上面で検出され、アゼの高さは4~6cmで区画はすべて確認されるなど遺存は比較的良好であった。西側の区画は面積の違いがあるものの、第1水田と非常に近い形状を呈している。また、Hr-FA上第1水田からさほど掘り下げていないこともあり地形的にも近似している。このため、東側では4区から続く湾入部地形の影響で区画が乱れる傾向がある。またこの部分の第7・10区画と第12区画・第11区画と第13区画間には15~20cmの高低差がある。配水関係では第1水田検出時に確認した58号溝が位置的に本水田の取水路と考えられる。なお、途切れている部分は第1水田のアゼが存在した所であり、その影響で確認できないと推測される。水口は明瞭なものがないが、第4区画と第7区画間にあるアゼの途切れが唯一水口と考えられるものである。3区では第1水田ほどではないが種子が出土しており、その出土状態も第1水田同様等高線に沿っており、水田が洪水で冠水状態の際に浮遊した種子が取り残されたと考えられる。

遺物は水田検出時に土師器杯類89点、壺甕類505点、須恵器杯類622点、壺甕類389点、蓋129点、瓶類1点、反軸陶器碗1点、瓶類1点、木材24点が出土し、土師器杯1点、甕1点、木器9点を掲載した。また、伴う可能性のある遺物としては打ち込まれた状態で出土していないが枕の3区-6、3区-10、3区-11の3点が考えられる。

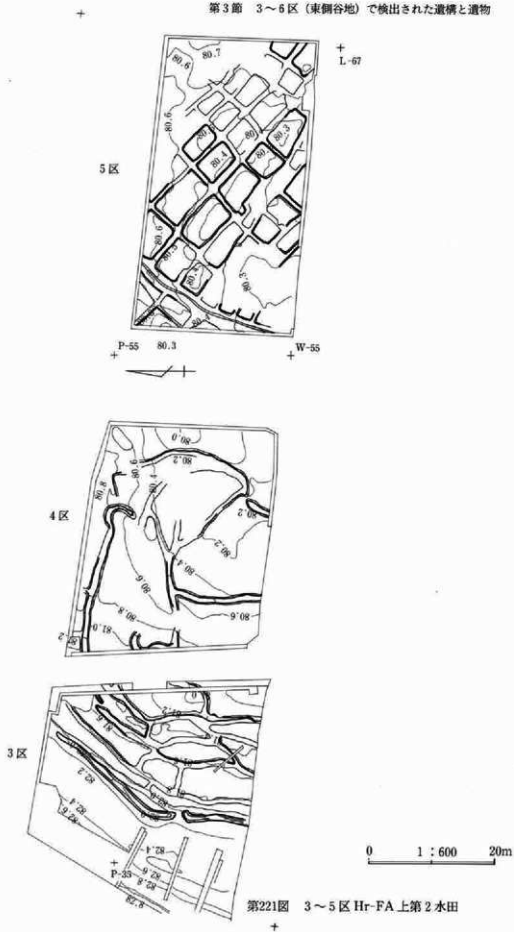
4区第2水田は Hr-FA (16) 層と直下の17層で確認し、アゼの上には Hr-FA が遺存していた。このように、アゼと区画内で土層が異なっているのは水田面が確認できず、床土部分もしくは耕作土中での検出となったためと考えられる。これは、断面観察において14層下半に Hr-FA と17層の小ブロックが多く含まれていたことが傍証となろう。第2水田の耕作土上面、すなわち水田面は14層の中央から下部にかけて存在したと推定される。しかし、検出されたアゼは高さ10~14cmと高く、大きいアゼのみが検出されたとも考えられる。地形はAs-B下水田同様、湾入部の影響で等高線が南中央を中心に弧を描いており、検出されたアゼもAs-B下水田程ではないが南を中心に湾曲している。確認されたアゼが少ないため、区画の形状が判明したものはない。

遺物は水田検出時に土師器杯類21点、壺甕類10点、須恵器杯類2点、木材41点が出土し、そのうち土師器杯3点、甕1点、須恵器杯2点、蓋1点、軽石製品1点、木器15点を掲載した。この中で水田に伴う遺物は、アゼに沿って埋まるように出土した4区-25のみであり、他は廃棄か流入したものと考えられる。

5区では15層上面でアゼを確認し、東側は痕跡程度であるが西側では数cm前後の高さを有している。水田の遺存状況は比較的良好であるが、北東隅と南西隅の2カ所において区画は確認できなかった。5区は谷地中央に位置し、地形が安定しているため、面積の多少はあるものの区画の形状は整っている。取配水関連遺構としては西側に水路が検出されている。水路は幅40~50cm、深さ14~20cmを測り、24mにわたってアゼに挟まれる状態で確認された。水路は、谷地のほぼ中央を等高線に直行するように定向することから排水路と考えられる。本水路の埋土に砂は認められないが、水路が泥炭質土内を通過していることと排水路であることが原因していると推定される。

遺物は水田検出時に土師器杯類5点、壺甕類12点、須恵器杯類1点、壺甕類1点が出土し、土師器高杯(5区-1)1点のみ掲載した。しかし、この高杯は時期的に古く、本水田には伴わない。

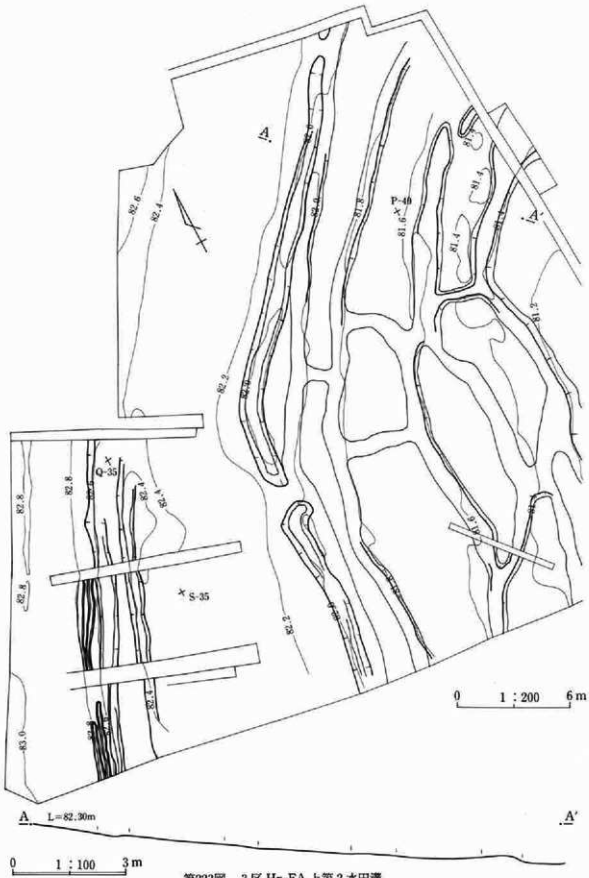
第3節 3～5区（東側谷地）で検出された遺構と遺物



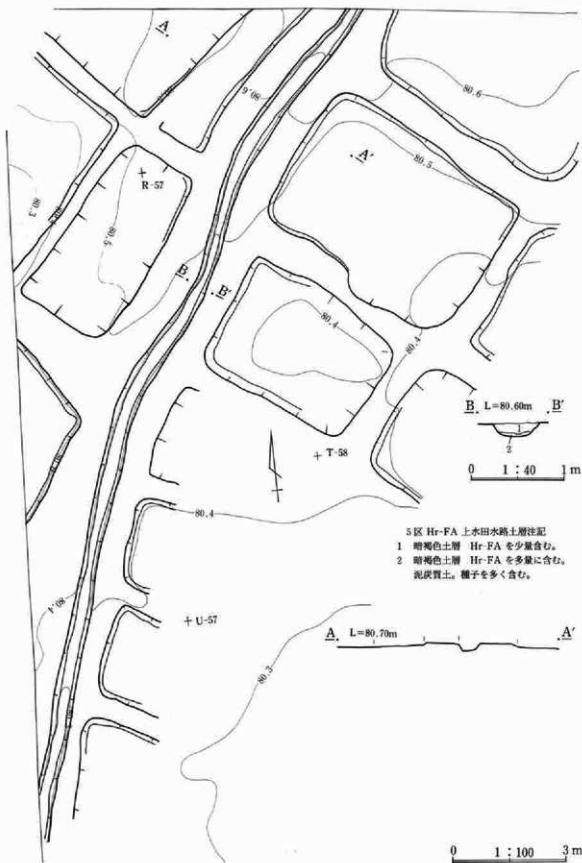
第221図 3～5区 Hr-FA上第2水田

第5章 検出された遺構と遺物



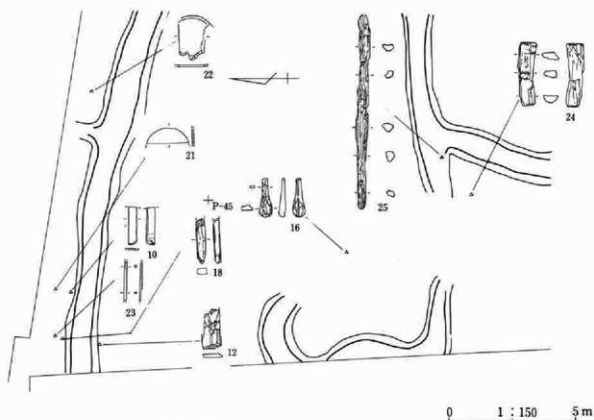


第223図 3区 Hr-FA 上第2水田溝



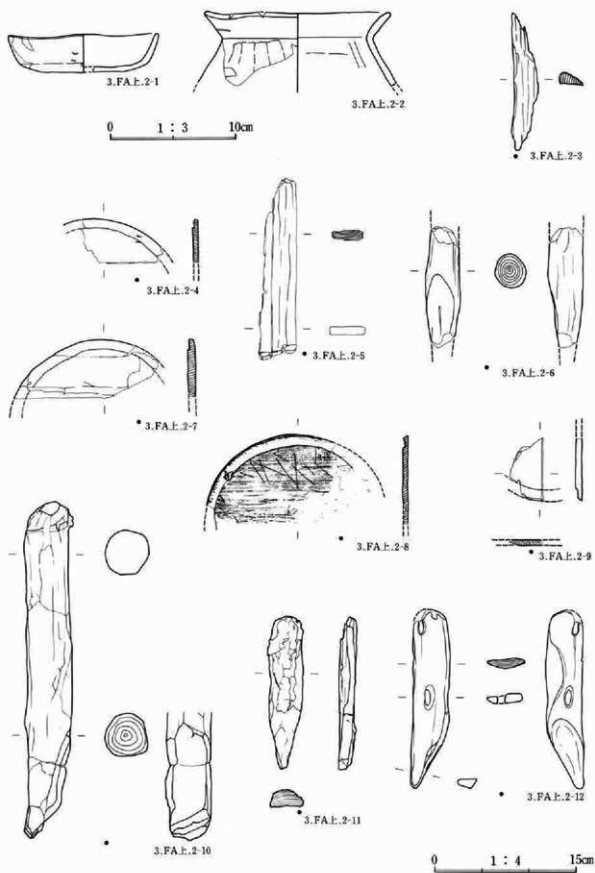
第224図 5区 Hr-FA 上第2水田水路

第3節 3～6区（東側谷地）で検出された遺構と遺物



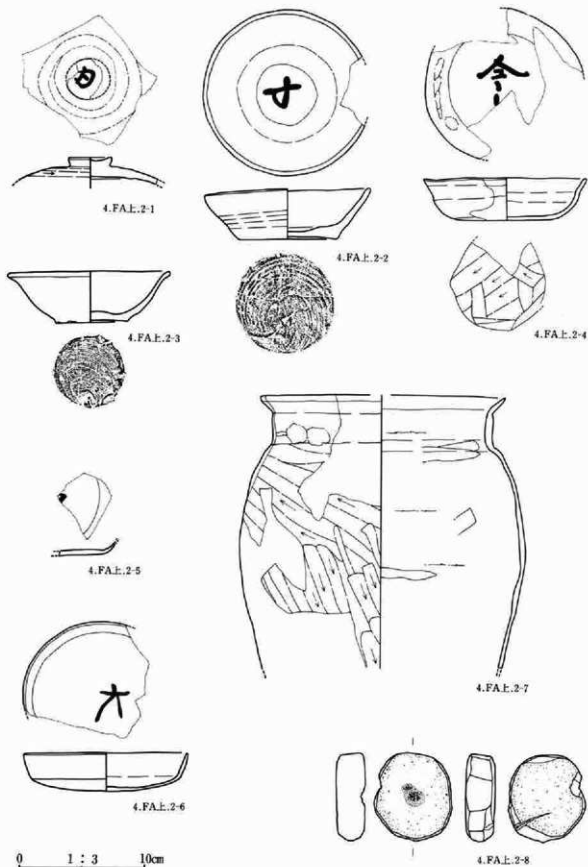
第225図 4区 Hr-FA 上第2水田遺物出土状態

第5章 検出された遺構と遺物



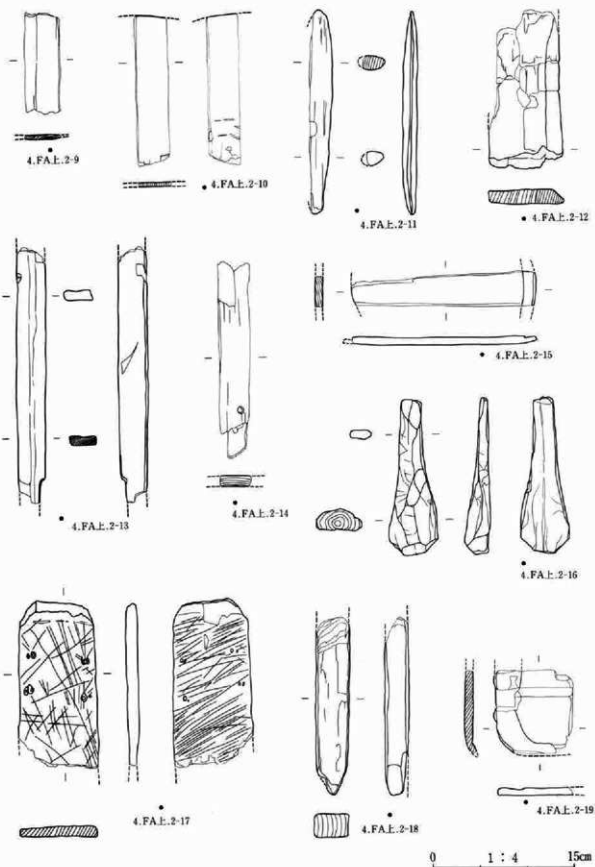
第226図 Hr-FA上第2水田出土遺物(1)

第3節 3～6区（東側谷地）で検出された遺構と遺物



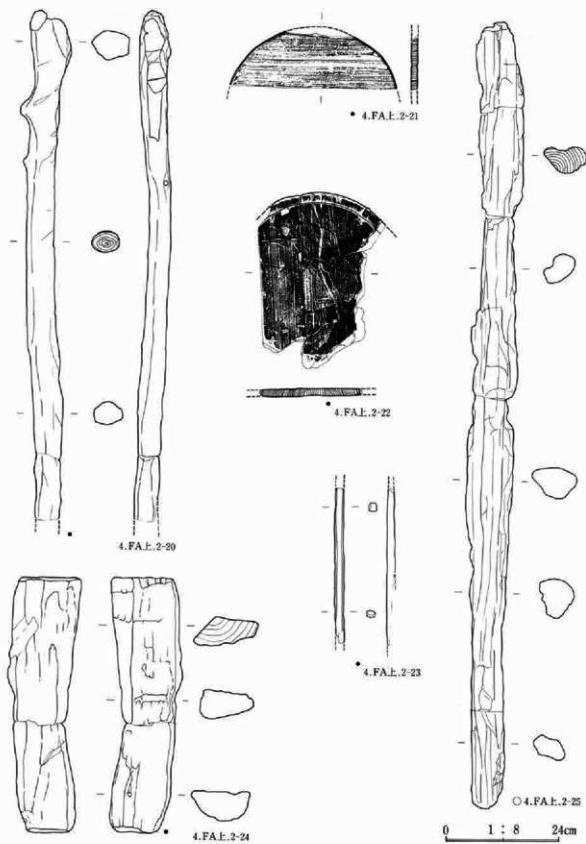
第227図 Hr-FA上第2水田出土遺物(2)

第5章 検出された遺構と遺物

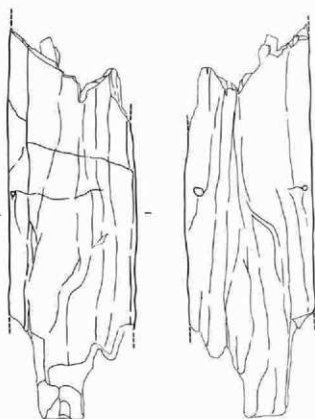


第228図 Hr-FA 上第2 水田出土遺物 (3)

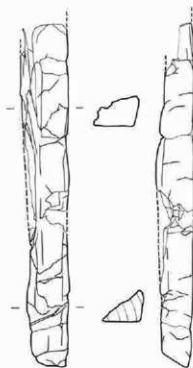
第3節 3～6区(東側谷地)で検出された遺構と遺物



0 1 : 4 15cm 第229図 Hr-FA上第2水田出土遺物(4)

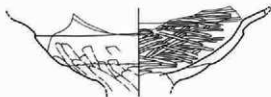


4.FA.E.2-26



4.FA.E.2-27

0 1 : 4 15cm



5.FA.E.2-1

0 1 : 3 10cm

第230図 Hr-FA上第2水田出土遺物(5)

5・6区 Hr-FA 上第3水田（第231～238図、PL-37・38・102～104）

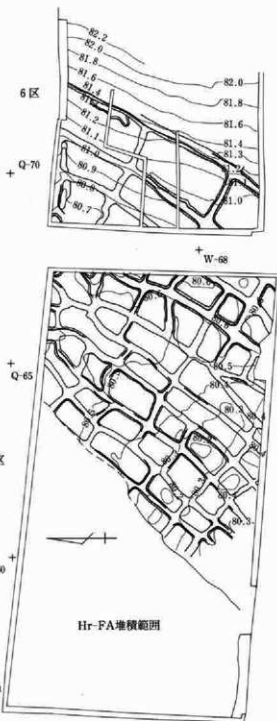
水田区画を検出した5区東半分においてHr-FA層は平面的に散在する程度で、6区の西側も同様な状態であり、調査時にはHr-FAより後出する水田の床土部分を検出したと考へてHr-FA上第3水田とした。本水田は後述するように、調査時にはHr-FA上第3水田と考へていたが、Hr-FA下水田との関係やHr-FAの純層との関係からHr-FA下水田と考へたほうが良いであろう。しかし、ここではかつて「朝鮮馬渠埋藏文化財調査事業団 年報-6-」のなかで異なった時期として報告したこともあり、混乱を避ける意味で両者別々に紹介したうえで修正しておきたい。

5区ではHr-FA(16)層と17層上面で確認され、アゼの高さは1cm以下から4cmと低いが、水田区画は全面にわたって確認され、水田の遺存状態は比較的良好である。アゼは等高線と直交するように設定し、その間を区切って区画としている。区画は等高線の直交方向に長軸を有する長方形が多いが、等高線のつまる部分では正方形に近い形状を呈している。取排水については、水路や水口が検出されておらず不詳である。

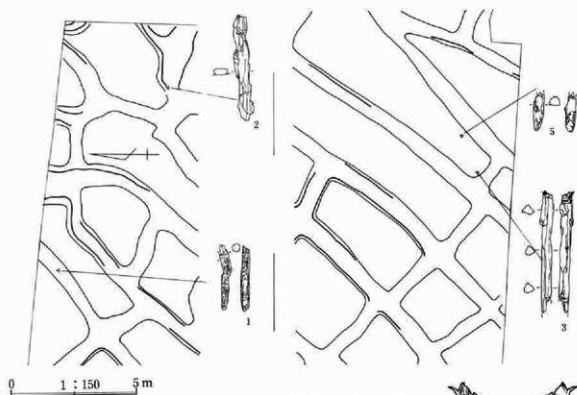
土器では水田に伴うものではなく、混入の状態ですり器壺類の細片が18点出土しているのみであり、図示し得るものはなかった。木製品では、打ち込まれた状態で出土した5区-1の杭に泥炭層の圧密化現象による折れが認められた。

6区でもアゼの高さは2～5cm程度であるが、区画は良好に検出された。区画はいずれも5区と同方向に長軸を有する長方形であるが、地形の関係から等高線との向きは逆となっている。取排水関係遺構は検出されていない。

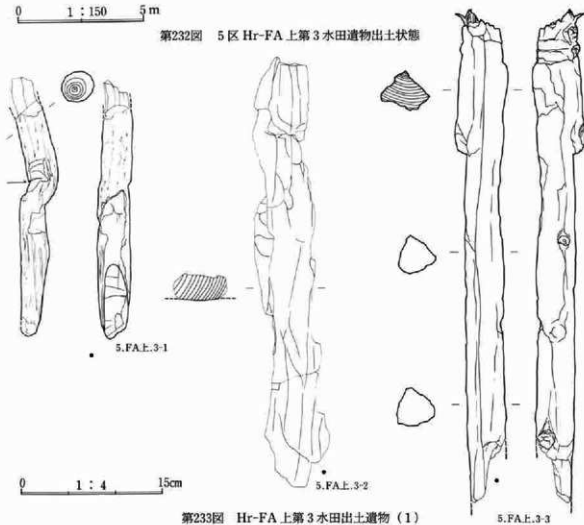
遺物は、土師器杯(6区-1・2)や甕(6区-6)、杭(6区-7・10・12など)、着柄鋤跡(6区-17)などを図示した。しかし、遺物は水田検出中に出土したもので、Hr-FA下から出土したわけではない。



第231図 5・6区 Hr-FA 上第3水田



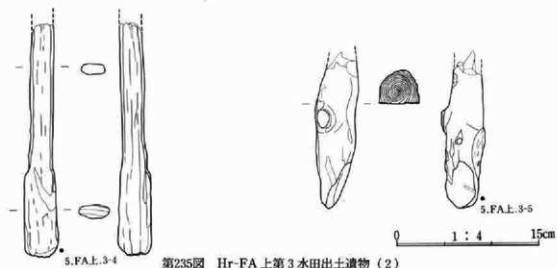
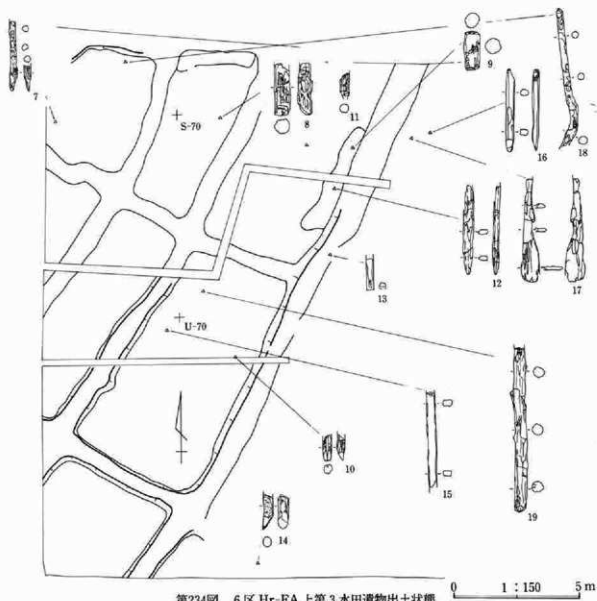
第232図 5区 Hr-FA 上第3水田遺物出土状態



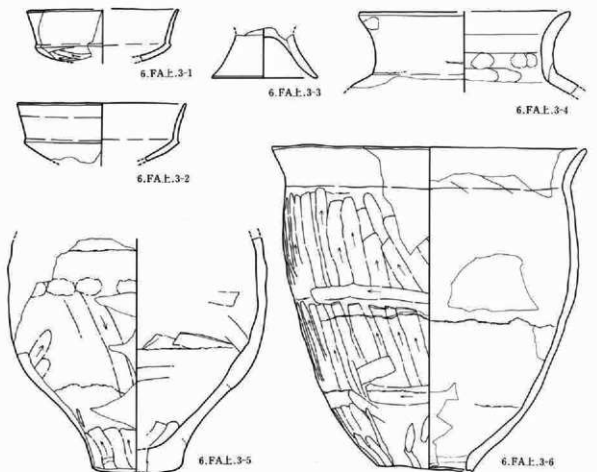
第233図 Hr-FA 上第3水田出土遺物 (1)

5.FA.E.3-3

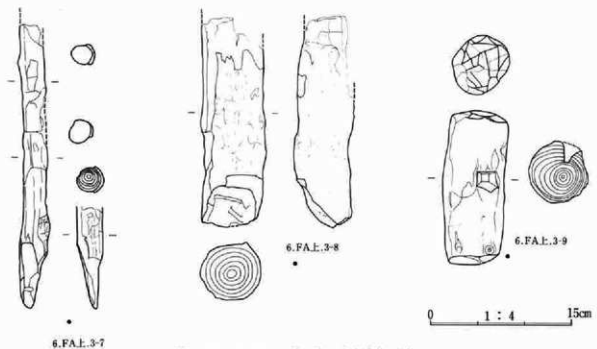
第3節 3～6区(東側谷地)で検出された遺構と遺物



第5章 検出された遺構と遺物



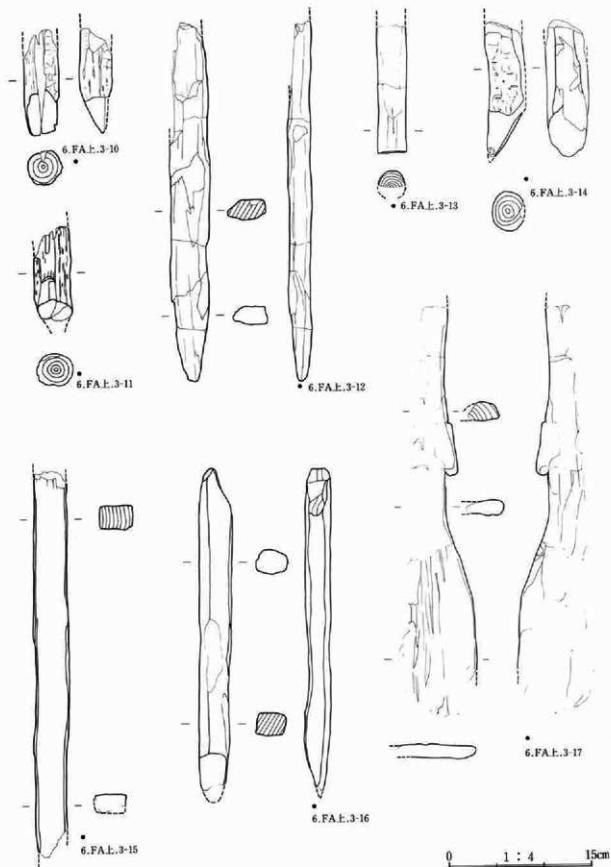
0 1 : 3 10cm



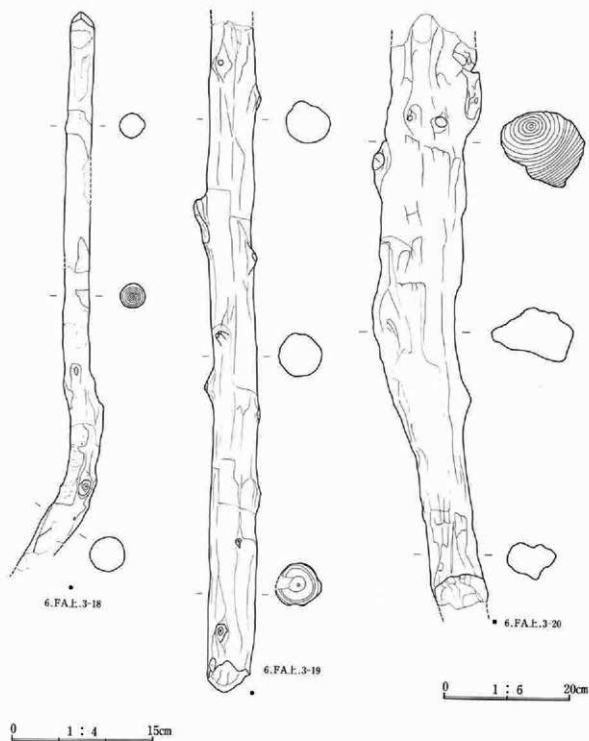
0 1 : 4 15cm

第236図 Hr-FA上第3水田出土遺物(3)

第3節 3～6区(東側谷地)で検出された遺構と遺物



第237図 Hr-FA 上第3水田出土遺物(4)



第238図 Hr-FA 上第3 水田出土遺物 (5)

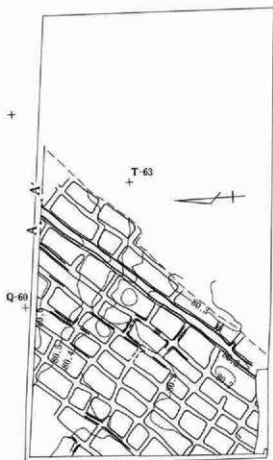
5区 Hr-FA 下水田（第239～241図、PL-39・104）

5区西側では1～2cmの厚さで Hr-FA 純層の堆積が認められ、その直下から水田が検出された。アゼは第3水田同様、北東から南西方向に設定した後、直交方向に区切って水田を区画している。区画の形状は谷地の延びる方向に長軸を持つ長方形を呈するが、西に向かうほど正方形に近くなる。本水田のアゼは下端幅40～50cm、高さ1～4cmであるが、東側では幅110～130cm、高さ10cm前後の大アゼが長さ29mにわたって確認されている。北壁セクション（第240図）に見るように、大アゼ中央はやや幅広く中央がわずかにくぼんでおり作業道としての使用があったことを伺わせる。配水関係では、第40区画と第41区画、第44区画と第45区画間の東側にアゼの途切れがあって水口と考えられる。この2カ所の水口と地形から考えて、配水は谷地両側から大アゼへ、北東から南西に掛け流していたと推定される。

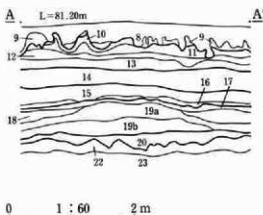
出土遺物に土器はなく、木材が4点出土し、うち1点（2）を図示した。また、Hr-FA 下水田は検出されなかったが、4区の Hr-FA 直下から出土した板状木製品（1）もここに図示した。

Hr-FA 上第3水田の項でも触れたように、調査時にも疑問があったものの、東側で Hr-FA 純層が認められないことから別の水田として調査した。しかし、5区では西と東で Hr-FA 下水田と Hr-FA 上第3水田が重複することなく平面的にも連続し、連続する同一水田区画においても比高差が全く認められない。また別の水田面とした場合、第3水田の耕作が西側の Hr-FA 純層に及ばなかったのが説明できないなど疑問点が多い。したがって、Hr-FA 上第3水田（5・6区）は上層の水田の耕作によって Hr-FA 純層の殆どが露込まれた状態であり、両者は同一時期の水田と判断されよう。このように考えると、Hr-FA 上第3水田の遺存の悪さも説明できる。（本文中の図は別個に扱ったが、付図とした全体図には2面を合成したものを掲載したので参照されたい。）本報告書作成以前（群馬県埋蔵文化財調査事業団年報—6—, 1987）に発表した内容をここで修正しておきたい。

従来 Hr-FA 上第3水田としていた水田を含めて Hr-FA 下水田とすると、谷地内で最も平坦な5区では Hr-FA 層を境として上下の水田でアゼの走向に変化が生じている。すなわち、As-B 下水田、Hr-FA 上第1水田、同第2水田では等高線と平行方向をアゼの基準とし、それを直交方向に区切って等高線と平行方向に長い長方形区画を設定している。これに対して Hr-FA 下水田と後に述べる As-C 上水田、As-C 下水田では等高線と直交方向をアゼの基準とし、さらに等高線と平行方向に区切って等高線と直交方向に長い長方形区画を作っている。5区西側における谷地上流側と下流側の比高差は、Hr-FA 下水田大アゼ西側において約1.3%（28.4m間隔で高低差36cm）。As-B 下水田のほぼ同じ場所において約0.6%（29.3m間隔で高低差17cm）と等高線と平行方向に長方形区画の長軸を有する As-B 下水田より Hr-FA 下水田の方が急傾斜となっている。水田耕作は水を使用することから等高線耕作が一般的であり、Hr-FA 下水田及びそれ以下の水田区画のありかたはそれに反して作られている。このような水田区画のありかたは、本遺跡の耕作土が泥炭質土であることから、水位が高く湿地であったため排水を重視していたのであろうか。そして Hr-FA 上第2水田以降、耕作土に基本的な変化は見受けられないが水位などに変化が生じた結果、区画の変更を行ったと考えられないであろうか。

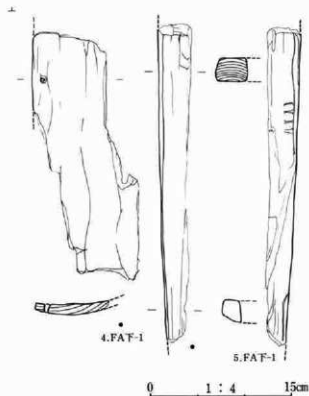


第239図 5区 Hr-FA 下水田



第240図 5区北壁 Hr-FA 下水田大アゼ断面図

- 5 区北壁大アゼ土層注記
- 8 黒褐色砂礫土層 (10YR2/2) 1m以下の浅間系の礫石を多く含む。砂がレンズ状に多く入る部分がある。
 - 9 a いわゆるピンクアッシュ層
 - 9 b As-B 層
 - 10 黒色シルト質壤土層 (10YR1.7/1) As-B 下水田耕作土。横位のアシ類は目立たないが、植物根遺体を多く含む。



第241図 Hr-FA 下水田出土遺物

- 11 黒色土層 (10YR1.7/1) 10層に比して明るい色調。横位のアシ類を少量含む。植物根遺体を含むが、10層より少量。
- 12 黒色土層 (10YR1.7/1) 11層より横位のアシ類を多く(20~30%)含む。
- 13 黒色土層 (10YR1.7/1) 土は少なく明褐色 (7.5YR5/6) を呈する横位植物遺体を断面積の約50%強含む。
- 14 黒色土層 (2.5YR2/1) 上面で Hr-FA 上第1水田を検出。他の土層に比して灰色味が強い。横位のアシ類は断面積の10%程と少ない。植物根遺体を多く含む。
- 15 黒色土層 (2.5YR2/1) 部分的に黒味が強い。横位のアシ類が主体を占める。植物遺体は明褐色 (7.5YR5/6) であるが、上層に比してやや黄色味を帯びる。Hr-FA のない部分又は堆積状態の悪い部分は、Hr-FA 軽石粒を含む。上面で Hr-FA 上第2水田を検出。
- 16 Hr-FA 層 植物根遺体を多く含むが、断面では目立たない。
- 17 黒色土層 (10YR1.7/1) 横位のアシ類を断面積の10%程含む。植物根遺体を含むが、断面で目立たない。Hr-FA 下水田耕作土。
- 18 黒色土層 (10YR1.7/1) 横位のアシ類を断面積の10~25%程含む。部分的に50%を越える。
- 19 a 黒色土層 (10YR1.7/1) 横位のアシ類の色調は黄褐色 (10YR5/6) を呈し、断面積の約10%を含む。
- 19 b 黒色粘質土層 19層より黒味が強い。
- 20 As-C を主体として少量の黒色土を均一に含む。上面で As-C 上水田を検出。
- 21 As-C 層 粒径は1mm程度が主体で、少量2mm前後を含む。
- 22 黒色土層 (10YR1.7/1) 色調・植物遺体の状況ともに19層と同様であるが、若干植物遺体を多く含む部分が多い。As-C 下水田耕作土。
- 23 黄褐色 (10YR5/6) の横位のアシ類を主体とし、黒色土 (10YR1.7/1) を断面積の15~20%程含む。

3～6区 As-C 上水田（第242～254図、PL-39・40・104～107）

As-C 上水田は、5区に於て Hr-FA 下水田調査終了後 As-C 下水田の調査にはいるために重機で As-C 層上面まで除去したところ、黒色土を含んだ As-C 層の中に帯状に純層が認められ、この面で平面調査を行ったところ小区画の水田区画が現れた。調査当初はこの水田区画を As-C 下水田の疑似畦畔とするか一時期の水田とすか迷ったところであるが、後述する木組遺構が検出されたこと、上層で同一区画を持つ水田を検出していないこと、As-C 下水田のアゼの一部が耕作によって削平されていることなどの理由から一時期の水田と判断した。しかし、耕作土上面すなわち水田面は19層中に存在すると考えられる。

3区西側の傾斜は一段と急になり、水田区画は東側でのみ検出された。検出面はアゼ部分が21層、区画内が20層である。アゼの高さはほとんどないが、黒色を呈する20層中に As-C の純層（21層）が白く目立ち、区画は明瞭に検出できた。アゼは等高線と平行方向に設定した後、直交方向に区切って区画を形成している。全形が判明する区画は一つしかないが、形状や規模は近似していると思われる。

出土遺物に水田に伴うものはないが、検出時に土師器杯類10点、甕類5点、木材31点が出土し、そのうち土師器壺1点と木製品5点を掲載した。

4区では Hr-FA 上第2水田以前の区画は、湾入部の地形に沿ってアゼは湾曲し区画も変形であったが、As-C 上水田では南北方向に長軸を有する長方形区画となっている。4区の長方形区画は、東西幅が3.5～1.5mと狭く、中には短軸と長軸の比率が1：4の区画も存在する。東側にはやや蛇行する幅1.2～1.4m、検出高10cmの大アゼが認められ、北端の等高線の一つまわっているところで西に方向を変えている。この大アゼを境に区画の形状に変化が生じ、4区では区画が大きくなっている。

検出中に出土した遺物としては、土師器杯類9点、壺類8点、須恵器蓋1点、甕類5点、木材33点が出土している。このうち図示した須恵器蓋（4区-1）と図示していない須恵器甕は奈良時代以降の所産であり、Hr-FA 上第2水田の耕作が深くまで及んでいたと考えられる。また、所属年代が問題となる曲物については不明である。いずれにしても、耕作によって下層と上層の遺物が混ざってしまうため、遺物から水田の時期を推定することは困難である。

5区も4区同様整った区画であるが、4区に比して1区画の幅が広く、より正方形に近くなっている。また、上層の Hr-FA 下水田と比べると幅、長さ共に1区画当りの規模が大きくなっている。したがって、5区全体で確認された区画数は Hr-FA 下水田より少なくなっている。アゼの走向は、本遺跡の中では基盤目状に近く、どの方向のアゼを基準としたか判然としない。Hr-FA 下水田と異なり大アゼは見あたらないが、大アゼがあったのと同一場所には小アゼに挟まれた2条の排水路と考えられる溝が検出された。溝の規模は幅15～60cm、深さ5～10cmで長さ20mにわたって検出された。区画はこの水路の両側で幅狭く、離れるにしたがって幅広くなる傾向が認められる。5区の東側には6区北東隅から続く65号溝があり、アゼを破壊していることから水田より新しいと考えられる。溝埋土には As-C が多量に含まれており、水田に近い時期の所産と考えられる。この溝はかなり蛇行していることから人為的な感じを受けない。また、埋土中からは種子が出土している。

水田検出中には土師器甕1点、木材27点が出土し、木製品10点を図示した。図示した杭のうち4区-7、5区-3、5区-5、5区-8、5区-10は打ち込まれた状態で検出された。但し杭の場合、検出面と打ち込まれた面が異なることが多く、本水田面に伴うか否かは不明である。杭のうち5区-6、5区-9には泥炭層の圧密化現象によると思われる屈曲が認められる。⁽¹⁾

6区アゼの走向は5区と同様で、地形の関係から縁辺に行くほど幅が狭くなっている点が異なる程度であ

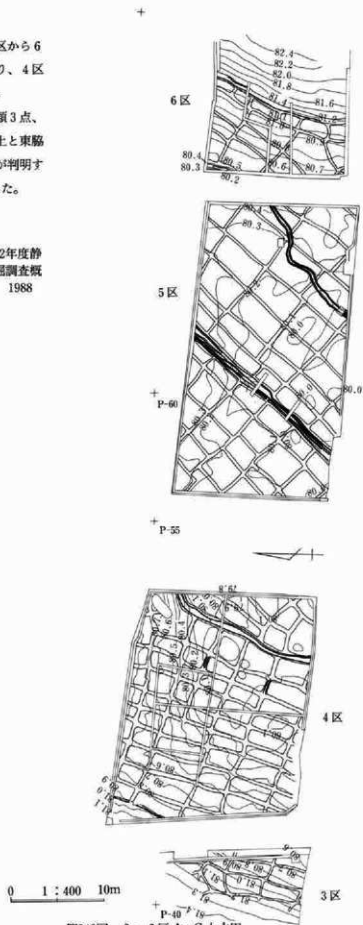
第5章 検出された遺構と遺物

る。したがって、As-C上水田では3区から6区までのほとんどの区画が長方形となり、4区画においても変形区画が認められない。

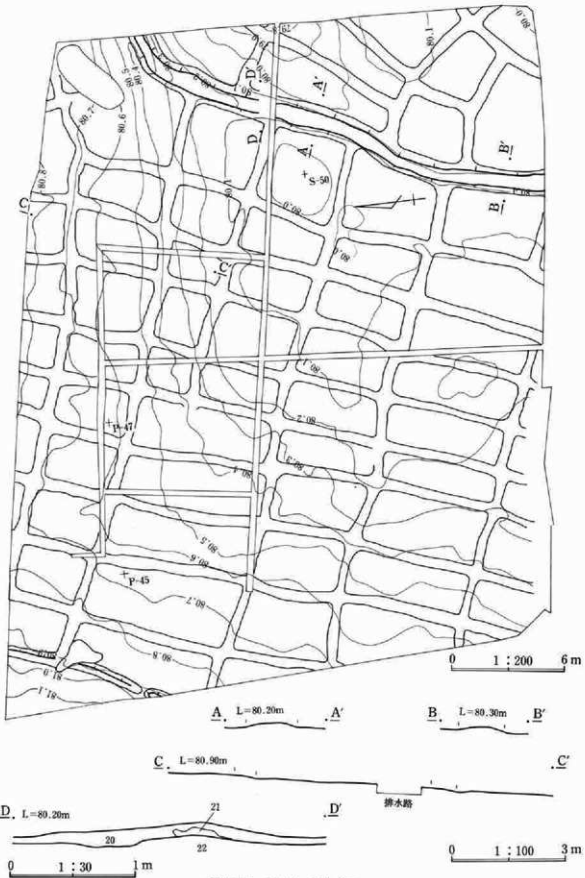
検出中に出土した遺物は土師器壺壺類3点、木材11点であり、このうち東端のアゼ上と東脇から出土した土師器壺破片が全体形状が判明するまで接合できた6区-1のみを図示した。

註

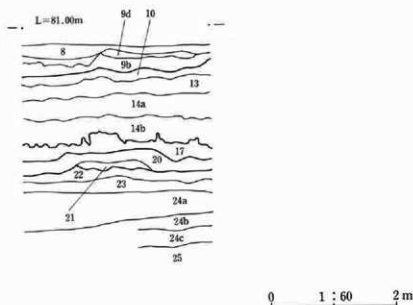
1. 栗野 克巳ほか 長崎遺跡—昭和62年度静岡バイパス(長崎地区)埋蔵文化財発掘調査概報—静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988



第242図 3～6区 As-C上水田



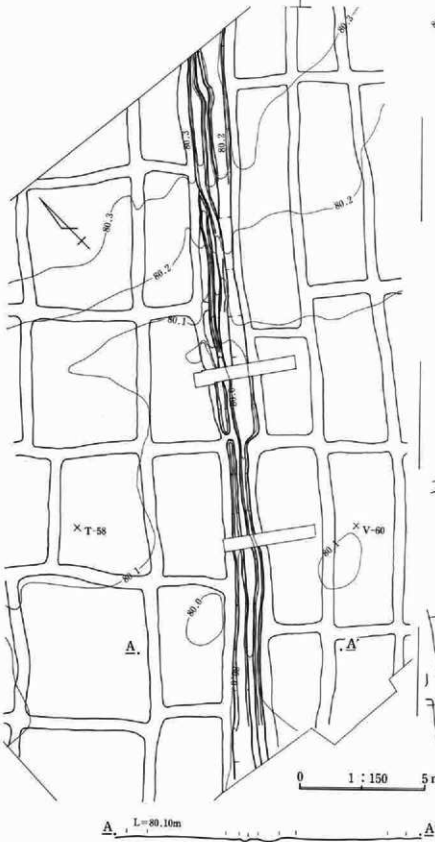
第243図 4区As-C上水田



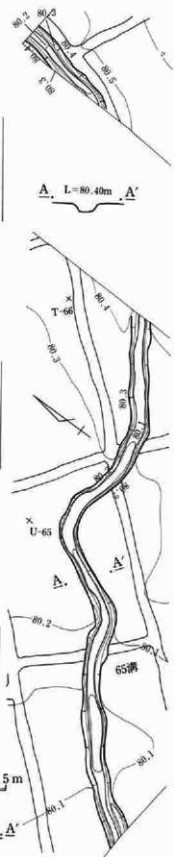
第244図 4区南壁As-C上水田大アゼ断面図

- 4区南壁大アゼ土層注記
- 8 黒褐色砂壤土層 1mm以下の浅間系の礫石を多く含む。砂がレンズ状に多く入る部分がある。
 - 9a いわゆるピンクアッシュ層
 - 9b As-B層
 - 10 黒色シルト質壤土層 As-B 下水田耕作土。横位のアシ類は目立たないが、植物根遺体を多く含む。
 - 11 黒色土層 10層に比して明るい色調。横位のアシ類を少量含む。植物根遺体を含むが、10層より少量。
 - 12 黒色土層 11層より横位のアシ類を多く(20~30%)含む。
 - 13 黒色土層 土は少なく明褐色(7.5YR5/6)を呈する横位植物遺体を断面積の約50%含む。
 - 14a 黒色土層 分解の進んだ植物根遺体を多く含む。4区では16層(Hr-FA)を踏み込んでおり、Hr-FAを少量含む。
 - 14b 黒色土層 分解の進んだ植物根遺体を多く含む。Hr-FAと17層をブロック状に含む。
 - 17 黒色土層 Hr-FA 上第2水田耕作土。横位のアシ類を断面積の10%程含む。植物根遺体を含むが、断面では目立たない。
 - 20 As-C を主体として少量の黒色土を均一に含む。
 - 21 As-C 層
 - 22 黒色土層 植物遺体を多く含む。As-C 下水田耕作土。
 - 23 5区と異なり黒色粘質土である。黄褐色の横位のアシ類も少ない。
 - 24a 黒褐色粘質土層 縦位の植物遺体を少量含む。
 - 24b 濃い黄褐色の植物遺体層 植物遺体の断面積の約30%含む。
 - 24c 濃い黄褐色の植物遺体層 黒色粘質土を挟む。縦・横位の植物遺体を多量に含む。
 - 25 黒色粘質土層 植物遺体を少量含む。

第3節 3～6区(東側谷地)で検出された遺構と遺物

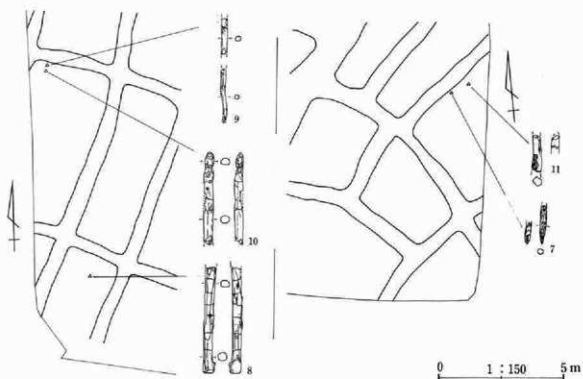


第245図 5区As-C上水田水路

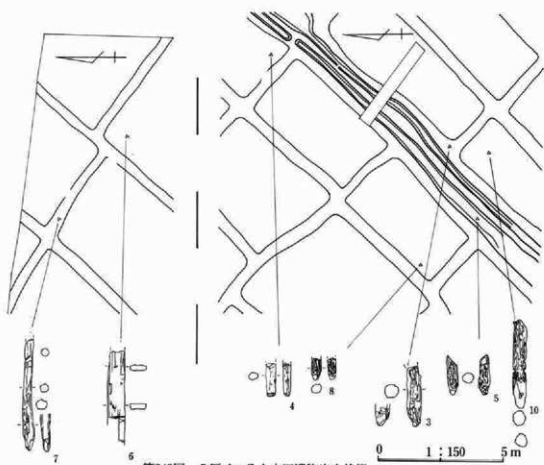


第246図 5・6区65溝

第5章 検出された遺構と遺物

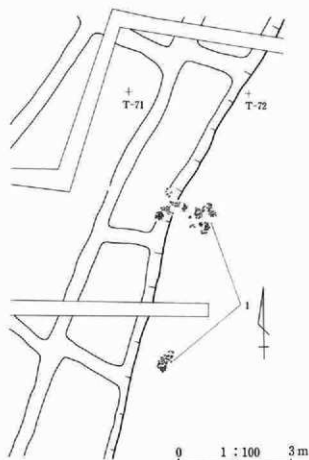


第247図 4区 As-C 上水田遺物出土状態

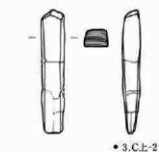


第248図 5区 As-C 上水田遺物出土状態

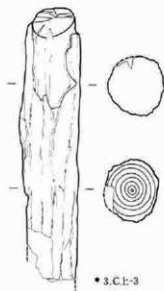
第3節 3～6区（東側谷地）で検出された遺構と遺物



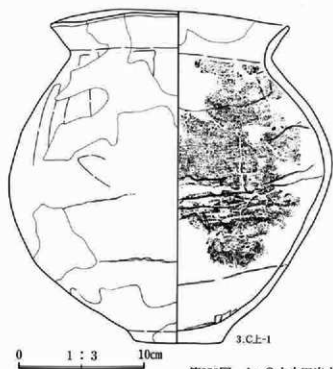
第249図 6区As-C上水田遺物出土状態



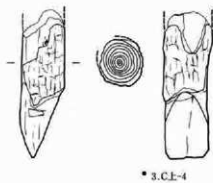
• 3.C.上-2



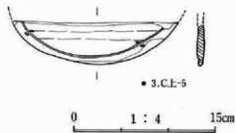
• 3.C.上-3



第250図 As-C上水田出土遺物（1）

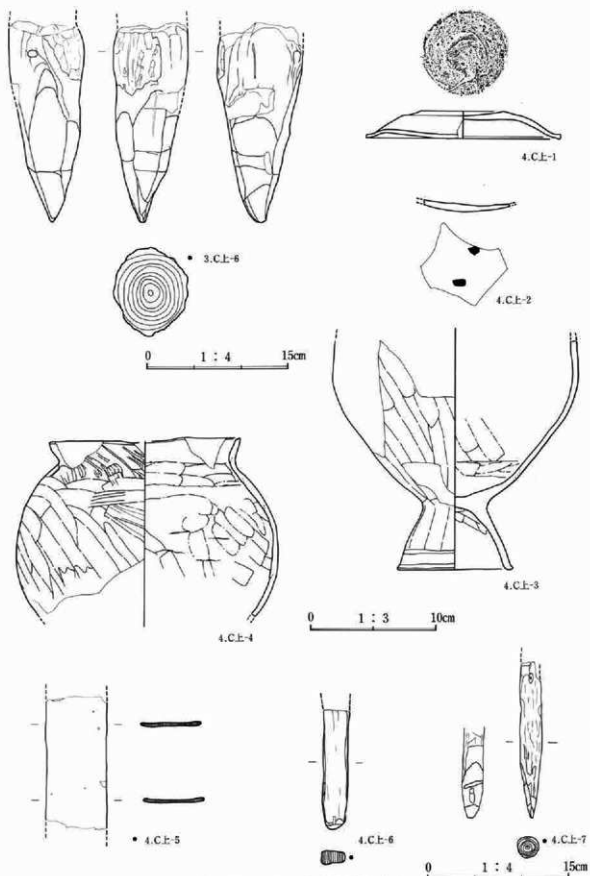


• 3.C.上-4



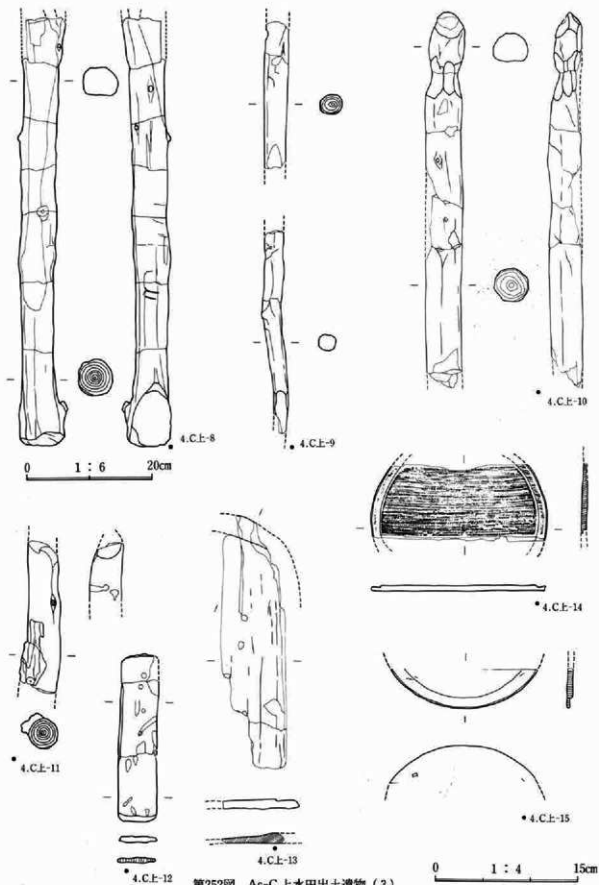
• 3.C.上-5

第5章 検出された遺構と遺物

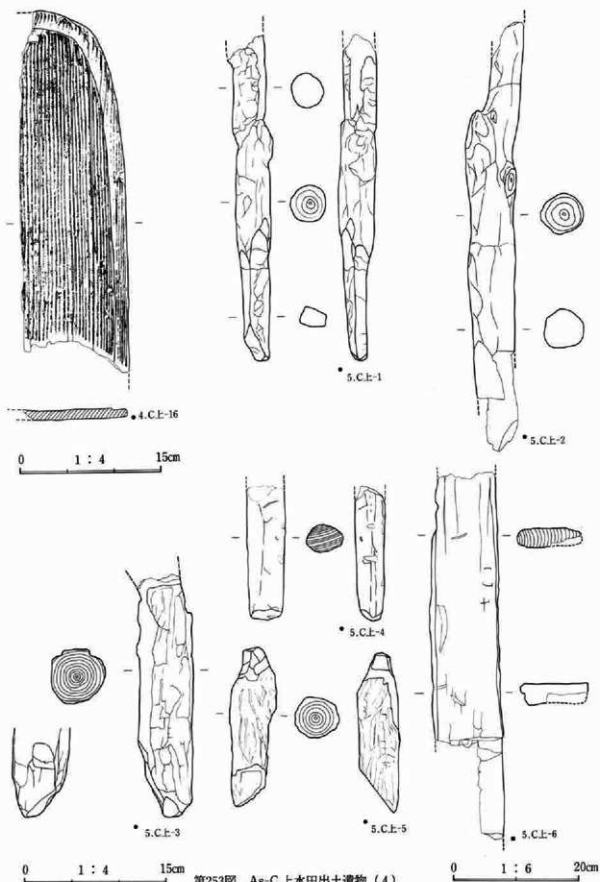


第251図 As-C上水田出土遺物(2)

第3節 3～6区（東側谷地）で検出された遺構と遺物

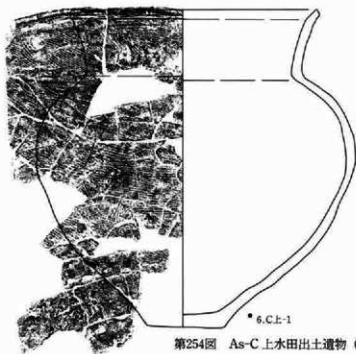
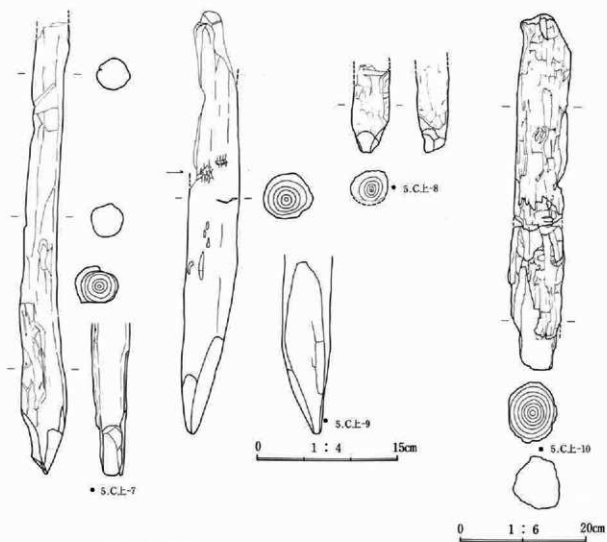


第252図 As-C上水田出土遺物(3)



第253図 As-C上水田出土遺物(4)

第3節 3～6区（東側谷地）で検出された遺構と遺物



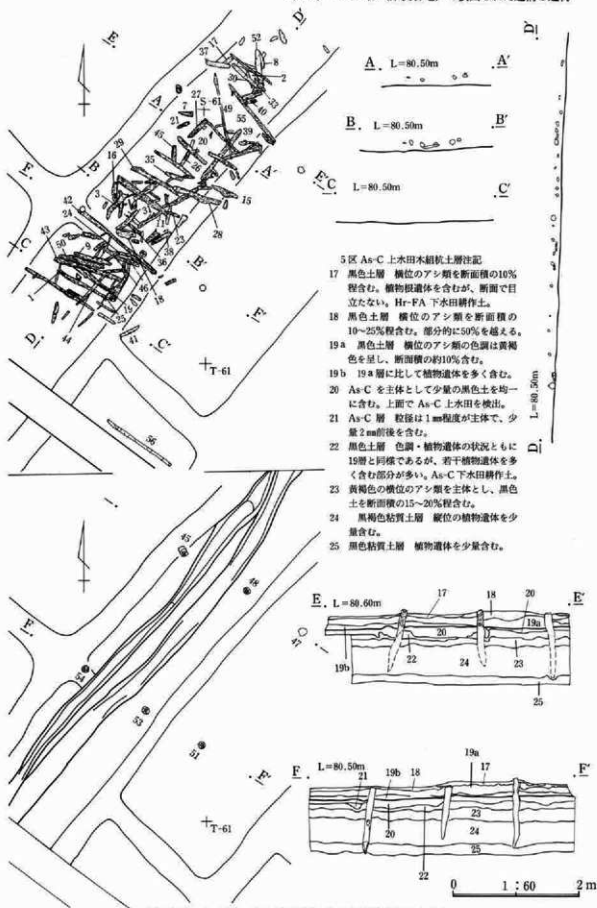
第254図 As-C上水田出土遺物（5）

5区 As-C 上水田木組 (第255~266図、PL-41・42・107~112)

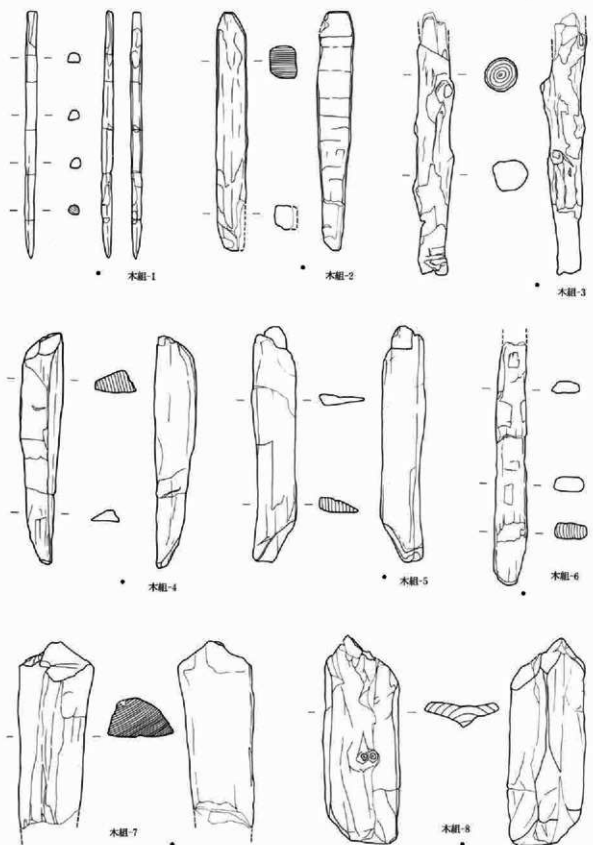
5区 Hr-FA 下水田調査終了後、As-C 上水田の調査を行うために大アゼを除去し始めたところ、水路をまたぐように木製品が組まれた状態でまとまって出土した。木組は水路と平行に2列棒状木製品を置き、それと直交する方向に棒状木製品を等間隔に並べている。並べている木製品はいずれも棒状で、杓や杓穴は一つも認められず、板材も1枚も認められない。また、遺存が悪いこともあろうが明瞭な調整痕もなく、断面形状も一定でないなどさほど調整を施していない。並べている棒状製品と杭とを組んだ痕跡は現状では認められず、どのような構築物であったのか不明である。木組内には2.5m幅、1.05~1.15m間隔で直径10cm、長さ1m前後の3本の杭を2列、計6本が水田確認面から65~80cm打ち込まれた状態で検出された。6本の杭を水路をまたぐように打ち込む場合、両側に水路と平行に3本ずつ配置するのが通常と考えられるが、この場合は中央と西側の間に水路が位置し、木組自体も水路部分のみで検出されている。6本の杭は広葉樹(コナラ節、クヌギ節)で53、54には泥炭層の圧密化現象による繊維の屈曲が認められる。特に54には3カ所認められ、上端は特に著しい。

この木組からは構築部材が128点出土し、小片を除く56点を掲載した。しかし、本遺構の木製品は遺存が悪いため整理時までには破損し接合もできない状態になったものも多く、図示した中でも出土状態図より遺物実測図の方が短くなっている製品がある。

水田内で発見される木組の性格として、大アゼ補強材、橋、鳥追いなどの小屋などが考えられるが、本遺構の場合、Hr-FA 下水田大アゼの一部でしか検出されないうえに杭が少ないため補強材とは考えにくく、橋にしては部材の方向が異なっているうえに間隔が開き過ぎている。また、小屋とした場合には外側の杭が2.5m間隔であるのに南北のみ間に1本ずつ杭を配していることや、検出された部材から床、柱、土台、屋根、壁材などの建築材料が見いだせないなど否定的な要素が多い。したがって現段階において用途は不明としておきたい。しかし、可能性としては人間の姿を隠せる程度の簡単な施設や収穫物や道具の借り置き場の施設などが最も高いであろう。

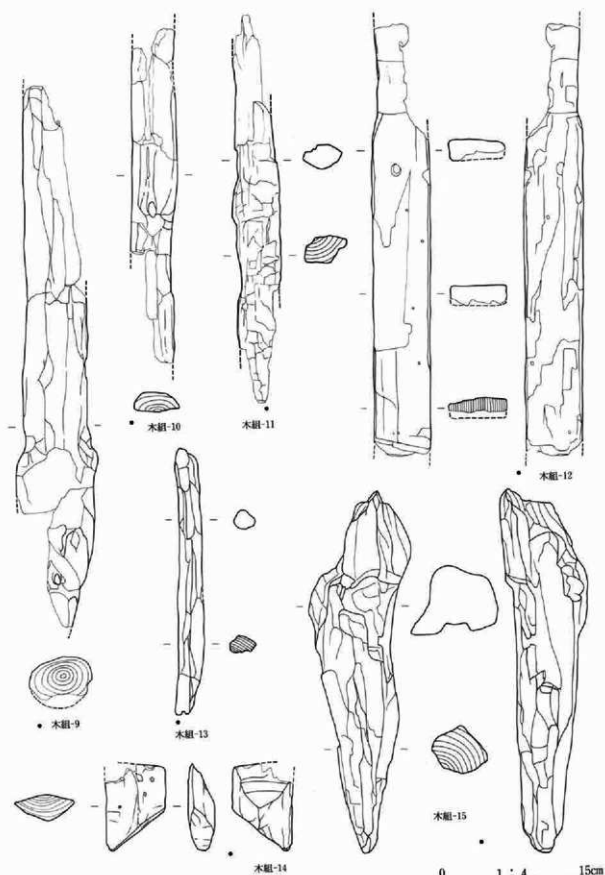


第255図 As-C 上水田木組遺構 (下は構築部材除去後)

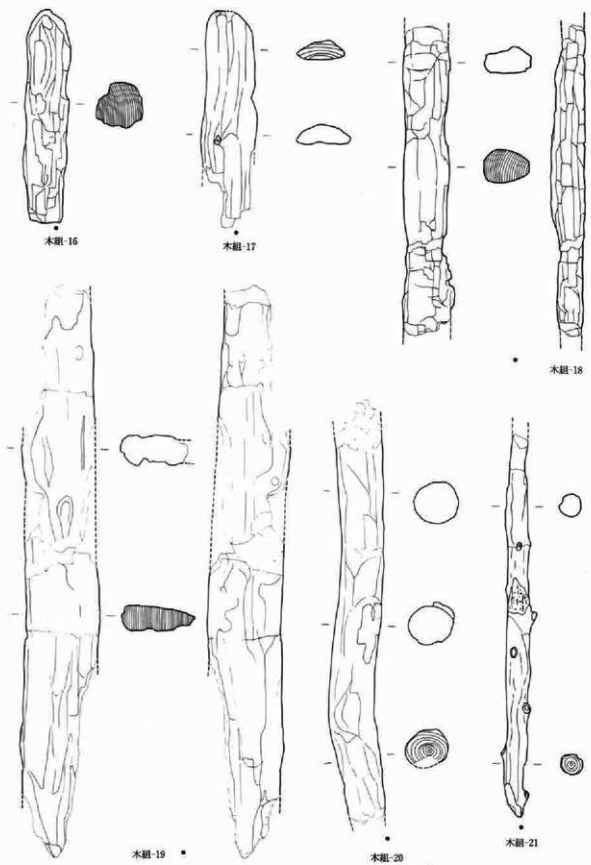


第256図 As-C上水田木組遺構出土遺物(1)

0 1 : 4 15cm

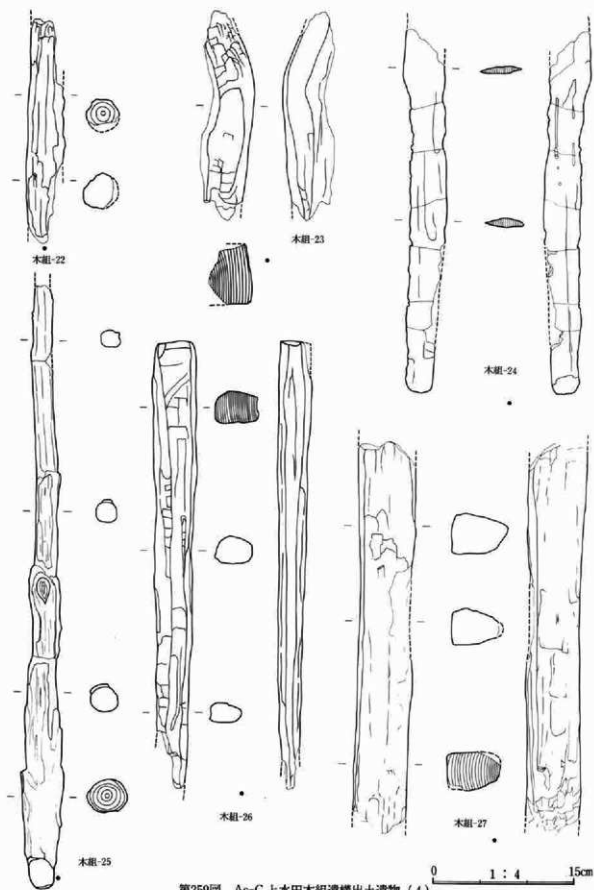


第257図 As-C上水田木組遺構出土遺物(2)

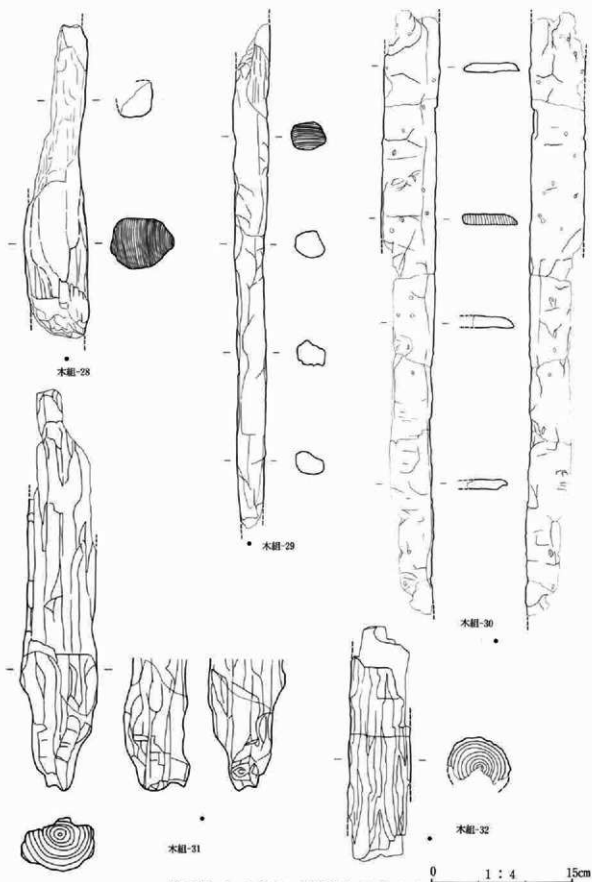


第258図 As-C上水田木組遺構出土遺物(3)

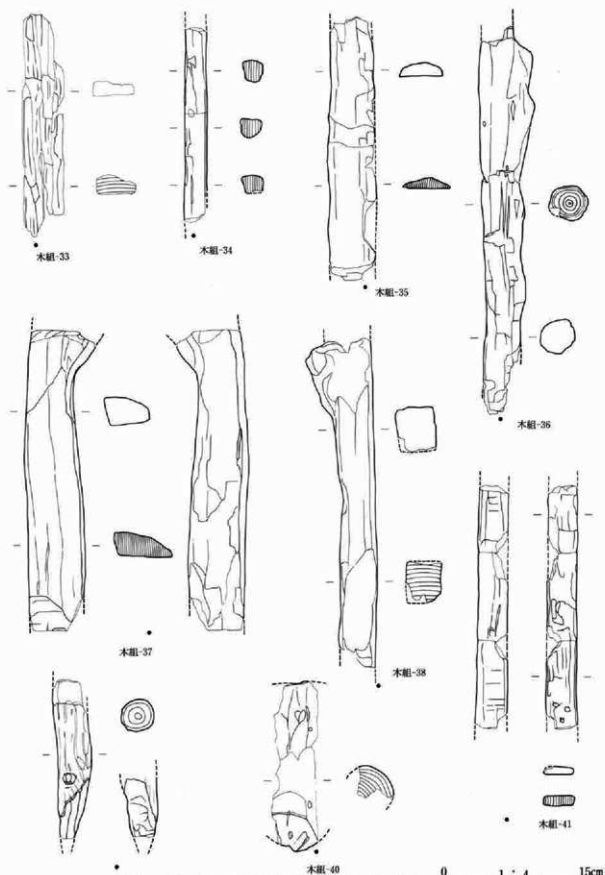
第3節 3～6区（東側谷地）で検出された遺構と遺物



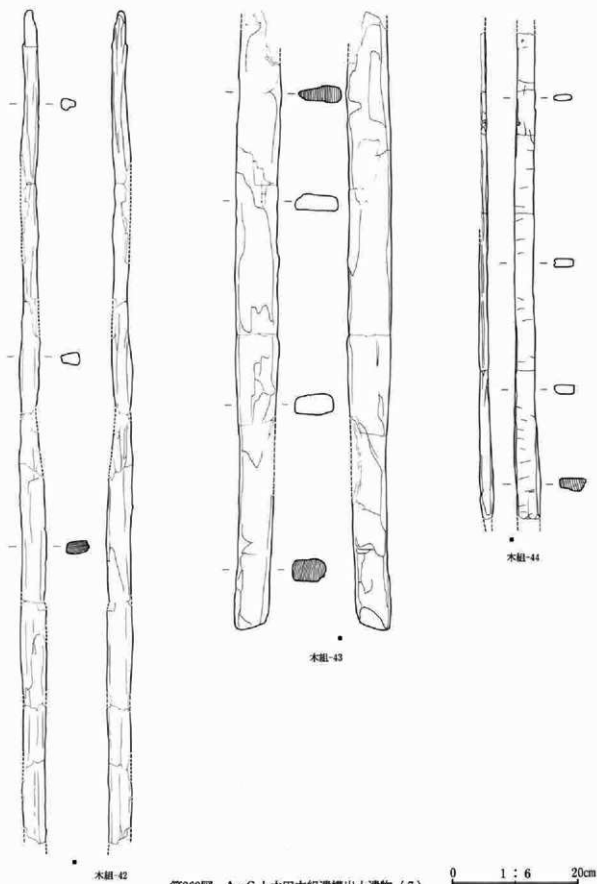
第259図 As-C上水田木組遺構出土遺物(4)



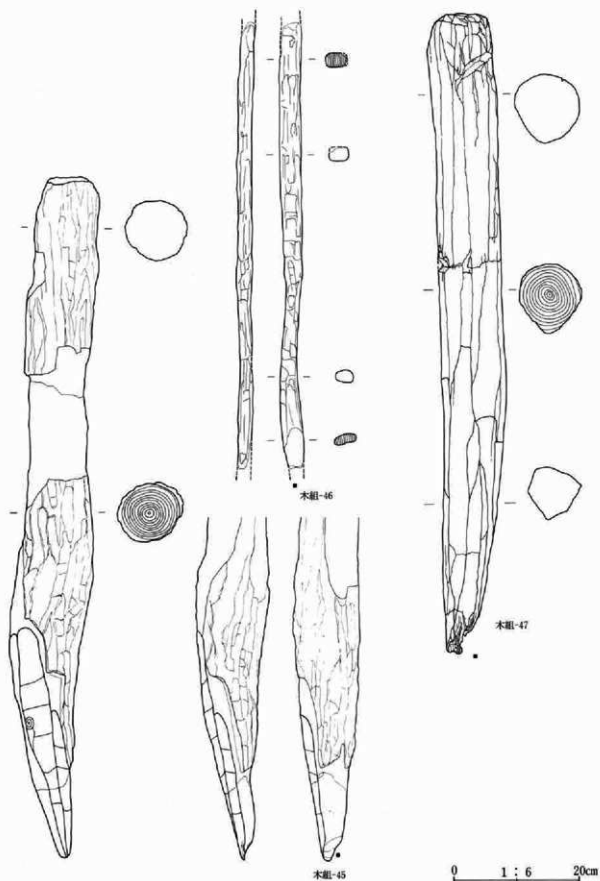
第260図 As-C上水田木組遺構出土遺物(5)



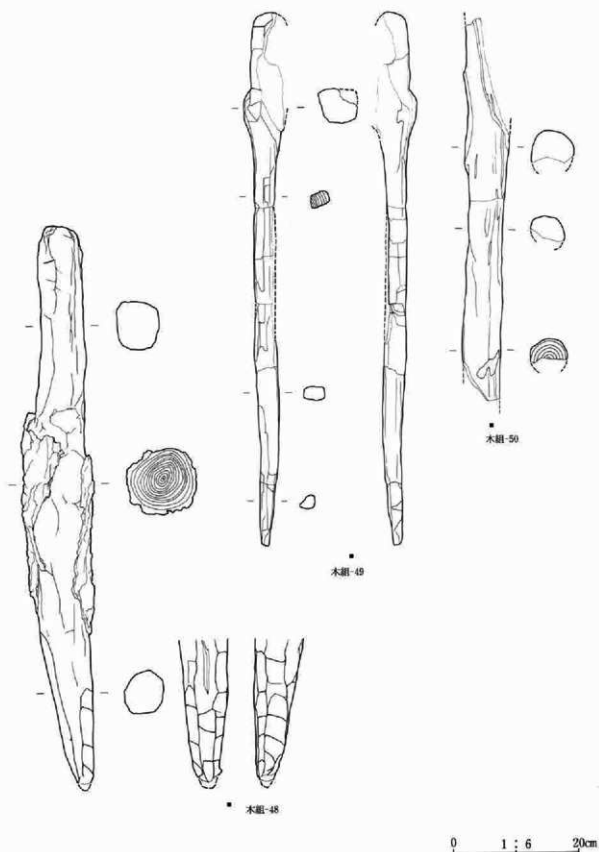
第261図 As-C上水田木組遺構出土遺物（6）



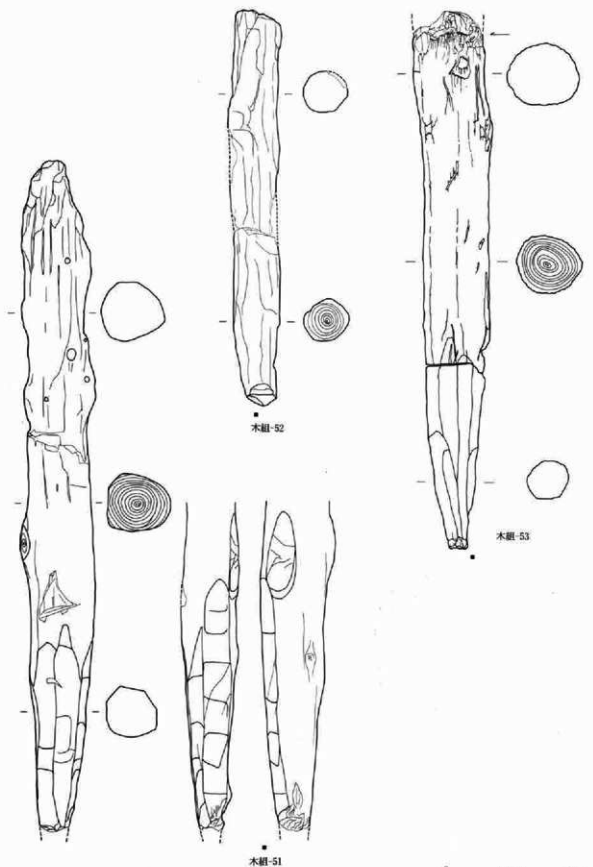
第262図 As-C上水田木組遺構出土遺物(7)



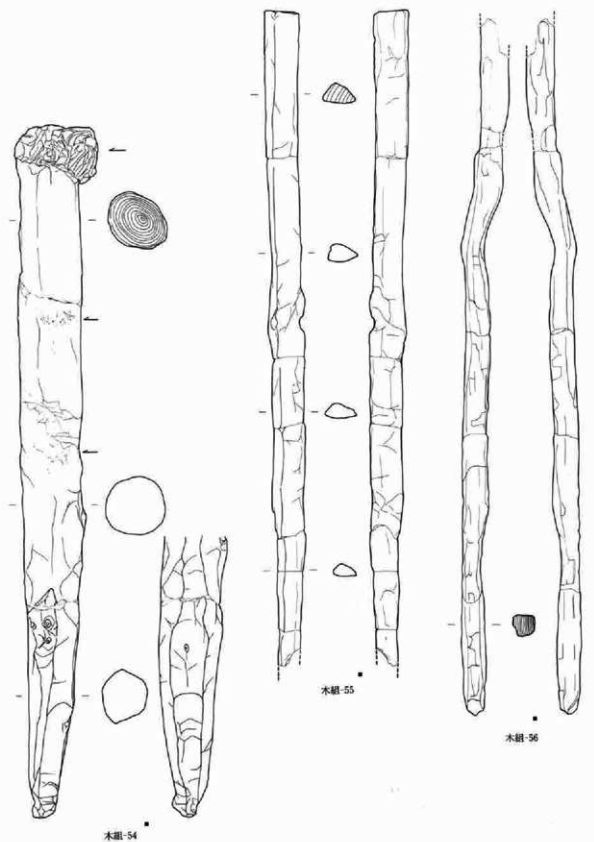
第263図 As-C上水田木組遺構出土遺物（8）



第264図 As-C上水田木組遺構出土遺物(9)



第265図 As-C上水田木組遺構出土遺物 (10)



第266図 As-C上水田木組遺構出土遺物 (11)

3区～6区 As-C 下水田(第267～273図、PL-44～47・113)

As-C 上水田調査終了後、黒色土を含む As-C 層(20層)と As-C 純層(21層)を除去したところ、3～6区にかけて As-C 上水田と同一カ所にアゼが検出された。アゼの走向と区画は5区の一部を除いて一致している。

3区では、アゼの高さは1・2cmと低く、検出された範囲も南西隅に限られている。当時は検出範囲より多少西に広がっていたと思われるが、傾斜が急なため Hr-FA 上水田ほどの拡がりはなかったであろう。検出時には土師器壺頸類7点、木材9点が出土し、古式土師器の3点(3区1～3)を掲載した。

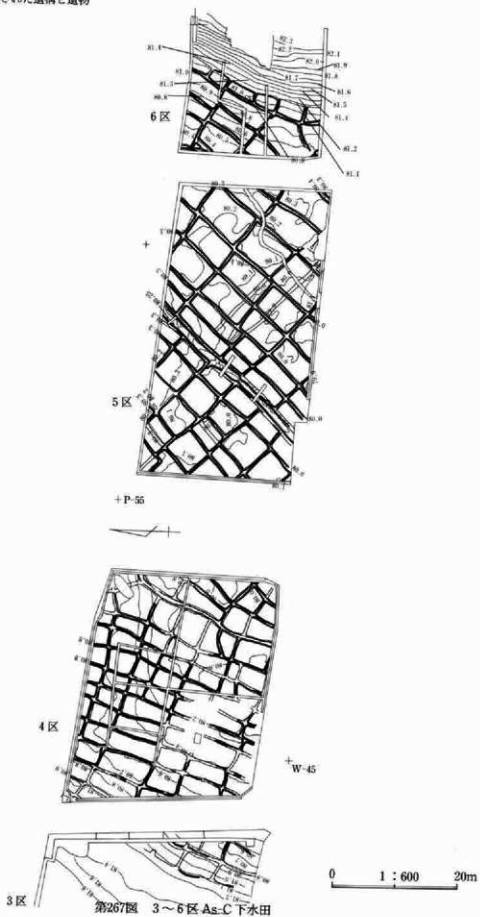
4区は西寄り中央がぬかってしまいアゼが検出できなかったが、アゼの走向と区画は同一である。区画は、等高線が南北に走行する西側では南北に狭小な長方形を呈し、等高線が東西に走行する北側では正方形に近い形状となる。また、等高線が複雑に蛇行する西側は変形区画となっている。なお、東側の大アゼは幅70～110cm、高さ10cmと多少規模が縮小しているものの同一場所に存在し、地形に沿って東に湾曲している。検出時に弥生時代後期の土器細片1点、木材6点が出土したが掲載し得る個体はなかった。弥生時代後期の土器片は6区 As-C 下水田耕作土下でも出土しており、As-C 下水田の時期ではなく、耕作土下の時期を示すものと考えられる。

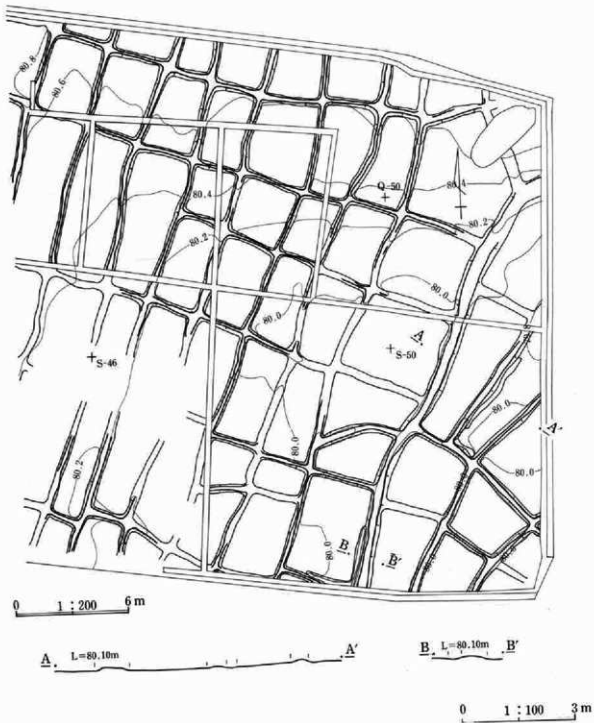
5区では区画形状、面積、水路の位置と規模はほとんど As-C 上水田と同様であるが、水路西の第87・88・96区画、大アゼ東の中央から南東にかけての第118・123・124・129・130・135・138区画に偏平な小アゼが検出された(PL-46)。水田面上には部分的であるが As-C 純層が残り、足跡状のくぼみ内には全て As-C 純層が堆積していることから As-C 上水田の耕作は同下水田の水田面にまでほとんど達していないと考えられる。このため、偏平なアゼは As-C 下水田の段階では偏平ではなかったが、As-C 上水田の段階でこの部分のアゼが踏襲されなかったことから耕作によって削平されたと解釈される。しかし、偏平なアゼと遺存の良いアゼが同時期に存在したとすると、その間の区画が非常に狭くなってしまふことを重視すれば、偏平なアゼが他の区画のアゼと直線的に通っていることから、当初は偏平なアゼの場所で区画を設定したが、As-C 降下によって廃棄する直前にアゼの付け替えをおこなっていた可能性も考えられよう。

5区の水田面は中央が高く周辺部が低い傾向があり、良好な例として第102区画の状態を第270図に示した。アゼ際のくぼみが顕著なものは、第94区画西側のように溝状を呈する所もある(PL-46)。また、水田面には足跡状の落ち込みが無数に認められ、良好な第102区画周辺のみ精査を行った(第271図)。その結果、足跡状のくぼみは、アゼ上には少なく直線的に並ぶ傾向が伺えた。

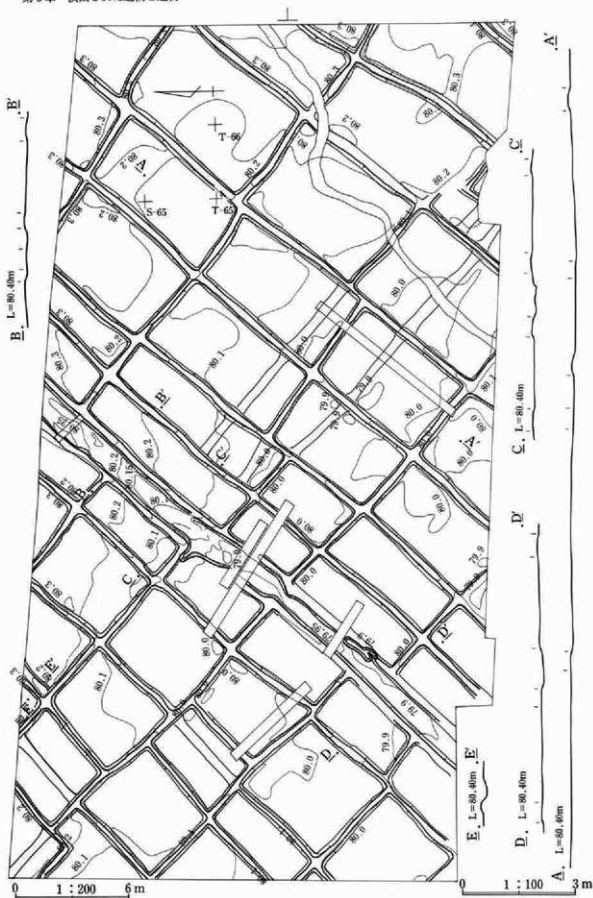
遺物は、検出時に土師器細片1点、木器類4点が出土し、杭を4点掲載した。杭のうち5区1～3はアゼに打ち込まれた状態で検出された。しかし、杭が打ち込まれた時期が As-C 上水田か本水田であるかは判断としない。

6区では北西隅に若干アゼの違いが認められるものの、アゼの走向と区画にはほとんど変化は認められない。アゼの高さは3cm～8cmを測り、台地に近くなるほどアゼの遺存は悪くなっている。検出時に木器類が3点出土したが実測し得る個体はなかった。

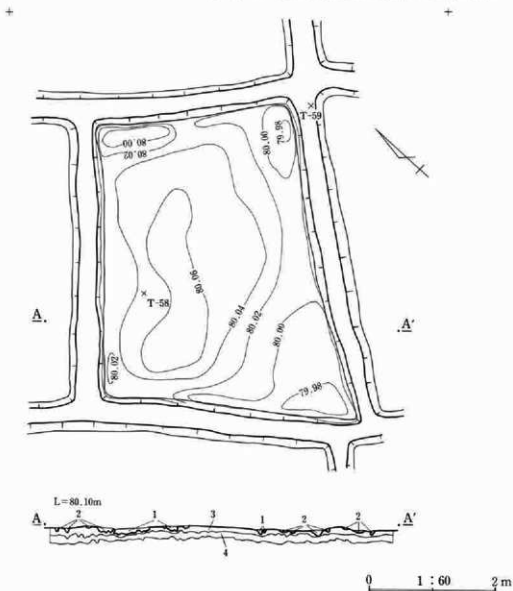




第268図 4区 As-C 下水田



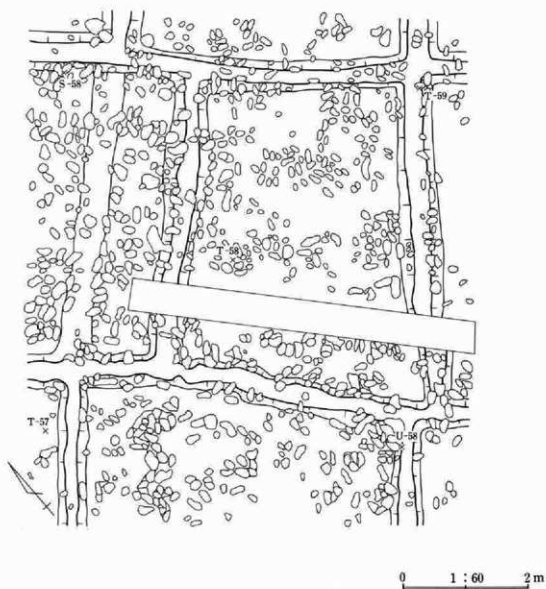
第269図 5区As-C下水田(水色はAs-C上水田に踏襲されていないアゼ)



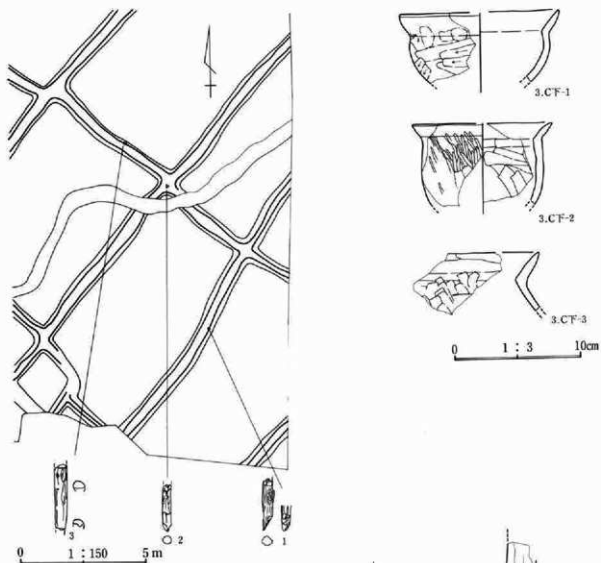
5区 As-C 下水田部分別土層注記

- 1 As-C を主体として少量の黒色土を均一に含む。上面で As-C 上水田を検出。
- 2 As-C 層 粒径は 1mm 程度が主体で、少量 2mm 前後を含む。
- 3 黒色土層 (10YR1.7/1) 植物遺体を断面積の 15% 程度含む。As-C 下水田耕作土。
- 4 黄褐色 (10YR5/6) の横位のアサ類を主体とし、黒色土 (10YR1.7/1) を断面積の 15~20% 程度含む。

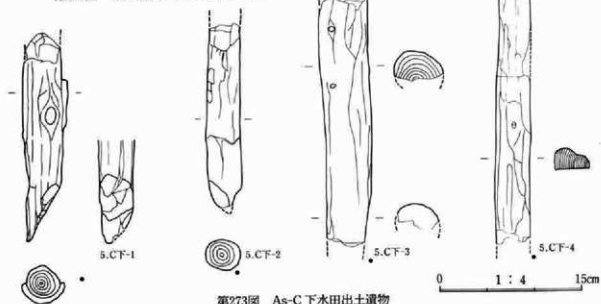
第270図 5区 As-C 下水田第102号区画



第271図 5区As-C下水田第102号区画周辺足跡状くぼみ



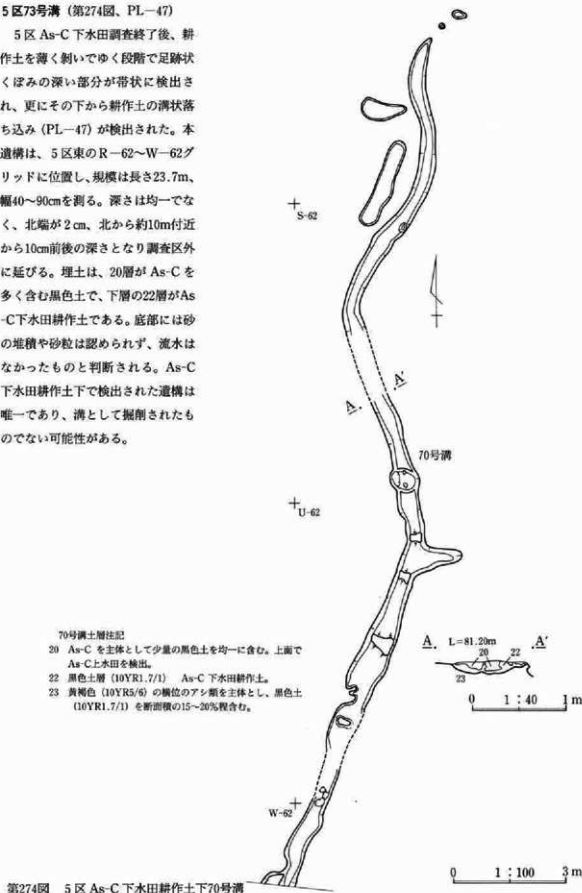
第272図 5区As-C下水田杭出土状態



第273図 As-C下水田出土遺物

5区73号溝 (第274図、PL-47)

5区As-C下水田調査終了後、耕作土を薄く剥いでゆく段階で足跡状くぼみの深い部分が帯状に検出され、更にその下から耕作土の溝状落ち込み (PL-47) が検出された。本遺構は、5区東のR-62~W-62グリッドに位置し、規模は長さ23.7m、幅40~90cmを測る。深さは均一でなく、北端が2cm、北から約10m付近から10cm前後の深さとなり調査区外に延びる。埋土は、20層がAs-Cを多く含む黒色土で、下層の22層がAs-C下水田耕作土である。底部には砂の堆積や砂粒は認められず、流水はなかったものと判断される。As-C下水田耕作土下で検出された遺構は唯一であり、溝として掘削されたものでない可能性がある。



70号溝土層注記

- 20 As-C を主体として少量の黒色土を均一に含む。上面でAs-C上水田を検出。
- 22 黒色土層 (10YR1.7/1) As-C下水田耕作土。
- 23 黄褐色 (10YR5/6) の横位のアシ類を主体とし、黒色土 (10YR1.7/1) を断面積の15~20%程含む。

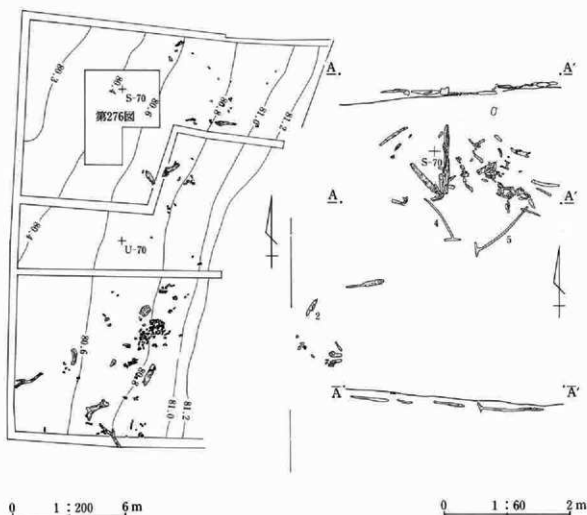
第274図 5区As-C下水田耕作土下70号溝

4～6区 As-C 下水田耕作土下（第275～279図、PL-48・49・113・114）

4区南側中央をAs-C下水田耕作土下の試掘として22層～25層上面まで掘り下げたが遺構は検出されず、木本性の根状を呈するものと自然木が散在的に検出された。

5区では、調査を先行した6区に於いて木器類が多量に出土していたことから、木器類の広がりをつかえることを目的として東側から調査を進めた。その結果、木器類は検出されず、4区で検出されたものと同様な根状のものが多量に検出された。この材は、当時の環境から調査中にはハンノキの可能性はあるのではないかと考えていたが、樹種同定の結果（樹種同定報告図版29）にあるようにハンノキではなく広葉樹の根であることが判明した。現在この根の同定は不可能であるが、As-C下水田開田以前にどのような木が繁茂していたかは興味のあるところである。

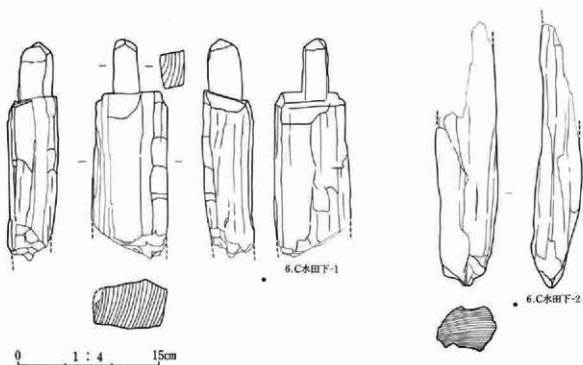
6区ではAs-C下水田耕作土下から多量の木材が出土した。木材には加工痕のない自然木を主体として226点検出したが、図示し得たのは完型と完型に近い2本の楸柄（4・5）含めて5点のみである。また、木材の中には樹木の皮もあり、西南部に集中して検出されている。水田が検出された層に比べると圧倒的に自然木が多く、As-C下水田以前の水田が存在しないことの傍証ともなる。



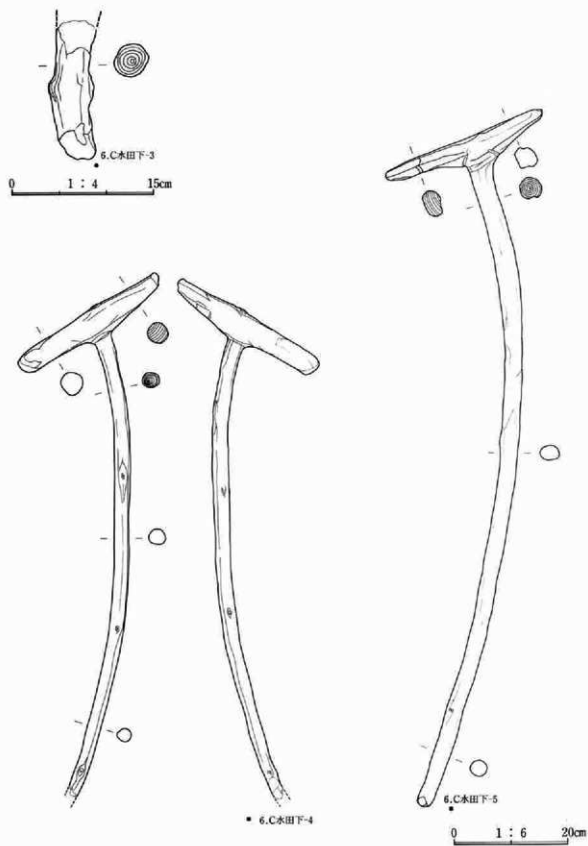
第275図 6区 As-C 下水田耕作土下材出土状態 (1) 第276図 6区 As-C 下水田耕作土下楸柄出土状態



第277図 6区 As-C 下水田耕作土下材出土状態 (2)



第278図 As-C 下水田耕作土下出土遺物 (1)



第279図 As-C下水田耕作土下出土遺物（2）

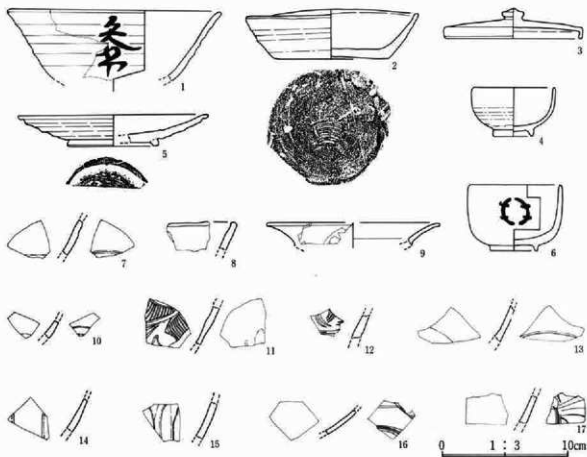
第4節 表土出土の遺物

表採及び表土出土の遺物（第280・281図、PL-115・116）

表採及び表土出土の遺物は、表採と表土出土遺物以外にも1・2号溜井出土の古代中世遺物なども含めた。古代遺物はおもに2区から出土し、1の墨書土器には「矢田部」(PL-117)と記されており注目される。また、8は高温によって発泡した土師器と思われるが詳細は不明である。21は須恵質の瓦塔破片で屋根部分にあたる。瓦塔屋根部分の破片は1区6号溝からも出土し、胎土はかなり似ているが接合はしない。

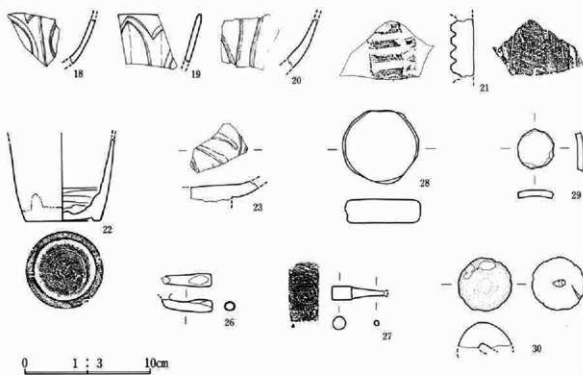
古代末～中世前半の遺物は、近世の3・4区1号溜井埋土と近代の1号溜井埋土最上層の砂層中に集中し、9点が出土している。なかには、本県で出土例の少ない景徳鎮系の青白磁梅瓶(11・12)も含まれている。出土位置が3区と4区の北で、なおかつ砂層出土が多いことから北側台地上から流れてきたと考えられよう。

近世以降の遺物は、幕末の染付碗(6)やいわゆる高田徳利(22)があり、近世の集落が現在にまで続いていることの一部を伺わせる。35の槍は、穂先が錆び、柄は雨水に当たりひびが入って湾曲している。穂先は先端がやや潰れているが現存長12.3cm、茎は15cmを測る。茎の端には目釘穴が1カ所あるが、鎌のように一端を折り曲げて作っている。穂先はかなり研ぎ減っているように見え、1カ所認められる穂もかなり浅くなっている。柄の先端部分には目釘の金具を挟んで4カ所に蔓状のものを巻いて朱漆を塗った痕跡が残っている。茎の装着は、柄の一端を細く溝状に抉り、装着した後にはふさいで漆で巻くという方法をとっている。

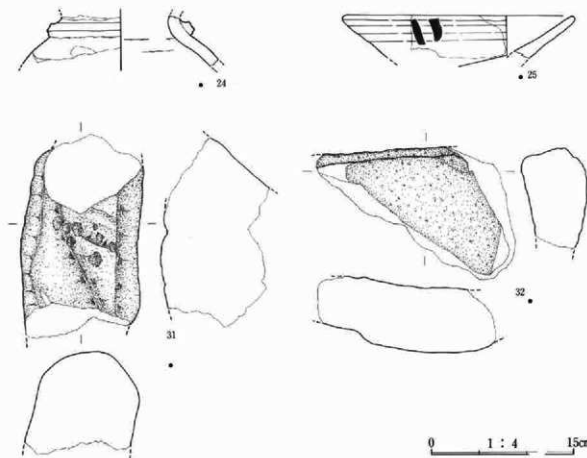


第280図 表採及び表土出土遺物(1)

第4節 表土出土の遺物

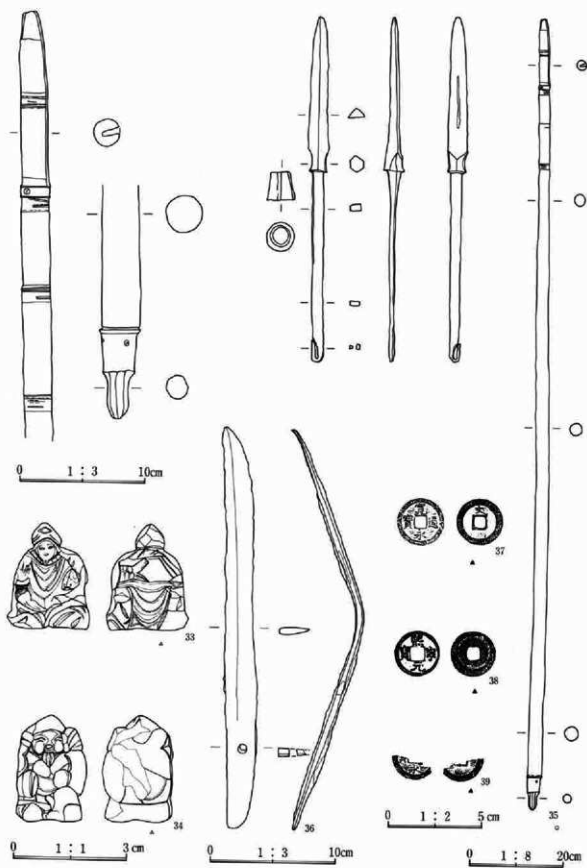


0 1 : 3 10cm



0 1 : 4 15cm

第281図 表採及び表土出土遺物(2)



第282図 表採及び表土出土遺物(3)

第5節 縄文時代の遺構と遺物

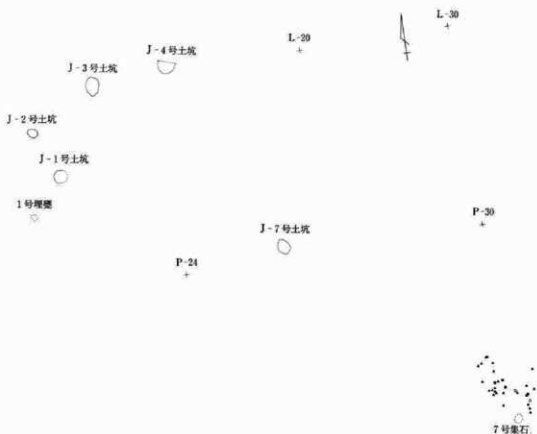
縄文時代の遺物は、草創期後半から後期後半にわたる土器・石器が出土しており、遺構は埋設土器1基、土坑13基、集石7基、陥穴3基が検出されている。出土土器は早期終末～前期初頭と前期後半が主体であり、これに後期前葉がついている。その他の時期はいずれも数点の出土であり、本調査区では以上の3つの時期が主要なものである。なお、出土土器は以下のように分類した。

第I群土器	草創期後半熱糸文系土器群		
1類	井草式土器	2類	熱糸文系終末の土器群
第II群土器	早期前葉沈線文系土器群		
第III群土器	早期終末条痕文系土器群		
1類	沈線や刺突文を施文するもの	2類	絡条体円痕文を施文するもの
3類	貝殻緑線円痕文を施文するもの	4類	貝殻背円痕文を施文するもの
5類	条痕文のみを施文するもの	6類	無文のもの
第IV群土器	早期終末～前期初頭羽状縄文系土器群		
1類	縄文条痕土器	2類	沈線で文様を施文するもの
3類	縄文のみなもの		
第V群土器	前期後半の土器群		
1類	諸磯b式土器	2類	諸磯c式土器
3類	十三菩提式土器	4類	浮島・興津式土器
第VI群土器	中期終末加曾利E4式土器		
第VII群土器	後期の土器群		
1類	称名寺II式土器	2類	堀之内I式土器
3類	加曾利B2式土器		

1 遺構・遺物の分布 (第283図、PL-54)

縄文時代の遺構・遺物は、2・3区のローム台地を中心に、その両側の低地にも分布が及んでいる。ローム台地は本来西側寄りが最も高く、東側に向かって緩やかに傾斜するが、西側縁辺は古代～近世の水田化に伴い削平され、その東の最も高い部分も近年の土取りによる削平が暗色帯まで及んでいる。また東側台地上も近世以降の畠地化に伴い、段状に削平されている。そのため、遺構・遺物の分布が認められるのは台地東側部分のみに限られ、西側では古代～近世の水田に伴う水路や旧河道上面砂層中からわずかに出土しているにすぎない。ここでは、台地東側の遺構・遺物の分布について、若干ふれておこう。

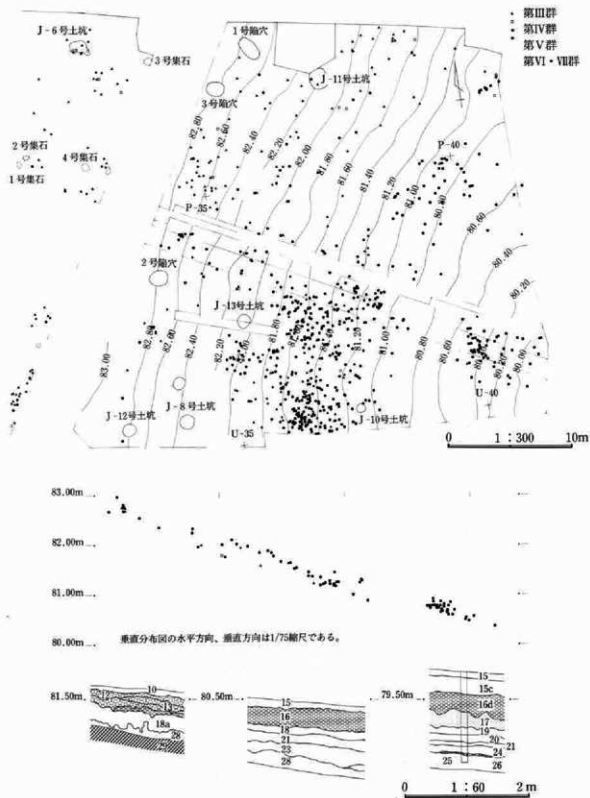
第283図はその分布状況を示したものである。遺物の分布は出土土器を4時期に大別してマーク別とし、石器は割愛した。2区台地上の遺物は削平により失われており、台地縁辺から低地の傾斜面のみがそれを免れている。遺物の分布を時期別に見ると、第III・IV群土器は台地縁辺寄りに散在しており、集石周辺に一部集中する部分がある。第V群土器は台地と低地にまたがる南寄りに集中分布しており、接合する個体も多い。第VI・VII群土器は低地内の2カ所に集中分布しており、接合率が高い。以上のように、遺物の分布は時期が新しいほど低地寄りに偏する傾向がある。なお、台地縁辺から低地にかけて、2次堆積ローム層(16層)が認められた(付図一、)。層厚は厚いところで40cm程あり、低地部分ではその直下に軽石を含む灰白色粗砂



第283図 2・3区遺構の配置と遺物の分布

層（17層）が堆積している。第V群土器はこの2次堆積ローム下半に含まれ、第VI・VII群土器はその直上の黒色土中に含まれていた。16・17層下からは若干の第III群土器と剥片類が出土している。なお、17層直下黒色土のC14年代は 4680 ± 150 y.B.P.と測定されている。

次に遺構の分布を見てみよう。第IV群土器を使用した1号埋設土器は最も西側に位置する。集石土坑は台地縁辺の上位に沿って7基が配置されている。遺物分布との重複状況から見て、集積土坑は第III・IV群土器の時期に該当するであろう。土坑は埋設土器の北側に4基、その東側に単独で1基、集石土坑と同位置に重複して2基、第V群土器集中分布域の西側に4基、その東側に単独で1基、3区北寄りに単独で1基が、各々配置されている。埋設土器北側の4基のうち、J-3・4号からは第III群と第IV群土器が出土しており、また集石土坑と同位置の重複するJ-5・6号土坑からも同群土器が出土している。埋設土器東側の単独のJ-7号土坑と、第V群集中分布域西側のJ-8号土坑からは第V群土器が出土している。時期が新しいほど低地寄りとなる遺物の分布状況や他遺構との配置関係から、J-1～4号、J-5・6号土坑は第III・IV群土器と、J-7号、J-8・9・12・13号土坑は第V群土器と関連するものと思われる。なお、集石土坑の下位斜面に長軸を直交させた配置で、陥穴3基が検出されている。

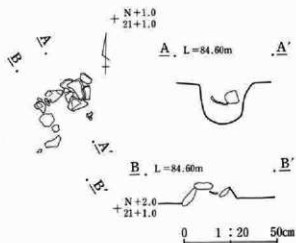


283図 2・3区遺構の配置と遺物の分布

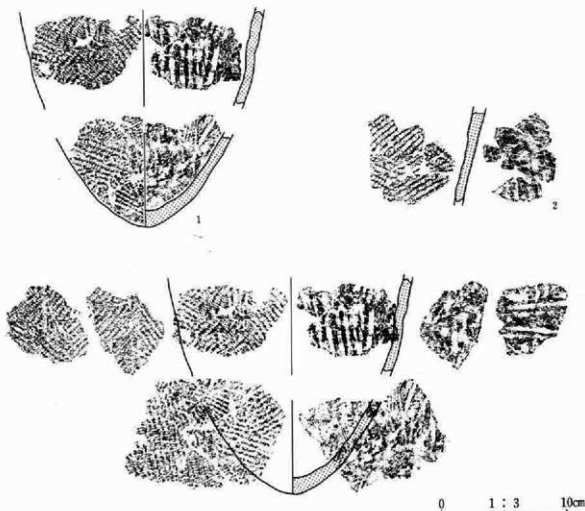
2 埋設土器 (第284図・第285図、PL-50)

N-21グリッドに位置する。丸底状を呈する深鉢の胴下半部を埋設したもので、土器内に被熱して割られた大型礫が入っていた。また土器の北西側のやや高い位置には、やはり被熱した礫が数個認められた。土器下には径28cm、深さ22cmの掘形があるが、土器は底面に達していない。なお、この部分から焼土は確認されなかった。

埋設された土器は欠失部分が多く、また脆弱であったため、全点が接合できなかった。縄文は0段2条縄を使用し、胴部はRLとLRを交互に横位施文して菱形縄文を構成し、底部付近はRLを横位施文して斜縄文としている。施文はかなり乱れている。内面の条痕文はかなり幅広いの施文具で縦位に施され



第284図 1号埋設土器出土状態



第285図 1号埋設土器

るが、上位の一部には横位施文の部分もある。器厚は6～7mm程で、内外面には指頭状凹凸が残る。胎土に多量の繊維を含み、硬質で外面は茶褐色、内面は黒色を呈す。2は埋設土器に共伴した土器である。外面には0段2条R Lと1段撚りのLを交互に横位施文して菱形縄文を構成し、内面には縦走する幅広の条痕文が施されるなど、埋設土器と共通する特徴をもっている。2点とも第IV群1類に含まれる。

3 集石 (第286図・第287図、PL-52・53)

東側台地縁辺の上位レベルで7基が検出された。この地点は遺物分布の西端部にあっており、これより西側は削平されていることが判る。集石分布域にも削平は部分的に及んでおり、それで消失したものも十分に想定できる。そのため、ここでは数個単位のものも集石として認定した。礫はいずれも被熱しているものが多い。また、集石下に掘り込みを伴うものと伴わないものがある。この地域の縄文時代の遺構はローム質土が覆土となる場合が多く、遺構の確認が難しい。1～3号集石下で確認した掘り込みも不明瞭な部分を含んでいる。

1号集石

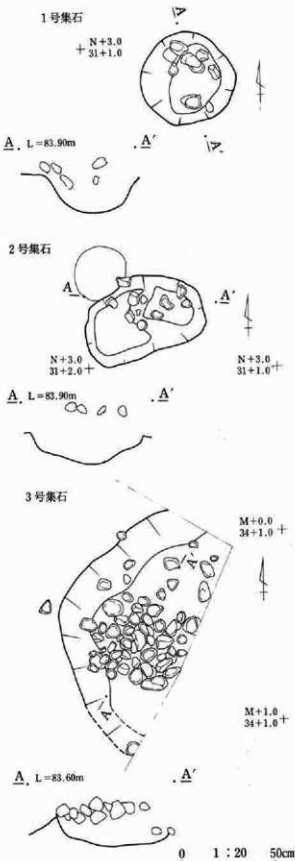
N-31グリッドに位置する。検出した礫は10個で、上面に6個、その下に4個が配された。石材はいずれも粗粒安山岩である。礫下には直径約50cmのほぼ円形の掘り込みを伴う。焼土等は確認されていない。

2号集石

N-31グリッドに位置する。検出された礫は10個で、ほぼ水平に配されていた。石材はいずれも粗粒安山岩である。礫下には長軸65cm、短軸40cmで、底面がやや段をもつ掘り込みを伴う。焼土等は確認されていない。

3号集石

M-34グリッドに位置し、一部は調査区外にかかる。検出した礫は69個で、本遺跡では最多である。大多数が直径60cmの範囲に集中しており、本来の形態を保持していると思われる。石材は全て粗粒安山



第286図 集石遺構 (1)

第5章 検出された遺構と遺物

岩で、石皿片1点以外は自然円礫である。このうち72%は被熱しており、欠損品は6点である。完形礫の大きさを重量別に見ると、200g以下23点、200~400g 22点、400~600g 14点、600~800g 2点、800g以上2点であり、小型の円礫が多用されている。以上の傾向は他の集石にも共通している。なお、集石下に大型の掘り込みが検出されたが、本集石の掘り込みにしては規模が大きすぎる。

4号集石

N-32グリッドに位置する。8個の礫がほぼ同レベルで検出された。石材はいずれも粗粒安山岩で、6個は被熱している。なお、礫と同レベルから第III群6類土器少片2点が出土している。

5号集石

O-33グリッドに位置する。礫は4個で、いずれも粗粒安山岩である。そのうち2点は被熱しており、1点は欠損している。ここでも第IV群6類土器が2点出土している。

6号集石

R-31グリッドに位置する。3個の礫がまとめて出土。石材はいずれも粗粒安山岩で、1点は欠損している。

7号集石

S-30グリッドに位置する。47個の礫が径60cm程の範囲に集中して出土した。石材は細粒安山岩1点以外は全て粗粒安山岩である。使用された礫の大きさや被熱の比率は3号集石と同傾向にある。

所見

3号・7号集石は集中する範囲や礫の構成が類似しており、これを逸脱するものがないことから、本来の形態を示していると思われる。使用された粗粒安山岩の円礫は、周辺の河床で最も容易に入手できる石材である。用使については、礫の7割以上が被熱していると判断できること、骨片等が出土していないことから、焼いた礫を使用する調理施設と考えてよいだろう。礫数の少ないものが多いのは、同じ礫を複数回使用した結果とも考えられ、今後は礫の集石間接合を行う必要がある。



第287図 集石遺構(2)

4 土坑 (第288図～第290図、PL-50・51)

J-1号土坑

M-21グリッドに位置する。東半を擾乱されているが、円形を呈するであろう。径1m、深さ30cmである。

J-2号土坑

L-21グリッドに位置する。長軸86cmの楕円形を呈し、長軸上底面の一方に浅いビット状の落ち込みが付く。なお、覆土中から破片1点が出土している。

J-3号土坑

L-22グリッドに位置する。長軸1.32mの楕円形を呈し、南側長軸端に浅いビット状落ち込みが付く。深さは20cm程で底面はやや凹凸が見られる。なお、覆土中から第IV群3類土器1点、剥片4点が出土。

J-4号土坑

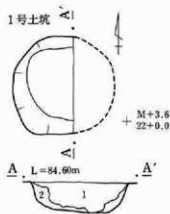
K-23グリッドに位置する。長軸1.36mの楕円形状を呈するが、北側の一部を擾乱されている。底面がかなり傾斜しており、覆土も不自然であることから、風倒木痕の可能性もある。なお、覆土中から第III群6類土器5点、第IV群3類土器1点、剥片6点が出土している。

J-5号土坑

L-33グリッドに位置する。長軸1.32mの楕円形を呈し、底面は平坦である。覆土中から第III群5類土器1点、同6類土器20点、加工痕ある剥片2点、自然礫1点が出土。

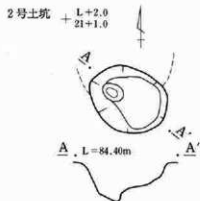
J-6号土坑

5号土坑の一端に接しているが、切り合い関係は不明である。長軸44cmの浅い小坑で、覆土中から第III群

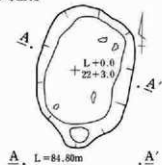


1号土坑土層注記

- 1 黒褐色土層 ソフトロームを遊状に含む。
- 2 ソフトローム層



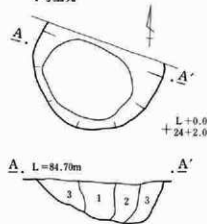
3号土坑



3号土坑土層注記

- 1 暗黄褐色土層
- 2 黄灰色土層

4号土坑



4号土坑土層注記

- 1 暗黄灰色土層
- 2 暗黄褐色土層
- 3 黄灰色土層

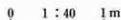
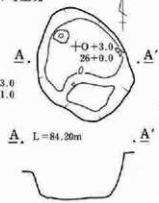
6号土坑



6号土坑土層注記

- 1 ローム塊と灰褐色土塊の混土層

7号土坑



第288図 土坑 (1)

第5章 検出された遺構と遺物

6類土器2点が出土している。

J-7号土坑

O-25グリッドに位置する。長軸1.24mの不正楕円形を呈し、長軸上の一端にステップ状のわずかな高まりが付き、もう一方に浅い小ピットが位置している。なお、覆土中から第V群1類土器2点、剥片1点が出土している。

J-8号土坑

S-39グリッドに位置する。直径1.2mの円形を呈し、東側の一部を2号竪穴状遺構に切られている。深さは28cmで底面は平坦である。覆土中から第V群2類土器36点、同3類土器1点、剥片1点が出土しており、そのうち第V群2類土器の大型破片が、東側立ち上りに密着した状態で検出されている。

J-9号土坑

8号土坑の北側約4mに位置する。直径1mのほぼ円形を呈し、深さは40cmで底面は平坦である。覆土中から自然露2点が出土している。

J-10号土坑

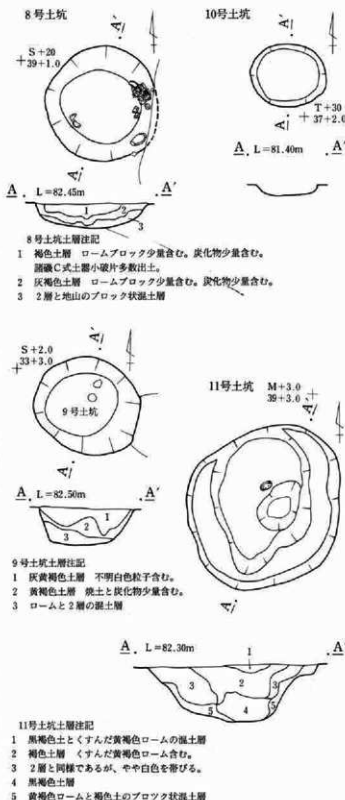
第V群土器集中分布域の東端低地内の、T-37グリッドに位置する。円形を呈する浅い小坑で、直径80cm、深さ12cmである。遺物は出土していない。

J-11号土坑

M-39グリッドに位置する。直径1.6mの不正円形状を呈す。周縁に沿ってステップ状の段があり、底面東寄りに浅い落ち込みが見られる。最も深い部分で60cmの深さがある。平面形の大きさと深さは近接する陥穴に匹敵する規模であり、覆土も類似している。なお、覆土中から自然露1点が出土している。

J-12号土坑

8号土坑の東側、T-32グリッドに位置



第289図 土坑(2)

する。直径1.4mの円形を呈し、深さは20cmである。覆土中から自然礫2点が出土している。

J-13号土坑

R-35グリッドに位置する。直径1mのほぼ円形を呈し、深さは16cmである。遺物等の出土は認められない。

5 陥穴 (第290図・第291図、PL-51・52)

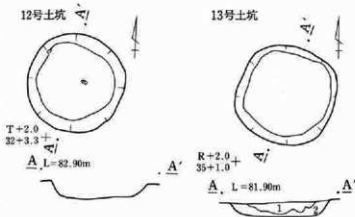
集石分布域の東側に沿って3基を確認した。平面形は3基とも長楕円形を呈し、長軸が傾斜に対して直行するように配置されている。いずれも立ち上り部分が大きく崩落し、確認面では大型の楕円形状を呈するが、底面の形状が本来の形態を示している。また、上半のかなりの部分は削平されているであろう。埋没土はロームと黒褐色系土壌のブロック混土を基調としており、地山ロームより硬質の特徴的な土質である。いずれも遺物の出土はなく、時期は不明である。

1号陥穴

3区の北西隅、M-36グリッドに位置する。規模は長軸が上端で2.28m、底面で1.3m短軸が上端で1.2m、底面で0.36mである。長軸での断ち割り調査を行ったところ、底面の北西隅で直径23cm深さ14cmの円形の落込1カ所を検出したが、棒状痕等は認められない。

2号陥穴

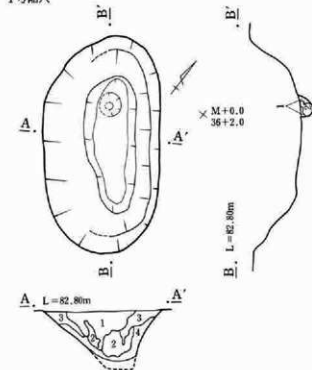
Q-33グリッドに位置する。規模は長軸が上端で2.00m、底面で1.24m、短軸が上端で1.52m、底面で0.34mである。これも長軸での断ち割り調査を行ったところ、底面を3等分する位置に直径24cm程の浅い皿状のくぼみを確認したが、棒状痕は検出できなかった。なお、覆土中から自然礫1点が出土している。



13号土坑土層注記

- 1 黒褐色土と灰褐色土の混土層 ロームブロックを含む。
- 2 ロームブロックと灰黄褐色土の混土層 粘性がある。

1号陥穴



1号陥穴土層注記 (A~A')

- 1 灰黄褐色土層 ロームブロックを少量含む。
- 2 灰黄褐色土とロームブロックの混土層
- 3 褐色土層 白色・黄色礫石を含む。
- 4 2層と同様であるが、ロームブロックを多く含む。

1号陥穴土層注記 (B~B')

- 1 灰黄褐色土層 ローム粒を含む。
- 2 ロームと灰黄褐色土の粒状混土層

0 1 : 40 1 m

第290図 土坑(3)、陥穴(1)

第5章 検出された遺構と遺物

3号陥穴

1号陥穴の南西約3mのところに位置する。西側端部を近世の井戸で削平されているため、長軸規模は不明である。短軸は上端で1.34m、底面で0.5m程である。埋没土の状態から、かなり早い段階で壁面の崩落があり、その後に黒褐色土が埋没している状況が窺える。なお、壁面崩落土である4層中から、自然礫1点が出土している。

6 遺構出土の土器 (第292図、PL-128)

集石・土坑から出土した遺物のうち、主なもののについてここに示した。石器は3号集石から石皿片1点が出土しているが、細片のため割愛した。

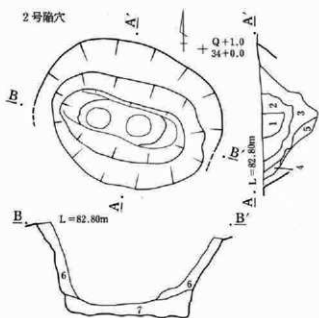
1・2は5号集石出土の第III群6類土器である。2点とも内外面に擦痕状のナデを施しており、薄手の2は内面の一部に条痕が残る。胎土には多量の繊維を含み、内面には指頭状の圧痕が認められる。

3・4は4号土坑出土の土器である。3は0段2条L・Rを横位施すもので、第IV群3類に含まれる。施文は粗雑で空白部を残している。4は第III群6類に含まれる薄手の無文土器で、器面に凹凸を残している。2点とも胎土に多量の繊維を含んでおり、4には大粒の片岩・石英を多く含んでいる。

5～10は5号土坑出土の第III群6類土器である。いずれも内外面に擦痕状のナデを施すが、一部に条痕が残るものもある。7は外反する口縁部破片で、口唇部は尖頭状を呈す。いずれも胎土に多量の繊維を含むが、6・8・9は大粒のチャートも含んでいる。

11は7号土坑出土の第V群1類土器である。Lの結節を伴うR・L燃りの縄文を地文に、3本単位の浮線をめぐらし、浮線にも縄文R・Lを施している。胎土には多量の軽石粒を含む。

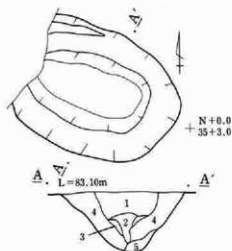
12～17は8号土坑出土のもので、13は第V群



2号陥穴土層注記

- 1 黒褐色土層 白色微粒子を多量に含む。
- 2 褐色土層 白色微粒子を多量に含む。
- 3 くすんだ灰褐色土層 ロームブロックを少量含む。
- 4 3層と5層の混土層
- 5 ロームと黄褐色土のブロック状混土層
- 6 褐色土とロームのブロック状混土層
- 7 褐色粘質土層

3号陥穴

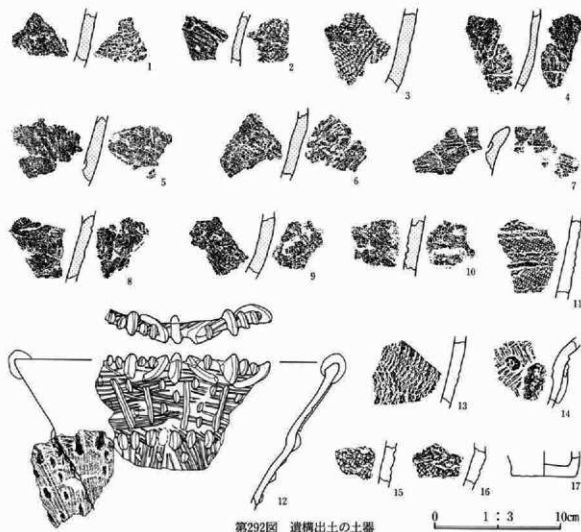


3号陥穴土層注記

- 1 黒褐色土層 白色軽石を多く含む。
- 2 黒褐色土層 白色軽石を少量含む。
- 3 灰黄褐色土層
- 4 ロームブロックと灰黄褐色土ブロックの混土層
- 5 4層と同様であるが、ロームブロックの量が多い。

0 1 : 40 1 m

第292図 陥穴(2)



第292図 遺構出土の土器

3類に、他は同群2類に含まれる。12は壁面に密着して出土した大型破片で、胴部上位に小さく段をもつ。半截竹管による集合沈線は地文化し、口縁部と胴部上位の段部を中心に、大小様々な貼付文で加飾されている。内側に強く折れ曲がった口唇部にも集合沈線が施され、口縁部には精円区画の単位化された貼付文が付けられる。14は胴部上半にくびれをもつタイプで、鋸歯状の集合沈線上に貼付文が施される。13は三角形の沈線区画内に、鋸歯状の貝殻腹縁文を充填している。15・16はL縄の結節第1種を伴うRLの縄文を施している。17は小型の底部である。いずれも胎土に多量の砂粒を含むが、12・15・16は大粒の片岩と石英、14は大粒のチャート、17は金雲母と石英を各々多量に含んでいる。

7 遺構外出土の遺物

遺構外出土の遺物は、先述のように2・3区の台地東側縁辺から低地にかかる包含層出土のものがほとんどであり、1区の台地東側削平部分と旧河道出土の遺物は、現位置を示していない。そのため、ここでは2・3区出土の土器と石器を中心に扱い、1区出土の遺物は遺跡全体を理解するための補足資料としたい。

2・3区出土の土器 (第293図～第301図、PL-129～143)

第1群土器 (第293図-1～10)

総数11点出土しており、うち10点を図示した。いずれも2区からの出土である。

第5章 検出された遺構と遺物

1類 (1~3)

3点出土しているが、これらは同一個体である。弱く外反する口唇内面に縦位の縄側面押圧を施し、やや肥厚する口唇外面と口唇下には横位回転施文、胴部には条を縦位とする斜位回転施文をして文様帯を構成し、口唇直下には縄文施文後に横位のなでを加えている。縄文施文はいずれも単節RLの同一原体である。焼成は良好で、胎土にチャート・石英を少量含む。

2類 (4~10)

燃糸文終末期の土器群を一括した。4・5は半截竹管による沈線文が施文された土器である。4は口縁部が強く外反し、口唇直下からやや幅広い半截竹管による沈線文が全面に施されている。器面調整は良好である。5は口縁部がわずかに外傾し、口唇下に無文部をもうけて以下全面に沈線文を施している。口唇下無文部にはY字状の構成を意図したような細沈線が施されている。なお、わずかに残る口唇部分はかなり傾斜しており、低い山形状の突起が付く可能性もある。6~10は無文土器である。いずれも器面の調整は良好で、8~10は外面に研磨が施されている。焼成はいずれも良好で、胎土に軽石粒・石英・チャートを多く含むもの(4・5・7)と、大粒の片岩を多量に含むもの(6・8~10)とがある。

第II群土器 (第293図~11)

2区から出土した2片が接合した1点のみの出土である。体部が直線的に開く小型の土器で、横位の細沈線を基調に、部分的に斜行する沈線が加えられている。焼成は並で、胎土に軽石細粒を比較的多く含む。

第III群土器 (第294図~第297図)

早期終末の条痕文系土器群を一括する。本地区では1・3類土器の出土は認められなかった。

2類 (第294図-1~8)

絡条体圧痕文を施文するものを一括した。いずれも外反する口縁部の破片で、文様構成に隆帯を伴う一群(1~4)と伴わない一群(5~8)とがある。1は口縁部に高い隆帯をめぐらし、突起下に断面三角形の幅広い突帯を付けている。隆帯と突帯には絡条体圧痕文を羽状に施し、その同側を同圧痕文で縁取っている。また、口唇部にも同圧痕文による斜位の刻みが施されている。2~4は口縁部に低い幅広い隆帯をめぐらす一群である。2はやや小型の土器で、隆帯の幅や文様帯幅は3・4に較べてせまい。文様は1と同様に羽状の構成であるが、1では隆帯上で羽状構成になっていたのに対し、3・4では隆帯と口縁部に各々斜位に施文し、その間を縁取るように圧痕文を施して羽状構成としている。なお、やや小型の2では、隆帯と口縁部が同方向の施文となっている。5~8は隆帯を伴わない一群である。5~7は羽状構成をとるものと思われるが、8は口唇下に縦位の圧痕文を連続して施し、その下端を横位の圧痕文で縁取る構成をとっている。また、8は口唇部に貝殻腹縁による斜位の刻みが施されている。絡条体原体は、いずれも細い縄をやや間隔をあけて巻いたもので、縄は1段であろう。なお、1・6では角のある細い棒状の軸の圧痕が認められる。器面に条痕が認められるものはなく、1・5・7・8では内面に擦痕状の整形痕が認められる。胎土には多量の繊維を含むが、特に2~5は多量の軽石粒を含む。

4類 (第294図-9~22、第296図~11)

貝殻背圧痕文を施すものを一括した。11~16は口縁部、17~22・第296図-11は胴部、9・10は底部付近の破片である。口縁部はいずれも弱く内湾し、口唇部が刀の切った先状を呈するものが多い。底部は砲弾形の尖底であろう。第296図-11は内面のみ、13・14・17・18は器内外面に条痕文が施されるが、他は無文である。条痕文はいずれも幅広いのあらいもので、施文は浅く部分的である。11・12は口縁部肥厚帯をもつもので、口唇部上面と肥厚帯に貝殻背圧痕文を密に施している。13は口唇部内面、14~16は口唇部上面に圧痕文が施さ

れたもので、15は外面にも施文が認められる。胴部および底部付近のものはいずれも外面のみに圧痕文が施文されるが、10は貝頂部の圧痕も認められる。いずれにも胎土には多量の繊維を含むが、11・12・18・19は軽石粒、16・17はチャートを多量に含む。なお、17・19は内面に指頭状の圧痕が認められる。

5類 (第294図-23~27・37~39、第295図-1~29、第296図-1~16)

条痕文のみを施文した一群を一括する。23~27は口縁部、第295図-5・第296図-12・16は底部付近、その他は胴部の破片である。口縁部は外反するものが多く、25~27は口唇部に刻み目が施されている。底部は砲弾状の尖底を呈するようである。条痕文は内外面に施文されるもの他に、内面が無文化されるもの(第295図-16・第296図-10)、外面が無文化されるもの(第296図-11~16)がある。無文化とは条痕文が施されないものと、施文後に擦り消されたものの両者があり、明確に区分できないが、いずれにしても無文化する意図をもったものである。条痕文は条間隔の広いものが大半だが、第295図-6・8・13・25では細かい施文具を使用している。施文は斜位・縦位方向のものが多く、粗雑で浅い施文を特徴としている。全面にきちつと施文するものはほとんどなく、部分施文のようなものが多い。また、内面に指頭状の圧痕を残すものも多く、第295図-3・10・20・24などは明瞭である。いずれも胎土に多量の繊維を含むが、特に第295図-9・12・16・28、第294図-38、第296図-2・5は結晶片岩を多量に含んでいる。

6類 (第294図-28~36、第296図-17~25、第297図-1~27)

無文のものを一括した。28~36は口縁部、第295図-17・18は底部付近、その他は胴部の破片である。口縁部は弱く外反するものが多く、底部はやはり砲弾状の尖底を呈するであろう。口縁部で条痕状に見えるのは、繊維の脱落によるものである。28は内面に文様施文を伴う希な例で、斜位の刺突列が等間隔に施されている。器面は条痕文を擦り消して無文化したものと、当初から無文のものがあるが、明確に分離できないため、ここでは一括して扱っている。いずれも胎土に多量の繊維を含むが、特に第294図-34、第297図-10・16~19は多量の軽石粒、第297図-20・21は多量のチャートを含む。また、本類にも内面に指頭状の圧痕を残すものも多く、第296図-23・25、第297図-2・8・11・12・27などは明瞭である。なお、本類は2・3類および4類の一部の胴部となる可能性が高い。

第IV群土器 (第298図-1~33)

早期終末~前期初頭の羽状縄文系土器群を一括する。いずれも胎土に多量の繊維を含む。

1類 (1~7)

縄文条痕土器を一括する。縄文はいずれも0段2条の縄で、施文は横位施文に限られている。原体は1~3・5がRL、7がLR、4・6はRLとLRで縦羽状の縄文を構成しているが、いずれも菱形構成をとるものと思われる。なお、3は0段R燃の部分施文が認められる。条痕文は条幅の広い施文具を使用しており、施文は浅く空白部が多い点はIII群土器と共通しているが、1~3に見られる斜格子状の施文はIII群土器にはない構成である。なお、5では外面にも条痕文が施されている。器壁は比較的薄いものが多いが、4・7はやや厚手である。また、1は胎土に軽石粒を多量に含む。

2類 (8~11)

縄文を地文に、沈線で文様を施すものを一括した。文様を描く沈線は8・9が1本、10・11は2本単位の平行沈線である。施文具は8・9・11が丸頭状、10は角頭状で、いずれも太くしっかりとした文様を描いている。8は対抗する弧状文で文様構成するものであろうか。9は垂下沈線の下端に横位の沈線を施している。10は口唇下に横位に連続する弧状文を施し、その間に平行沈線を垂下させて文様を構成している。11はV字状文の下端に横位沈線を付加している。いずれも小片のため全体の構成は不明だが、直線的な構図のもの

第5章 検出された遺構と遺物

曲線的なものの両者が認められる。地文の縄文はいずれも0段2条縄に限られており、8はLRの横位施文、9はLRの縦位施文、10・11はLRを縦位・横位に施文して菱形縄文を構成すると思われるが、両者とも施文がかなり乱れている点が特徴的である。なお10は口唇部にも縄文が施されている。いずれも内面に細かな凹凸や調整痕を残している。

3類 (12~33)

縄文のみを施すものを一括した。縄文原体や施文方法に特徴のある数種を含んでいるようである。12~19は細い縄をコイル状に強く撻った原体を使用する一群で、いずれも0段3条縄を使用し、節は細かく圧度は深いものが多い。施文は12・17・18のように斜位施文により条を縦位に施すものや、13~16・19のように2種類の異なった原体を交互に施文して縦羽状を構成するものを特徴としている。縦羽状の構成は、横位施文を組み合わせるもの(13・16・19)と、横位と縦位を組み合わせるもの(14・15)とがあるが、いずれも条が縦方向に傾く点が意図されているため、鋭角な羽状となっている。12は上半にLRを横位施文、下半はRLを斜位に施文して、条が中折れ状となる特異な構成をとっている。17・18の原体はRLである。器形の調整は比較的良好で、いずれも砂粒を少量含むが、特に14は大粒のチャート、17・18は軽石粒を多量に含む。

21は0段3条のRLとLRを交互に横位施文して、菱形縄文を構成するもので、本類では唯一の例である。これも条が縦方向に傾く点が意図されているため、縦長の菱形となっている。器面の調整は粗く、内面に指頭状の圧痕が残る。また、胎土にはチャート粒と軽石細粒を多く含む。

22・28・30はランダムな施文を特徴とする一群である。いずれも撻りの異なった2種類の原体を使用し、基本的には横位施文による菱形あるいは羽状縄文を構成するが、器面に凹凸があるため斑状の無文部が多く、施文方向も一定しない。内面の調整も粗雑で、調整痕や凹凸面を残している。原体は22・28が0段3条、30が0段2条である。

23は0段2条LRの縄文を縦位・横位に施文して、横長の菱形縄文を構成するもので、2類の10・11に近似している。24・25は弱く外反する口縁部破片である。24は縄文LRを口唇外面に横位施文、以下は縦位施文している。25は口唇外面に斜位の刻みを施した隆帯をめぐらすもので、口唇下には縄状の圧痕が見られるが、判断としない。いずれも内面の調整は粗雑である。26は0段2条RLとLRの縄文で縦羽状を構成するもので、器面調整は丁寧である。27は無節Lと0段2条RLの縄文で縦羽状を構成するもので、器面調整は粗雑である。29・31は撻りの異なった2種類の原体で羽状縄文を構成するもので、原体は29が0段3条、31は0段2条である。いずれも器面調整は丁寧である。

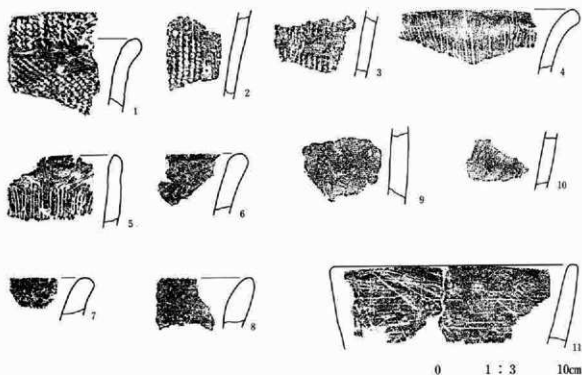
20・32・33は底部付近の破片で、いずれも尖底であろう。縄文は20が0段3条LR、32が0段2条RL、33は無節Lである。

第V群土器 (第298図-34~第300図-37)

前期後半の土器群を一括する。これらは1~3類に分類されるが、この地点では2類が主体であり、1類がこれに次いでいる。

1類 (第298図-34~第299図-6)

諸磯b式土器を一括した。第298図-34~36は浮線文土器で、34・35は浮線に斜めの刻み目を、36は地文と同じ縄文を加えている。地文の縄文は34がLR、35・36はRLである。38~43は半截竹管による平行沈線で文様を施文する一群である。地文に縄文が施文されるのは42のみで、他は無文地である。38は平行沈線間に浮線文と同様の斜めの刻みが加えられる。38~41は複数の平行沈線で弧状あるいは菱形の文様を構成する。42・43は一単位の平行沈線を施すもので、42は弧状文、44は斜格子文が構成されている。42は胴部の内折部

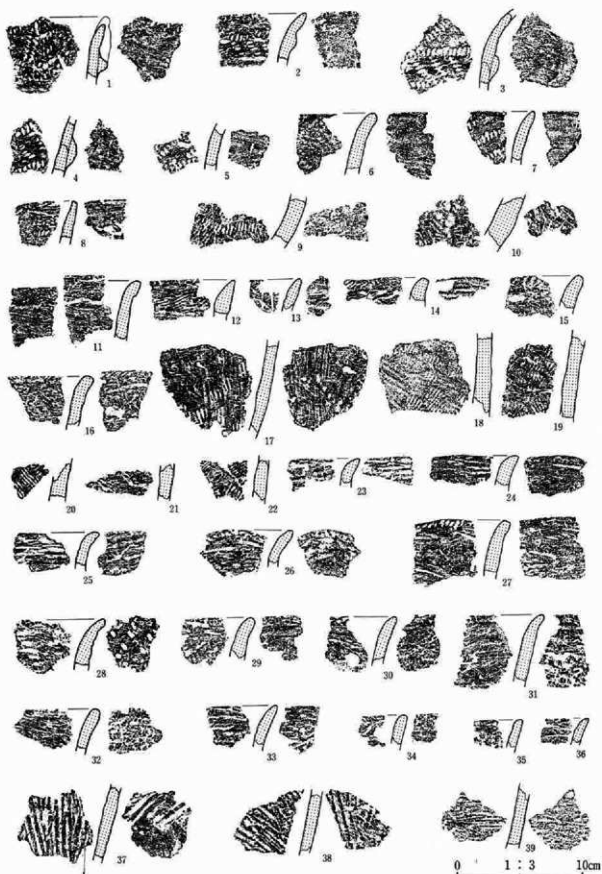


第293図 2・3区出土の土器（第1群、第III群）

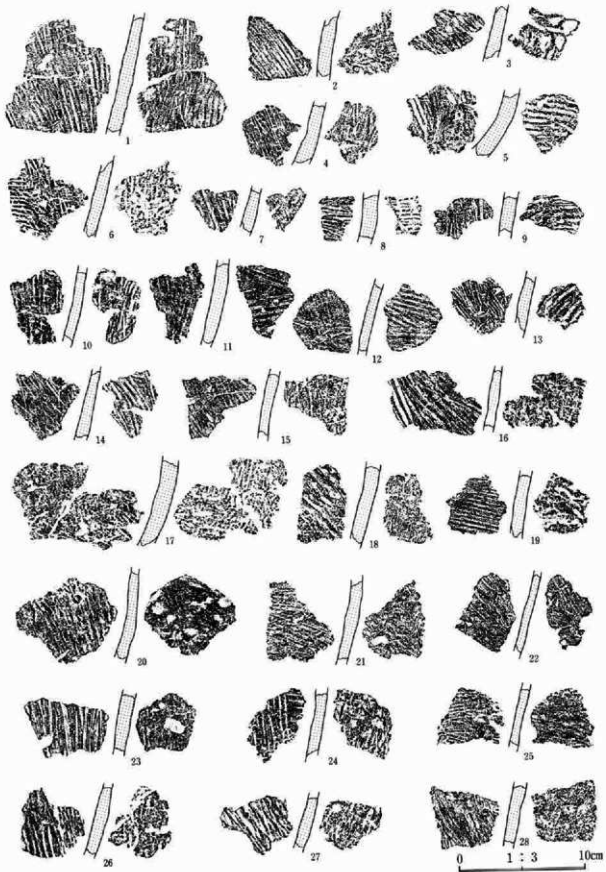
で文様帯を区画するが、胴下半にも縄文RLが施されている。44・45、第299図5～7は、半截竹管による集合沈線で文様を構成する一群である。前者の一群に較べて細身の施文具を使用しており、2本以上の複数単位による施文に特徴がある。45は口縁部が外反する波状口縁の土器で、文様構成は浮線文と同様である。地文はRLの縄文で、波頂下に貼付文を施している。44・5・7は口縁部が大きく内湾しながら開く深鉢で、外側へ突出する口唇部が特徴的である。5・7は平縁であるが、7は突起が付くものと思われる。文様構成は、5が弧状文を組み合わせるもの、7は大柄の菱形文で、空白部に弧状文を加えている。6も類似する器形であるが、口唇部の突出が見られない。5・7では横位回転の文様構成をとるのに対し、6は縦位方向へ回転しており、平行沈線の幅も広く、施文も粗雑になっている。第298図37・46～48、第299図1～3は、縄文のみを施した一群である。施文は粗雑なものが多く、条の流れが一定しないものや、空白部の多いものもある。原体は37・48・2が無節L、46が複節LRL、47はRLとLRの結束第1種羽状縄文を、撚りの異なった2種類で菱形部分を構成するもの、179はRLとLRで羽状縄文を構成するもの、3はRLとLRによる結束第1種羽状縄文を構成するものである。なお、47・3では原体末端の結束部分が認められる。第299図3は浅鉢形土器である。くの字状に内折する胴上半に刻みを付けた浮線文を施し、胴下半にはRLの縄文を施している。なお、本類土器は胎土に砂粒を多く含むが、特に35・42・43・46・4は大粒のチャートと石英、45は大粒の片岩を多量に含んでいる。

2類（第299図8～15、第300図1～28・31～37）

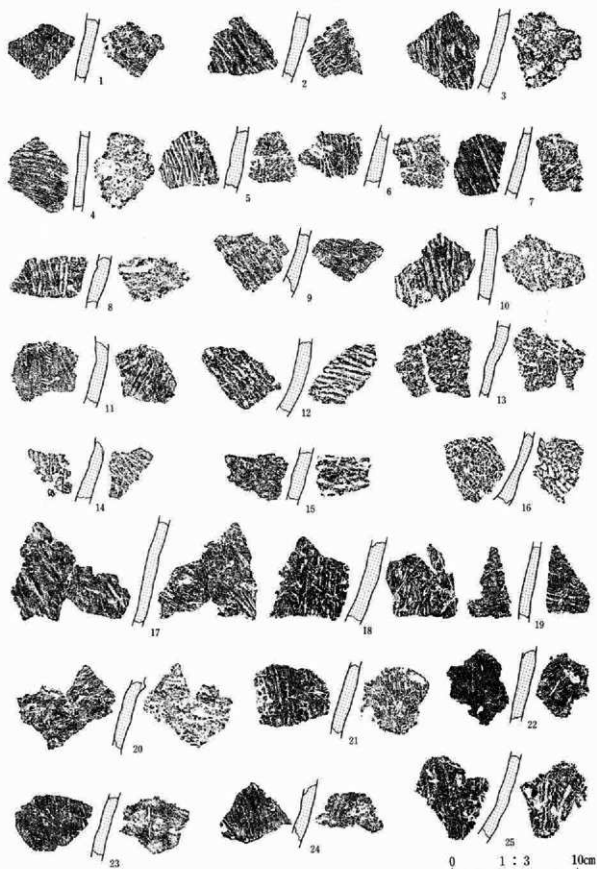
諸磯C式土器を一括した。1類の横位回転の文様構成は口縁部に集約され、胴部には縦区画の文様が導入される。文様施文は半截竹管による集合沈線が引き継がれ、貼付文による装飾が盛況となる。地文に縄文を施すものは見られない。第299図8は口縁部が強く外反し、その端部が鋭角に内折する平縁の深鉢である。文様は頸部をめぐる横帯文で2分され、口縁部には羽状文、胴部には懸垂文と木の葉状文などで構成される。



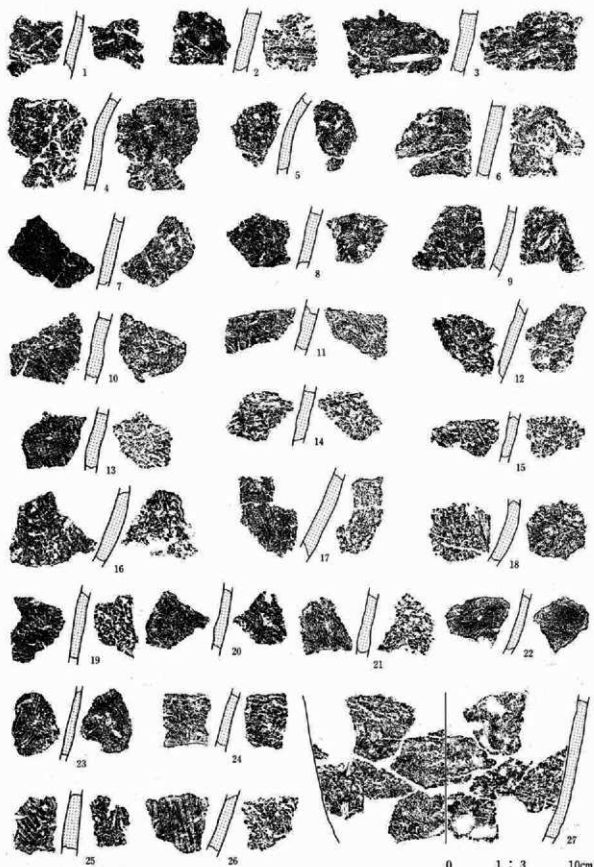
第294図 2・3区出土の土器（第Ⅲ群2・4・5類）



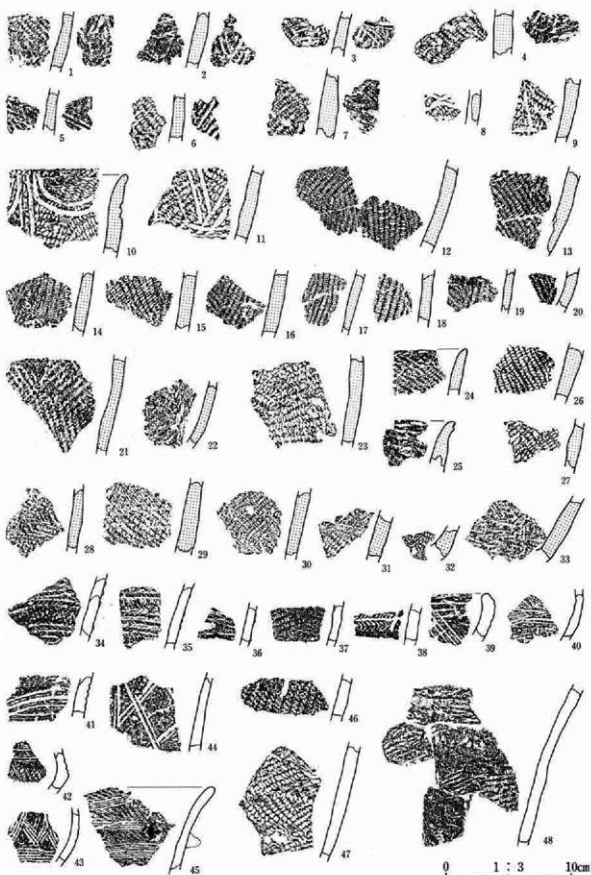
第295図 2・3区出土の土器(第Ⅲ群5類)



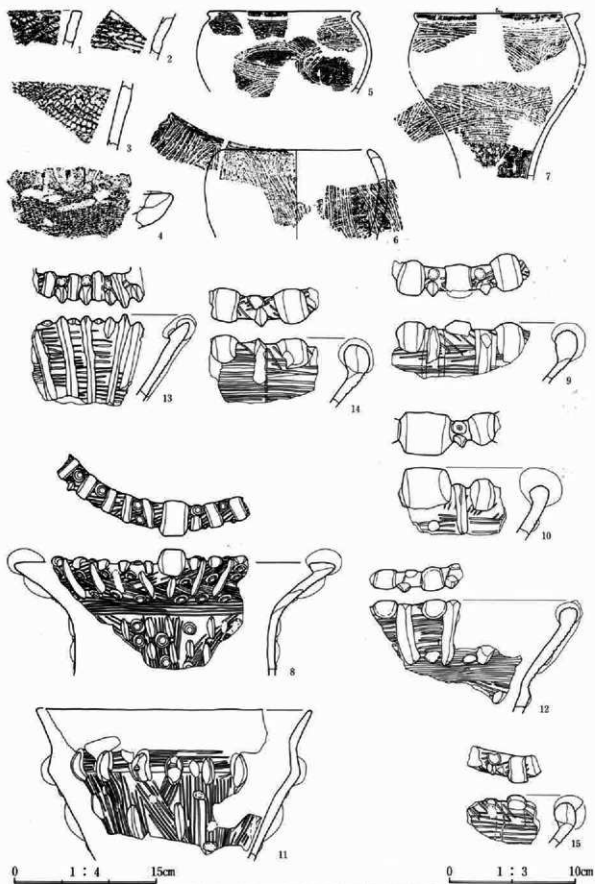
第296図 2・3区出土の土器(第Ⅲ群5・6類)



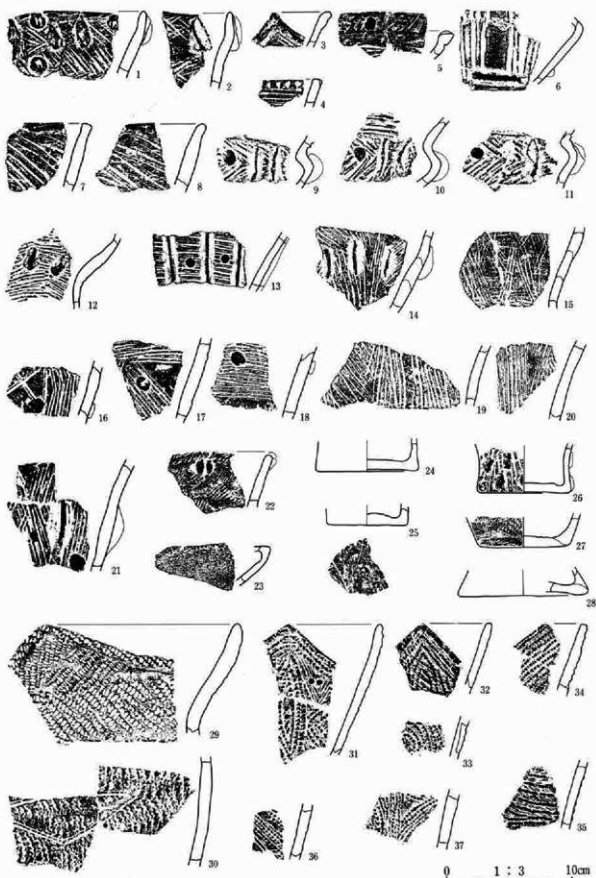
第297図 2・3区出土の土器 (第III群6類)



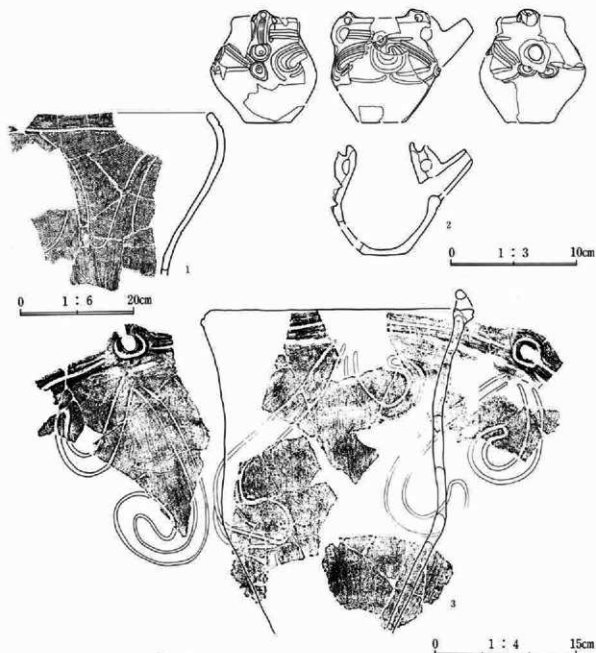
第298図 2・3区出土の土器（第IV群1・2・3類）



第299図 2・3区出土の土器(第IV群、第V群2類)



第300図 2・3区出土の土器(第V群2・3・4類)



第301図 2・3区出土の土器 (第VI群、第VII群)

貼付文は文様単位を示す大型のものを中心に、棒状貼付および円形竹管による刺突が加えられた円形貼付文が全面に施され、あたかも集合沈線による文様が地文のように見える。9・10・12・14・15は外傾する口縁端部が蕨手状を呈するもので、口縁部の羽状文は上方にせり上がり、その下の横帯文が文様化している。12では羽状文が省略され、かわって横帯文下の頸部屈曲部に羽状文が加えられている。11は口縁部文様が省略された土器であろう。13は口縁上端が鋭角に内折し、その部分に羽状文を簡略化した斜行沈線を施している。第300図1・2は口縁部が弱く内折するもので、円形貼付には半截竹管による2点刺突を加えている。3は大波状口縁の波頂部片である。4は角頭状の口唇部外端に刻みを加えている。5は狭い口唇部上端に斜行沈線を円形貼文が施されており、この部分が口縁上端の内折部分にあたることからわかる。6は口縁部がくの字状に内折し、3～4単位の太沈線で懸垂文を施し、棒状貼文を横に加えるなど、他とは異なった様相が見ら

第5章 検出された遺構と遺物

れる。浅鉢あるいは異系の土器であろうか。7・8は幅広の施文具で斜行沈線を施すもので、貼付文は見られない。9～13は頸部付近の破片である。9～11は頸部が屈曲するタイプで、その部分に羽状文と貼文が施されている。14～21は胴部の破片である。16・21では斜格子状の構成が見られる。31～37は最も新しい一群である。器形は大波状口縁の深鉢が一般的で、文様は主文様であった集合沈線が地文化し、その上に結節浮線文で大柄の渦巻文や木の葉状文が施される。2個一對の円形貼文が加えられることも多い。36は地文がなく、直接爪形文のみで文様を施した例である。22は全面に縄文のみを施文するもので、口唇下に2個一對の小型貼文が付けられている。縄文は無節Lで、施文は口唇上面におよんでいる。23は本類に伴う無文の浅鉢、24～28は深鉢の底部である。本類も1類同様に胎土に砂粒を多く含むが、第299図8・10・13、第300図9～11・13・28は大粒の片岩、第299図12、第300図26は大粒のチャート、第299図9・10・14・15、第300図1～4・8・12・14・16～18・20・21・24・25・27は軽石粒、第300図6・23は多量の金雲母と石英、その他は細粒と、各々混和物に変化がある。

3類 (第300図29・30)

浮島・興津系の土器を一括した。29は大波状口縁の深鉢で、R LとL Rの縄文を交互に横位施文して、羽状縄文を構成している。30は貝殻腹縁による細かな鋸歯状施文を全面に施し、その上から半截竹管の平行沈線で三角形の区画文を施文している。2点とも胎土に多量の細粒を含む。

第VI群土器 (第301図1)

型式が判明したのはこの加曾利E 4式土器1点のみである。口縁部がキャリパー形の深鉢で、胴部上半に波状文と精円で区画文を組み合わせた単位文様を施している。区画内に充填する縄文はL R。胎土に砂粒を多量に含む。

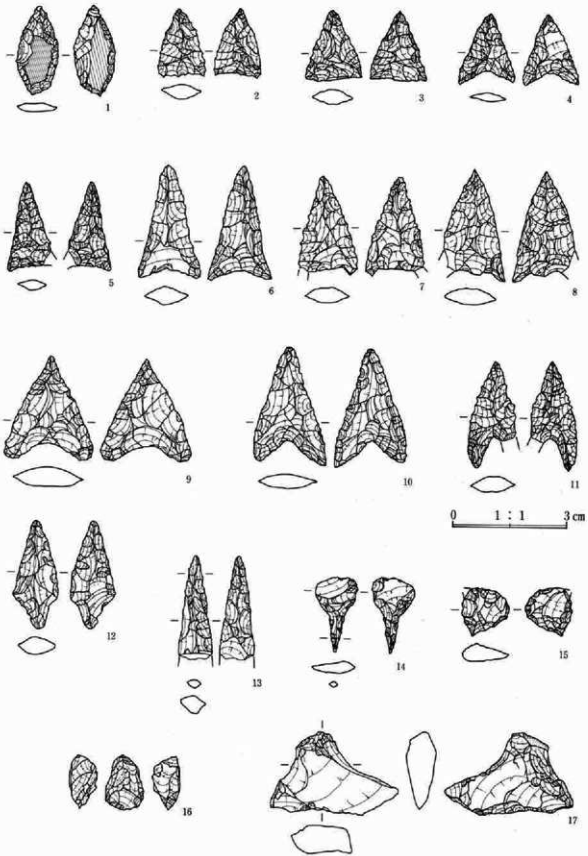
第VII群土器 (第300図2・3)

集中出土した土器片から、2個体を図上復元した。2は一對の橋状把手が付く注口付土器である。文様は把手と対向する位置に施された丁字文と、それを中心とする三角形の区画文で構成される。文様帯は頸部と胴部中央をめぐる沈線で区画され、他は無文である。文様施文は2本と3本を単位とする沈線が使い分けられ、各沈線の交点には盲孔を伴う円形貼文が加えられるが、2つが接する部分では8の字状を呈す。なお、把手にも盲孔が多用されている。3は口縁部が弱く開く深鉢で、口縁部には円孔を伴う突起を2あるいは4単位付け、外削ぎ状を呈する口端に沈線を1本めぐらしている。胴部文様は突起下からのびる2本の沈線による大小の丁字状文で構成される。以上の2点は堀之内I式の古い段階に位置づけられよう。

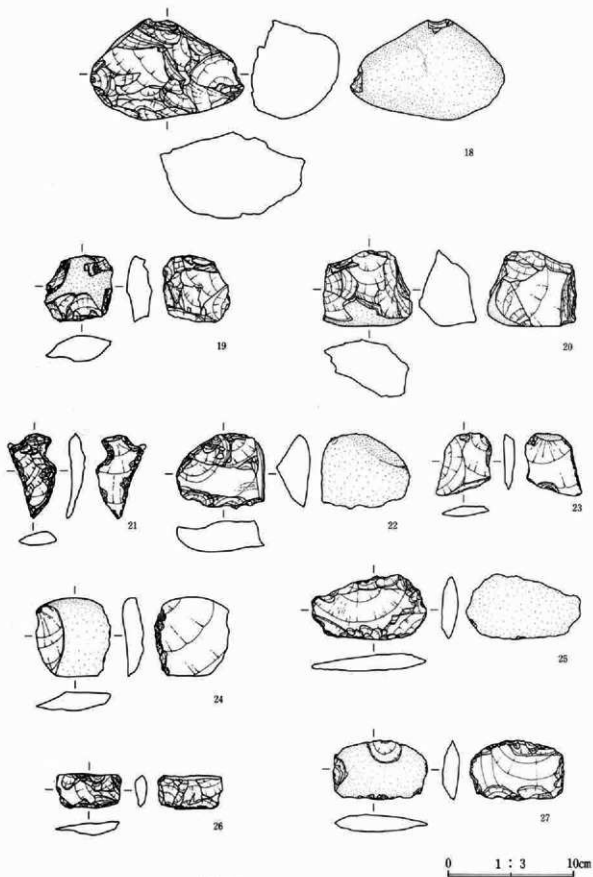
2・3区出土の石器 (第302図～第310図、集合表・観察表、PL-149～152)

総計302点の石器と石製品1点が出土している。石器のうち磨製石器は4点のみであり、奇異な印象を受けるが、その原因は判然としない。打製石器は297点出土しており、その主体となるのは削器・加工痕ある剥片・使用痕ある剥片の3器種の剥片石器で、合計229点打製石器の77%を占める。他の主な器種は打製石斧が57点で19%、石鏃が16点で5%となっている。石鏃がやや少ないが、剥片石器が多産化するの、群馬県の縄文時代早期後半から前期の一般的傾向である。石材では黒色頁岩が多用されており、剥片石器3器種の77%、打製石斧の89%がこの石材を使用している。黒色頁岩は利根川の一支流である赤谷川水系（県北）が原産地と目されており、この石材を多用するのも本地域の特色である。

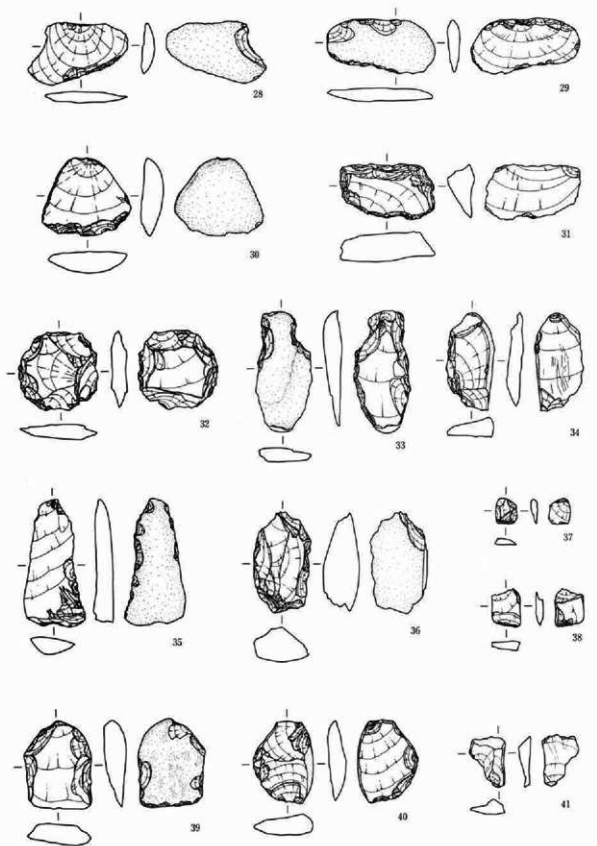
第302図1・13は石槍である。1は木葉形を呈するもので、両面に自然面を残す薄い剥片を素材に、周辺部に剝離を加えて作出している。13は細身のもので、下半を欠失する。厚手の剥片を素材に両面から剝離を加



第302図 2・3区出土石器(1)

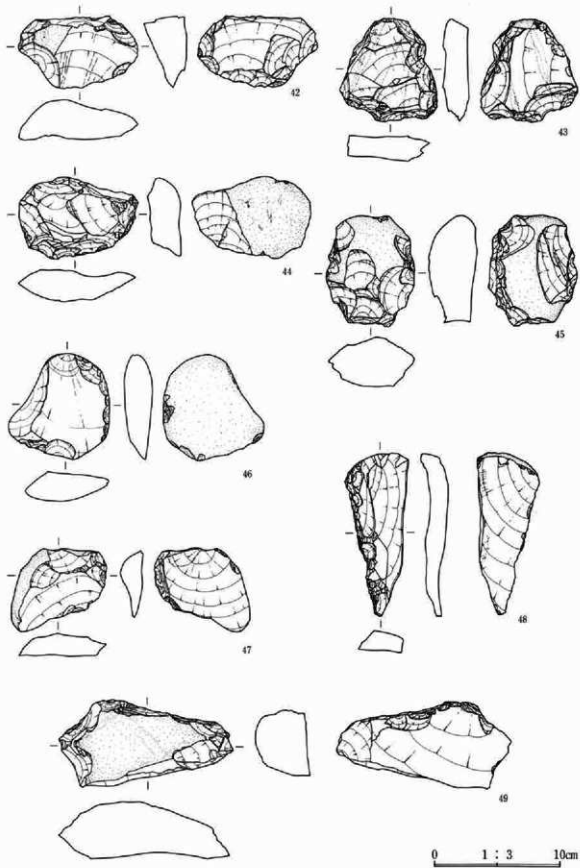


第303図 2・3区出土石器(2)

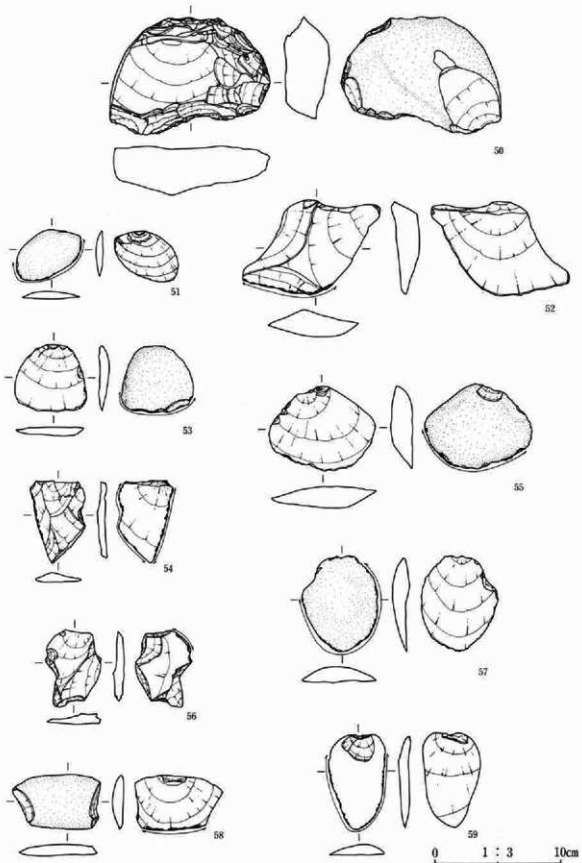


第304図 2・3区出土石器(3)

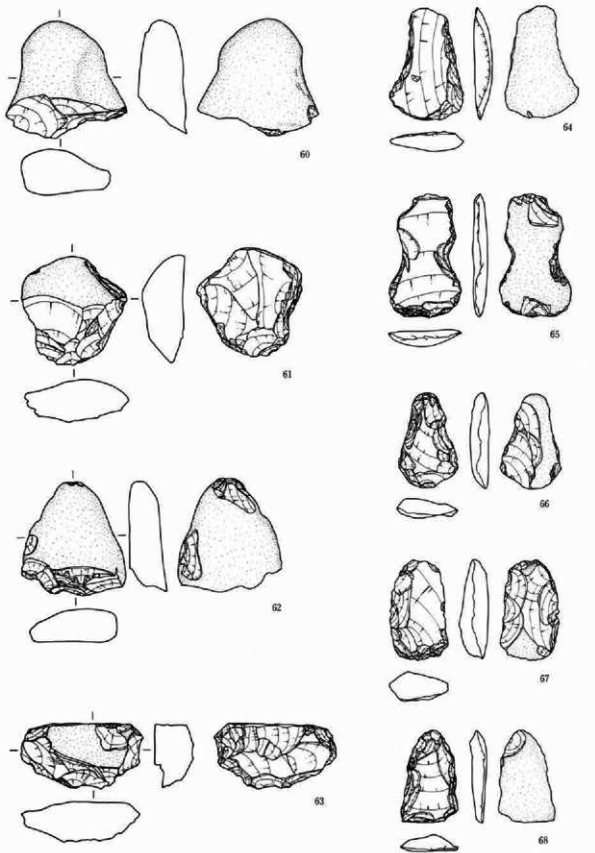
0 1 : 3 10cm



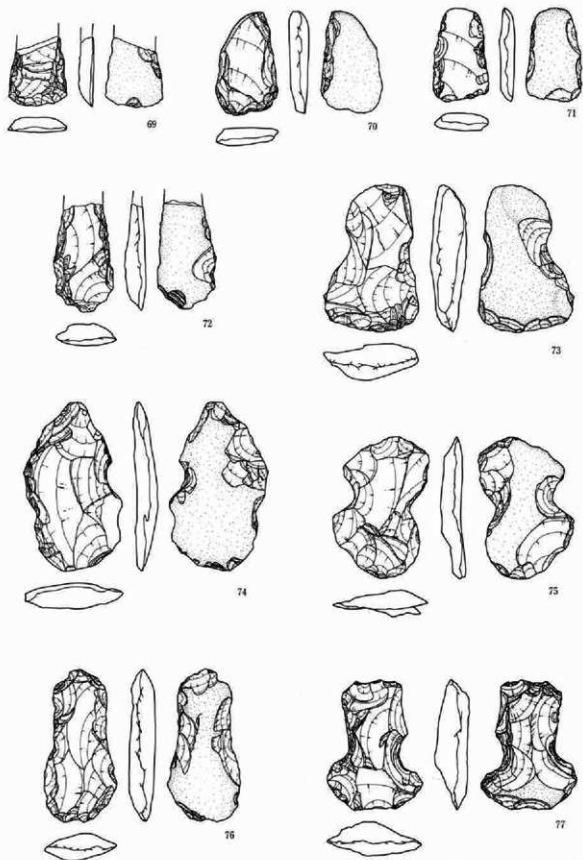
第305図 2・3区出土石器(4)



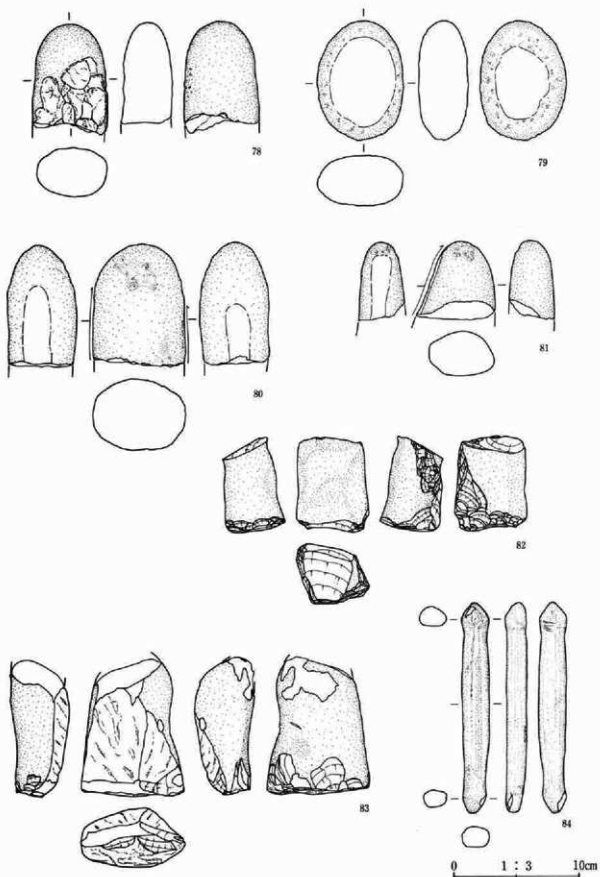
第306図 2・3区出土石器(5)



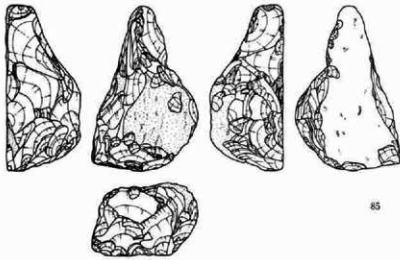
第307図 2・3区出土石器(6)



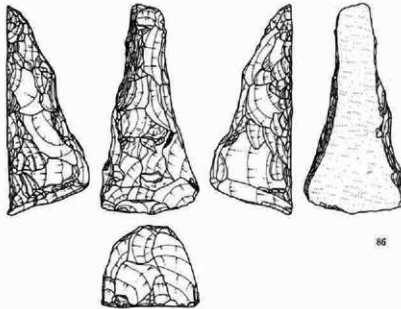
第308図 2・3区出土石器(7)



第309図 2・3区出土石器(8)



85



86

0 1 : 3 10cm

第310図 2・3区出土石器(9)

えて、断面菱形状に作出している。2～12は石鏃で、凹基無茎鏃を中心に平基無茎鏃・凸基有茎鏃が少数出土している。石材は黒曜石・チャート・黒色安山岩が多用されている。14・15はつまみ部が付く縦長形態の石鏃で、15は銚部が欠失している。16は小型の掘器である。17は横型の石匙で、やや粗雑だが打点部を調整してつまみ部を作出している。

第303図18～20は石核である。いずれも自然面を残し、数方向からの剥離が認められる。第303図21～第304図35は削器である。片面に自然面を残すものが多い。25～31は横長削片を素材に、長辺の一邊に刃部を作出している。21・33～35は縦長削片を素材とするもので、21・33では打点部をつまみ状に作出しており、縦型

の削器としたほうがよいかもしれない。第304図36～第306図50は加工痕ある剥片である。各種石器の未製品や素材剥片、欠損品や定型化しないものを含むため、形態は様々である。第306図51～59は使用痕ある剥片である。素材剥片の形態は削器と同様であり、刃部には刃こぼれや摩耗痕が認められる。

第307図60～63は礫器である。偏平な円礫の一端を打ち欠いたものと、石核状の大型剥片の周縁を調整したものとがあり、下端部に敲打によるつぶれが認められる。第307図64～第308図77は打製石斧である。短冊形・楕形・分銅形の各種が認められる。64・66～71は長さ10cmに満たない小型のもので、両側縁に片面加工を施し、刃部が片刃状を呈するものが多い。この類は早期後半～前期初頭に特徴的な器種である。

第309図78は棒状礫の側縁を使用面とする敲石で、下半を欠失している。79～81は磨石である。80・81は棒状礫の側縁に敲打と磨痕の両使用痕を残すいわゆる「殻磨石」で、いずれも欠損品である。82・83はスタンプ状石器である。棒状礫を半割し、割面を平坦に調整したもので、いずれも平坦面に磨痕を残している。また、82は側縁の一部にも調整剥離が加えられている。2点とも頭端部を欠失している。南関東では粒度の粗い石材を使用するのが一般的だが、本遺跡では緻密な黒色頁岩を使用している。84は3区低地部から第VII群土器（堀之内1式土器）とともに出土した石棒である。両端部に頭部を作出した小型のもので、石材は緑色片岩である。第310図85・86は三角錐状石器である。側縁の一面に平坦な自然面を残し、他の面には入念な調整剥離を加えて握り部を作出し、底面は側縁自然面から70度前後の角度で平坦面が作出される。底面には明瞭な磨痕は認められない。なお、80～83・85・86は第I群2類・第II群に伴出するものと思われる。

1区出土の土器（第311図、第312図、PL-144～147）

土器は第III群～第VII群のものが出土しており、第III群～第V群は東側の台地削平部の溝や土坑からの出土が大半であるのに対し、第IV群の土器はほとんどが谷地部旧河道中からの出土である。このことは、西側台地上にも第III群～第VII群土器が分布していたことを示している。出土量は早期終末の土器群が比較的多い。

第III群土器（第311図-1～27）

早期終末の条痕文系土器群を一括する。ここでは4類の出土が認められなかった。

1類（3）

本遺跡では1点のみの出土である。斜向する二本の太沈線と刺突文が施された土器で、外面には横位、内面には斜位のあらい条痕文が施されている。胎土は多量の浮石細粒と少量の繊維を含む。

2類（1）

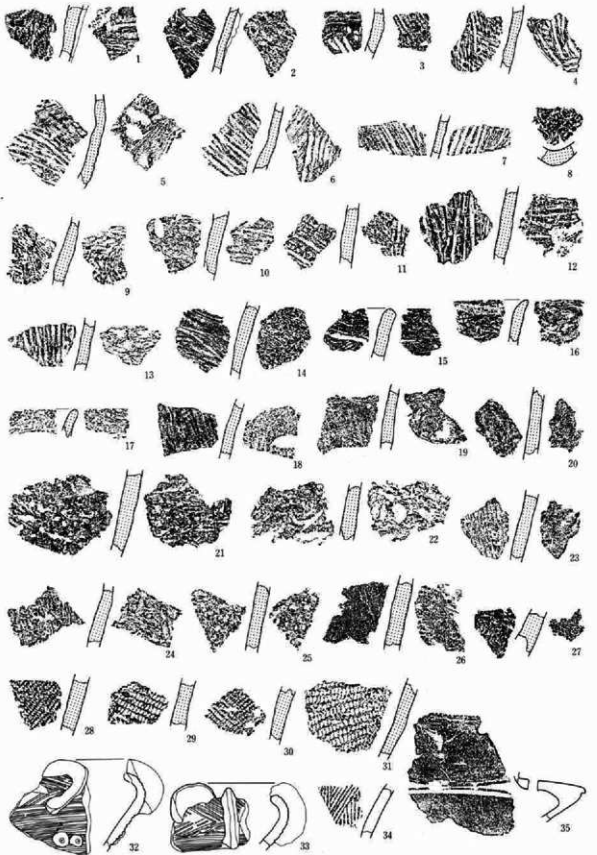
やや斜向する縦位の幅広隆帯に絡条体正痕文を斜位に施し、隆帯と口縁に沿って同正痕文を斜位に等間隔に施している。絡条体は細い縄を間隔をおいて巻き付けた原体を使用しており、縄は判読できない。器内外面は斜向する幅広のあらい条痕文が施されているが、外面は施文後になでが加えられている。胎土は多量の繊維を含む。

3類（2）

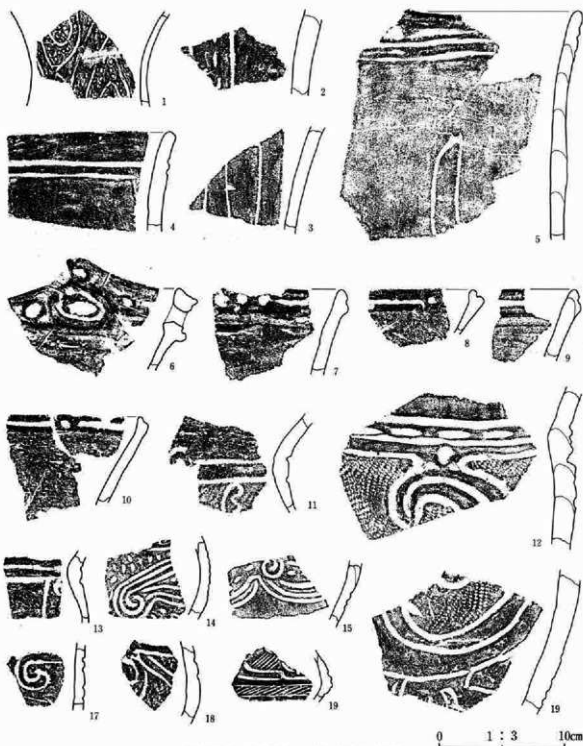
本類も1点のみの出土である。斜向する幅広の隆帯に貝殻覆縁による刻目目が施された土器で、外面には斜位の条痕文が施されるが、内面は無文である。胎土に多量の繊維を含む。

5類（4～14）

幅広のあらい条痕文のみ施すものを一括した。8は尖底の底部小片である。条痕文は斜向するものが多く、基本的に内外面に施文されるが、無文部分が見られるものや、その後になでが加えられたものもある。また、内面に指頭状の圧痕が認められるものもあり、特に5は明瞭である。胎土は多量の繊維のほか、浮石や凝



第311図 1区出土の土器 (第III群)



第312図 1区出土の土器(第IV～VII群)

灰岩の細粒やチャートを含むものが多く、なかでも12・14は浮石、13はチャートを比較的多量に含む。

6類 (15～27)

無文のものを一括した。15～17は口縁部、27は尖底部付近の小片である。口縁部形態は、口唇部が丸くやや外傾するもの(15・17)と、弱く外反して内削ぎ状を呈するもの(16)とがある。器面の特徴や胎土は2・3区のものと同様である。

第IV群土器（第311図—28～31）

縄文のみを施す3類が4点出土している。いずれも0段2条縄を使用しており、R LとL Rを横位施文して菱形縄文を構成する。胎土には多量の繊維と浮石粒を含み、内面には指頭状の凹凸が残る。

第V群土器（第311図—32～35）

前期後半の土器では2類の諸畿C式土器4点が出土している。32～34は集合沈線で文様を構成する深鉢の破片で、口縁部にあたる32・33では大型の耳状貼付文や2個1単位の円形貼付文が付けられている。35は胴部に円孔が付く浅鉢である。いずれも胎土に大粒の片岩を多量に含む。

第VII群土器（第312図—1～19）

後期の土器を一括した。1・2は文様を構成する平行沈線間を刺突で充填する称名寺II式土器である。3・5は口縁部が若干開く胴長の深鉢である。口縁部は小波状を呈し、波頂部には円形の刺突が見られる。口唇下に無文部を設けて2本の沈線をめぐらし、胴部には平行沈線で文様を施す。4も同様である。6～18は頸部がくの字状にすぼまる深鉢である。口縁部は無文化され、くの字上を呈する口唇下に円形刺突文と沈線を巡らしている。胴部文様帯は獣手文やJ字文、渦巻文などで構成される。11・13・18は縄文を地文とするが、12・14～16は空白部を縄文あるいは刺突で充填している。縄文は11～13・16がL R、18はR Lである。以上の土器はいずれも堀之内I式に比定されるが、3本単位の沈線で文様を描き、空白部を縄文や刺突で充填する12・14～16は後出のものである。19は沈線区画内を斜行沈線で充填する加曾利B 2式土器である。

1区出土の石器（第313図～第315図、観察表、PL—148・149）

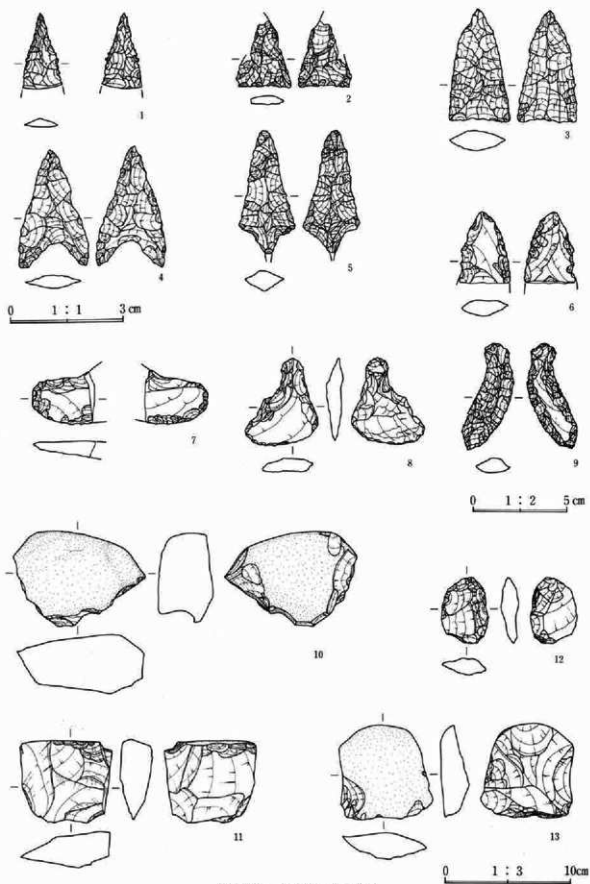
合計は121点が出土しており、器種の構成や使用石材は2・3区出土の石器と共通している。

第311図1～5は石鏃である。2・3は平基無茎鏃、4は凹基無茎鏃、5は凸基無茎鏃に分類される。1は下半が欠失しており、形態は不明だが、鋭利な先端部や鋸歯状を呈する側縁加工などは、有舌尖頭器のものに近似している。6は尖頭器で、下半が欠失している。横長剥片を素材とし、周縁部だけに剝離を加えて形状を作出している。7～9は石匙である。7は横長剥片の両側縁に剝離を加えて、楕円形状に作出している。8は三角形を呈するもので、両側縁を中心に剝離を加え、つまみ部を作出している。9は縦長のタイプで、両面に入念な調整剝離を加えて形状を整えている。10は石核で、自然面を多く残している。12は石核を転用した鏃器で、下端に敲打によるつぶれが認められる。

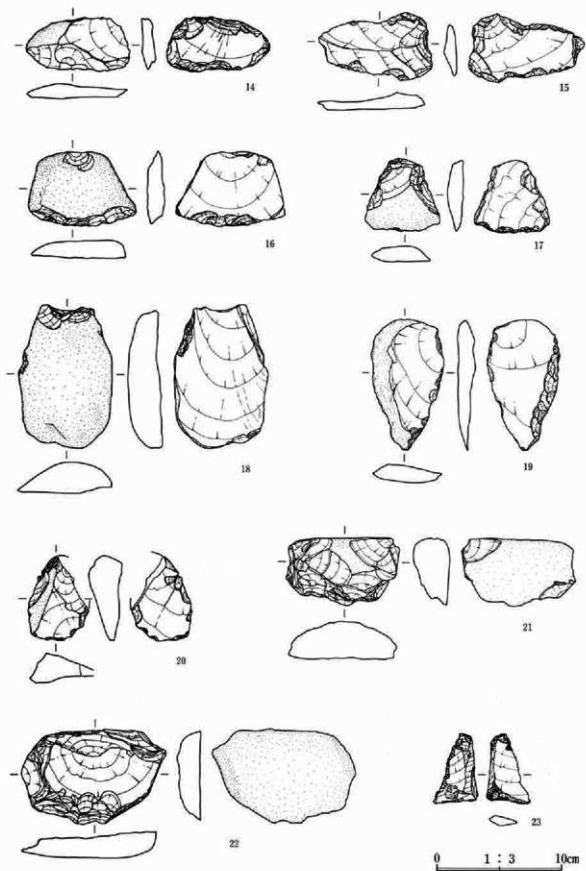
第311図11・13および第314図14～19は削器である。自然面を残す横長・縦長の剥片を素材とする点は、2・3区出土のものと同通している。11は母指状を呈する小型のもので、一側縁に両側から剝離を加えて刃部を作出している。13・16は片面に自然面を残す台形状の大型剥片を素材に、打点に対応する端部に刃部を作出している。14・15は横長剥片を素材に、長辺の一方に刃部を作出している。17は両側縁の片面加工を中心とする作出手法や片刃の刃部などに、小型の打製石斧と同通する要素をもっている。18・19は縦長剥片を素材とするもので、いずれも一側縁を刃部としている。20～23は加工痕ある石器である。肉厚で自然面を残すものが多い。

第314図23～第315図27は使用痕ある剥片である。片面に自然面を残す剥片を素材とするものが多い。28～33は打製石斧である。28～31は長さ10cmに満たない小型のタイプで、片面を中心とする側縁加工や片刃状の刃部に共通性をもっている。32・33は分銅形のタイプである。32は両面に自然面を残しており、偏平な小型円礫から作出したものである。

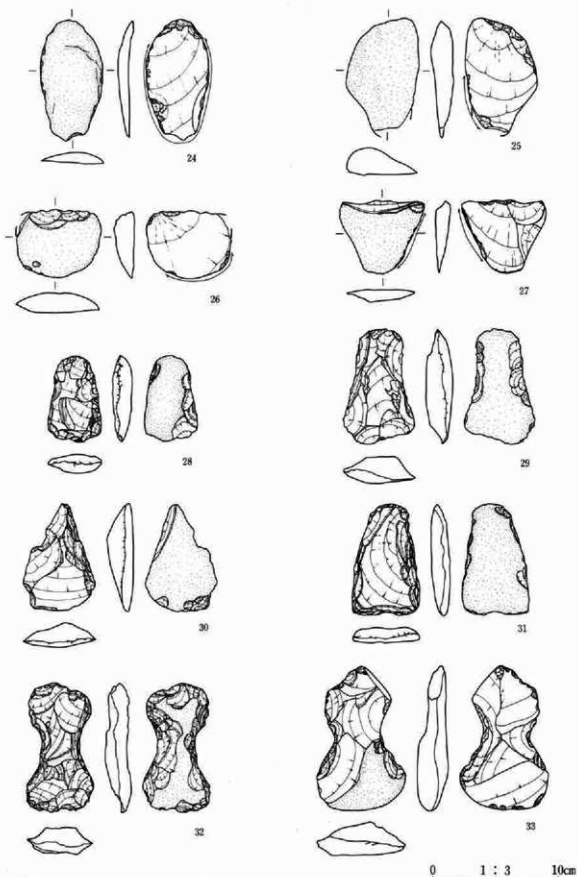
第5章 検出された遺構と遺物



第313図 1区出土石器(1)



第314図 1区出土石器(2)



第315図 1区出土石器(3)

第6節 旧石器時代の遺構と遺物

1 調査区の設定と調査方法 (第316図)

上武道路の事前試掘調査は、台地ではローム層上面までの確認調査が前提である。そのため、ローム層中に存在する旧石器時代の遺構・遺物の確認調査は、基本的に縄文時代までの調査が終了した時点で行うことになる。本遺跡はローム台地の端部に立地しており、ローム層の堆積も良好なため、旧石器時代の存在する可能性は強いと判断された。調査はローム台地全域を対象とし、2×4mの試掘坑を周囲4mの間隔で設定した(第316図)。2×4mの試掘坑は、1坑の調査が比較的短時間ですむため、遺跡存在の確認が早い時点でつかめ、しかも坑内での可動性も確保できる点で採用した。4mの間隔とした理由は、県内で確認されている旧石器時代の一ブロックの範囲は5～6mのものが多いため、遺跡が存在すれば確認率は高く、排土運搬時の安全性も確保できる点にある。調査対象となるV・VI層までは、深い部分で1mほどの層厚となるため、まずIV層までの調査を行い、その下層については浮石層であるIIIb層上面まで重機で除去した後に調査を行う方法をとった。調査はジョレンを主に、補助的に移植ゴテ等を使用した。試掘調査で遺物が確認されると、出土層位を確認しながら周辺を拡張し、分布状況を勘案して調査区を限定していった。なお、出土遺物は包含層毎に通番とした。

2 基本層序と文化層

旧石器時代の調査範囲は2区台地部分に設定した。台地上は先述のように上面の削平がほぼ全面に及んでおり、特に22ライン以西16ラインまでは土取りがV層にまでおよび、それ以西は近世水田化により、さらに下層のVII層にまでおよんでいる。そのため、表土下からハードローム層までの間に入る土層はほとんどが失われており、3区東側縁辺でローム新移層がわずかに認められたにすぎない。

I 層 表土層(耕作土)。

II 層 くすんだ黄褐色土層。

軟質のローム新移層で、縄文時代の包含層にあたる。

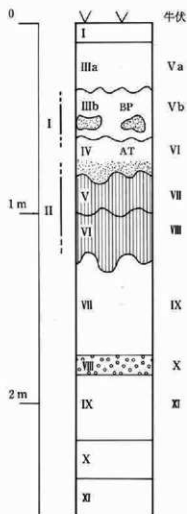
2区東端の台地縁辺のみに認められた。

III a 層 明黄褐色ローム層。

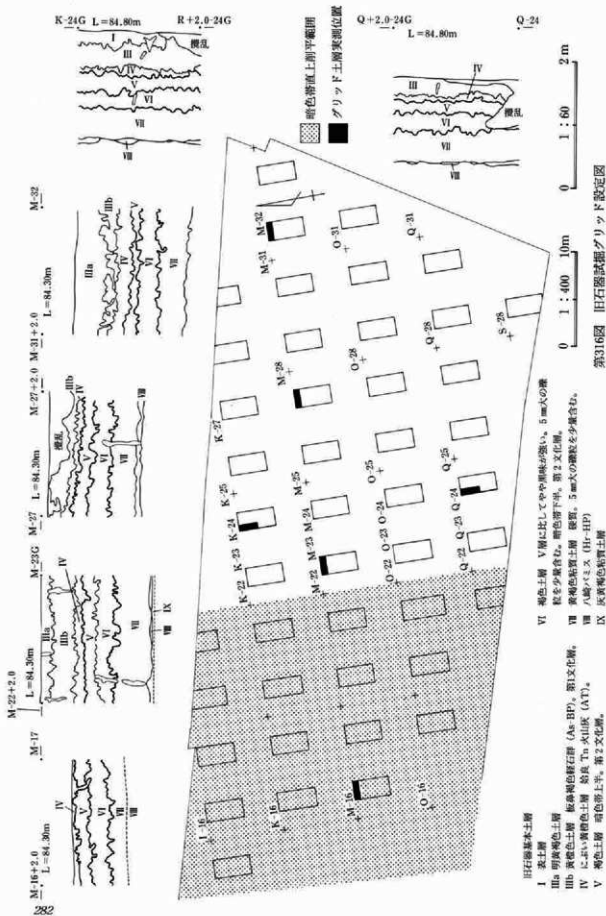
いわゆるハードローム層の上半部にあたり、浅間一白糸軽石(As-Sp)を多量に含む。この層の上位には、本来浅間一板鼻黄色軽石(As-Yp)とソフトローム層が存在するが、台地上ではほとんどが削平されている。東側低地では、ボーリング調査でAs-Yp層が確認されている。

III b 層 黄褐色ローム層

ハードローム層の下半部にあたり、浅間一板鼻褐色軽石群(As-Bpグループ)をブロック状に含む。III a層との境界は新移的であるが、含まれる軽石の違いと若干の色調濃度差をもとに分層した。



台地の基本土層



第316図 旧石器試掘グリッド設定図

旧石器基本土層

- I 灰土層
- IIa 明黄褐色土層
- IIb 黄褐色土層 板状褐色砂層 (Ak-BP)、第1文化層。
- IV におい黄褐色土層 粘長 Tn 火山灰 (AT)。
- V 褐色土層 暗色帯直上。第2文化層。

- VI 褐色土層 V層に比してやや黄味が強い、5m次の層 灰を少量含む。暗色帯直下層。第2文化層。
- VII 黄褐色粘質土層 硬質、5m次の層灰を少量含む。
- VIII 八崎パミス (Hr-1H)
- IX 灰黄褐色粘質土層

- IV 層 ぶい黄褐色ローム層。
ハードローム層の最下層にあたり、下半に始良一丹沢火山灰（A T）の最大値がある。III a 層に比べて褐色が強く、やや軟質である。
- V 層 褐色ローム層。
いわゆる暗色帯の上半部分にあたる。15～20cmの層厚がある。
- VI 層 褐色ローム層。
暗色帯の下半部分にあたる。V層に比べて色調が暗く、5mm大の礫を少量含んでいる。20cm前後の層厚がある。
- VII 層 黄褐色粘質ローム層。
40cm前後の層厚がある。いたって硬質で粘性が強く、5mm大の礫を含む。22ライン西側の土取り部分で数グリッドの試掘を行ったところ、25cm大の亜円礫を1点確認したが、明確な石器は認められなかった。
- VIII 層 標名一八崎軽石（Hr-Hp）層。
10cm前後の層厚で確認された。
- IX 層 灰黄褐色粘質ローム層。
- X 層 青灰色あるいは灰白色粘土層。
15～20cmの層厚がある。
- XI 層 青灰色砂土層（基盤層）。
上層は粗い均質な砂土であるが、下層は粒度が細かく硬質化する。

以上が本遺跡のローム台地部分の基本層序である。このうち文化層は、III b層中に1面、V層を中心にIV層下位からVI層中位にかけて1面、合計2面の文化層が検出されており、上層のものを第I文化層、下層のものを第II文化層とする。なお、基本層序図の左側の数字は、本遺跡の東側約2.5kmに位置する旧石器時代の主要遺跡である下触牛伏遺跡の基本層序である。牛伏遺跡でも本遺跡とほぼ同様の文化層2面が確認されている。

3 第I文化層の調査（第318図、第322図1・2、PL-153）

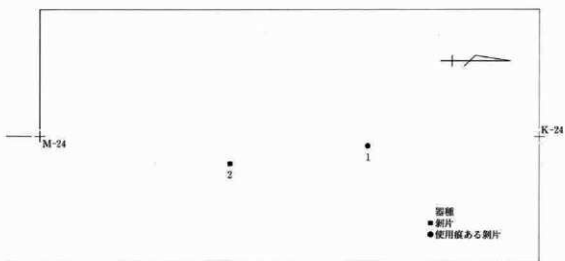
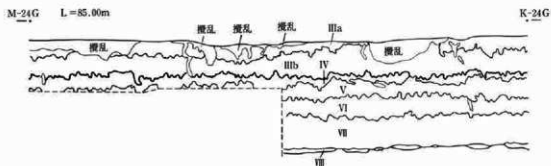
K-24グリッドの試掘坑で石器1点が出土したため、西側に2m、南側に4mを拡張し精査したところ、さらに1点の出土が得られたが、出土石器はこの2点のみであった。1はチャート製の使用痕ある剥片で、III b層下半からの出土である。両面に節理面をもつ断面三角形の剥片で、裏面の大きな剝離面が最も古い面で、この時点で節理面から剝落したものである。節理面には異なる方向からの剝離面が残る。表面には同方向からの剝離が重畳し、その打点方向に使用によると思われる刃こぼれが認められる。2は黒色安山岩製の剥片で、III b層上半からの出土である。横長剥片の中央部から半割れたもので、上方に打面を残している。表裏面ともほぼ同方向からの剝離が行われている。この2点の石器は8cmの高低差をもって出土しているが、この部分ではB P 軽石が混土化しているため、同軽石層との上下関係は不明である。

4 第II文化層の調査

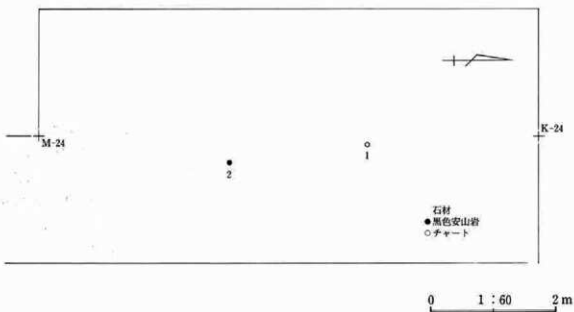
第II文化層の概要

第II文化層の遺物総数は164点で、これらはV層を中心にIV層下位からVI層中位にかけて出土している。

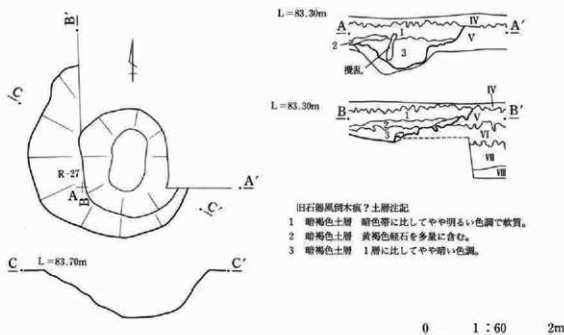
第5章 検出された遺構と遺物



第317図 第1文化層器種別分布図



第318図 第1文化層石材別分布図



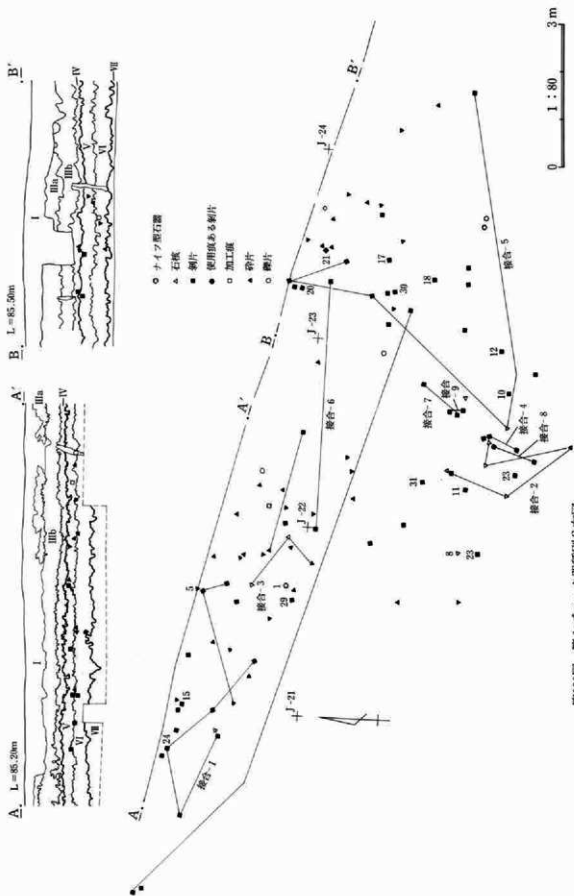
第319図 旧石器風倒木痕？

部はAT層上にもおよぶが、概ねAT層下の文化層としてよいだろう。分布は台地西側を中心に調査区のほぼ全域にわたっているが、いずれも散在する傾向にある(付図-10)。分布の中心部にあたる台地西側の22ライン以西が削平されており、この部分では本来の分布状況が失われていると判断されるが削平の及んでいない部分の分布状況も加味すると、本調査区が遺跡の中心とは思われない。むしろ北側の台地に中心があり、本調査区はその縁辺にあたるものと考えたほうがよいであろう。確認されたブロックは、北側調査区外へのびる1カ所のみである。

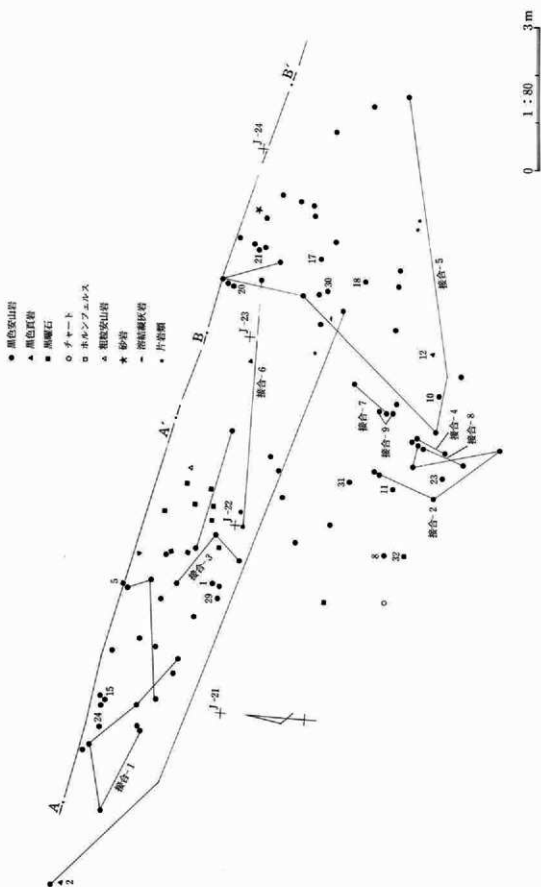
石器の器種構成は、ナイフ形石器1点、加工痕ある剥片3点、使用痕ある剥片5点、石核11点、剥片76点、碎片45点、礫片25点である。石材は10種類のもので出土しており、このうち黒色安山岩が102点で全体の62%を占めている。その他では片岩類19点、黒曜石14点、黒色頁岩9点、チャート8点であり、他は数点づつ出土である。接合関係はブロック内のみで認められたが、石材はいずれも黒色安山岩であった。また、石核11点と定形石器であるナイフ形石器も全て黒色安山岩であり、本調査区内で一連の製作工程が想定できるのは、黒色安山岩のみである。黒色安山岩に次ぐ片岩類はいずれも礫片であるが、その分布はブロック周囲の7点の他は広範に散在する特異な分布を見せている。この石材は下触牛伏遺跡では極部磨製石斧に多用された特有の石材であり、本遺跡でも極部磨製石斧を保有していた可能性が高い。

風倒木痕の調査(第319図)

石器群の調査に伴って、Q-27グリッド南西部で風倒木痕が検出された。平面形は直径約2mの不正円形で、断面形は上半がやや開くスリ鉢状を呈す。埋積土は軟質の暗褐色土で3層に分層され、上面にIV層が水平堆積している。地山の逆転現象が明瞭に認められないことから、当初は土坑として調査を行ったが、完掘状態で底面に数本の根状痕跡が認められたため、風倒木痕と判断した。



第320図 第1ブロック掘台別分布図



第321図 第1ブロック石材別分布図

第5章 検出された遺構と遺物

第1ブロックについて（第320図・第321図、PL-55・56）

I-20～24、J-21～24グリッドに位置する。東西20m、南北10mの広範囲に分布し、北半は調査区外にかなり不明である。また、本ブロックもJ-21・22グリッドを中心に削平がおよんでおり、欠失したのも多いと思われる。調査した範囲には4つのブロックが含まれると思われるが、明確な分離ができないため、ここでは一括して扱っておきたい。

ブロックはナイフ形石器1点、加工痕ある剥片1点、使用痕ある剥片1点、石核5点、剥片39点、砕片36点、礫片5点の合計88点の石器で構成される。石材は黒色安山岩が66点で全体の75%を占め、他に黒曜石14点、片岩類3点の他、黒色頁岩・チャート・粗粒安山岩・砂岩・溶結凝灰岩が各1点づつあり、かなりのバラエティが認められる。このうち黒色安山岩はブロック内のみで11例39点が接合しており、最多は6点、最長は16m間の接合例が認められた。

第II文化層の石器（第322図3～第325図35、PL-153・154）

3はナイフ形石器で、定形石器では唯一の出土例である。横長剥片を縦位に使用し、打面部に調整加工を加えて側縁とし、もう一方の側縁と基部は切断によって直線的に作出している。刃部に加工は施されない。

4～7は使用痕ある剥片である。4は切断した剥片の両端部に使用痕が認められる。5は打面調整部分を取り込んだ横長剥片の一端を使用したもので、そのままナイフ形石器状を呈す。6・7は縦長剥片の側縁を使用面としたもので、6は端部を欠失している。

8・9は加工痕ある剥片である。8は横長剥片の一端に微細な加工を施したもので、欠損品である。9は周縁部全体に調整加工を加えて母指状に作出している。

10・11は石核である。10は数方向からの剝離面が認められる。11は直角の切断面をもつもので、表面には2方向からの剝離面が認められる。いずれも幅広の剥片を作出している。

12～35は剥片である。一部に自然面を残すものが多い。形状は縦長と幅広のものが主流で、前者は同方向からの剝離が多いが、幅広のものや円形状のものは異方向からの剝離面を残すものが比較的多く見られる。

33は本遺跡最大の剥片で、これを剝離できる石核は調査区内では確認されていない。

第II文化層の接合資料（第326図～第328図、PL-155）

接合例は11例39点であり、いずれも黒色安山岩で第1ブロック出土である。

接合-1は石核2点と剥片4点、合計6点で構成される。内側から稜面に向かってほぼ同一方向の剝離が行われており、幅広の剥片を作出している。

接合-2は石核1点、割れた石核3点、剥片1点、砕片1点、合計6点で構成される。3つに分割した石核は、いずれも剝離面から稜面に向かって力が加わっている。

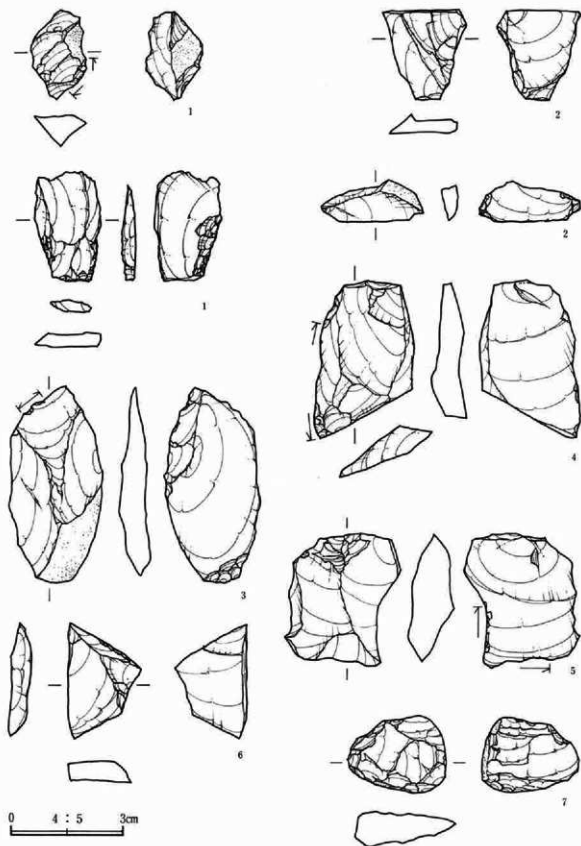
接合-3は石核2点、砕片1点、合計3点で構成される。石核は90度の打面交換を行った後に1枚の縦長剥片を剝離し、その後2分割されている。

接合-5は石核1点、剥片4点、合計5点で構成される。工程は剥片1・3を剝離した後に2の剥片を剝離しており、2が目的剝離となっている。

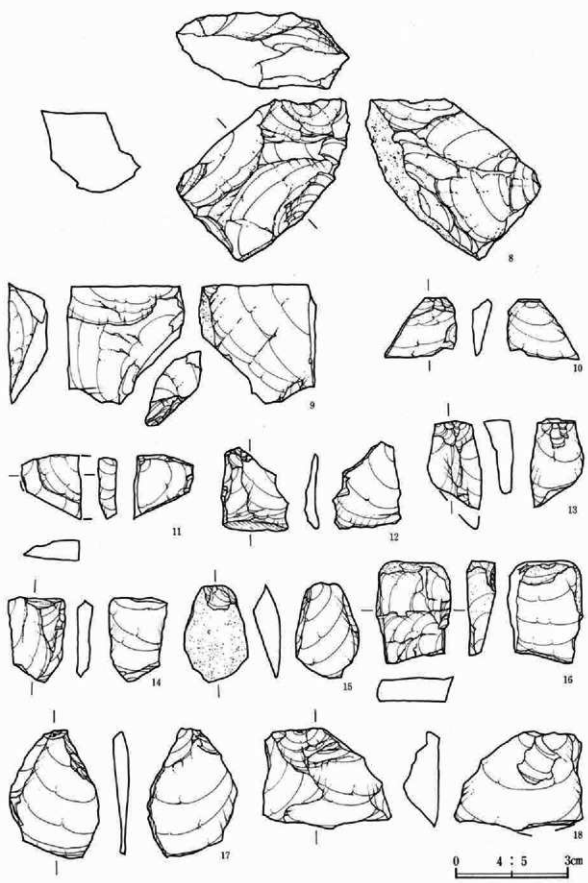
接合-4・6・7はいずれも剥片の接合例で、4が4点、6・7は2点で構成される。4・7は幅広の剥片を同方向から剝離している。6は大型の剥片の接合例で、打面の転換が認められる。

接合-8・9は欠損した剥片の接合例である。

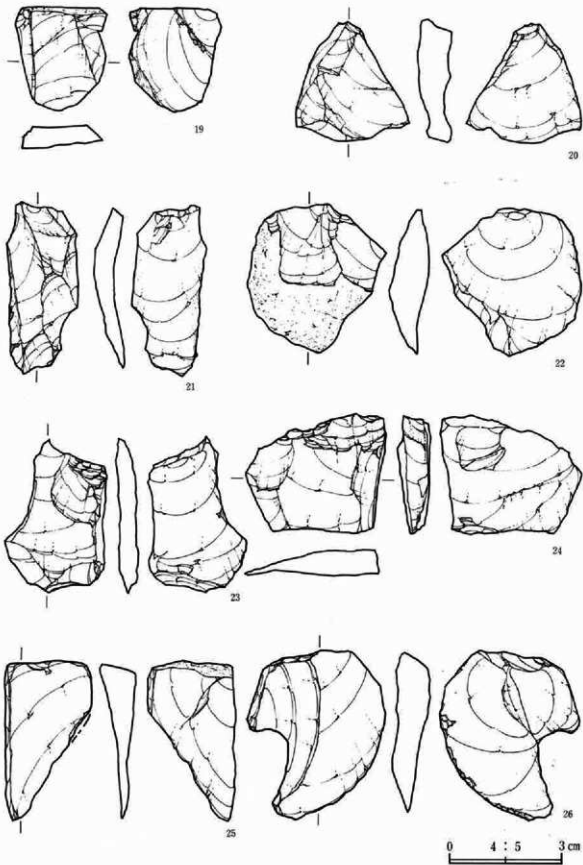
第6節 旧石器時代の遺構と遺物



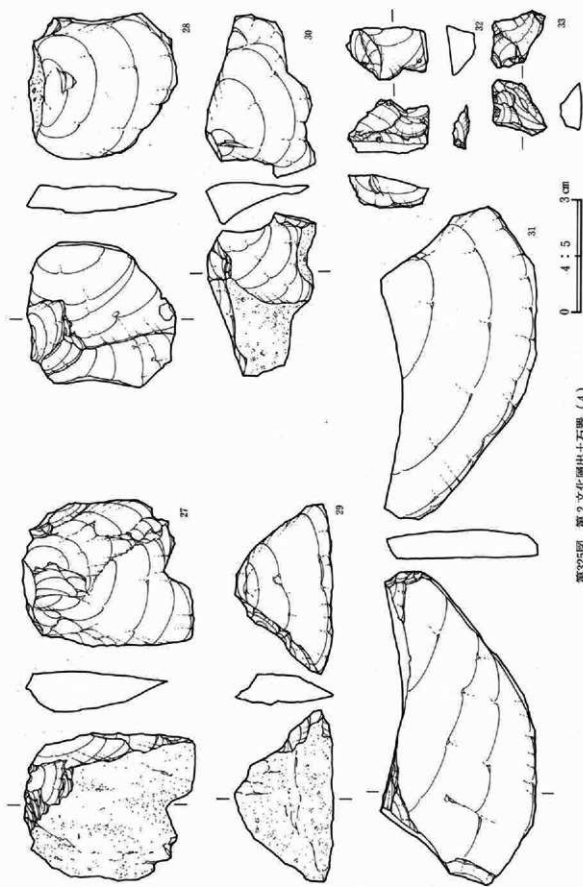
第322図 第1文化層出土石器（上段2点）、第2文化層出土石器（1）



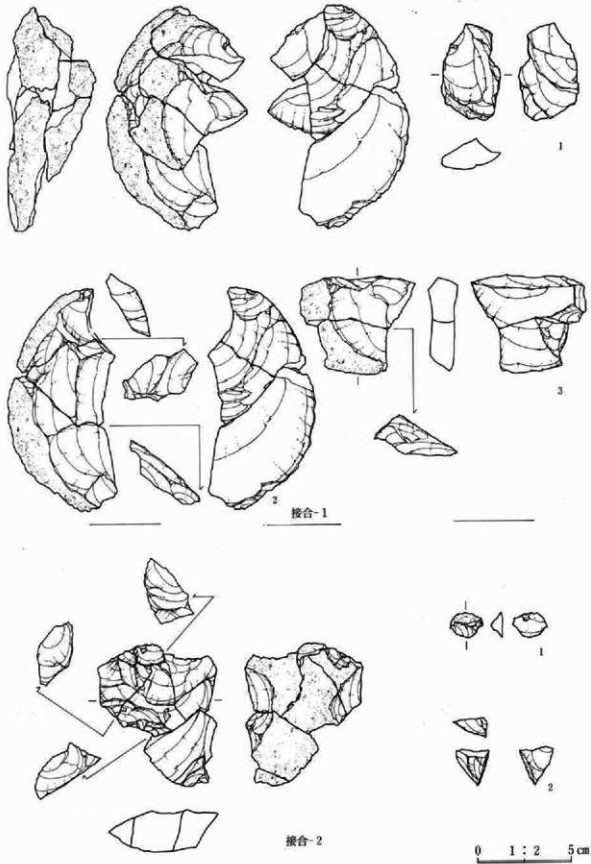
第323図 第2文化層出土石器(2)



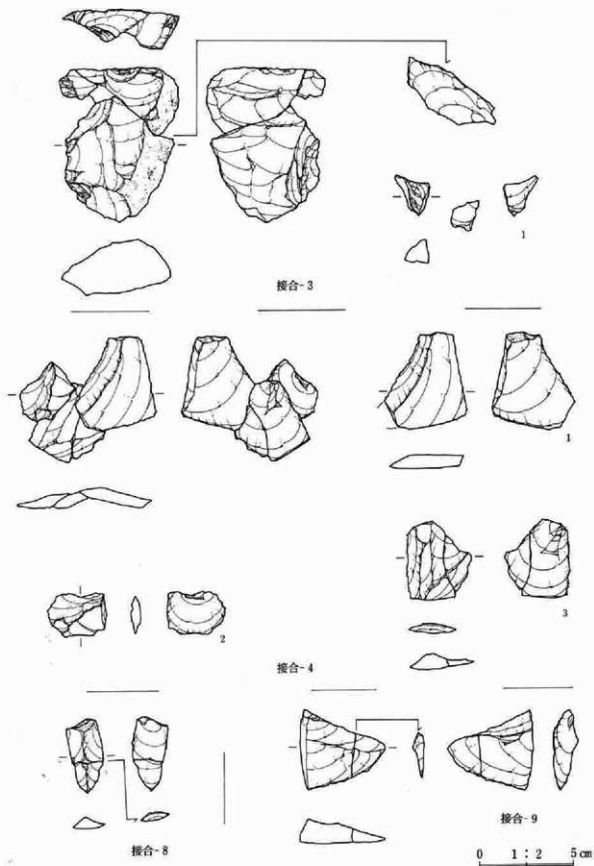
第324図 第2文化層出土石器(3)



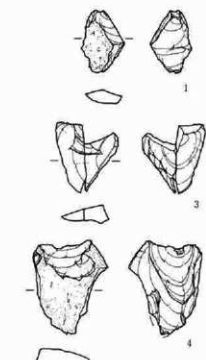
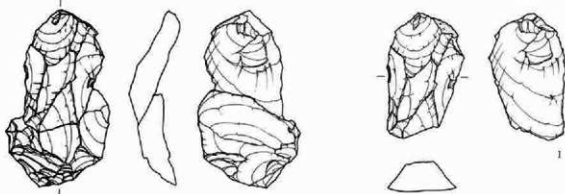
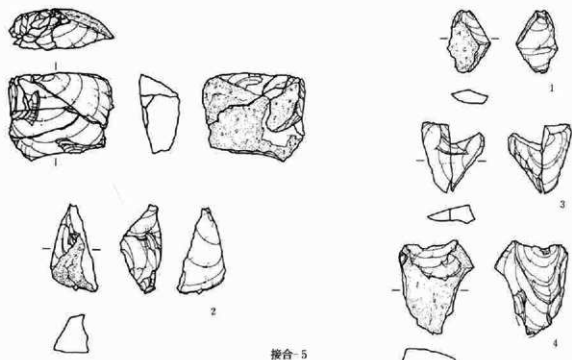
第325図 第2文化層出土石器(4)



第326図 第2文化層接合資料(1)



第327図 第2文化層接合資料(2)



第328図 第2文化層接合資料(3)

0 1:2 5 cm

第6章 ま と め

1. 水 田

1区

1区では水田や水路・溝から古墳時代後期の土器が多量に出土している。しかし、住居が検出された2区(台地上)では、西側が削平されているものの古墳時代後期の住居が存在せず、1区出土遺物は調査区北側に続く台地西側からもたらされたのであろう。これは、2区遺構外出土遺物の中に古墳時代後期の土器が若干認められること、2区とした調査区が洪積台地南端を東西にかすめるように横断し、北側ほど住居分布が密なことから集落の中心がより北側に存在すると考えられることから傍証される。

1区からはA s-B下水田、第3氾濫層下水田、第4氾濫層下水田、A s-C下水田の4枚が検出され、第4氾濫層下水田調査中に2地点でプラント・オパール分析を実施した。分析の結果、A地点では9・10・11層上部にピークが認められ、水田耕作の可能性が増強された。しかし、1区の水田中最も良好なアゼを検出したA s-C下水田耕作土の15層では1個もプラント・オパールが検出されておらず、調査結果と異なる結果が出されている。この事実は、結果的に分析地点が遺存不良部分となってしまったことを差し引いても理解しがたい結果である。そこで、試料数は3点と少ないが近接したA地点の結果をみると、A地点10-1層が7,300個/区、10-2層が2,000個/区、11-1層が5,000個/区、11-2層が900個/区なのに対し、A地点では10-1層が2,900個/区、10-2層が900個/区、11層が0個/区と地点によってかなりの違いが認められた。したがって、先のA s-C下水田の結果も地点を変えればイネのプラント・オパールが検出された可能性もある。いづれにしても一地点での分析の問題とともに、同一水田面、同一区画内での平面的な密度差異のデータ公表を期待したい。

3～6区

3～6区の谷地では、A s-C層下からA s-B層下の間に計6枚の水田を検出した。検出された水田の時期は、分層の鍵層としたA s-C、H r-F A、A s-Bといったテフラ以外に耕作土層から出土した遺物の下限をあてることも考えられる。しかし、本遺跡の場合、テフラに直接埋没していない水田は、耕作時の地表面すなわち水田面を検出していない可能性が高く信頼性に欠ける。加えて、泥炭質土特有の圧密化(本文編、233図-1、第254図-9第265図-53、第266図-54)により堆積土が圧縮されていることも水田面の検出を困難にしていると考えられる。また、時期決定に有効な土器は土層堆積状態不良な谷地縁辺に多く、縁辺に存在する住居の時期以外の遺物はほとんど出土しない。また、部分的に深く耕作が及んでいる箇所から土器が出土することもあってより新しい土器の混入(例えば第251図-1、2など)が認められ、一層時期決定を困難なものとしている。したがって、材同定の際にはH r-F A層より上層の水田検出時に出土した木製品については奈良・平安時代として扱っている。

検出された6面の水田区画は各水田毎に多少異なるが、谷地中央の区画に注目するとH r-F A下水田とH r-F A上第2水田の間で区画の長軸が90°変わっている。H r-F A上第2水田より上層では、水田の保水性からくる長軸を等高線と平行方向に設定する等高線耕作の原則に則っている。それに対し、H r-F A下水田より下層の水田では等高線と直行方向に長軸を設けている。この谷地のA s-B層から下層は、アシのような植物遺体を多く含む泥炭質の土であるうえ、肉眼で見る限りH r-F A上第2水田より上層とH r-F A下水田より下層との堆積土の違いは認められなかった。そこで、これらの層位について自然科学

的分析結果をみると、植物遺体量を測定する強熱減量測定ではA s-C層より下位では60%前後、上位では50%前後という結果がでていた。また、珪藻分析では19層～22層（21層はA s-C純層）は沼沢湿地のような環境、17・18層（17層はH r-F A下水田耕作土）では前後と比較して水深が増加した沼沢湿地、その後15 a層に流水の影響が認められるほかは、A s-B堆積前の10層まで沼沢湿地の環境が継続していたと考えられている。珪藻分析ではA s-C上・同下水田とH r-F A上第1・同第2水田、A s-B下水田との水深差は読み取れないが、前者の層位に植物遺体量が多いことを考慮すれば、水田区画長軸方向の変化は水田面の水量（水深）の変化に起因したと考えられまいだろうか。以上のような違いは認められるものの、A s-B以下の水田が沼沢地性であったことには変わりなく、この環境は種実遺体同定、花粉分析、昆虫遺体同定も同様な結果を出している。

水田耕作時に沼沢地性であるうえに耕作土が泥炭質であれば生産量が問題となる。本谷地で行った2地点のプラント・オパール分析の結果、通常では水田の可能性が高いと判断する5,000個/ccを大幅に下回ると共に、1区に比して生産性が低いとされていた。しかし、3～6区の水田が非常に比重の軽い泥炭質土であることを考慮し、1ccあたりではなく仮比重を基に1gあたりの個数に換算すると、各水田共に1区の水田に比して遜色のない数値となる。（最近のプラント・オパール分析では個数/gを使用している。）しかし、水田としては決して良好な環境ではなかったことに変わりはなく、イネよりもヨシ属のプラント・オパールが卓越すると共に、花粉分析でもイネ属花粉の量は少ないとされている。A s-C層上の水田を検出していない層位でもイネ属花粉は一概に認められ、プラント・オパール分析でも地点による違いはあるものの水田を検出した層とほぼ同量のイネのプラント・オパールが検出されており、分析からは水田経営が継続した可能性が高いとされている。

長期間にわたって泥炭質の粘質土が堆積していた谷地も、A s-B降下後突如として砂質の堆積土となり現在に至っている。河川の影響のない谷地にあって砂質土が5区で約1m自然堆積するとは考えにくく、調査区南側の道路を境として南は約1m低くなっていることから、堆積土の多くは客土であると考えられる。これに伴い、以前に比して水田可耕作地としては良好になったようで、検出されるイネ属花粉やプラント・オパールの絶対量は増加している。

3～6区の谷地では、15層堆積時に好流水性種の珪藻が多出し流水の影響が認められ、6区北東には洪水によると思われる砂層が堆積している。しかし、河川のない谷地であるため水田を覆うのはもとより、層として確認できるのは他にはない。一方、宮川に面した千足遺跡1区、無名小河川に面した二之宮宮下東遺跡5区、粕川流域の五目牛清水水田遺跡1～3区、5区などでは度重なる河川氾濫により埋没した水田が複数面検出され、赤城山麓の河川災害の多さを物語っている。このような中にあって千足遺跡3～6区の谷地はその地形から洪水による災害から守られていた数少ない場所であった。そのため、本文編「遺跡の位置と周辺環境」で触れたように近年まで「種田」と称して種肥を確保していたことを考え合わせれば、生産性は低いものの安全な場所であったため、古くから開田され現在まで稲作が続けられているのであろう。

3～6区とした谷地は、本文中で述べたようにボーリング調査により深さ7mにも及ぶ洪積世からの谷地であることが判明した。A s-C下水田以下の堆積層中には、A s-S j（浅間一総社軽石）、A s-Y P（浅間一板鼻黄色軽石）、棒名一八崎軽石（H r-H P）の指標テフラや浅間D軽石（A s-D）の可能性のあるものなどが確認された。この堆積土の分析は、谷地縁辺から出土した縄文時代や台地上の旧石器時代の遺跡周辺環境を知るのみでなく、関東における植生史研究にとっても意義深いものとなったであろう。

2. 胎土分析

土師器の胎土分析

土師器類の胎土分析目的の第1は、古墳時代の杯の焼成温度差であり、第2にそれらの胎土傾向の差異である。第1の目的については、肉眼観察で最も焼成温度が高いと考えられた1類が焼成ランクII、II～IIIと高ランクに位置付けられた。中でも断面などが還元状態で焼き歪みや発泡しかかっている部分が認められる試料№11・12（以下試料№を省略）がランクIIと最も高ランクの結果が出ており肉眼観察の結果と一致している。第2の胎土であるが、肉眼観察では9～12を1類、13～16を2類、17～19を3類、20、21を4類、22、23を5類としたが、石英-斜長石の相関による分類ではIグループが試料№22、26、IIグループが試料№14、15、16、17、19、20、21、23、29（二つに分類可能か）、IIIグループが試料№9、10、11、13、その他が試料№12、18、24、25、27、28と判断され若干相違が生じている。1類がほぼIIグループに相当するが、IIグループに入っていない№12と№9～11のX線回折試験チャートを比較すると（胎土分析第10図参照）ピークの変動パターンに共通性が認められ、同一グループの可能性もあるのではないだろうか。

2類は当初13・14・16の胎土が1類に近似するとした。しかし、分析結果は13が1類に含まれ、他が集中する傾向が認められた。この結果を受けて再度確認したところ（巻頭カラー参照）誤認であり、13は1類に14・15・16は1類と3類の中間的な特徴を有しており分析結果と一致した。なお、この傾向はX線回折チャート（第10図）でも伺える。

3類は胎土全体の感じは同様であるが、19のみに石英粒が認められるという違いがあった。分析による石英と斜長石の相関図では当然若干異なった結果となっている。また、X線回折チャートでは19にのみ角閃石の高いピークが認められるなど若干異なった傾向を示しているようである。焼成温度は、肉眼観察同様1類に比して低温で焼成されているという結果となっている。

4類は当初1類に近いしていたが、石英と斜長石の相関では2類と3類の中間に位置している。後に実顕微鏡で胎土の拡大写真撮影の確証した結果、肉眼観察でも2類に近いことを確認した。この結果はX線回折チャートでも確認できる。

5類は22・23共に量が少ないため、両者で胎土傾向が異なるが、その他としてまとめた一群である。分析結果は両者とも異なるグループと判断され、X線回折チャートでも同様な傾向が伺える。また、3類とも異なる一群であった。

その他として被熱粘土塊とフイゴ羽口、平安時代の土師器壺・杯の分析を行ったが、いずれも分析値にばらつきがあり集中しなかった。また、これらは肉眼観察でも共通点が少ない。したがって、整理作業中には被熱粘土塊がフイゴ羽口の摩滅した破片の可能性も考えたが、フイゴ羽口や鉄滓と分布が若干異なることからその可能性は少ないといえる。

縄文土器の植物珪酸体分析結果について

縄文土器のうち、ある一定時期にわたって胎土に植物繊維を混入する時期があることは、古くから注目されていたが、どのような植物が何のために混入されたのかについては、未だ明確な結論が出ていない。この問題を解明するため第1ステップとして、今回はまず土器胎土に含まれる植物繊維は何かを明らかにすることを目的として、植物珪酸体分析を実施した。この分析法を選んだのは、ススキやササに含まれるいわゆるプラントオパールはガラス質であり、土器胎土の硬質化に関与した可能性があることによる。分析試料は、本遺跡出土の繊維土器12点と比較用の無繊維土器4点、合計16点とした。

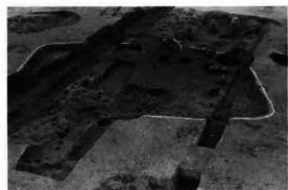
分析の結果、プラントオバールの含有量は総体として繊維土器に多く含まれる傾向が見られたが、無繊維土器にも少なからず含まれており、その量比は繊維土器の個体差を上回るほどではなかった。しかし、植物の種類が比較的明確なネザサ節・クマザサ属などを含むタケ亜科やウシクサ族・ヨシ属では繊維土器と無繊維土器の量比がより大きい傾向がある。そして繊維土器での個体差による量比がかなり大きいのに対し、無繊維土器は平均して少ない傾向が伺える。このことは、繊維土器のサンプルの採取位置の違い（例えば繊維痕の集中している部分を使ったものと、そうでないものの差）による可能性も考えられる。また、今回分析した土器では、プラントオバールの風化や損傷が激しく、この傾向は特に無繊維土器やプラントオパール含有量の少ない繊維土器ほど著しい傾向が認められた。これは土器の生地そのものに含まれているプラントオパールが風化損傷している可能性と、焼成時の温度によりプラントオパールが溶け出している可能性の二つが考えられよう。

今回の分析では、繊維土器に含まれる植物を特定することはできなかったが、無繊維土器にもプラントオパールが含まれていること、繊維土器にもプラントオバールの含有量にかなりの差があること、プラントオバールのなかには風化損傷しているものが多いこと、などが明らかとなった。また、繊維土器のうち数点が多量のタケ亜科を含んでいた点も注目しておきたい。なお、胎土分析の結果では、繊維土器の多くは繊維の脱落した空洞の内壁が、他の部分に比べてガラス化しているという所見も出ており、今後サンプルの採取位置も問題にしていきたい。





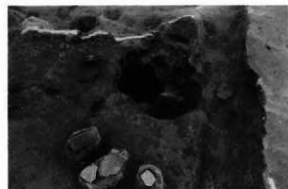
2区台地全景



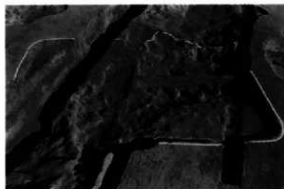
2区1号住居跡全景



2区1号住居跡竈

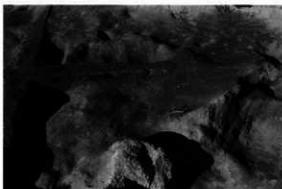


2区1号住居跡貯蔵穴



2区1号住居跡掘形全景

PL-2



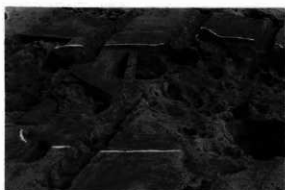
2区1号住居跡掘形



2区2号住居跡全景



2区2号住居跡掘



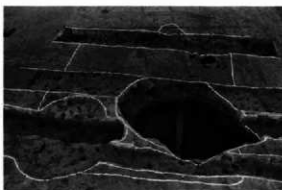
2区2号住居跡掘形全景



2区3号住居跡掘形全景



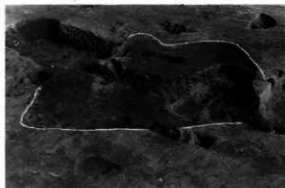
2区4号住居跡掘形全景



2区5号住居跡掘形全景



2区6号住居跡掘形全景



2区7号住居跡全景



2区7号住居跡竈



2区7号住居跡掘形全景



2区7号住居跡掘形遺物出土状態



2区8・9号住居跡全景



2区8号住居跡全景



2区8号住居跡竈

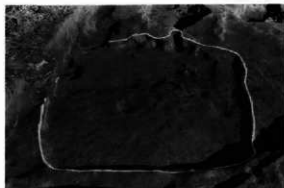


2区9号住居跡全景

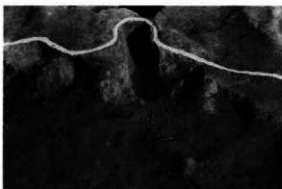
PL-4



2区9号住居跡貯藏穴



2区23号住居跡全景



2区23号住居跡竈



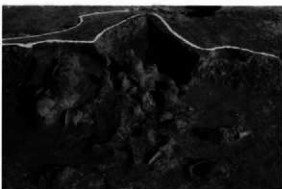
2区8・9・23号住居跡掘形全景



2区8・23号住居跡掘形全景



2区10号住居跡全景



2区10号住居跡竈付近遺物出土状態



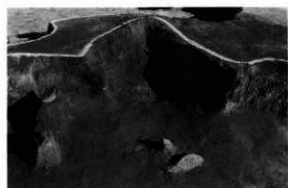
2区10号住居跡竈煙道遺物出土状態



2区10号住居跡竈前遺物出土状態



2区10号住居跡竈前遺物出土状態



2区10号住居跡竈



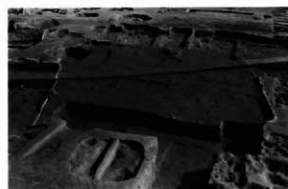
2区10号住居跡竈後床下土坑と竈前床面



2区10号住居跡竈後掘形全景



2区10号住居跡住居拡張前・後掘形全景

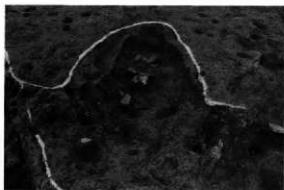


2区11号住居跡全景



2区11号住居跡竈前遺物出土状態

PL-6



2区11号住居跡電掘形



2区12号住居跡全景



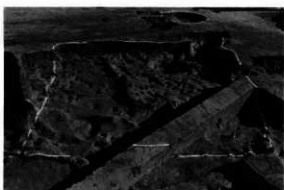
2区12号住居跡電遺物出土状態



2区12号住居跡電



2区12号住居跡円筒埴輪を使用した電支脚



2区12号住居跡掘形全景



2区13号住居跡全景



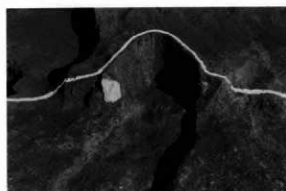
2区13・14号住居跡掘形全景



2区14号住居跡全景



2区14号住居跡鉄製紡錘車出土状態



2区14号住居跡竈



2区15号住居跡全景



2区15号住居跡遺物出土状態



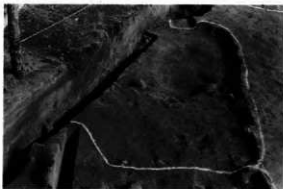
2区15号住居跡竈



2区15・16号住居跡掘形全景



2区15・16号住居跡掘形遺物出土状態



2区16号住居全景



2区16号住居遗迹出土状态



2区16号住居跡電



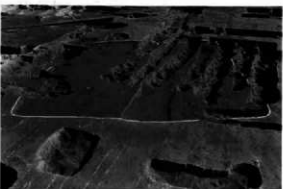
2区17・18号住居跡全景



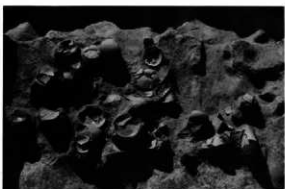
2区18号住居跡遗迹出土状态



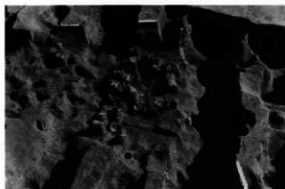
2区17・18号住居跡掘形遗迹出土状态全景



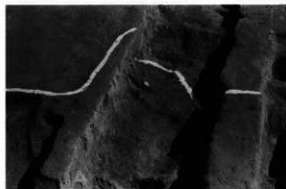
2区19号住居跡全景



2区19号住居跡貯藏穴? 遗迹出土状态



2区19号住居跡貯藏穴? 遺物出土状態



2区19号住居跡竈



2区19号住居跡掘形全景



2区20号住居跡全景



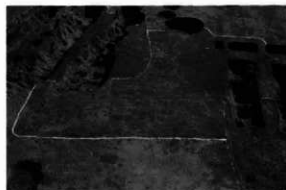
2区20号住居跡竈



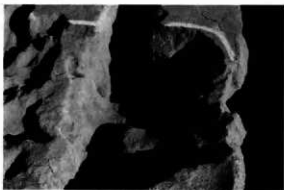
2区20号住居跡貯藏穴



2区20号住居跡掘形全景



2区21号住居跡全景



2区21号住居跡貯蔵穴



2区21号住居跡掘形全景



2区22号住居跡全景



2区22号住居跡電



2区22号住居跡掘形全景



2区22号住居跡掘形



2区22号住居跡掘形遺物出土状態



2区24号住居跡全景



2区24号住居跡遺物出土状態



2区24号住居跡窠



2区24号住居跡掘形全景



2区25号住居跡全景



2区25号住居跡掘形全景



2区26号住居跡全景

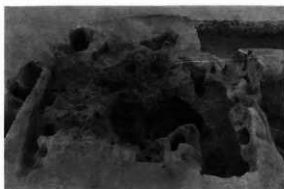


2区26号住居跡遺物出土状態

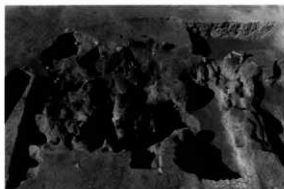


2区27号住居跡全景

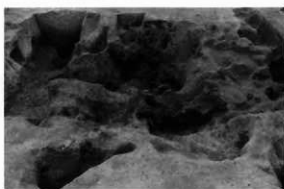
PL-12



2区1号小鍛冶跡全景



2区1号小鍛冶跡遺物出土状態



2区1号小鍛冶跡遺物出土状態近接



2区1号小鍛冶跡遺物出土状態近接



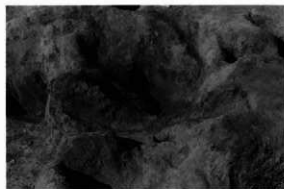
2区1号小鍛冶跡遺物出土状態近接



2区1号小鍛冶跡金床石出土状態



2区1号小鍛冶跡土器出土状態



2区1号小鍛冶跡炉床セクション



3区1・2号竪穴全景



3区1・2号竪穴連結部



3区1・2号竪穴掘形全景



3区1・2号竪穴セクション



2区1号井戸全景



2区1号井戸底部



2区1号井戸水桶出土状態



2区1号井戸構出土状態

PL-14



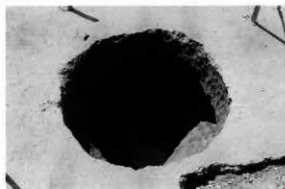
2区2号井戸全景



2区2号井戸底部



2区3号井戸全景



2区3号井戸全景 (底部掘削時)



2区3号井戸底部



2区4号井戸全景



2区5号井戸全景



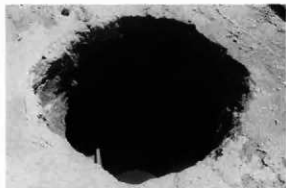
2区7号井戸全景



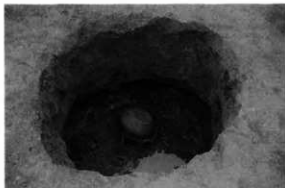
2区7号井尸遗物出土状态



2区7号井尸底部



2区8号井尸全景



2区8号井尸五輪塔出土状态



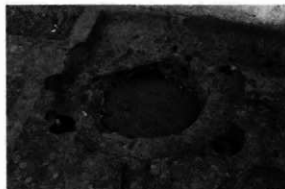
2区8号井尸筒近接



2区9号井尸全景

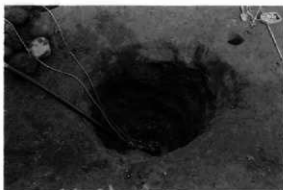


3区10号井尸全景

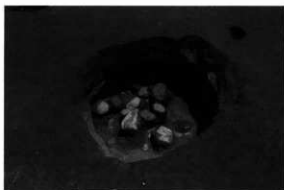


3区11号井尸確認状態

PL-16



3区11号井戸全景



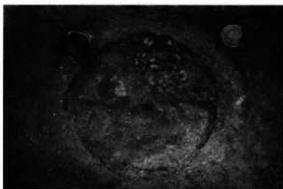
3区11号井戸露出土状態



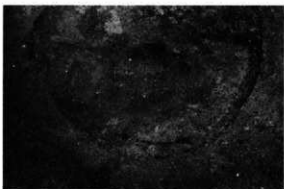
3区12号井戸全景



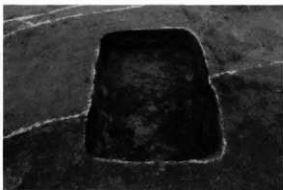
2区1号墓塚全景



2区1号墓塚桶底状压痕と遺物出土状態



2区1号墓塚桶底状压痕近接



1区13号土坑全景



1区17号土坑全景



2区17号土坑遗物出土状态



2区18号土坑全景



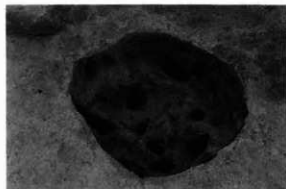
2区19·27号土坑全景



2区21号土坑全景



2区23号土坑全景



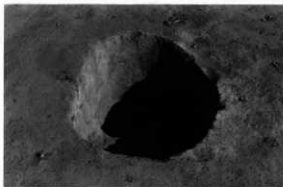
2区25号土坑全景



2区29号土坑全景



2区30号土坑全景



2区32号土坑全景



2区33号土坑全景



2区35号土坑全景



2区36号土坑全景



2区38号土坑全景



2区39号土坑全景



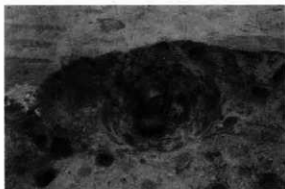
2区40号土坑全景



2区46号土坑全景



2区46号土坑全景



2区54号土坑全景



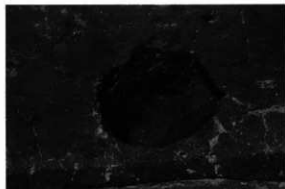
2区55号土坑全景



3区45号土坑全景



3区61号土坑全景



3区62号土坑全景



6区65号土坑全景



6区66号土坑全景

PL-20



1区溝群全景（南より）



1区溝群全景（南西より）



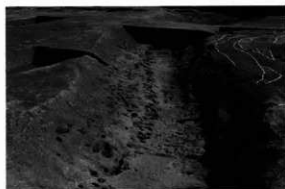
1区時期不詳水田



1区1号溝全景



1区1号溝南半



1区1号溝南北半



1区1号溝杭出土状態



1区6号溝全景



1区6号溝杭出土状態と底面



1区7号溝全景



1区8号溝全景



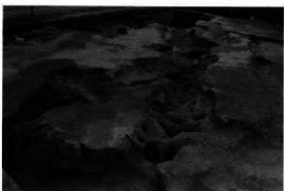
1区9号溝全景



1区10号溝全景



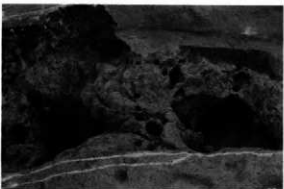
1区11号溝全景



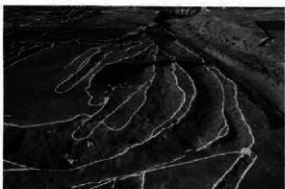
1区11・15号溝全景



1区15号溝底面



1区15号溝底面ウォーターホール近接



1区11・12・15・16号溝全景



1区11・15・36号全景



1区22~30号全景



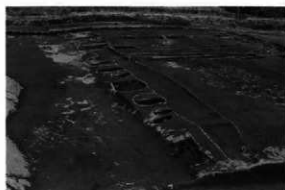
1区22~30号全景



1区32号全景



1区31号全景



1区33号溝と3~8・11号土坑全景

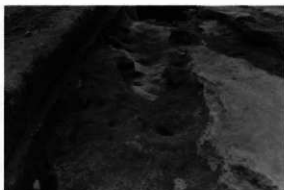


1区34号全景

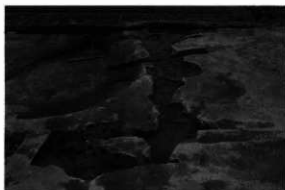


1区35号全景

PL-24



1区36号洞全景



1区56号洞全景



1区57·58号洞全景



3区48号洞全景



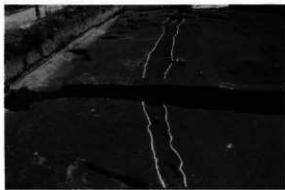
3区49号洞全景



3区60号洞全景



6区64号洞全景



3区71·72号洞全景



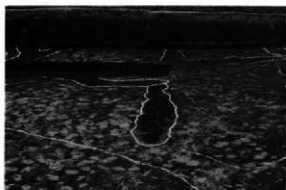
1区 As-B 下水田全景



1区 As-B 下水田水路 (42号溝)



1区43~45号溝全景 (As-B 下水田検出時に確認)



1区46号溝全景 (As-B 下水田検出時に確認)



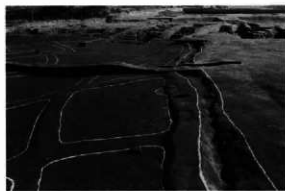
1区47号溝全景 (As-B 下水田検出時に確認)



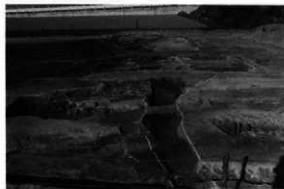
1区第3氾濫層下水田と溝群全景（西より）



1区第3氾濫層下水田と溝群全景（南東より）



1区第3氾濫層下水田と50号溝



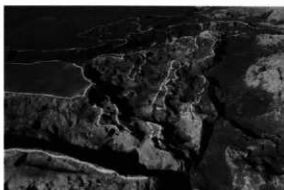
1区第3氾濫層下水田と54号溝



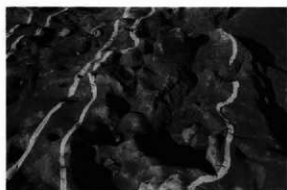
1区第3氾濫層下水田に伴う溝群と1・2号水溜



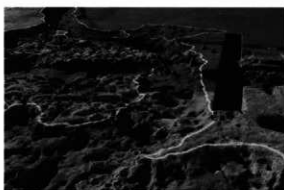
1区50号溝近接



1区1号水溜、54号溝



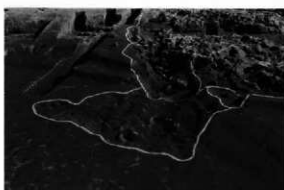
1区52号溝遺物出土状態



1区1・2号水溜、52号溝



1区2号水溜と53号溝



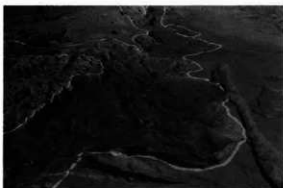
1区1号水溜と52号溝(西より)



1区1号水溜と52号溝近接(西より)



1区2号水溜と53号溝



1区2号水溜全景



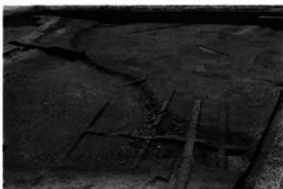
1区2号水溜近接



1区第4祀層層下水田耕作痕



1区1号祭祀全景



1区3号溜井と73号溝全景（東より）



1区3号溜井と73号溝全景（西より）



1区3号溜井遺物出土状態



1区3号溜井全景



1区 As-C 下水田全景 (東より)



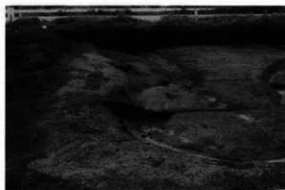
1区 As-C 下水田近接



1区旧河道全景 (東より)



1区旧河道北半 (東より)



1区旧河道南半 (東より)



1区 As-C 下水田耕作土下杭群全景



1区 As-C 下水田耕作土下杭近接



3区1号溜井遺物出土状態



3区1号溜井遺物出土状態



3区1号溜井全景(4区部分)



3区1号溜井全景（4区部分）堰板出土状態



3区1号溜井全景（4区部分）遺物出土状態



3区1号溜井お守り刀出土状態



3区1号溜井遺物出土状態



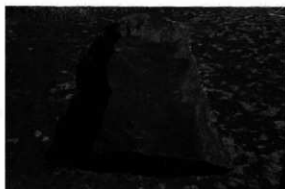
3区1号溜井遺物出土状態



4区2号溜井全景



4区2号溜井涌水部分近接



4区不明遺構全景



3区 As-B 下水田全景 (南より)



3区 As-B 下水田全景 (西より)



3区 As-B 下水田近接



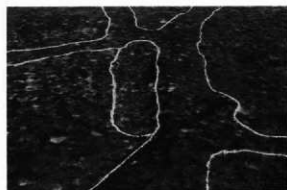
3区 As-B 下水田近接



3区 As-B 下水田1号水口近接



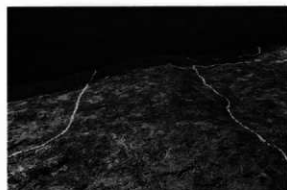
4区 As-B 下水田全景 (南西より)



4区 As-B 下水田近接



4区 As-B 下水田西側大アゼ



4区 As-B 下水田東側大アゼ



5区 As-B 下水田全景 (北西より)



5区 As-B 下水田全景 (東より)



5区 As-B 下水田西半



5区 As-B 下水田東半



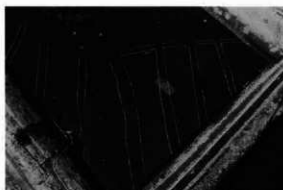
5区 As-B 下水田水路全景 (南西より)



3区 Hr-FA 上第1水田全景 (西より)



3区 Hr-FA 上第1水田全景 (南東より)



5区 Hr-FA 上第1水田全景 (南東より)



5区 Hr-FA 上第1水田遺物出土状態



6区 Hr-FA 上種子包含砂層全景



3区 Hr-FA 上第2水田全景 (南より)



4区 Hr-FA 上第2水田全景 (北東より)



4区 Hr-FA 上第2水田近接



4区 Hr-FA 上第2水田アゼ部分遺物出土状態



4区 Hr-FA 上第2水田遺物出土状態



5区 Hr-FA 上第2水田全景 (南東より)



5区 Hr-FA 上第3水田全景 (南西より)



5区 Hr-FA 上第3水田杭出土状態



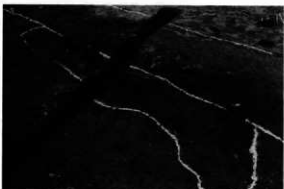
6区 Hr-FA 上第3水田全景



6区 Hr-FA 上第3水田遺物出土状態



6区 Hr-FA 上第3水田遺物出土状態



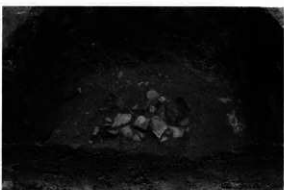
6区 Hr-FA 上第3水田遺物出土状態



6区 Hr-FA 上第3水田遺物出土状態



6区38号溝



6区 Hr-FA 上第3水田遺物出土状態



5区 Hr-FA 下水田全景 (南西より)



3区 As-C 上水田全景 (南より)



4区 As-C 上水田東半



4区 As-C 上水田西半

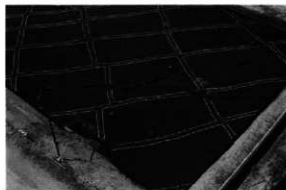


4区 As-C 上水田遺物出土状態

PL-40



5区 As-C 上水田全景 (北西より)



5区 As-C 上水田西半と65号溝



5区 As-C 上水田水路



5区 As-C 上水田遺物出土状態



5区 As-C 上水田木組



5区 As-C 上水田木組と Hr-FA 下水田大アゼ
(白線)



5区 As-C 上水田木組と Hr-FA 下水田大アゼ
(白線)



5区 As-C 上水田木組と Hr-FA 下水田大アゼ
(白線)



5区 As-C 上水田木組全景（北東より）



5区 As-C 上水田木組全景（北西より）



5区 As-C 上水田木組全景 (南西より)



5区 As-C 上水田杭



5区 As-C 上水田杭



5区 As-C 上水田木組出土状態



5区 As-C 上水田木組杭頭部近接



65号溝 (5区部分)



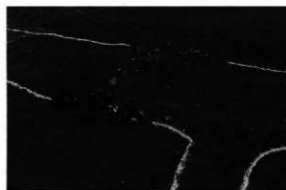
65号溝 (6区部分)



6区 As-C 上水田全景 (南より)



6区 As-C 上水田遺物出土状態



6区 As-C 上水田遺物出土状態



4区 As-C 下水田全景 (南より)



4区 As-C 下水田近接



4区 As-C 下水田大アゼ近接



4区 As-C 下水田大アゼ内の遺物



3区 As-C 下水田全景



5区 As-C 下水田全景 (南西より)



5区 As-C 下水田西半



5区 As-C 下水田水路 (南西より)



5区 As-C 下水田水路近接



5区 As-C 下水田水路近接



5区 As-C 上水田により削平された As-C 下水田アゼ



5区 As-C 上水田により削平された As-C 下水田アゼ



5区 As-C 上水田により削平された As-C 下水田アゼ



5区 As-C 下水田アゼに平行する溝状の落ち込み



5区 As-C 下水田水口状落ち込み



5区 As-C 下水田遺物出土状態



5区 As-C 下水田面近接



5区 As-C 下水田面近接



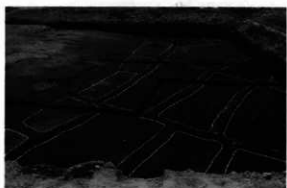
5区70号溝 (As-C 下水田耕作土下)



5区70号溝 (手前) と As-C 下水田面接 (奥)



6区 As-C 下水田全景 (南より)



6区 As-C 下水田全景 (北より)



6区 As-C 下水田近接



6区 As-C 下水田耕作土下木製品出土状態その1 (南西より)



6区 As-C 下水田耕作土下木製品出土状態その2 (南西より)



6区 As-C 下水田耕作土下鍍柄出土状態



6区 As-C 下水田耕作土下鍍柄出土状態



6区 As-C 下水田耕作土下鍍柄出土状態



6区 As-C 下水田耕作土下鍍柄近接



5区東側 As-C 下水田耕作土下木本類出土状態



2区1号埋設土器



2区1号埋設土器掘形



2区縄文1号土坑



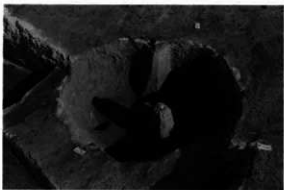
2区縄文2号土坑



2区縄文3号土坑



2区縄文6号土坑



2区縄文7号土坑



3区縄文8号土坑



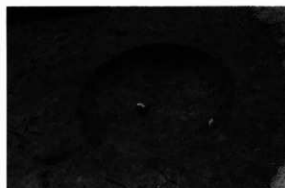
3区縄文8号土坑遺物出土状態



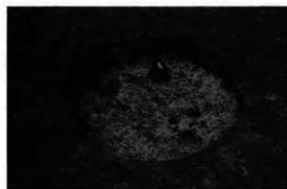
3区縄文9号土坑



3区縄文10号土坑



3区縄文12号土坑



3区縄文13号土坑



3区1号陥穴



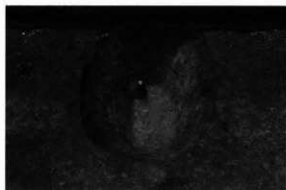
3区1号陥穴底部セクション



3区2号陥穴



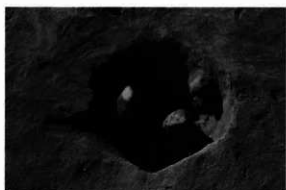
3区2号陷穴



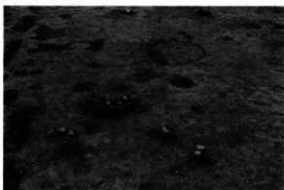
3区3号陷穴



2区1号集石



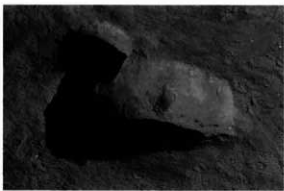
2区1号集石下土坑



2区1·2号集石



2区2号集石



2区2号集石下土坑



2区3号集石



2区3号集石下土坑



2区4号集石



2区4·5号集石



2区5号集石



2区6号集石



2区7号集石周边遗物出土状态



2区7号集石



2区7号集石下面



3区谷地縁辺縄文時代遺物出土状態（南東より）



3区谷地縁辺縄文時代遺物出土状態（南より）



3区谷地縁辺石棒出土状態



3区谷地縁辺縄文時代遺物出土状態（北より）



3区谷地縁辺縄文時代遺物出土状態（南より）



3区谷地縁辺縄文時代遺物出土状態（南東より）



3区谷地縁辺自然木根出土状態



3区谷地縁辺自然木根出土状態



2区西半旧石器試掘及び調査前



2区西半旧石器調査状況



2区東半旧石器調査状況



2区東半旧石器調査状況



2区旧石器第1ブロック遺物出土状態



2区旧石器第1ブロック遺物出土状態



2区旧石器第1ブロック遺物出土状態



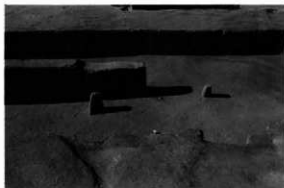
2区旧石器 J-23グリッド遺物出土状態



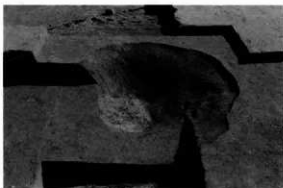
2区旧石器 I-20グリッド遺物出土状態



2区旧石器 M-19・20グリッド遺物出土状態



2区旧石器 K・L-24グリッド遺物出土状態



2区旧石器風倒木痕？



2区旧石器暗色帯下 M-23グリッド礫出土状態



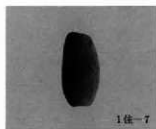
1住-1



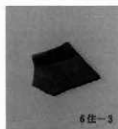
1住-9



6住-4



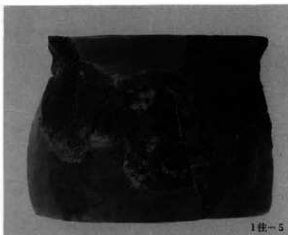
1住-7



6住-3



10住-14



1住-5



9住-3



9住-2



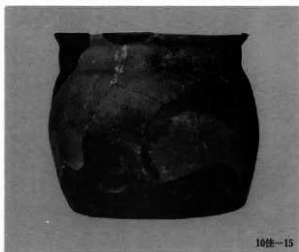
23住-1

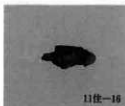
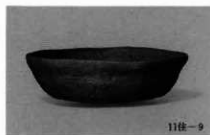
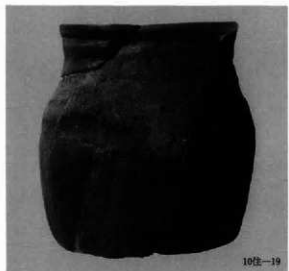


10住-7

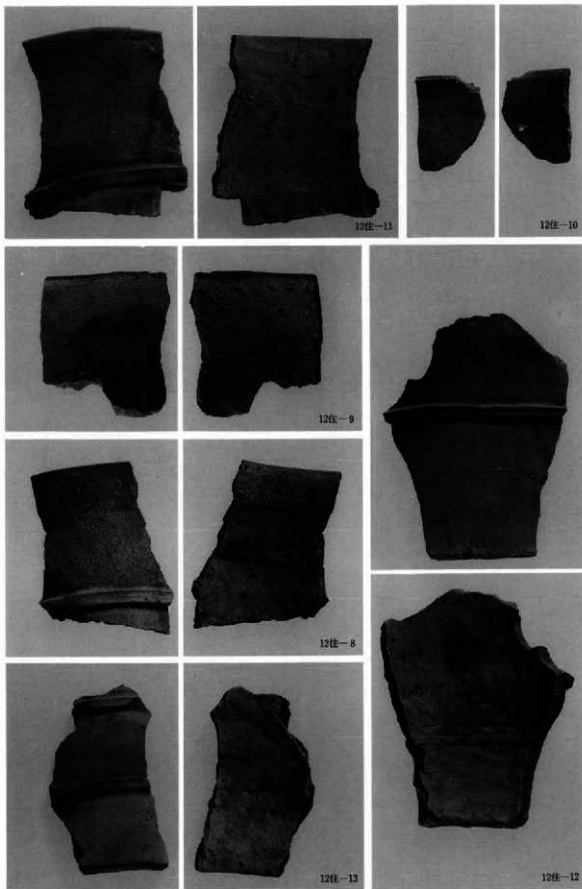


10住-6





PL-60





12住-14



13住-6



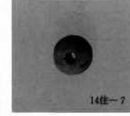
14住-8



15住-1



15住-3



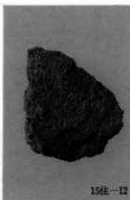
14住-7



15住-2



15住-4



15住-12

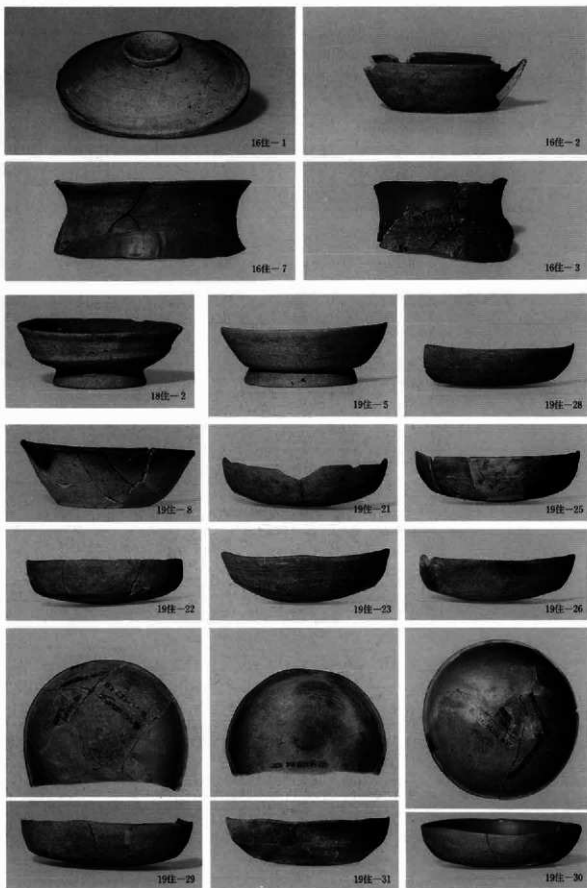


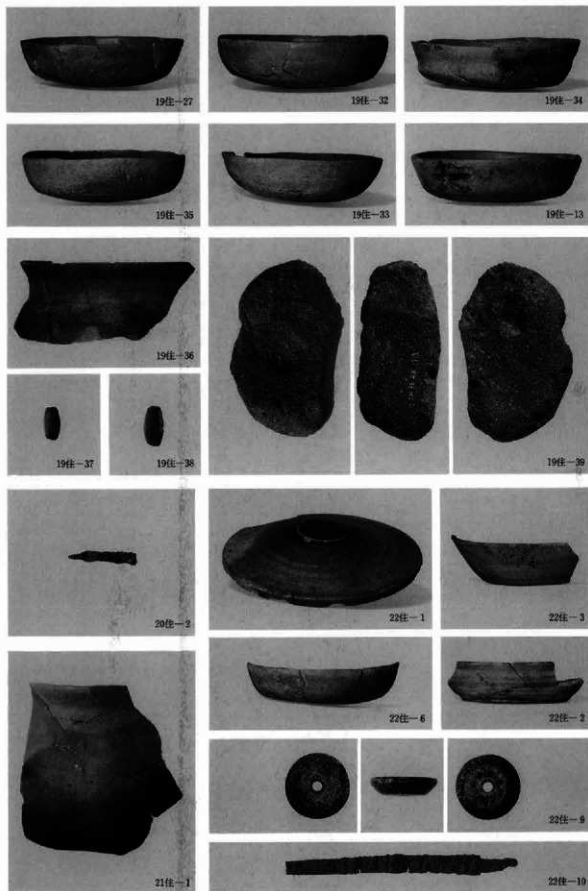
15住-8

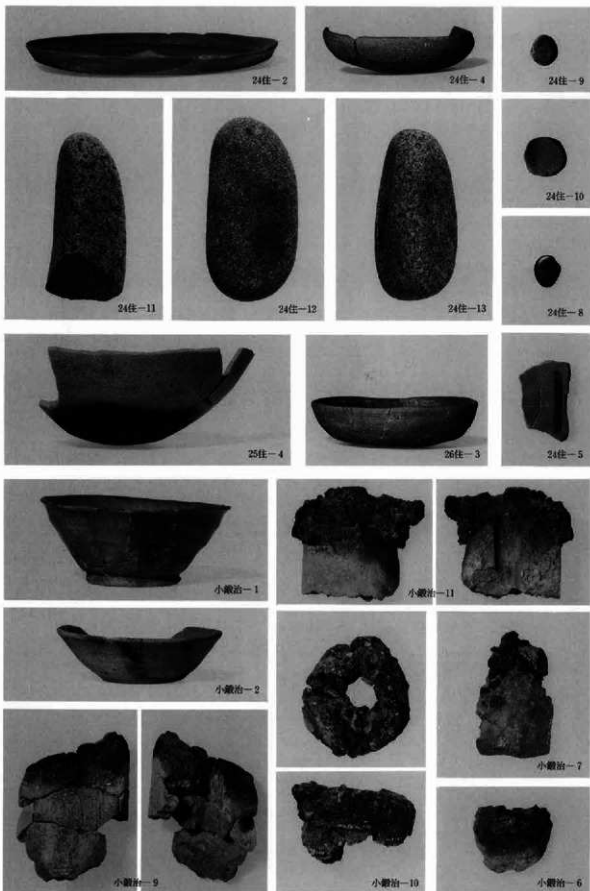


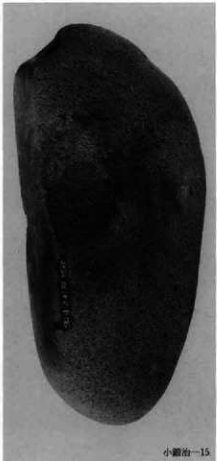
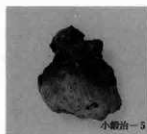
15住-7

PL-62

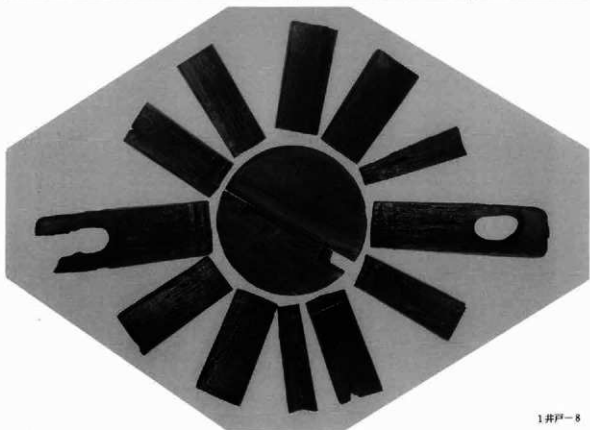
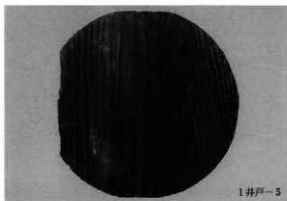
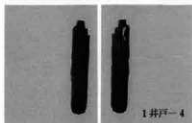
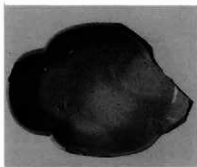




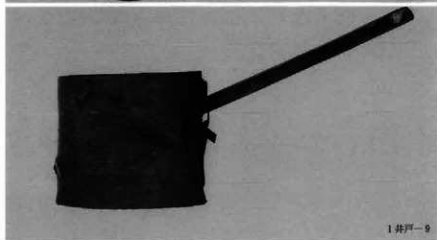
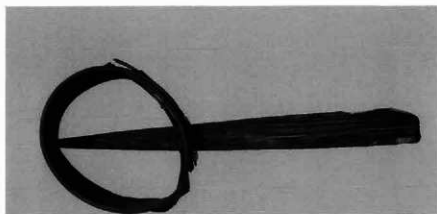




PL-66



1井戸-8



1 井戸-9



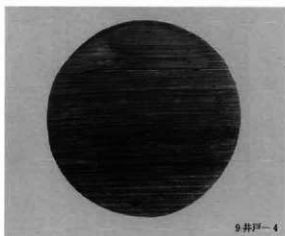
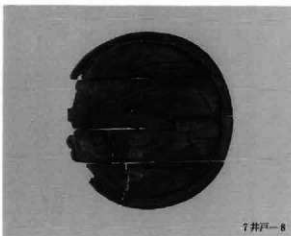
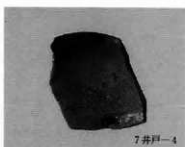
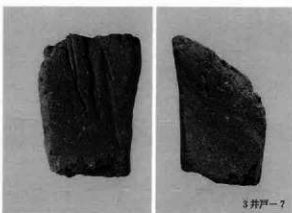
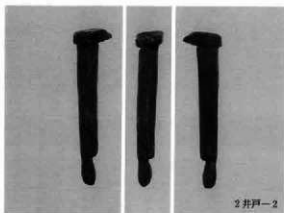
1 井戸-10

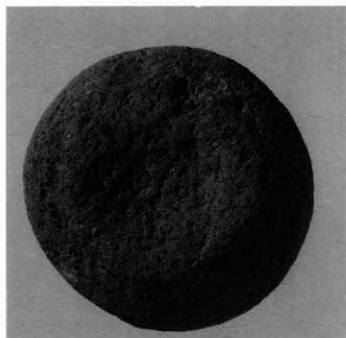


1 井戸-11



1 井戸-7





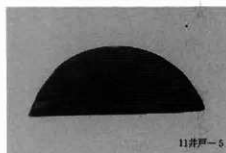
8井戸-7



11井戸-1



11井戸-6



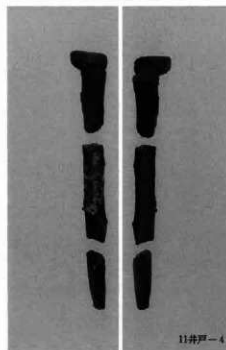
11井戸-5



1墓塚-2

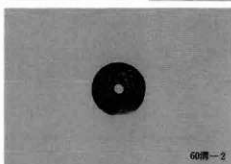
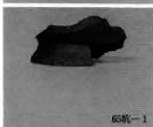
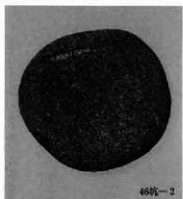
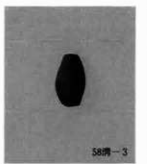


1墓塚-1



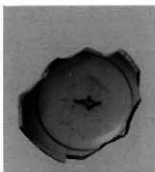
11井戸-4

PL-70





1 調-2



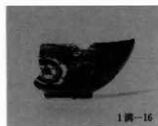
1 調-12



1 調-24



1 調-18



1 調-16



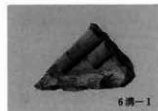
1 調-21



1 調-36



15 調-1



6 調-1



1 調-27



35 調-1



64 調-1



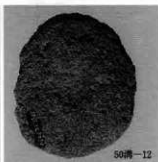
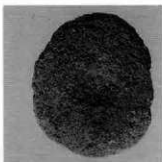
1 調-39



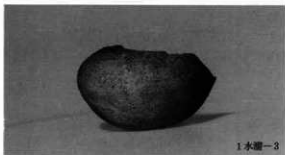
50 調-2

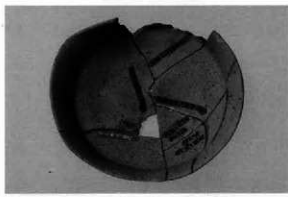


50 調-3













祭-60



祭-61



祭-62



祭-75



祭-79



祭-82



祭-84



祭-86



祭-87



祭-90



祭-89



祭-91



祭-92



祭-93



图—94



图—95



图—100



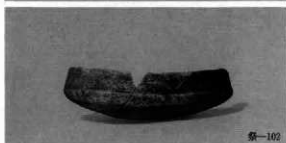
图—98



图—99



图—101



图—102



图—105



图—107



图—110



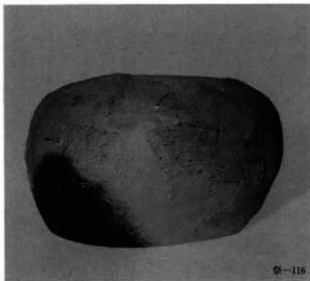
图—109



图—117



器-112



器-116



4 H 水田-2



4 H 水田-5



4 H 水田-8



4 H 水田-12



4 H 水田-19



4 H 水田-28



4 H 水田-24



4 H 水田-33

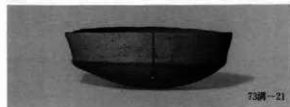




73溝-16



73溝-19



73溝-21



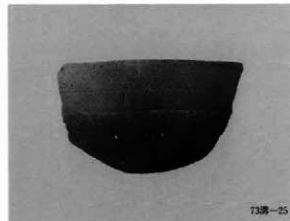
73溝-20



73溝-23



73溝-22



73溝-25



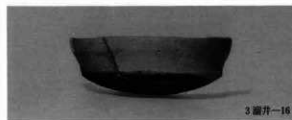
73溝-24



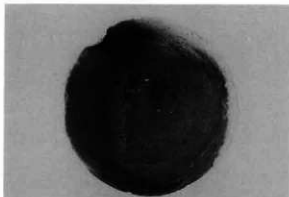
3 瀬井-7



3 瀬井-5



3 瀬井-16



3 番井—10



3 番井—14



3 番井—31



3 番井—29



3 番井—30



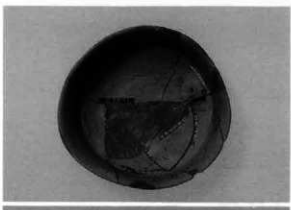
3 番井—35



3 番井—40

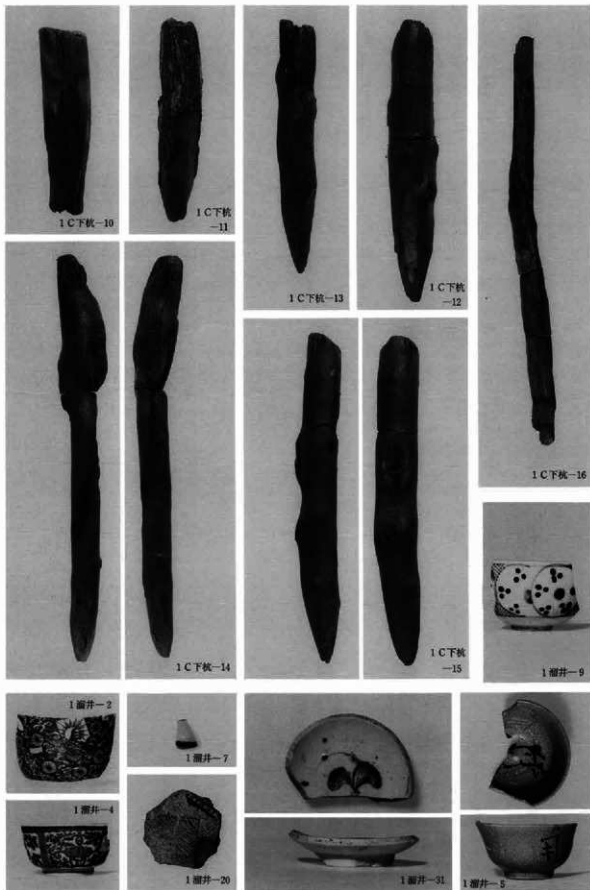


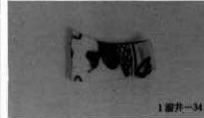
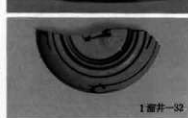
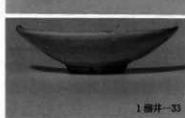
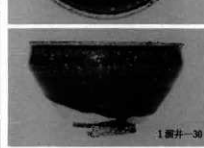
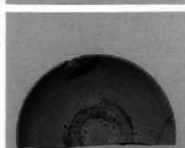
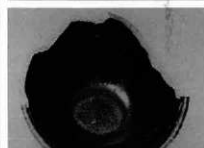
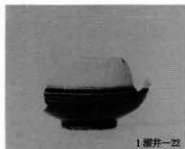
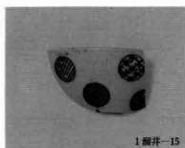
3 番井—38

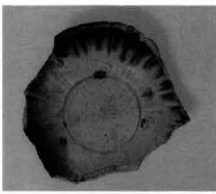


3 番井—39









1 湖井-39



1 湖井-38



1 湖井-41



1 湖井-40



1 湖井-42



1 湖井-43



1 湖井-44



1 湖井-45



1 湖井-50



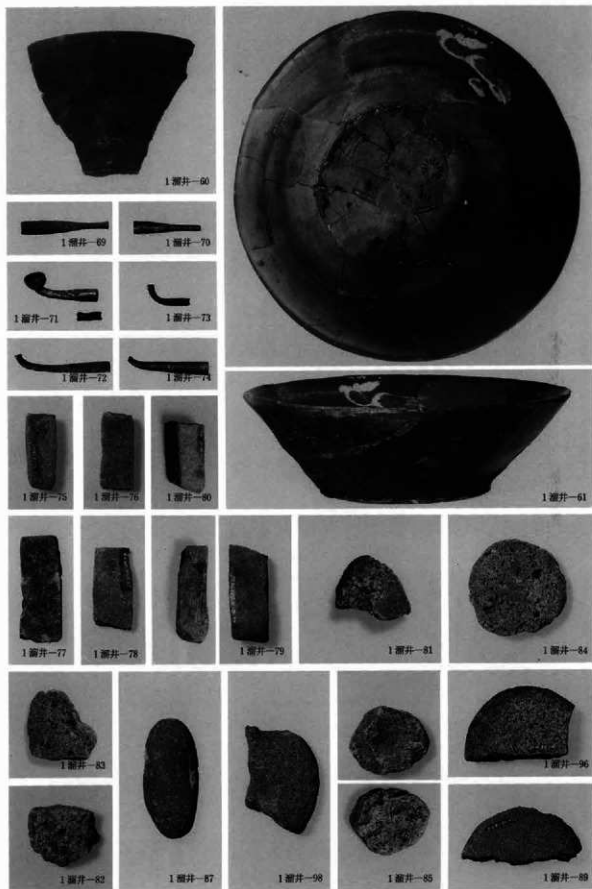
1 湖井-49

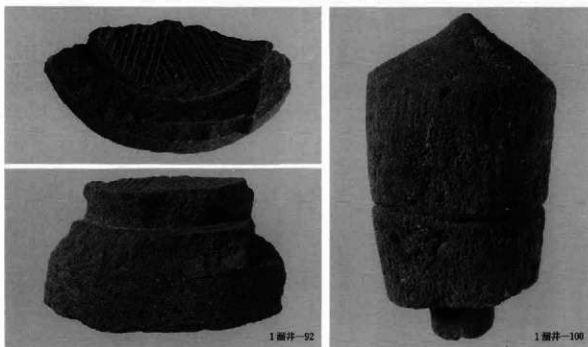
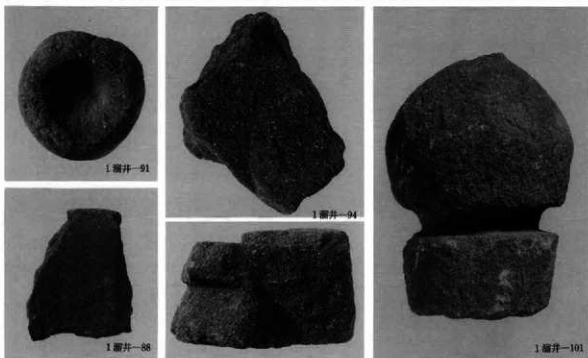
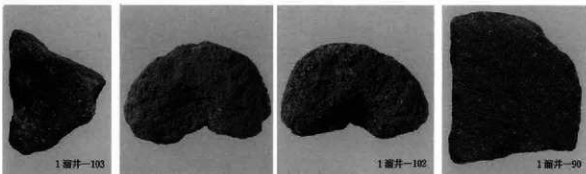


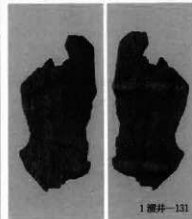
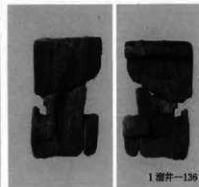
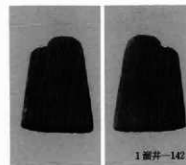
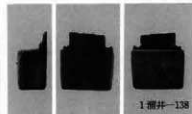
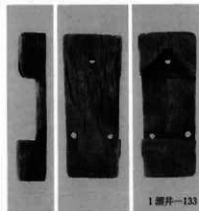
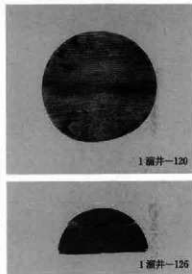
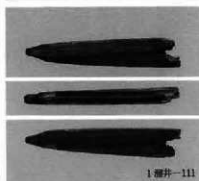
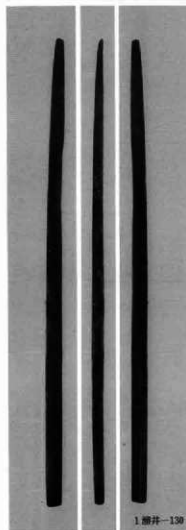
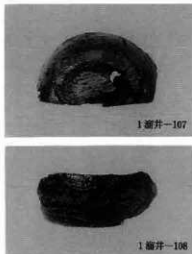
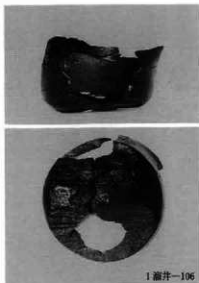
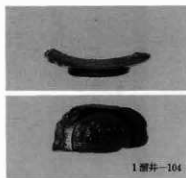
1 湖井-67

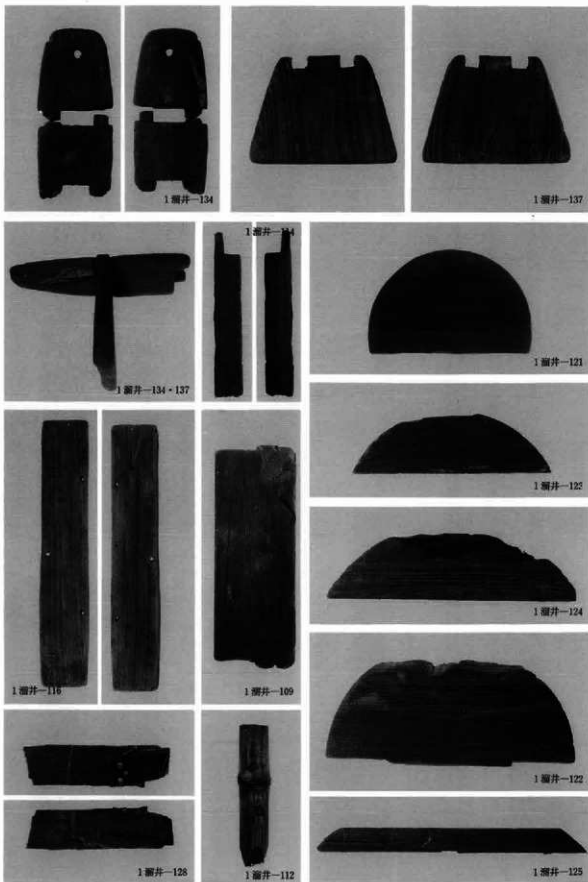


1 湖井-51



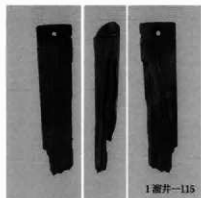




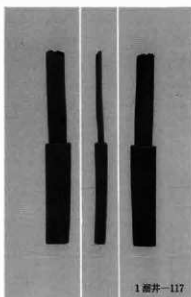




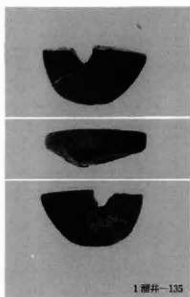
1 掘井-127



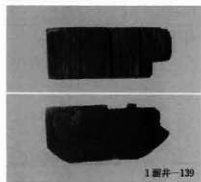
1 掘井-115



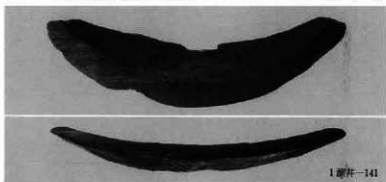
1 掘井-117



1 掘井-135



1 掘井-139



1 掘井-141



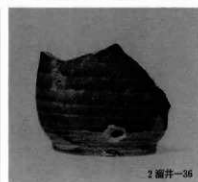
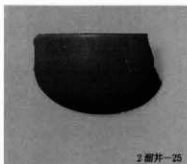
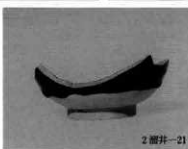
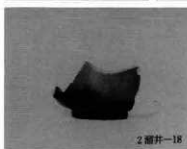
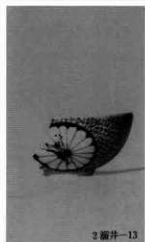
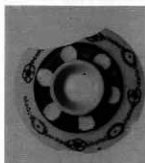
1 掘井-140

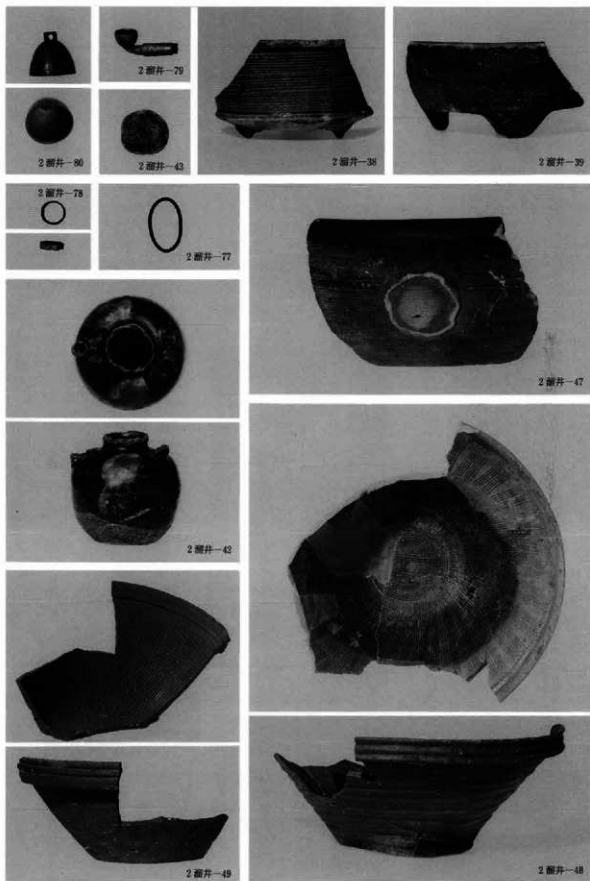


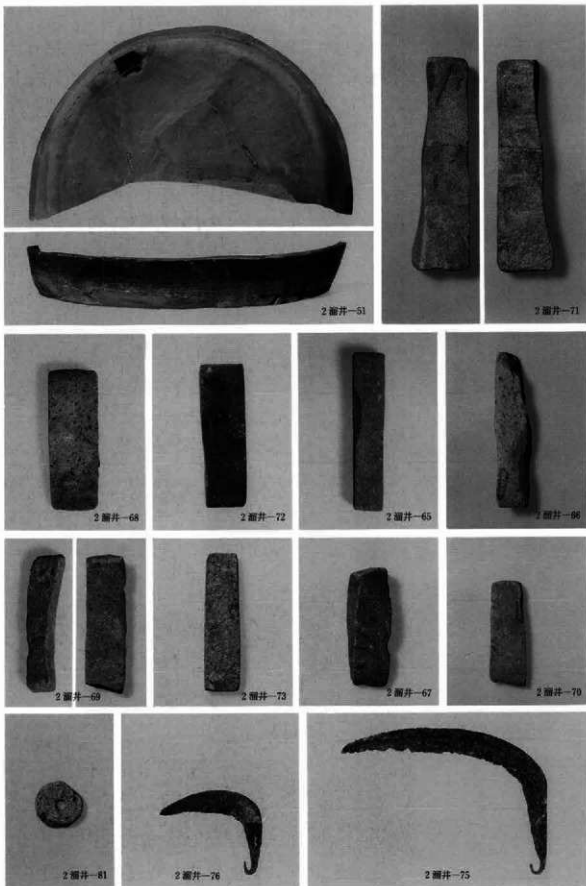
1 掘井-144

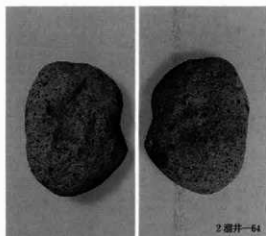


1 掘井-143

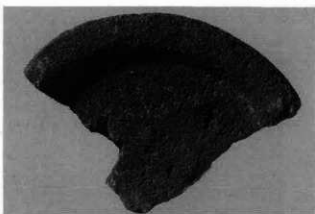








2 欄井-64



2 欄井-62



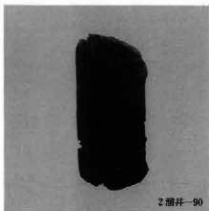
2 欄井-69



2 欄井-58



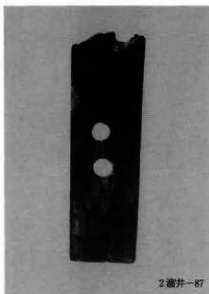
2 欄井-58



2 號井—90



2 號井—82



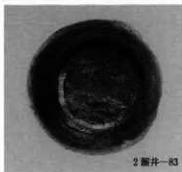
2 號井—87



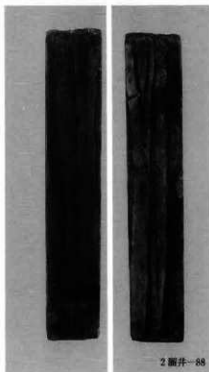
2 號井—61



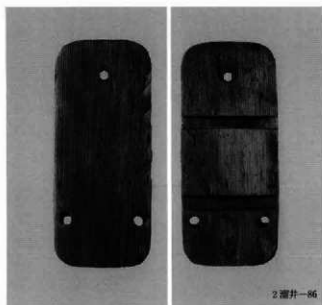
2 號井—84



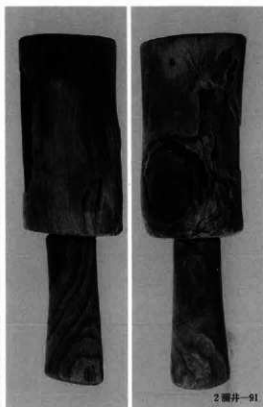
2 號井—83



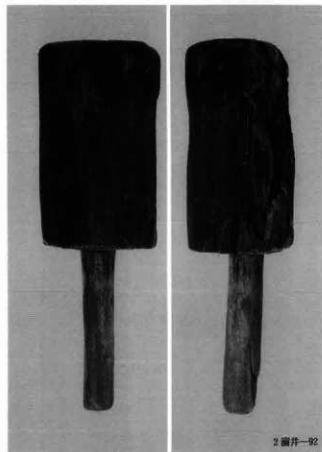
2 號井—88



2 瀬井-86



2 瀬井-91



2 瀬井-92



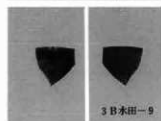
4 B 水田-1



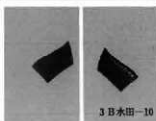
3 B 水田-12



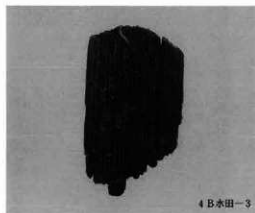
3 B 水田-11



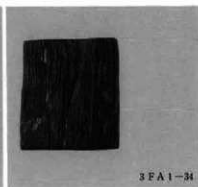
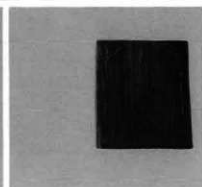
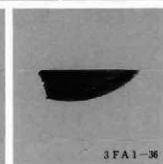
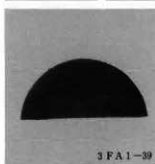
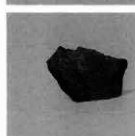
3 B 水田-9



3 B 水田-10



4 B 水田-3

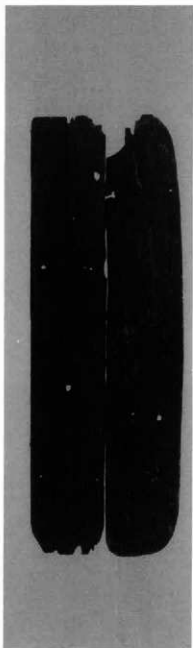




3 FA1-46



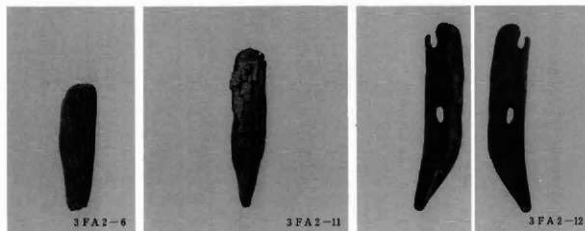
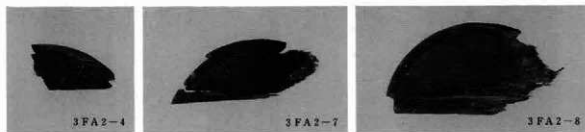
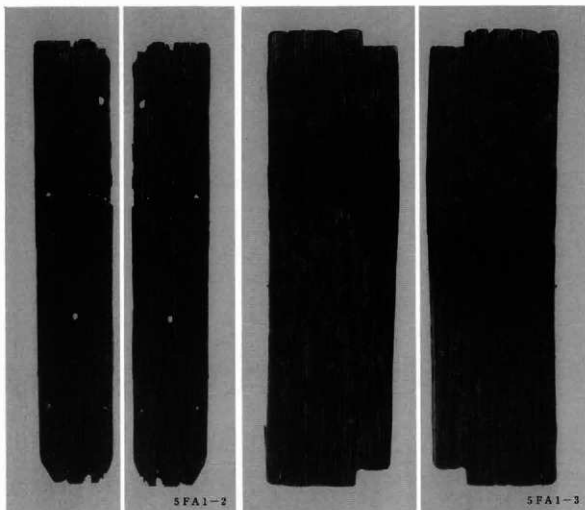
5 FA1-4

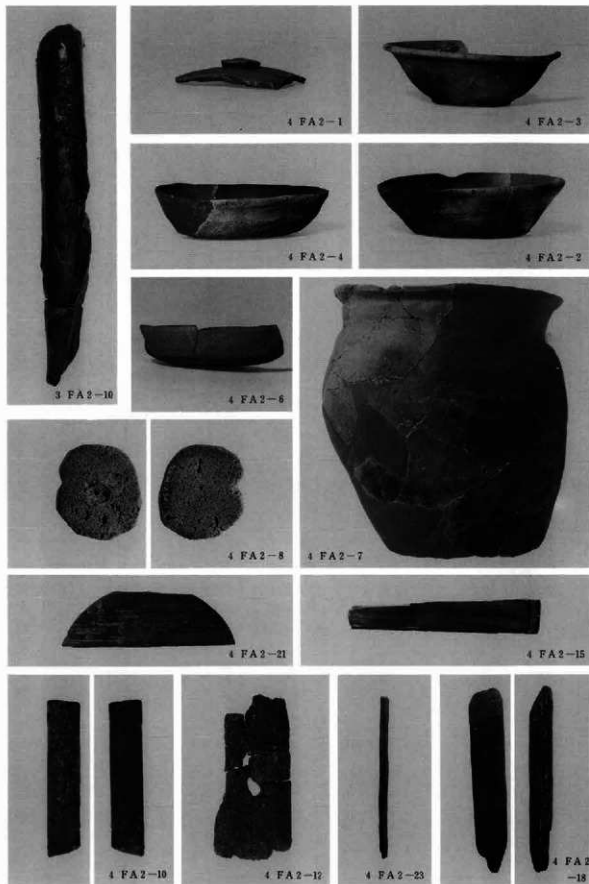


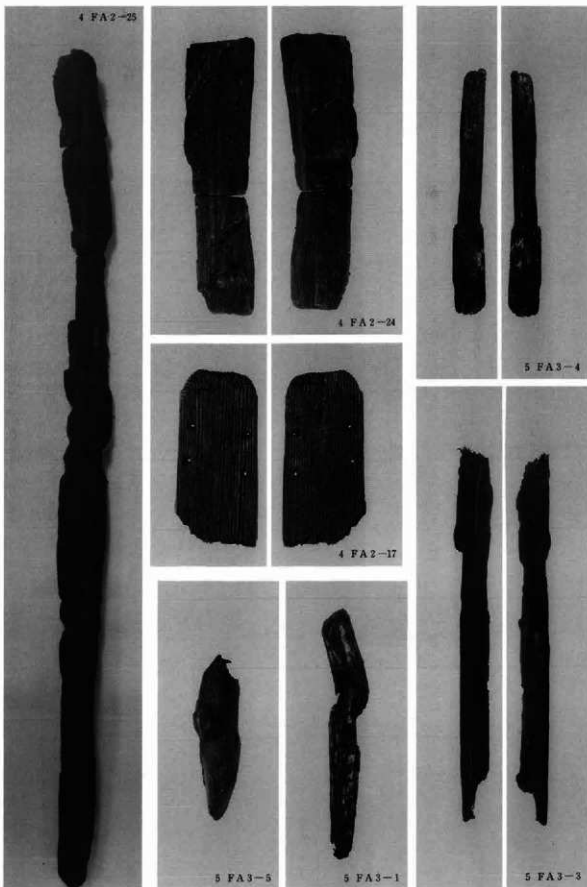
5 FA1-1



5 FA1-5

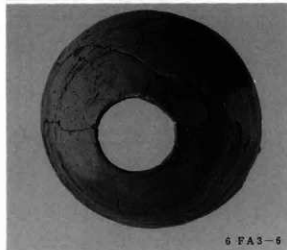








6 FA3-3



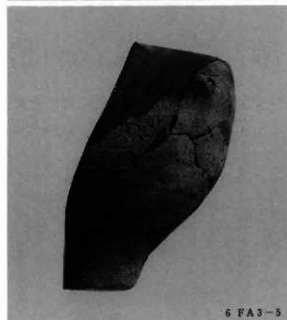
6 FA3-6



6 FA3-14



6 FA3-9



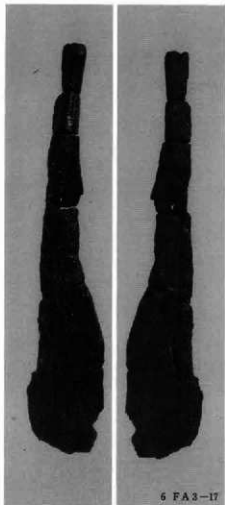
6 FA3-5



6 FA3-16



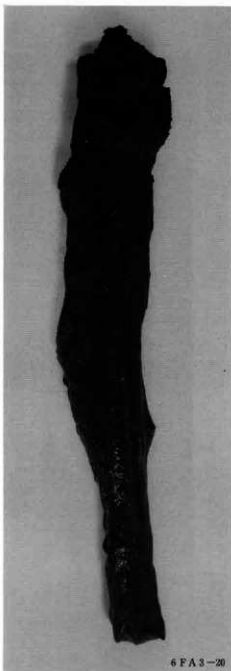
6 FA3-12



6 FA 3-17



6 FA 3-19



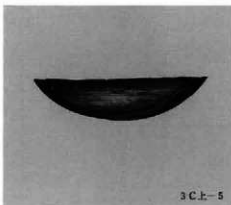
6 FA 3-20



4 FA F-1



3 C.L-4



3 C.L-5



3 C.上-1



3 C.上-6



3 C.上-3



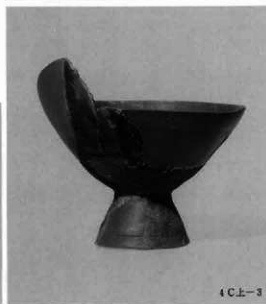
4 C.上-4



4 C.上-16



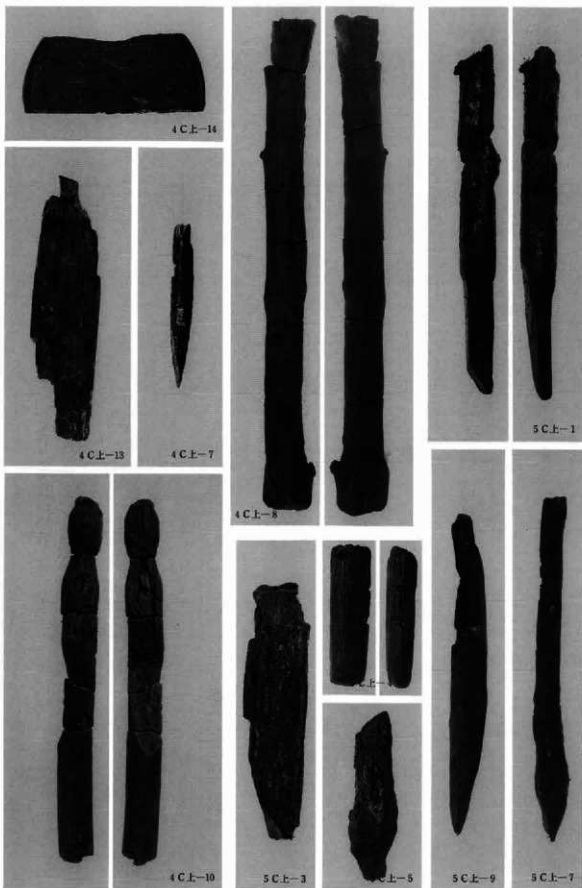
4 C.上-12



4 C.上-3



4 C.上-15

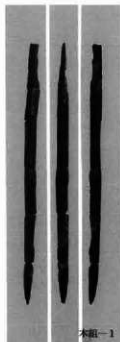




5 C.上-10



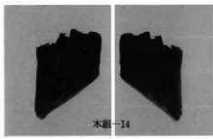
6 C.上-1



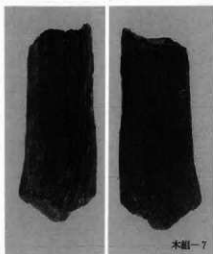
木組-1



木組-3



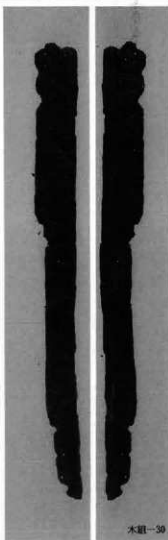
木組-14



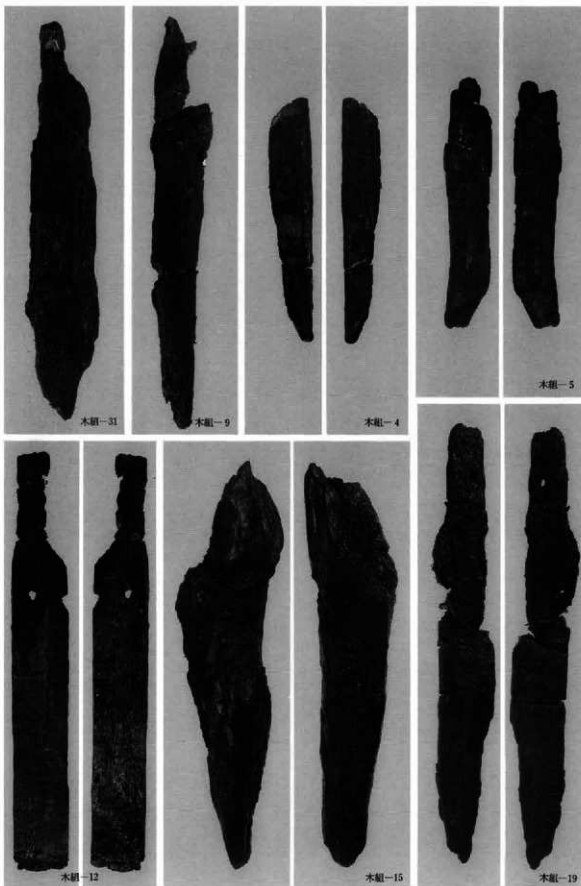
木組-7



木組-6



木組-30





木組-25



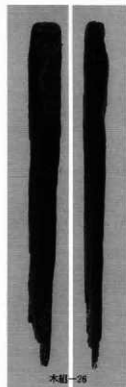
木組-37



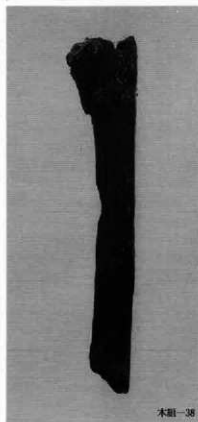
木組-50



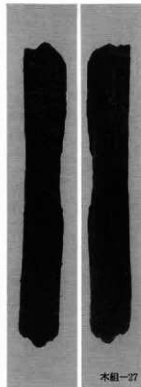
木組-52



木組-26



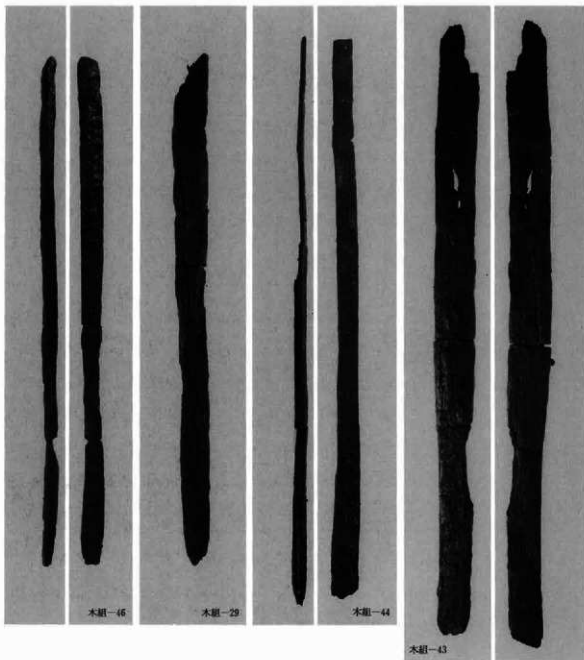
木組-38

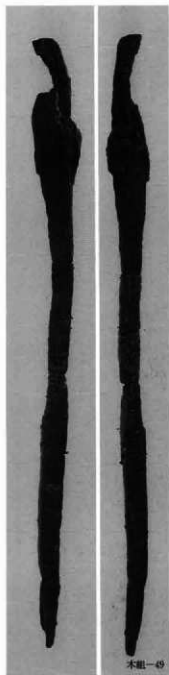


木組-27



木組-39





木組-49



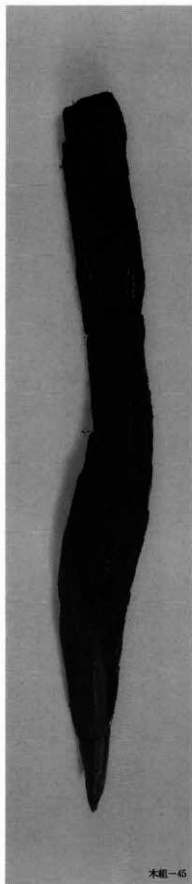
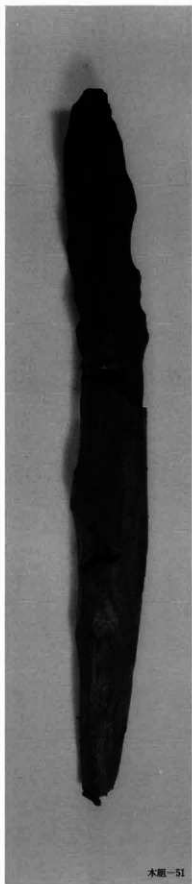
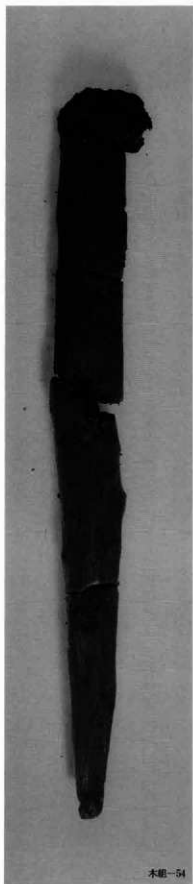
木組-53

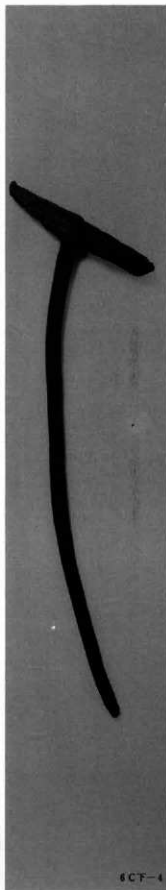
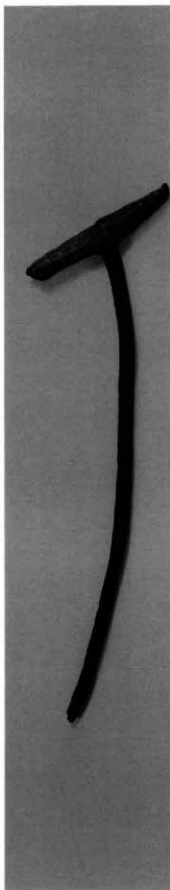
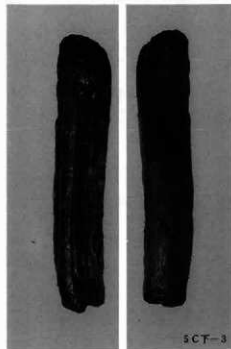
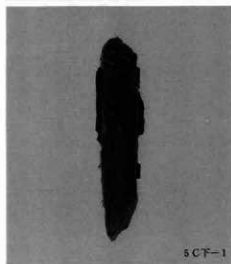
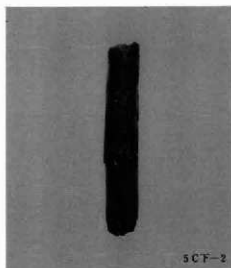


木組-48

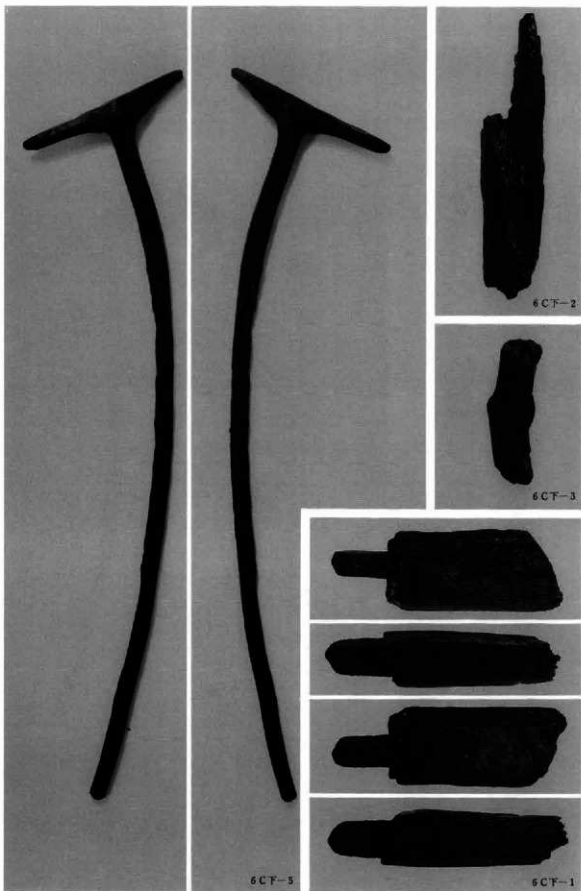


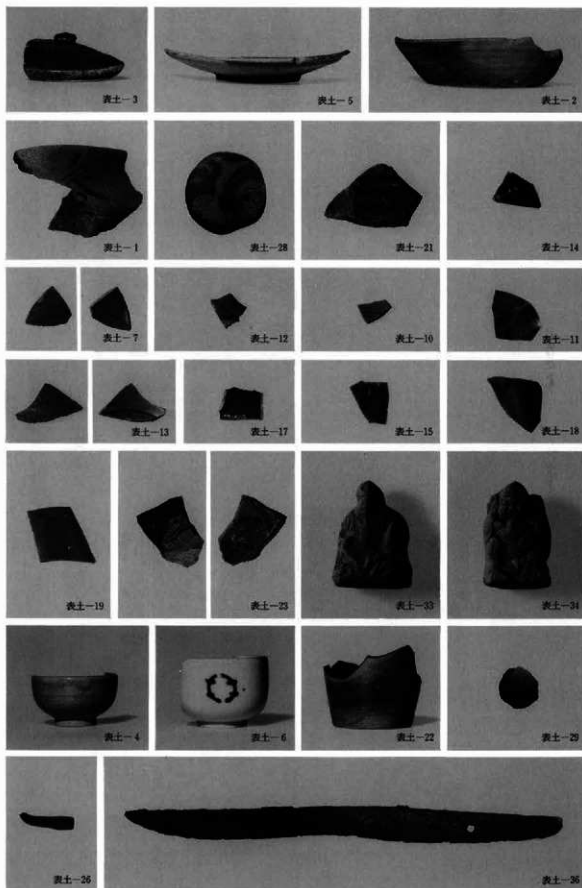
木組-47

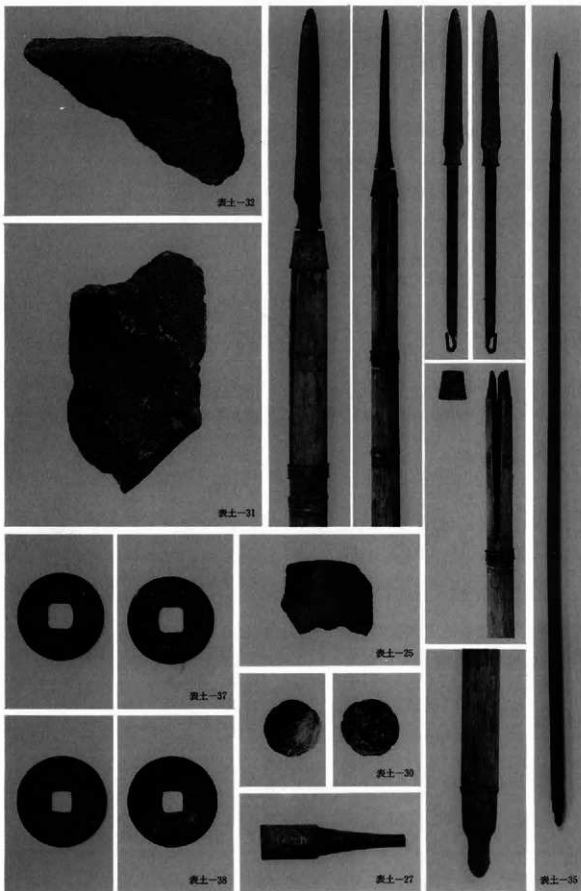


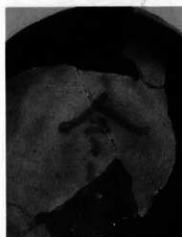
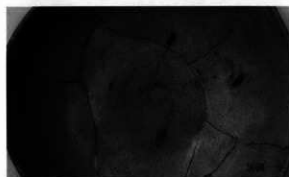


PL-114







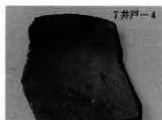


墨書近接

PL-118



漆継ぎ近接



油煙近接



壺内面接合痕近接



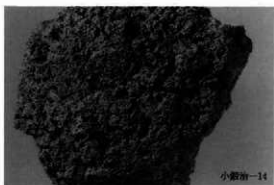
焼き継ぎ時の文字近接



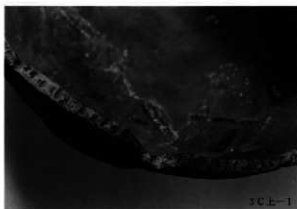
焙烙内面押印近接



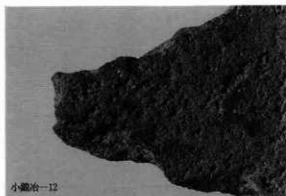
台付壺接合部近接



棟名軽石被熱部分近接



壺胴部接合痕近接 (下が底部側)



小鍛冶-12



鉄附着石製品、鍛冶金床石近接



6住-4

古代砥石の加工痕近接



砥石の加工痕近接



砥石の加工痕近接



1磨片-8a



1磨片-9



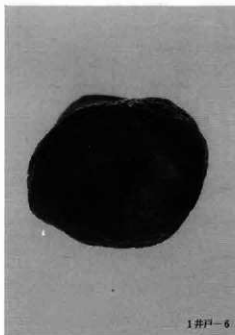
1磨片-36

砥石の加工痕近接



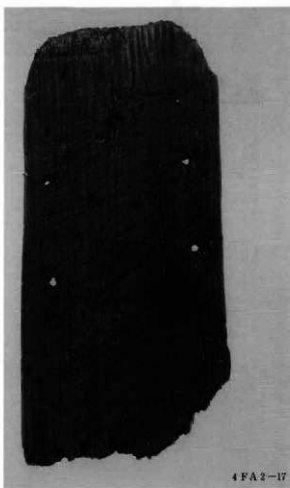
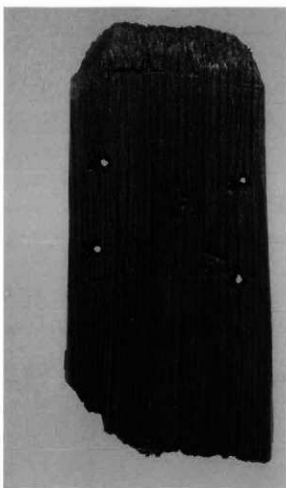
1 源井-105

漆碗底部外面文字近接



1 并尸-6

木口近接

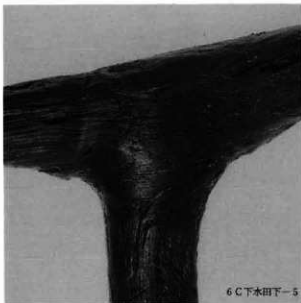


4 FA 2-17

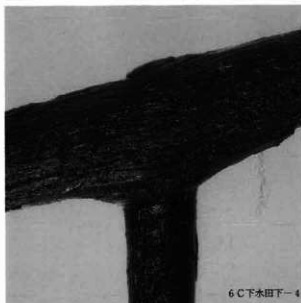
刃物痕近接



鉈作業台刃物痕近接

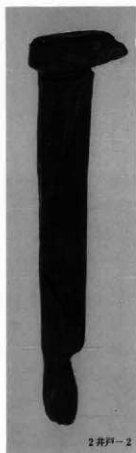


6 C 下水田下-5



6 C 下水田下-4

鉈柄近接 (5には緊縛痕が残る)



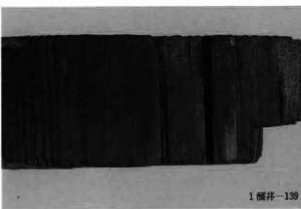
2 井戸-2

栓状木製品近接



1 新井
-117

お守り刀近接



1 新井-139

敷居近接



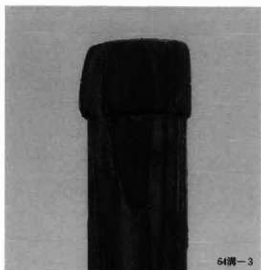
6 FA 3-9

木口加工痕近接



6 C 下水田下-1

建築材加工痕近接



64溝-3

有頸部加工痕近接



2 番井-86

陰印下駄加工痕近接



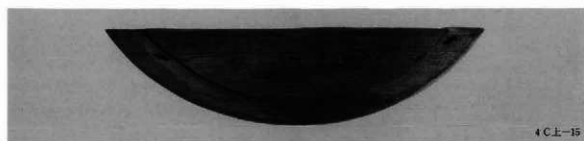
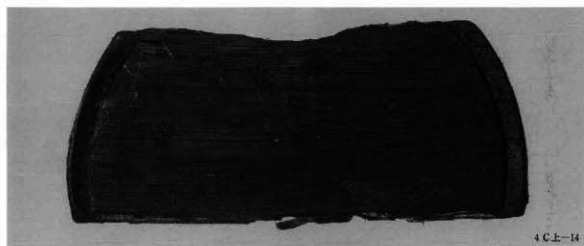
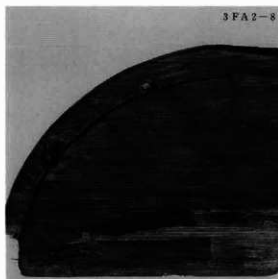
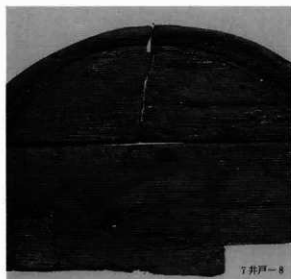
1 番井-133

胸下駄加工痕近接



1 番井-134

露印下駄加工痕近接



曲物底板カバ止め近接

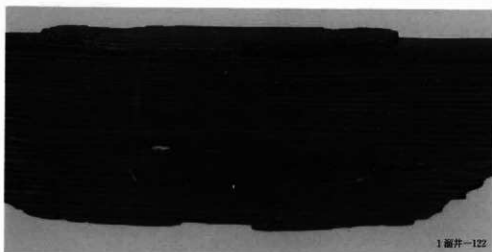
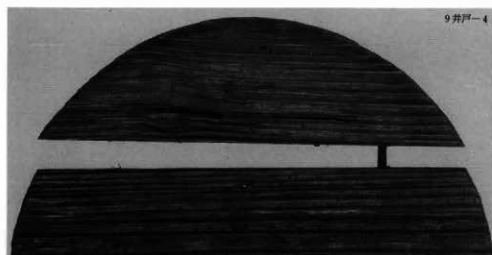
PL-124



曲物底板カバ止め近接

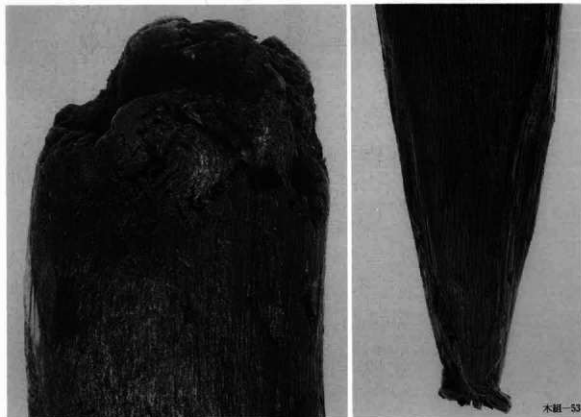
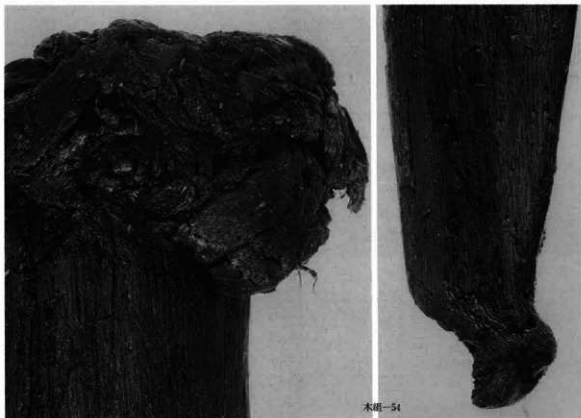


杓柄先端の木釘、摩滅痕近接

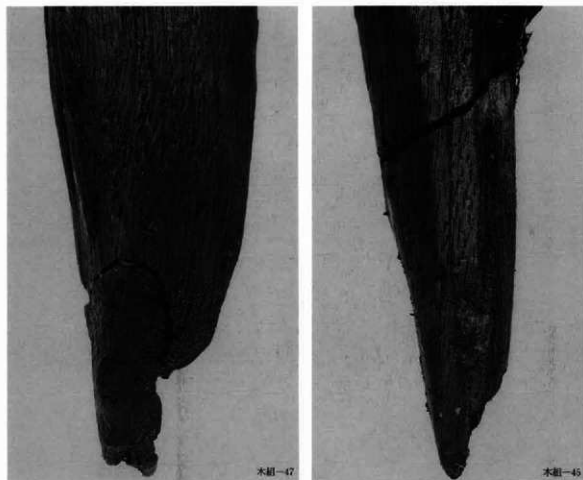


桶底板等木釘近接

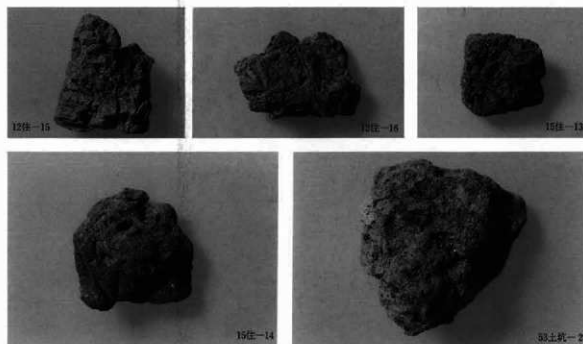
PL-126



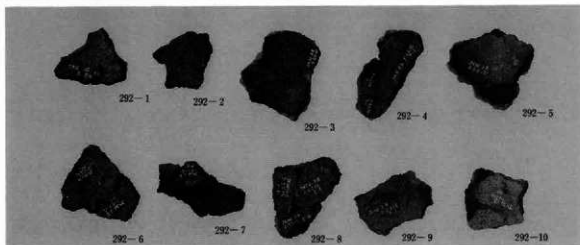
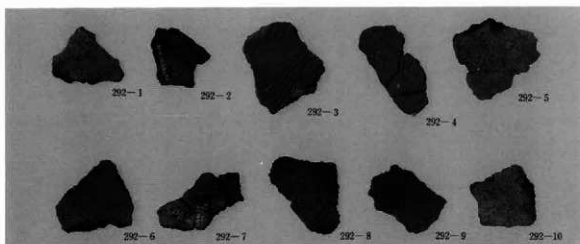
泥炭層圧密化による杭の折れ近接



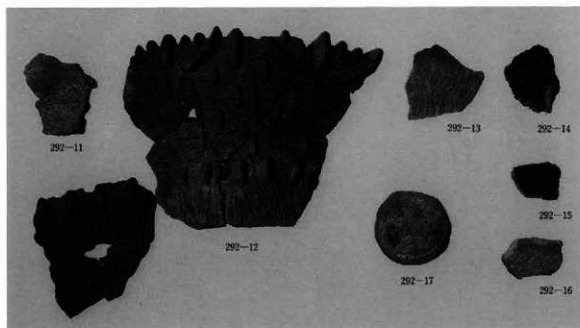
杭先端近接



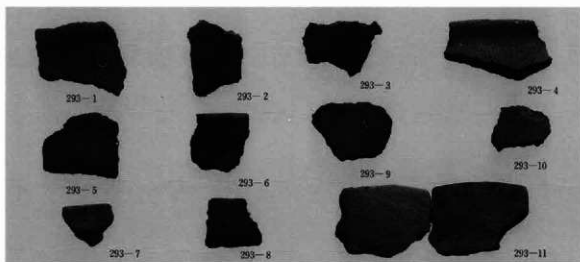
胎土分析に供した被熱粘土塊



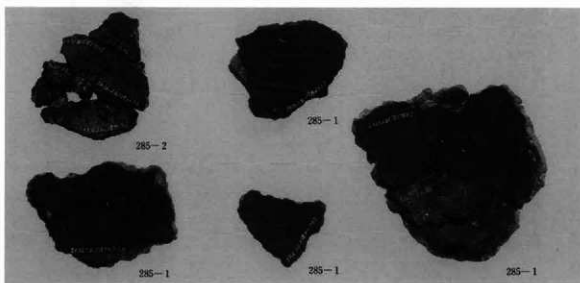
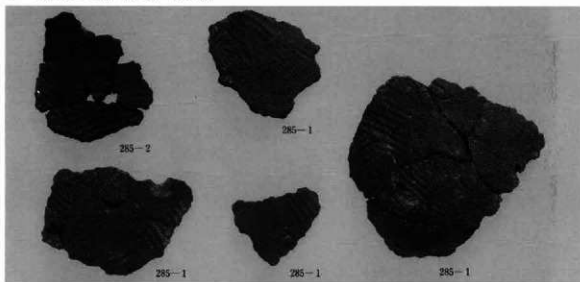
集石・土坑出土の土器（上段は表・下段は裏）



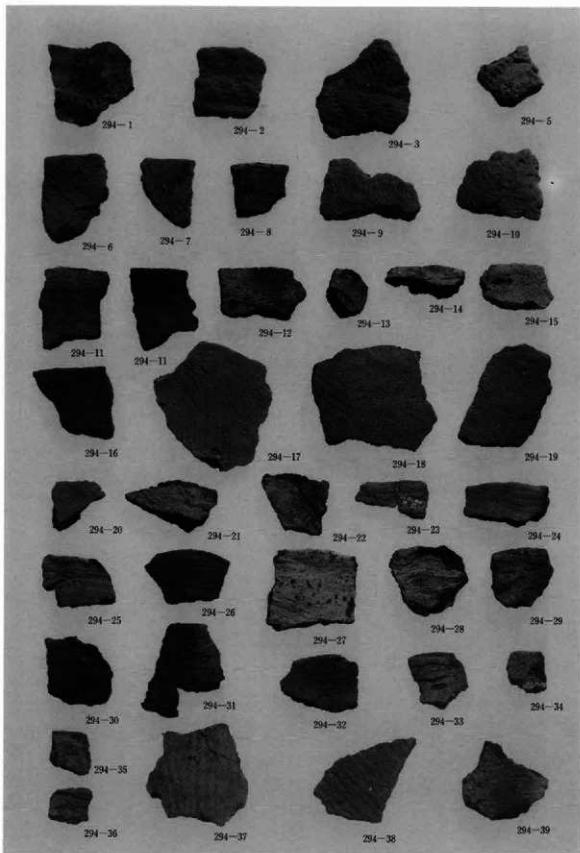
69号土坑出土の土器



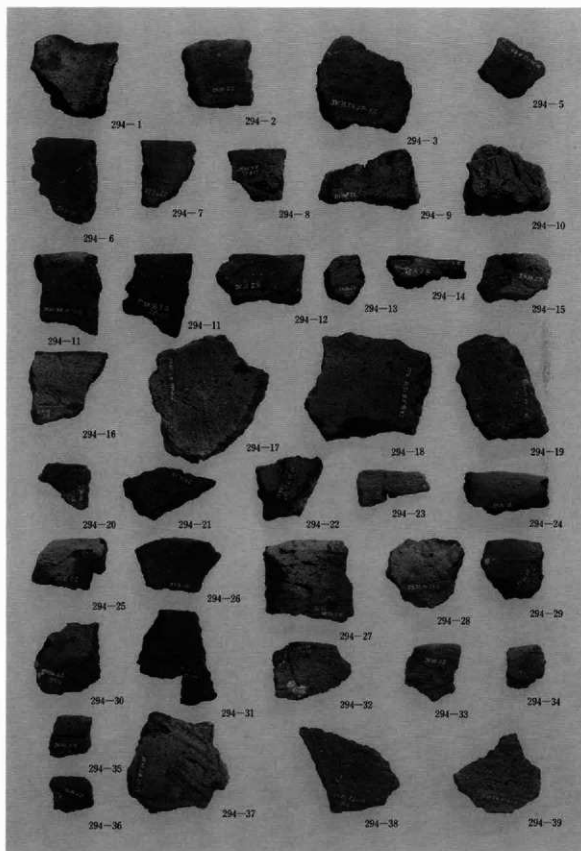
2・3区出土の土器（第I群・第III群）



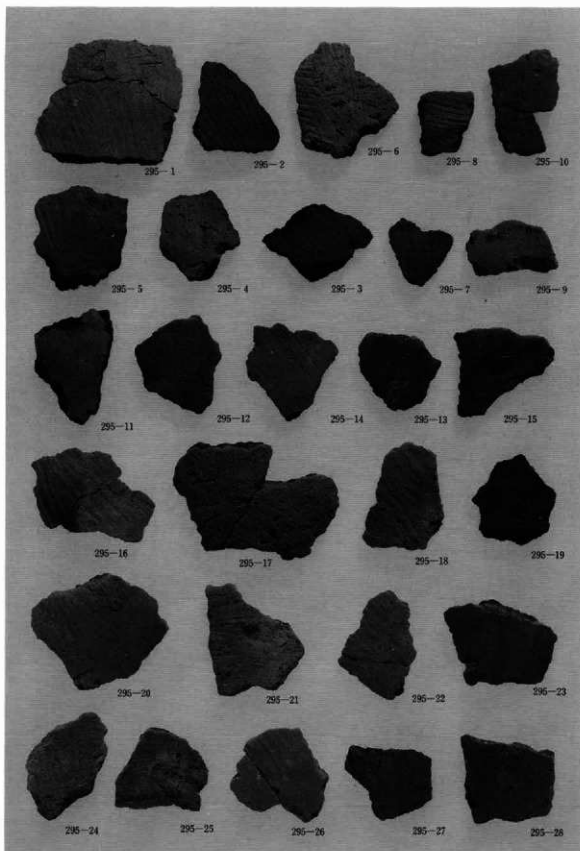
1号埋股土器（上段は表・下段は裏）



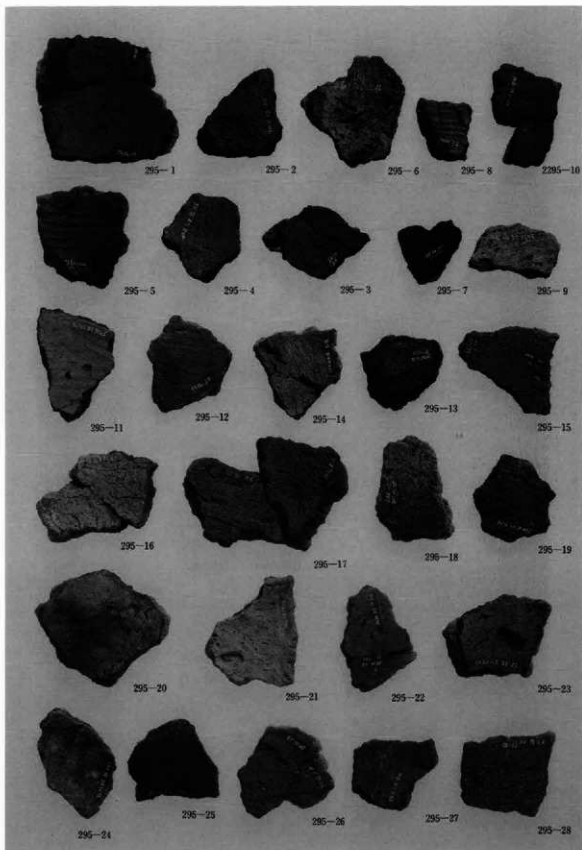
2・3区出土の土器 (第Ⅲ群2・4・5類の表)



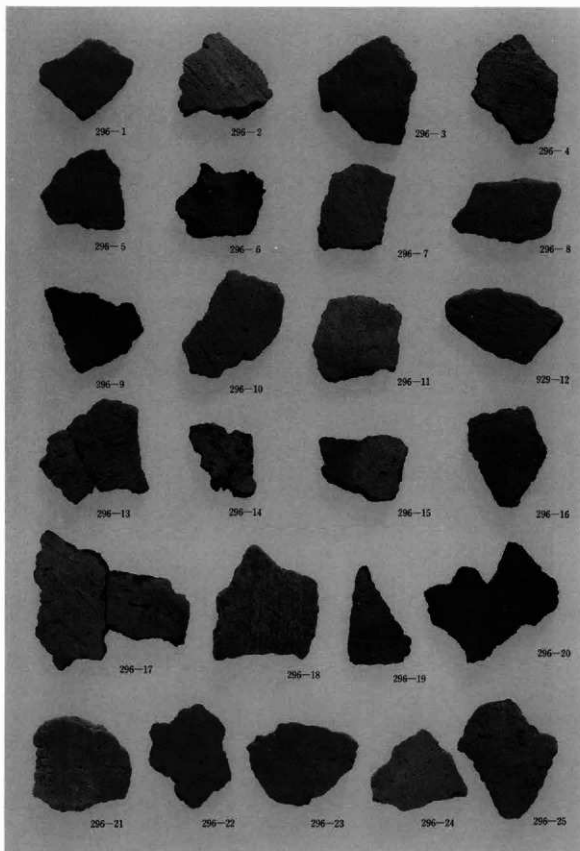
2・3区出土の土器（第III群2・4・5類の裏）



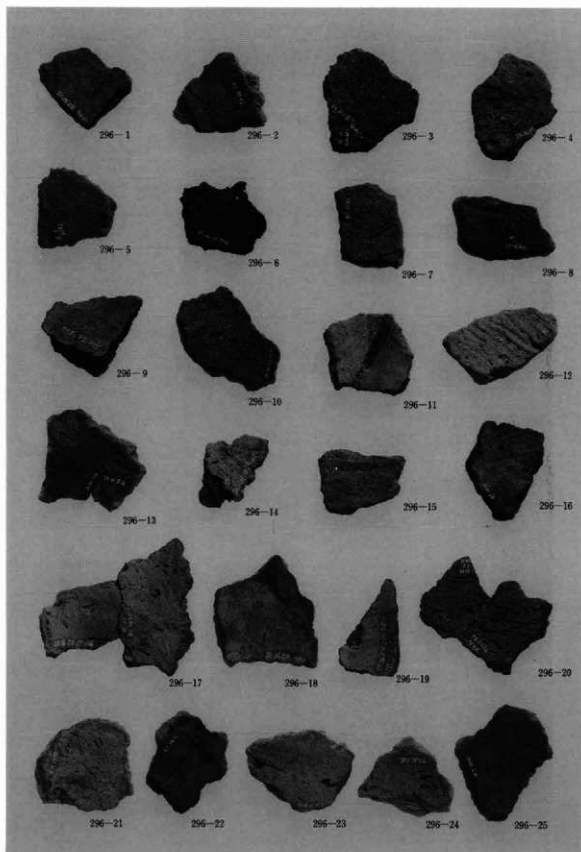
2・3区出土の土器（第Ⅲ群5類の表）



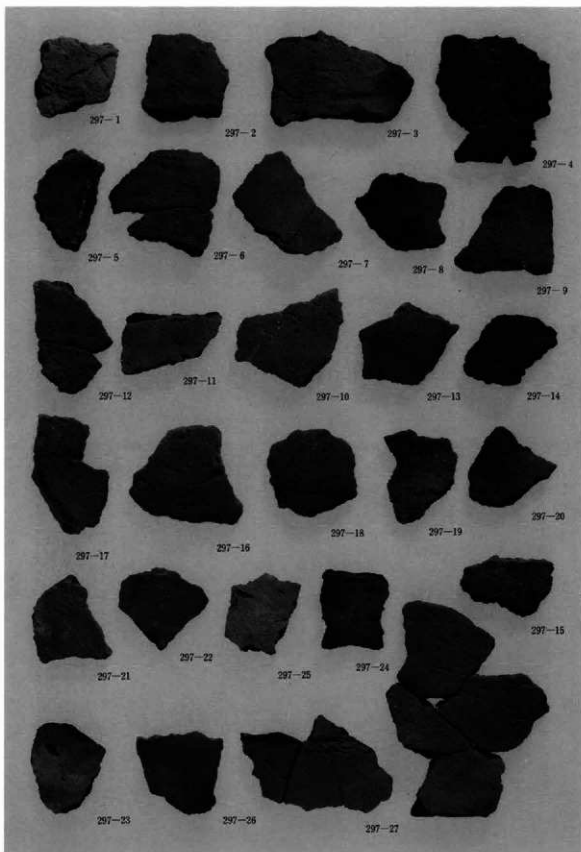
2・3区出土の土器（第Ⅲ群5類の裏）



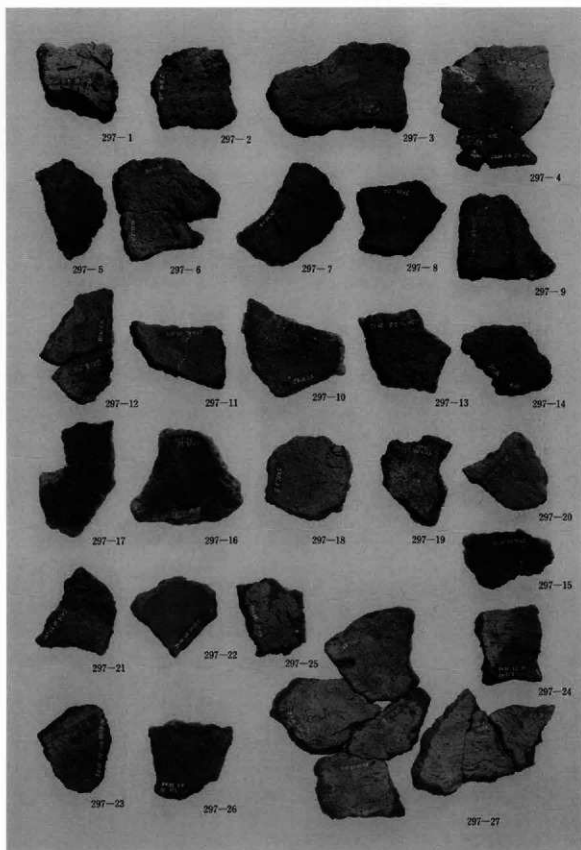
2・3区出土の土器（第Ⅲ群5・6類の表）



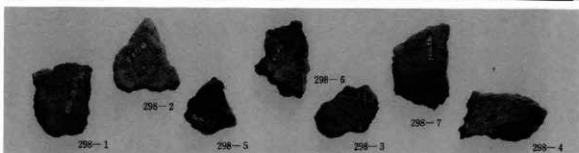
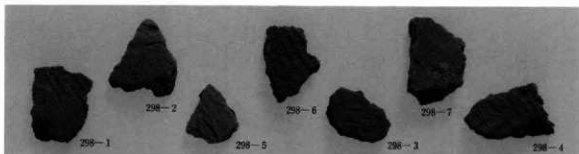
2・3区出土の土器（第三群5・6類の裏）



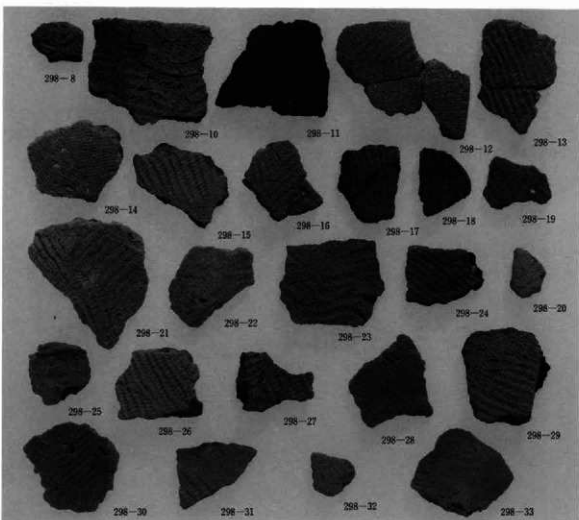
2・3区出土の土器（第Ⅲ群6類の表）



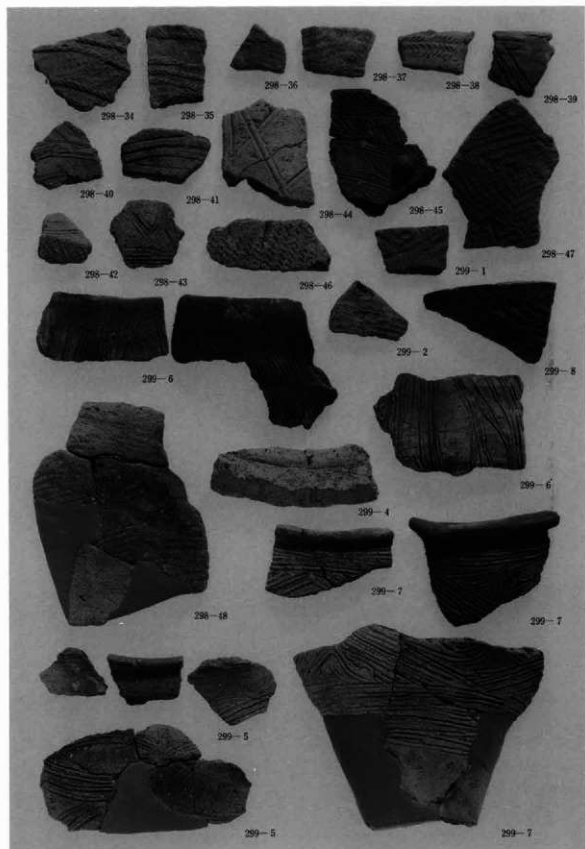
2・3区出土の土器（第三群6類の裏）



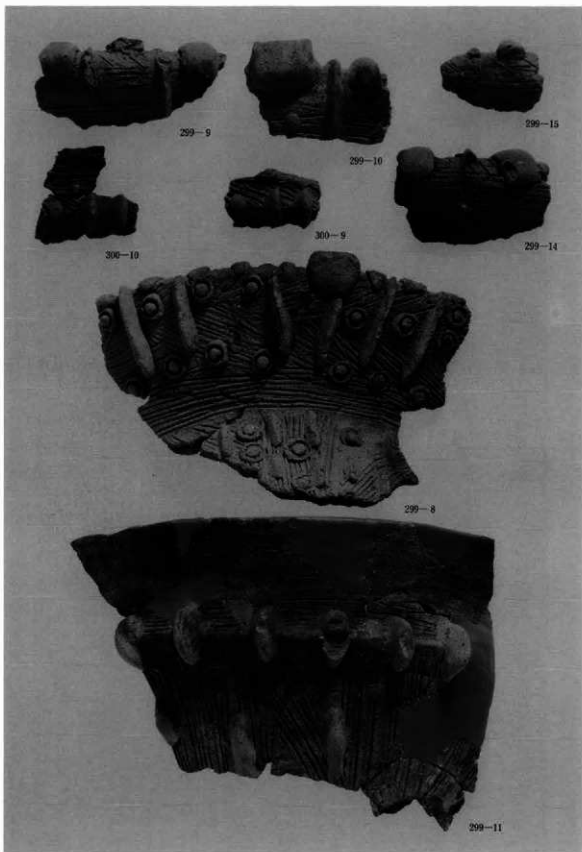
2・3区出土の土器(第IV群I類・上段は表・下段は裏)



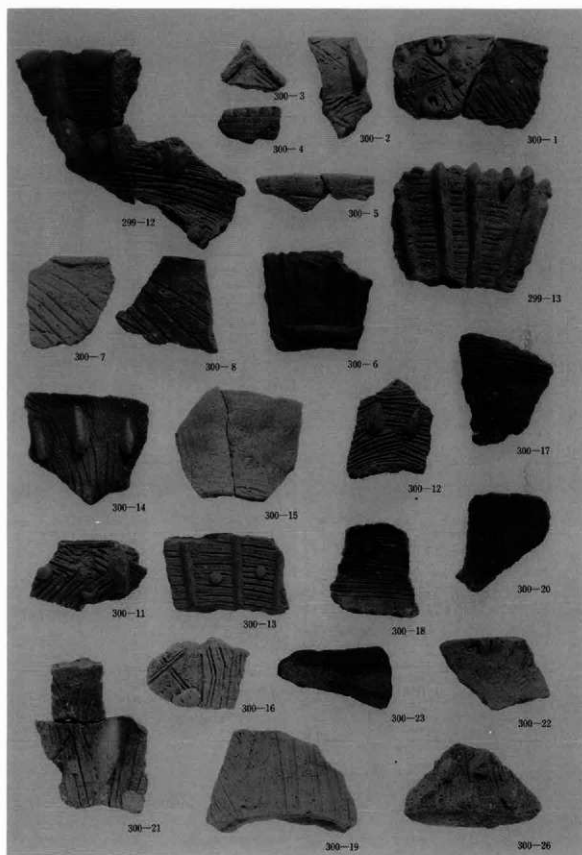
2・3区出土の土器(第IV群2・3類)



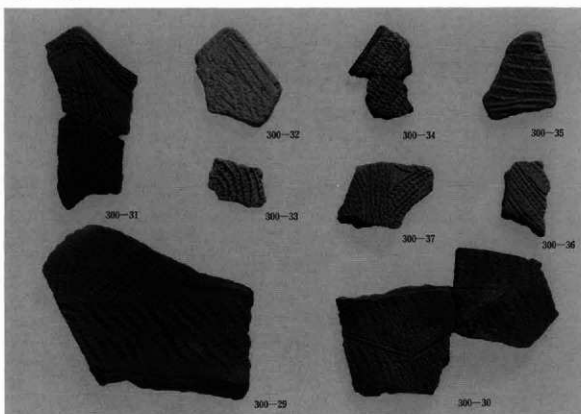
2・3区出土の土器（第V群1類）



2・3区出土の土器（第V群2類）



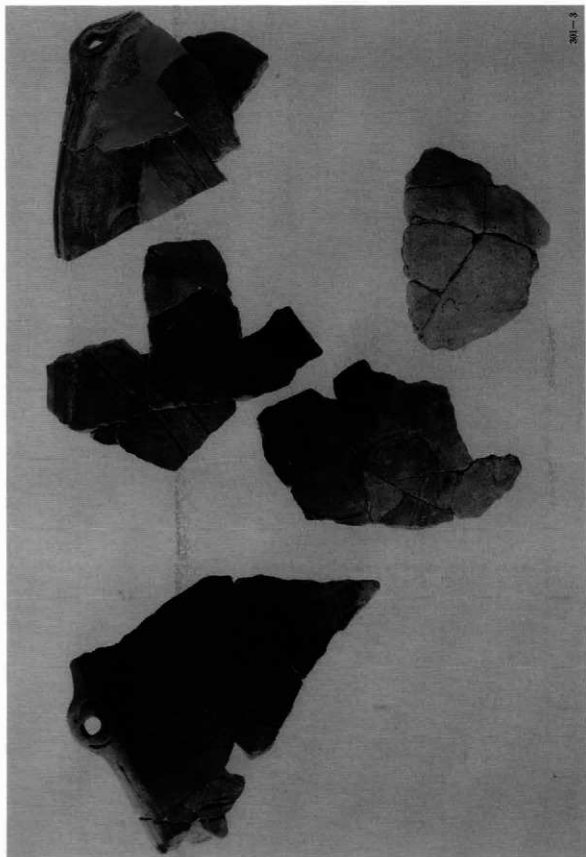
2・3区出土の土器（第V群2類）



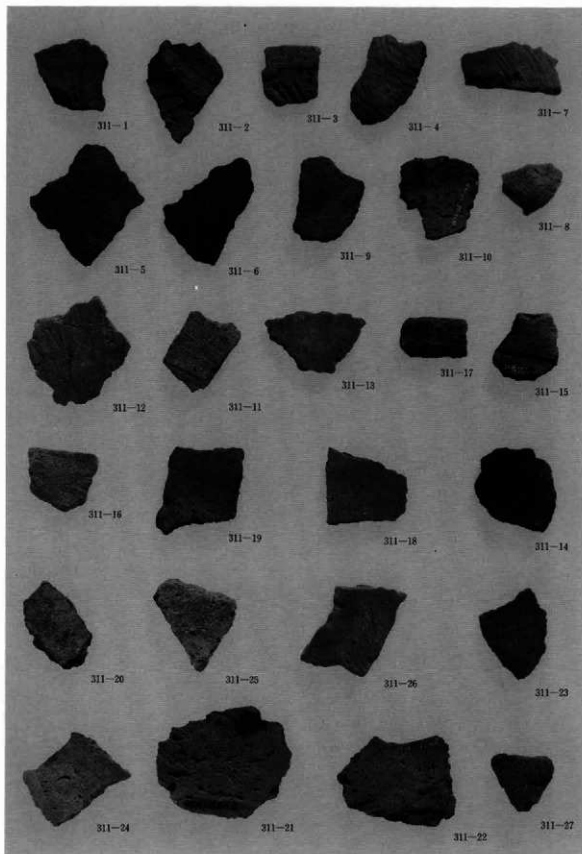
2・3区出土の土器（第V群3・4類）



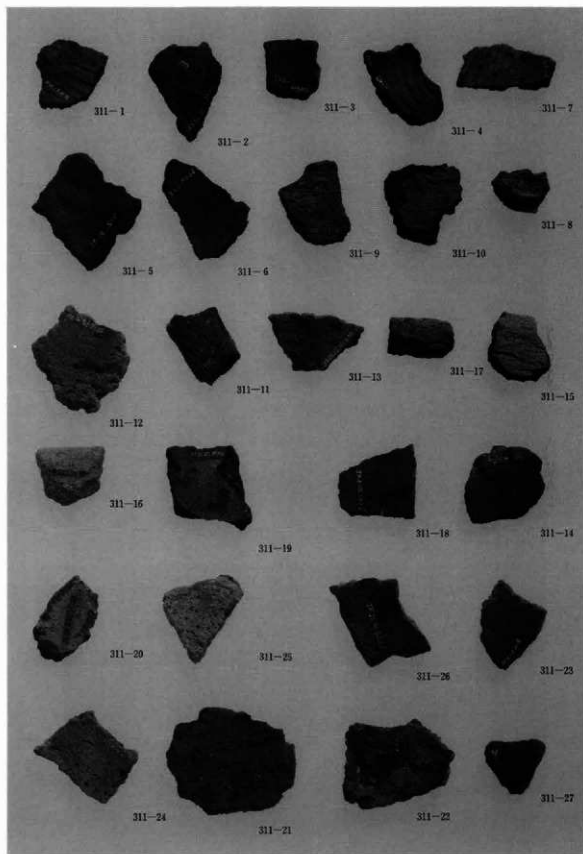
2・3区出土の土器（第VI群・第VII群）



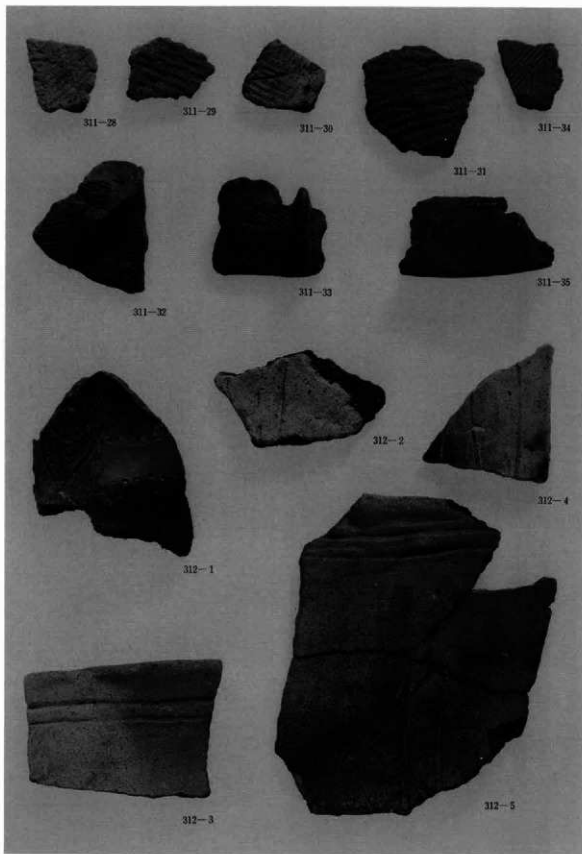
2・3区出土の土器（第Ⅶ群）



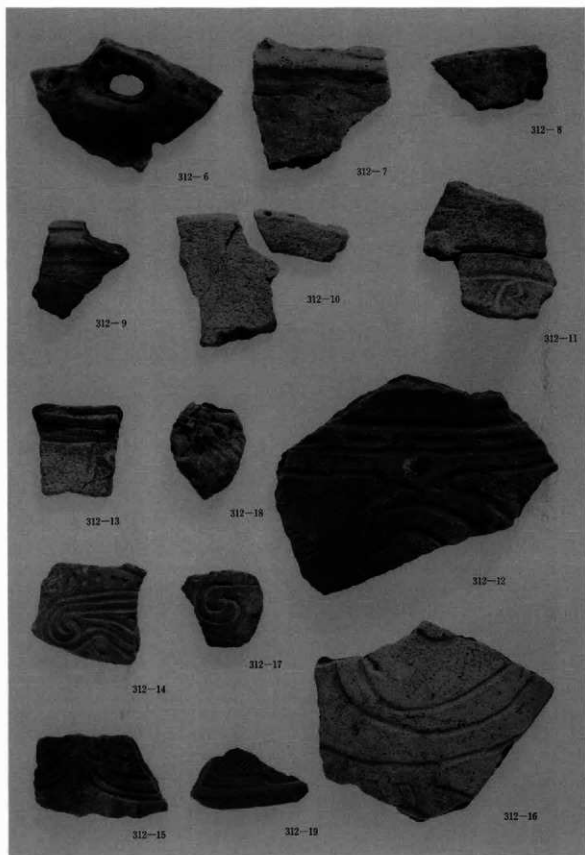
1区出土の土器（第Ⅲ群の表）



1区出土の土器（第Ⅲ群の裏）

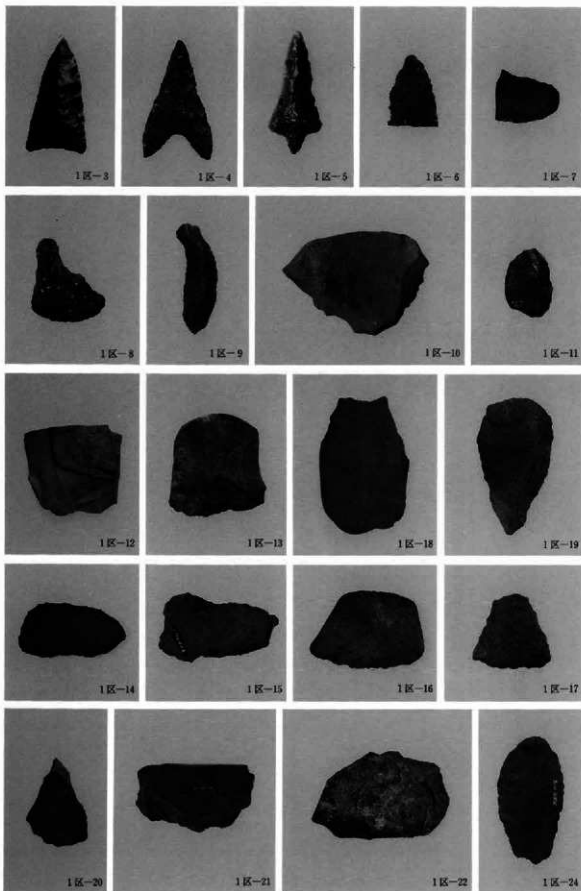


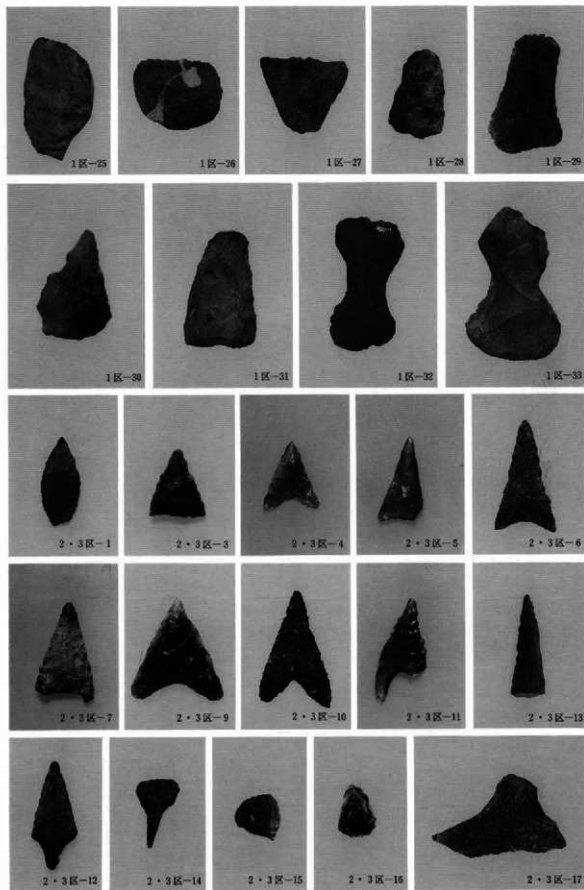
1区出土の土器(第IV~VII群)



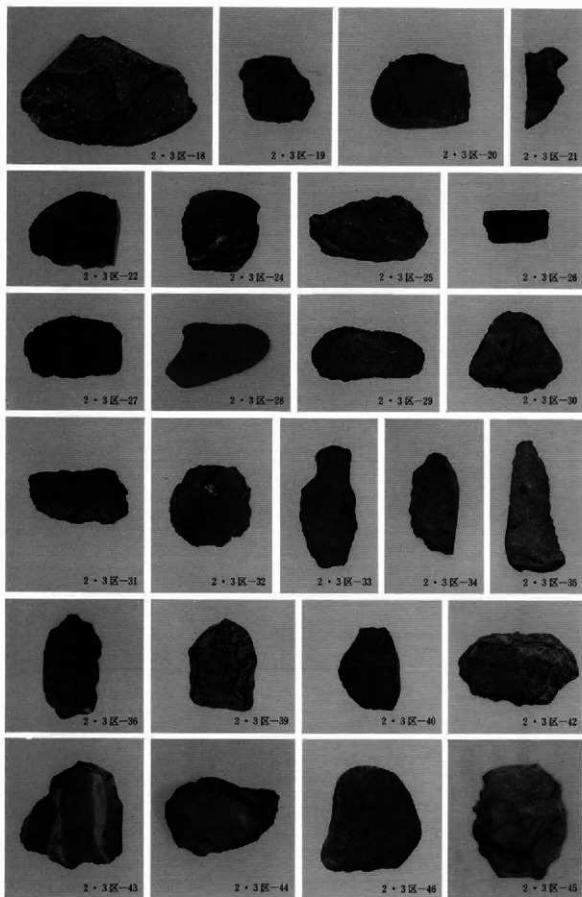
I区出土の土器 (第VII群)

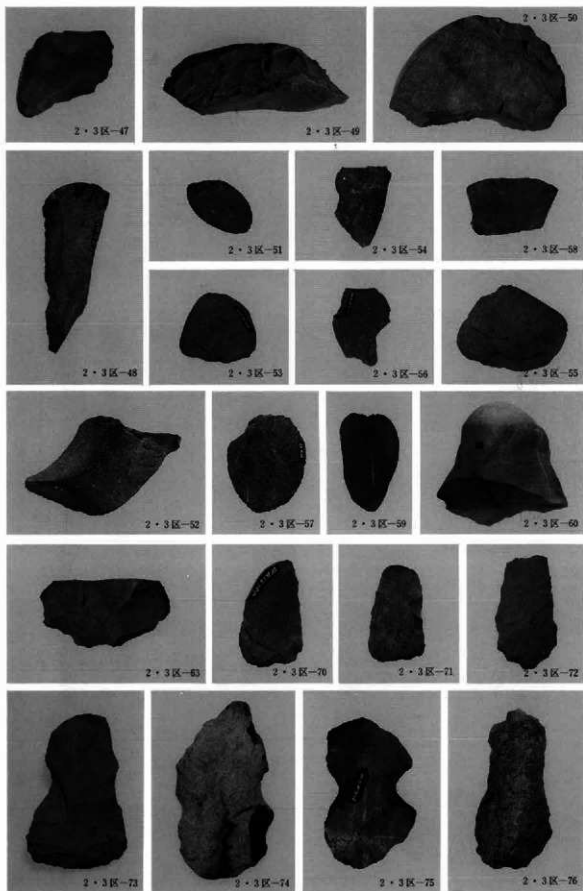
PL-148

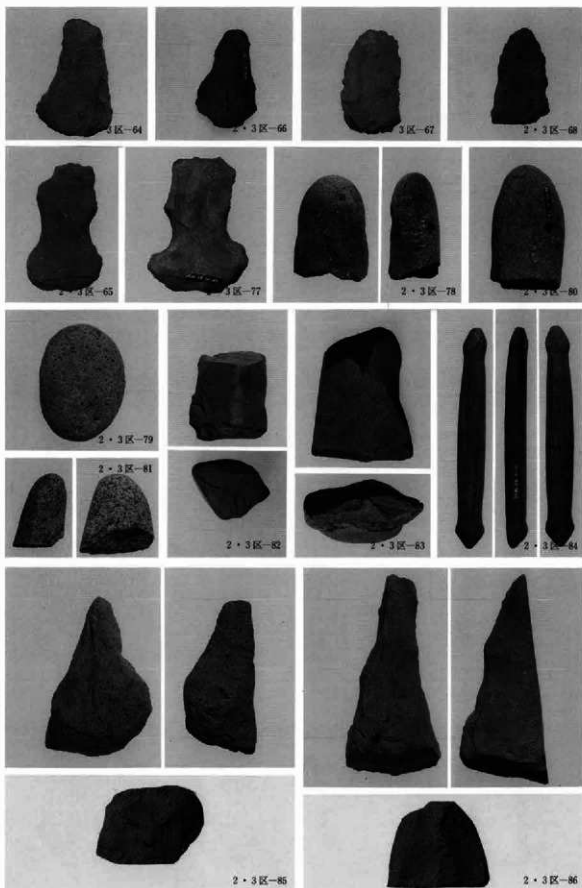


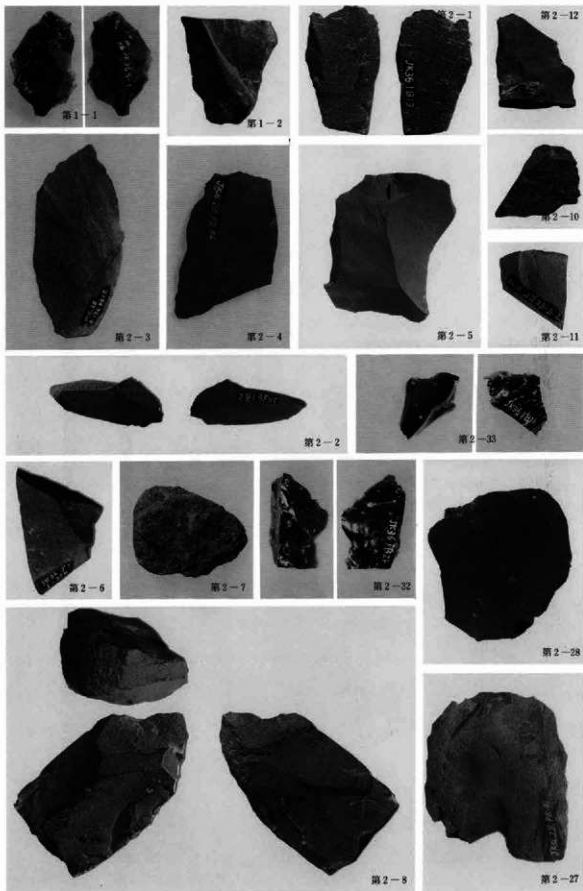


PL-150

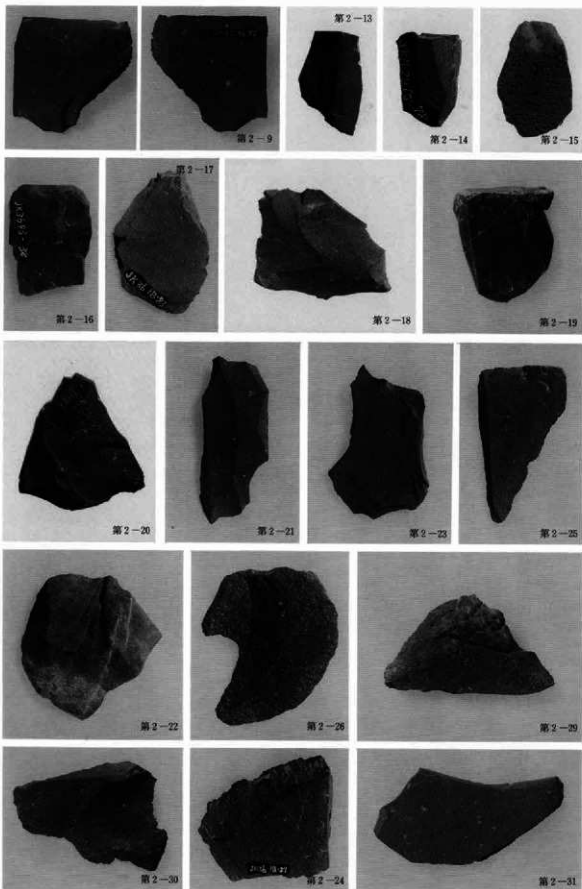


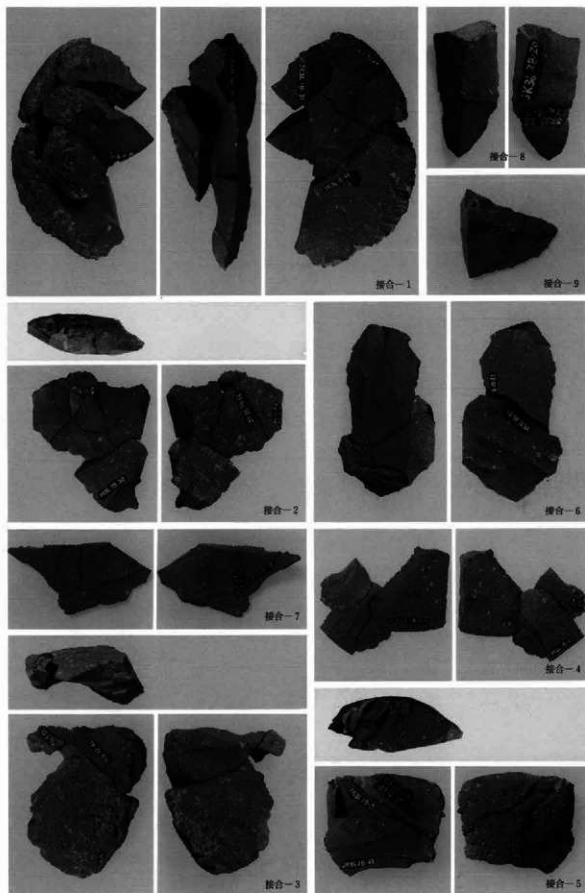






PL-154





群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告書 125 集

二之宮千足遺跡 (本文編)

一般国道17号(上武道路)改築工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成4年2月7日印刷

平成4年2月14日発行

編集・発行／(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北碓村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52-2511 (代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社